

ソードアート・オンライン —— 血盟の剣豪 ——

Syncable

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第五十層攻略完了とともに告げられた〈黒の剣士〉の攻略組離脱。突然のことで戸惑う者たちの前に現れたのは、最強の名を冠したヒースクリフ同様——ユニークスキルを持つ一人の少年だった。

これは、血盟騎士団の新人として攻略組になった彼が、SAOを攻略するお話。

『君を必要とする人を、助けてあげて』

——少年が、かつての相棒と交わした約束を果たすお話。

目次

アインクラッド

Prolog

1

Ep. 1 デュエル

6

Ep. 2 情報屋

10

Ep. 3 ユニークスキル

15

Ep. 4 シュガー・ステップ

20

Ep. 5 可能性

26

Ep. 6 偵察戦

32

Ep. 7 OSS

40

Ex. 聖夜に願う

46

Ep. 8 ビーストタイマー

59

Ep. 9 善悪の剣

62

Ep. 10 アウトラップ

68

Ep. 11 襲撃者

76

Ep. 12 黒衣の剣士

83

Ep. 13 思惑

89

Ep. 14 霊剣・レーヴァルティン

104

Ep. 15 暗闇の二人

111

Ep. 16 前進と光

117

Ep. 17 亡霊王

126

Ep. 18 活路

131

Ep. 19 受け継ぐ力

137

Ep. 20 黒の片鱗

146

E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.		
4 6	4 5	4 4	4 3	4 2	4 1	4 0	3 9	3 8	3 7	3 6	3 5	3 4	3 3	3 2	3 1	3 0	2 9	2 8	2 7	2 6	2 5	2 4	2 3	2 2
狂 乱 の 雨	狂 啼	虚 ろ な 光	夜 会	葛 藤	懺 悔	罪 の 竜	廻	黒 の 瞬 き	黒 の 剣 技	眼	因 縁	禍 根	嗤 う 者	作 戦 前 夜	月 夜 の 黒 猫 団	予 兆	笑 う 棺 桶	バ ー ス デ イ	不 穏	渴 望	仮 面 の 剣 士	武 士 と 商 人 戦 士	ア レ ン ジ メ ン ト	鍛 冶 屋
306	298	292	289	283	279	273	267	263	259	253	246	237	227	222	212	204	198	190	184	178	172	164	159	154

E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.
6 3	6 2	6 1	6 0	5 9	5 8	5 7	5 6	5 5	5 4	5 3	5 2	5 1	5 0	4 9	4 8	4 7
ホープフル・チャント	業火の輝き	青眼の悪魔	届く	孤独の失意	陽の兆し	理由	予感	アスレチック	余暇の冒険	再起	卑声	暗壊	反撃	往け	切望の光	ホープフル・サイズ
408	401	393	386	380	374	368	362	357	351	347	340	333	328	322	317	312

アインクラッド

Prolog

「黒の剣士」と呼ばれたプレイヤーをご存知だろうか。

第一層から第五十層までの全てのボス戦に参加した、まさにトッププレイヤーだ。ビーターの蔑称を最初に受けたのも彼だ。

ユニークスキル持ちの最強騎士・ヒースクリフと比肩されるほどの剣士だったが、第五十層ボス戦終了直後に攻略組からの離脱を宣言した。理由は、攻略よりも大切なものが出来た、らしい。

当然、攻略組からの批判は凄まじいものだった。

攻略を放棄することは、ゲームクリアを待つプレイヤー全てを見捨てることになるからだ。それでも彼は意見を変えなかった。その強い意思に、かつての相棒だった「閃光」の少女は彼の離脱を承諾した。それでも反対する者もいたが、ヒースクリフも承諾したことにより完全に諦めたようだ。

彼については他人伝に聞いたことしかない。なにせ俺が攻略組になったのが今日で、彼と入れ替わるような形になったからだ。会ったことも遠目から見たことも無い。

でも俺は顔も知らない彼を恨めしく思っている。

いや、彼だけではない。ヒースクリフもだ。

何故かって？

遡ること約30分前だ。

血盟騎士団本部にて新入団員として紹介された時のこと。簡単な挨拶を終えてお開きになるかと思いきや、いきなりヒースクリフが爆弾発言をしたのだ。

「彼は私と同じくユニークスキルを所持している。キリト君と同等かそれ以上の実力者だと私は思う。改めて、期待しているよ《劍豪》サツキ君」

一瞬の間を空けて、

「「「ええええっ!?」「」」」

本部長に驚きの声が響いたのは言うまでもない。

そこからは大変な騒ぎだった。

メンバー達に根掘り葉掘りユニークスキルのことを聞かれる始末。あまり広めたくないのに適当に回答を濁して躲すのにかなりのエネルギーを使った。

なんとかメンバー達を撒いてヒースクリフの元へと辿り着くと、アイツは待ってたと言わんばかりの笑みを浮かべていた。

「・・・何のつもりだ？」

「なに、隠していても仕方ないだろう」

「本当の理由は何だ？」

「鋭いな・・・キリト君がいなくなり、攻略組の戦力は激減したと言っている状況だ。これでは遅れが出てしまう」

「だから、黒の剣士の代わりを俺がやれと？」

「彼の代わりとなる存在が必要なのだよ。最前線を単独で踏破できる実力を持った者が」

「なるほどね・・・」

「言い忘れていたが、君は今まで通りにソロで攻略に励んでもらって構わない」

「それはありがたいけど・・・まさか」

「ユニークスキルを所持し、さらに私が実力を認めている。これで君のソロ攻略に反対する者はいないだろうか？」

「全部アンタの思惑通りってわけか」

「その通りだ」

そう言ったアイツの顔は、RPGでラスボスと戦う前の子供のようだった。

◆？

「副団長として命じます。サツキくん、しばらく私とコンビを組みなさい」

「んえ？」

「これが彼女―血盟騎士団副団長《閃光》ことアスナとの初エンカウントだった。

団長室からこっそり抜け出して本部を去ろうとした俺は、待ち伏せしていた彼女に捕まったのだ。さっきまで俺を追い掛けた副団長が、待たされた俺がいないので油断していたのが運の尽き。副団長の申し出を断りつつ穏便に離脱を試みる。が、悲しいことにリアルでもS.A.Oでも副団長レベルの高スペック女性と話した経験がない俺には難易度が高過ぎた。

「えーと、団長から聞いてると思うけど…俺は基本的にソロで活動したいな〜って」

「それは承知しています。ですが副団長として、団員の能力はこの目で見て把握しておく必要があります」

「ええ…わかりました」

抵抗しても無駄な気がしたのでとりあえず従おう。

「では明日の午前で。時間と場所は後で指定するのでフレンド登録だけ済ませましょう」

「え？いや、フレンドはちよっ―わかりました」

断つてはいけないと第六感が告げたのでおとなしくフレンド登録をする。

「ではまた明日。改めてよろしくお願いします、サツキくん」

「…はい。よろしくです」

こうして俺の攻略組生活が始まった。

〈アスナside〉

キリトくんの攻略組離脱。

戦力的に厳しいものだけど、それ以上に私は動揺した。自分が今までに感じたことの無い喪失感と孤独感に襲われたことに。

第一層からパートナーとして、二十五層からは攻略組の仲間として戦ってきた彼は戦力的にはもちろん、精神的にも大きな支えとなっていたと気付いた。

ようやくゲームの折り返し地点まで登り詰めたが、先日の五十層ボス戦では甚大な被害を出してしまった。

私の指揮のせいで死んだ人がいたのでは？

助けられた人もいたのでは？

もっと上手くやれたのでは？

死なずに済んだ人もいたのでは？………

そればかりが頭をよぎる。

そして追い打ちをかけるようなキリトくんの離脱。

戦力的に考えれば私は強い。でも心は未熟だ。他人の命を預かるなんて荷が重すぎる。壊れそうな時はいつもキリトくんに縋っていた。

もうダメだと思った。

だから本心とは真逆の、彼の離脱を承諾した。

攻略より大切なもの、それはつまり私よりも大切なものということだ。それならもう彼には縋れない。

私は近い内に死ぬ。

そんなことを考えながら参加した新入団員の歓迎式。

「彼は私と同じくユニークスキルを所持している。キリト君と同等かそれ以上の実力者だと私は思う。改めて、期待しているよ《剣豪》サツキ君」

理解し難いものだった。

団長はキリトくんを戦力としか見ていない。でも違う。私にとつ

てキリトくんは特別な存在なのだ。もう伝えることは出来ないけれど、やっと自覚した。

許せなかった。軽々しく同等やそれ以上と言われるのが。だから明日、証明する。

キリトくんを超える剣士なんていないことを。

Ep. 1 デュエル

〈サツキside〉

俺は今超絶に焦っている。

別に危険な状況でもなければ圏外でもないのだが。

朝靄が漂う街を全速力で駆ける。朝っぱらからこんなことをしていると周りの目が気になるが構っていられない。

「つたく・・・急過ぎるだろ！」

事の発端は5分前、俺がまだ惰眠を貪っていた時だった。

フレンドからのメッセージ受信を知らせる音で目を覚まして、その内容を確認した俺は飛び起きた。

『おはようございます。』

昨日の件ですが、9時にアルゲート北門に集合で』

ちなみにその時の時刻は8時50分。

寝起きの頭では一瞬理解が追いつかなかった。が、俺とて最前線をソロで戦ってきたんだ。すぐに思考を切り替えて準備を整えて今に至る。

転移門に飛び込んでアルゲートを指定。視界が開けると同時にまた走り出す。

北門が近付くと、何やら人集りができていた。

「なんだ？」

速度を落として集まった人たちの視線を追ってみると、俺は思わずうへえと顔を顰めた。

「・・・時間通りね」

そこには、どこかとても不機嫌そうな副団長と、ギルドの隊服を着た男がいた。

「・・・おはようございます」

とりあえず挨拶をする。

「おはようございます。間に合わないかと思っていました・・・朝からご苦労さまです」

「ええ、そりやどうも」

非常に腹ただしいがここは堪える。

「んで、そっちのおっさんは？」

「おっさん、だど？」

あ。地雷っぽい。

「私はアスナ様の護衛であるクラディールだ！よく覚えておけ三下ア！」

うへえ、面倒だけど刺激しないようにしないと。

「分かったよクラさん。で、なんで付いて来てるの？」

「貴様のような雑魚プレイヤーにアスナ様を任せられないからだ！身の程を知れ！」

「ええ・・・誘ったのは副団長だよ」

「さつきからこんな調子なのよ」

副団長もそれなりの苦労があるようだ。

「では行くぞ！くれぐれも私とアスナ様の足を引っ張ることのないようにな！」

ズカズカと進み始めたクラディールに、俺は思わず言った。

「え？足でまといが勘弁なのはこっちも同じだよ」

反射的に発したそれは思った以上のボリュームで、ザワついていた人集りもシーンとなった。クラディールもピタツと動きを止め、副団長からは驚いた気配を感じる。

「・・・なんだと？」

やっちまったと思いつつも、怒りからか軋んだ声のクラディールに、俺はどうにでもなれと続ける。

「いや、副団長一人なら万が一の状況でも対処できる自信はあるけど流石に2人はねー・・・ちよつと厳しいかなって」

「・・・それは、私とアスナ様より貴様の方が強いという意味か？」

「ん？んーまあそういうことだな」

「ふざっつ、ふざけるなああ!!」

怒声を上げて俺との距離を詰めてくるクラディール。どうやら相当興奮しているようだ。

「ならそれを証明してみろ！」

手早くウインドウ操作を始めたクラディール。すぐに俺の眼前にデュエル申請が出現した。躊躇うことなくYesボタンを押す。

「副団長」

「・・・なに」

カウントダウンを横目にクラディールとの距離を取りながら、事のいきさつを見守る副団長に話しかける。

「このデュエルで俺が勝ったら、もう解散で良いですよね？」

「・・・良いわ。勝ったらね」

「ありがとうございます」

「おい！KOB同士のデュエルだつてよ！」

「アスナさんを賭けた男と男の勝負だ！」

「「うおおおおお!!」」

何やら大盛り上がりだし大変な誤解をされているが今は気にしてられない。後で情報屋を買収すれば済む話だ。

クラディールが派手な装飾の施された両手剣を引き抜く。

「ご覧くださいアスナ様！このガキよりも私の方が強いことを証明します!!」

残り10秒。

クラディールが構えを取る。

その様から相手の初動モーションを予測。

今までの膨大な戦闘経験から俺が導き出した最適のソードスキルは――

「うおおおおおらあああ!!」

カウント0と同時に突進してきたクラディール。

予測通り。

俺は背中から愛剣を鞘ごと下ろし、居合の構えを取る。その動きに、クラディールはもちろん観衆たちからも驚愕した様子が伝わってくる。

それもそうだ。

俺の愛剣は片手剣。普通は居合の構えなんてしない。片手直剣カテゴリにはここから発動できるソードスキルがないからだ。

そう、”普通”なら。

「シネエエエツツ！」

渾身の一撃であろうそれを振りかぶったクラディールを間合いまで引き付け、俺は愛剣を抜いた。

一撃目。

カタナカテゴリソードスキル・辻風

力強いシステムアシストに自分の動きをシンクロさせて速度をブースト。手元が霞むほどの速度で抜き払った愛剣を、振り下ろされたクラディールの両手剣に見舞う。耳を劈く大音響と共に両手剣は半ばからへし折れ、その勢いでクラディールは大きく体勢を崩した。

二撃目。

細剣カテゴリソードスキル・リニア―

ガラ空きになったクラディールの急所―ではなく腹部に一発見舞う。

勢いそのまま後ろへ大きく吹っ飛んだクラディールは何度か地面を転がって止まった。

観衆も副団長もクラディールも黙ったままだ。

シーンとなったその場の静寂を破ったのは、俺の勝利とデュエル終了を告げるBGMだった。

「うおおお！すげえ!!」

「なんだ今の！どうやったんだ!？」

歓声の中わざと派手な音を立てて愛剣を収め副団長に歩み寄る。

「んじゃ、解散ってことで。お疲れした！」

返事を待たずに俺は走り出す。

目指すは愛しのマイハウス。

頭の中は二度寝のことで一杯だった。

Ep. 2 情報屋

〈アスナside〉

—全く見えなかった。

クラディールとのデュエルで初めて見た彼の剣士としての、いや〈劍豪〉としての姿。団長も認めているからかなりの実力者だとは思っていたけど、私の想像を遥かに超えていた。

クラディールの両手剣を視認できない一撃で破壊し、なんとか見えた二撃目は私も幾度となく使ってきたリニア。だが速度と精度、威力は私のそれよりも練度が高いのが明らかだった。

デュエルが決着したあと私は強い違和感を感じた。

細剣を主武器としている私だが、攻略組の指揮を執る立場として全てのソードスキルを熟知している。記憶を探ると、一撃目はカタナカテゴリの単発技だ。二撃目もソードスキルであることを考えると疑問の正体が分かった。

彼はソードスキルを連続で使っている。

そしてカテゴリの違うソードスキルを使っている。

本来なら有り得ないことだ。

ソードスキル使用後は短くても必ず硬直時間が発生する。連続で使用することはシステムの不可能なのだ。さらに有り得ないのが装備武器と違うカテゴリのソードスキルを発動させることだ。片手剣を装備している間は片手直剣カテゴリのソードスキルしか発動しない。”普通”ならば。

たった数秒のデュエルで本来なら有り得ないことがいくつも起きた。これらの能力が彼の持つ〈劍豪〉スキルによるものなのは確かだろう。

もっと詳しく聞き出さねば。

走り去っていく彼の背中を見つめながら私はフレンドリストを呼び出した。

◆？

〈サツキside〉

マイハウスに戻る前に俺はとあるNPCレストランを訪れていた。腹ごしらえが目的ではなく人との待ち合わせだ。

「相変わらず早いナ、サー坊」

「そつちこそ、まだ10分前だぞ」

現れたのは情報屋・鼠のアルゴ。

アインクラッドには多くの情報屋がいるが、最も信頼の出来る彼女以外と取引したことはない。

「それで、今日はどんな情報をお求めダ？」

料理を注文し終えたアルゴが言う。

俺は周りに漏れないように小声で問う。

「アレの件、何か分かったか？」

「・・・まだ何も掴めてないヨ」

「そうか、じゃあ別件だ。俺の情報に口止めを頼みたい」

アルゴは意外そうな顔をする。

「なんだ？おねーさんの知らない間に有名人にでもなったの力？」

「いや、これからなるからだ」

アルゴは一瞬キョトンとしたが、すぐに笑いを堪え始めた。腹立つ。

「これからつて、何かやるつもり力？」

「攻略」

「それなら今までも最前線に籠っていたダロ？」

「いや、攻略組としてだよ。さらに言えば血盟騎士団として」

「な、ナニイイ!？」

ガタツとイスから立ち上がったアルゴ。予測以上の反応に俺もびっくりした。

「どーいう風の吹き回しダ？いきなり攻略組なンテ・・・しかもあのK

「OB!?!」

「お、落ち着けアルゴ！声がデカい」

幸い店内に他のプレイヤーはいないから良かった。こんな大声でKOBなんて言ったら大注目間違いなしだ。落ち着きを取り戻したアルゴが仕切り直す。

「デ、改めて聞くケドボーユーことなンダ？」

「まあ、簡単に言おうと賭けに負けた」

「賭けつて誰とダ？」

「ヒースクリフ」

アルゴが驚きで目を見開く。

「KOBの団長カ。どんな賭けなんダ？」

「デュエルで俺が勝てば全財産、負ければギルド入団」

アルゴは拍子抜けしたような呆れた様子で言う。

「・・・なるほど、金に目が眩んだわけダナ」

「うるせ」

凶星をつかれて込み上げてきた恥ずかしさを誤魔化すため、運ばれて来た料理に手を伸ばす。

「デ、どうだったンダ？〈神聖剣〉の強さハ？」

「次元が違うよ」

ヤツとのデュエルを思い出す。薄暗い迷宮区での激闘を。

「とにかく硬すぎる。あの盾の防御を崩すには、超超超威力の一撃で体勢を崩すか、終わりのない連続攻撃で隙を作るしかないと思う」

「サー坊の〈剣豪〉スキルでもダメだったノカ？」

「ああ、俺の使える最高位ソードスキルを連続で叩き込んでやったけど全く動じなかったよ」

今でも記憶に鮮明に残っている。

俺の連続技を軽々と盾で捌いて、まるでもて遊んでいるかのような振る舞いのヒースクリフを。

「サー坊でも勝てないカ・・・やっぱりヒースクリフは最強に相応しいナ」

「悔しいけどそればかりは認めるしかないよ」

互いに頷き合いながら料理を頂く。

だいたい食べ終えた頃にアルゴが聞いてきた。

「そういえば本題は口止めの件だつタナ」

「思いつきり話逸れたけどな」

「そうだなーデ、サー坊の何をいくらで口止めしたいンダ？」

さつきまでとは違い情報屋の顔になったアルゴ。俺も気を引きしめる。

「俺に関する全ての情報に頼む。料金は・・・これでどうだ？」

トレードウインドウを呼び出してアルゴに金額を提示する。武器防具のオーダーメイドを頼んでもお釣りが出る額だ。よほど金に余裕がある奴じゃなければ簡単には払えないだろう。俺の財布は軽くなるが。

「ヨシ、良いぜ。取り引き成立ダ」

トレードが了承され所持金がガクツと減るのを何とも言えない気持ちで見届けた俺は、わずかに残っていたオレンジジュース的な飲み物を一滴残さず飲み干した。

「デモナー、サー坊が攻略組カー」

「なんだよ」

「イヤー・・・知り合った頃のサー坊からは考えられなくテナ」

「・・・人は変わるもんだよ」

「そうダナ」

なんだか妙な空気になってしまった。

そろそろお開きかなと思ひ、席を立とうとしたその時だった。

カランと来客を告げる音。

歓迎の言葉を発するNPC店員。

それに答える客人の声。

「あちらの方々お待ち合せています」

「えっ？」

思わず反応してしまった。

店内には俺とアルゴしかいない。なので”あちらの方々”とは俺たちのことを指しているのは明確だが、もちろん心当たりがない。

アルゴも一瞬驚いた様子だったが、俺の後ろ―来客の姿を見ると笑顔になった。

この時に俺はだいたいの察した。アルゴの笑顔と、俺のすぐ後ろから感じるとてもないオーラで。

完全に固まったままの俺に関せず、アルゴは無邪気にその名を呼んだ。

「アーちゃん!」

可愛らしい呼び名とは裏腹に、アーちゃんこと副団長は凜とした声で言った。

「お久しぶりです、アルゴさん。それと・・・さつきぶりね、サツキくん。ちやうど聞きたいことがあったの」

「り、了解」

どうやら、まだお聞きには出来ないらしい。

Ep. 3 ユニークスキル

〈サツキside〉

「アーちゃんこれもなかなかダヨ」

「本当だ、美味しい！」

「しかも美味しいだけじゃない、なんと敏捷力にバフがー」

「・・・」

なんだこの状況。

副団長が合流してどんな修羅場になるかと思えば、いきなり俺そっちのけで女子会が始まった。2人ともケーキやらパフェやらで盛り上がっている。

アルゴはともかく、副団長にもこんな女の子みたい的一面があるとは正直なところ意外だった。”攻略の鬼”なんて可愛くない呼ばれ方をしているデザートの的なものには興味がないと思っていた。

「・・・何か今、失礼なこと考えてるでしよう？」

「とんでもございません」

心読むとかエスパーなの？

「にやははーサー坊はすぐ顔に出るからナ、今のはオレっちでも分かるぜー」

「そんなに分かりやすいのか・・・」

昔から心理戦が弱い原因がわかった気がする。

「さて、では本題に入りましょうか」

食べ終えた皿をNPC店員が回収したのを見届けて、副団長はいきなり切り出してきた。さっきまでの和やかムードはどこへやら、俺は無意識に姿勢を正す。

「サツキくん、いくつか質問があります。できる限り話してもらいたいのですが、渋るようでしたらアルゴさんから聞きます」

「アルゴには口止めしてるぞ」

「だろーうと思いました。アルゴさん、サツキくんはいくら払いましたか?」

「この位だな」

アルゴがウインドウを可視化して副団長に見せる。それを見た副団長は耳を疑うことを言った。

「なるほど・・・ではこの倍を払います」

「は!？」

「良いヨ」

驚愕する俺と普通な対応のアルゴ。副団長がウインドウを操作し始めたので慌てて止めに入る。

「ちよちよちよちよつと待て」

「何か？」

「何か?じゃなくて、そんなに出して大丈夫なのか？」

ちよつとしたマイハウスが買える位の値段なのだがなんの躊躇いもなく払おうとする副団長。俺がどうこう言うことではないが流石に心配になる。

だが副団長はそんなことかと言わんばかりの様子だ。

「ご心配なく。まだまだ余裕がありますから」

「誰かさんと違って無駄使いしないからな、アーちゃんは」

「わかったわかった、だからちよつと待て」

副団長の手を下げさせて俺は続ける。

「お金はいいよ。副団長には教えておいた方が良いと思うし」

「なんダ?オレっちの時は随分渋ったくせにアーちゃんには素直なんだな」

「あんたに話すのとは訳が違うからな」

「では話してください」

「ああ、でも言葉で説明するより実際に見てもらった方が早いし分かりやすいだろ?」

会計を済ませて俺たちは店を出た。

◆?

〈アスナside〉

場所は変わって第五十層迷宮区。

すでに攻略済みだけどこの敵はまだまだ手強い。私はソロでも十分戦えるが、今はアルゴさんもいるのでいつも以上に周りに警戒している。

「この辺りで良いわ」

「だな」

松明が多く設置され外ほどではないが明るい広場で立ち止まり、モンスターが湧くのを待つ。その間シンプルなデザインである愛剣の感覚を確かめていた彼に、私は一つの疑問を聞いた。

「・・・あなたって元βテスター？」

「いや、ニュービーだよ」

「一人でここまで強くなったの？」

「いや、βテスター・・・じゃなくて”ビーター”とコンビを組んでた。かなり前だけど」

「・・・そう」

私と全く同じだった。

キリトくんと出会ってコンビ組み、数えきれないほどの技と知識を教えてもらった。今の私があるのは間違いなくキリトくんのおかげだ。絶望に囚われていた私に希望を、この世界で生きる意味を与えてくれた。

彼もそうなのだろうか？

その疑問を解消すべく発しようとした声を、アルゴさんが遮った。

「来たゾー」

私たちの前方10メートルにモンスターがポップする時特有のエフェクトが発生した。ポリゴンが徐々に形を形成していく。

現れたのはこの迷宮区でかなりの強敵である人型モンスターだった。阿修羅に扮した姿で一振の刀を武器とするそいつは、見た目に反して敏捷力が凄まじく使うソードスキルも類を見ないカスタマイズ

を施されていて攻略組でも少なくない犠牲者を出した。

「じゃあ、改めて説明するけど」

話しながら彼は前へ進む。

「俺のユニークスキル〈剣豪〉は、装備している武器と関係なく全てのソードスキルを使えるようになるスキルだ。だから片手剣を装備している今でも片手剣カテゴリ以外の、例えば細剣のリニアやカタナの辻風なんかも使える」

背中の中剣から愛剣を引き抜くと、それに気付いた敵が彼をターゲットイングする。

「さらに、ソードスキル使用後の硬直時間がない。なのでソードスキルを繋げての連続攻撃ができる」

殺気立った敵が無言で刀を握る。

「あとは、なんだろうな・・・」

彼が考える素振りを見せた瞬間、敵が仕掛ける。

カタナカテゴリ・ソードスキル”緋扇”

一瞬で中距離程度の間合いを詰めて3連撃を繰り出す厄介な技だ。

一気に彼との距離が縮まり、高速の連続技が――

「あぶな」

彼を捉えることはなかった。

片手直剣カテゴリの基本技・ホリゾントルで敵の一撃目を弾いて体勢を崩し、ソードスキルそのものを無効化した。致命的な硬直時間が課せられて完全な無防備となった敵の心臓部に、片手槍カテゴリ・ソードスキル”アクシス”を見舞う。こちらも基本技だが、強敵のHPは目に見えて減少する。

「あっそうそう、ソードスキルの威力とクリティカル発生ボーナスもあるな」

敵が吹き飛んで転がる様を見ながら彼は言う。ずっと下層のモンスターと戦っていると錯覚するほど圧倒的だった。

「サー坊！一つ聞いても良いか？」

「なに？」

静観していたアルゴさんが突然口を開いた。

「ソードスキルを全部使えるのは凄いガ、一つ一つ発動モーションは違うダロ？全部覚えてるノカ？」

「ご名答。全カテゴリー全ソードスキルの威力、射程、発動モーションを覚えてる。ちゃんと使い物になるまで随分かかったけどな」

それがどれだけ大変なことか私は知っている。

無限にも等しい数が設定されているソードスキル。それらの動きを覚えるだけでもかなりの時間が必要だが、彼はさらに自分が使えるようにまでなったと言う。私も使用率が高い武器種のソードスキルは覚えているが、とても動きを再現できるとは思えない。

「どうダ？アーちゃん。少しはサー坊のこと見直したカ？」

「・・・」

何やら楽しげなアルゴさんが言う。

確かに彼は凄い。

でもそれを認めることを拒む気持ちがある。

なぜ？

初めて見た見た片手斧と両手戦棍、両手鎌のソードスキルの連続技で敵を屠る彼を見つめながら、どんなに思考を巡らせてもそれが分からなかった。

Ep. 4 シュガー・ステツプ

〈サツキside〉

「初めまして剣豪さん！僕は血盟騎士団の偵察隊長をやらせて頂いているシュガーです！よろしくお願いします!!」

「お、おう。よろしくーって剣豪って呼ぶな」

ギルド本部の一室で見事な敬礼を俺に向けるこいつは、爽やかイケメンを絵に描いたようなヤツだった。赤い瞳から彼の純粹さが感じられる。

「・・・と言うわけで、あなたにはボス部屋の偵察チームに所属してもらいます」

「ええ・・・めんどー」

「よろしくお願いします！団長が認めた剣豪さんが一緒だととても心強いです!」

「・・・うん、よろしくね」

諦めよう。

こうなったのは全部ヒースクリフのせいだ。

迷宮区から帰還してアルゴと別れた後、俺と副団長はヒースクリフから本部へ呼び出された。それで話されたのが偵察隊の件だ。

「本戦はもちろん〈剣豪〉スキルは偵察戦でも役に立つと考えている。ボスの弱点を見つけるのに君ほどの適任はいないだろう?」

らしい。その通りだが。

「ではボス部屋が見つかったらご連絡させて頂きます!」

「ん?それまでは何も無いのか?」

「彼らの任務はあくまでボスの偵察なのでボス部屋が見つかるまでは基本的に自由です。レベリングでも装備強化でも出かけても休んでも何しても良いです」

「へえ、結構ホワイトじゃん」

最強の攻略ギルドという看板を背負ってるのでかなりのブラックだと思っていたが、案外そうでもないらしい。

「余談ですが、あなたとシユガーくんには本戦にも参加してもらいます」

「そっちが本題だろ!？」

訂正する。超ブラックだ。

「まあ偵察戦って言っても、ただボスにちよっかい出してモーシヨンとか能力を見るだけですけどねー生きて帰って帰ってくることを第一にしてるので!」

「いや、十分凄いよそれ」

ほわんほわんしながらシユガーは言ったが、未知なるボスに挑むのはレベル的ステータスよりも心の方が大切になると思う。もしかすると彼は見た目に反してかなりの胆力があるのかもしれない。

「じゃあ改めてよろしくな、偵察隊長」

「はい!よろしくお願いします剣豪さん!」

「だからその呼び方やめて」

もしかしたら彼は天然なのかもしれない。

◆?

〈アスナside〉

事務的なやり取りしか交わしたことの無い偵察隊長のシユガーくんだが、前から感じていた通り物腰が柔らかい性格のようだ。サツキくんともすぐに打ち解けている。

どこか抜けている彼だが、この世界で最も死の危険が高い偵察戦を幾度となくこなし、一人の死者も出したことがない。彼が偵察隊長になつてからは人的物的損害は無くなり、情報の質は格段に上がった。おかげで本戦がかなり楽になっている。

彼自身のプレイヤースキルはもちろん、指揮官としての才能もあるのだろう。第五十層ボス戦でも、私が思考停止に陥っていた間に次々と指示を出して団長が駆け付けけるまでの時間を稼いでくれた。レベルは私の方が高いと思うが、指揮官としては彼に劣ると思う。

「そうだ！今からフィールドに行きませんか？ 剣豪さんの戦いを見てみたいですよ！」

「今から!? いやちよつと・・・」

「そうですか・・・残念です」

「・・・わかった、行こう」

「本当ですか！ ありがとうございます!!」

私やサツキくんより年上と思われる彼だが、どうにも放っておけない弟に見えてしまう。

「私も行きます」

シュガーくんは驚きの、サツキくんは明らかに嫌そうな顔をしたが気にせず話を進める。

サツキくんにかなり渋られたが、シュガーくんの説得が効いて3人で最前線のマップピングに行くことになった。

◆?

〈サツキside〉

「剣豪さん！ 右はお任せ下さい！」

「あいよ、頼むわ！」

「新手は私が引き受けます」

「お願いします！」

「無理すんなよ」

「ええ」

第五十一層迷宮区は攻略が開始されてからまだ日が浅いが、全体の半分くらいは踏破されている。二十五層と五十層の迷宮区がアホミたいな規模と複雑さであったのに対し、ここは小規模かつシンプルなのでマツピングがガンガン進む。生息するモンスターも俺たち3人にとってもはや敵でもない。大量に湧いてくる群れを機械的に処理していく。

「剣豪さん凄いですね！さっきの連続技がユニークスキルですか!？」

実験的に試してみた両手斧と片手剣ソードスキルの組み合わせ技を見たシュガーが興奮した様子で聞いてきた。

「ああ、そうだよ」

「カッコイイなあ！僕ももつと頑張らないと！」

「いや、シュガーだって十分強いよ」

「そんなとんでもない！僕なんてまだまだですよ！」

そう言う彼だが、流石は最強ギルドの偵察隊長と言ったところでその戦闘技術は見事なものだった。危なげも無駄もなく、余裕はあるが隙がない。全ての動きが洗練されていて、放つソードスキルは完璧と言える完成度だ。

「片付きましたね」

副団長が周囲を見回してレイピアを収める。

初めて彼女の戦闘を見たが、文句の付けようがなかった。第一層からボス戦に参加してきた経験が見ているだけでも伝わってくる。俺もよく使うリニアアアなんか軌道が全く見えなかった。

「おつかれ。結構進んだな」

「そうですね！もうすぐボス部屋が見つかると思います！」

「あと数日中には見つかるでしょう」

「なんならこのまま俺たちで見つけるか？なんて——」

調子に乗った俺が冗談で口にしたそれに、

「良いですね！見つけちゃいましょう！」

「そうですね、賛成よ」

2人は即乗った。

「へ？いや、今のは冗談でもう帰―」

瞬間、俺の弁明を掻き消す音が響いた。聞き間違いのようなない特徴的なこの音は―

「新手が湧きました!」

「片付けて進みましょう」

「タイミング悪過ぎやろ!」

迫るモンスター郡に俺は泣きの連続ソードスキルを見舞った。

三時間後。

「ありました!」

「ようやくね」

「マジで見つけちゃったよ・・・」

巨大な二枚扉を見つけた俺たちはそこで切り上げてギルド本部へ戻り、ボス部屋の発見をヒースクリフに報告してアルゴに情報を提供した。

「たった3人で残りをマッピングしたノカ。相変わらずKOBは仕事が早いナ」

「まあ・・・ノリと勢いでな」

今日はこれで解散という流れに。

マイハウスに戻る前、ふと気になったことが。

「なあ、一ついいか?」

「どうしました?」

「まさかとは思うけど・・・偵察って明日?」

シユガーは疲れなど微塵も感じさせない爽やかな笑顔で、副団長は当然と言わんばかりに答えた。

「はい、そうですよ!一緒に頑張りましょう!」

「時間に遅れないようにしてください」

うへえと思いつつ「了解です」と返して俺は帰路についた。

帰宅してそのままベッドに倒れ込み、今日を振り返ってみると思い出したことが。

・
・
・あれ？今日って休みじゃなかった？

◆?◆?◆?

『君もここを知ってたの?』

それが彼女の第一声だった。

人気のない路地裏にひっそりと居を構える武器屋。目的を決めずにぶらぶらと歩いてるうちに辿り着いただけの俺だったが、他の店よりも値段が安かったので品定めしていたところだった。それを伝える。

『そうなの? てつきり私と同じかと思ったー』

そう言う彼女は店主に話しかけると何の迷いもなく初期装備の片手剣を売り払い、代わりに新しいモノを買った。次いで真っ黒なコートを彼女を包み、フードを目深に被るとこちらに振り向いた。

『せっかくだから教えてあげる。この武器は安い上に初期装備よりも強いんだよ。今のうちに買い替えておいたら? あと、このコートは3着しか売ってないレア物なんだ』

にこにここと楽しそうに喋る彼女。アドバイスをありがたく受け取って彼女に倣う。全く同じ出で立ちになった俺を見て、うんうんと頷いた彼女は納得した様子だ。

『お揃いだね。ここで会ったのも何かの縁だし、これからフィールドに出ない? 初心者だから分からないことあるだろうし』

断る理由がないので了承する。

『よし!じゃあまずは自己紹介だね。私はー』

彼女の名前を、俺は一生忘れないだろう。

◆?◆?◆?

〈サツキside〉

「ではこれより、第五十一層ボスモンスターの”偵察戦前会議”を始めます」

シユガーのその一言でザワついていた室内が静寂に包まれる。ピリツとした空気と息が詰まりそうさだ。

集まったのはK○Bの偵察隊に所属する20名だ。装備と雰囲気からそれなりの実力と覚悟があるように見える。俺たちを一瞥したシユガーは話を進める。

「事前に連絡した通り、昨日ボス部屋を発見した。前回のボス戦からそんなに日は経っていないけど僕たちのやることは変わらない。会議終了後速やかにボスの偵察を始める。何か意見は？」

誰も何も言わない。

シユガーに意見はないようだ。そうシユガーには。

「隊長、一ついいか？」

静寂を破ったのはめっちゃデカイ盾を背負った大男だ。おそらくタンク役だろう。低く落ち着いた声が彼の真反対にいる俺にもよく聞こえる。

「何かな？」

「知らないヤツが混じっててな。気になってんだ」

一人また一人と遠慮がちに俺に視線を向けてくる。彼らの気持ちは分かる。知らないヤツが自分たちの命に関わる大事な会議に当たり前の顔をしていたら気にならないわけがないだろう。

「あつ、そういえば紹介してなかったね」

「ごめんごめんとシユガーは俺の隣に立つ。」

「一昨日にK○Bに入団して、昨日ウチに配属となった剣豪のサツキさんです！みんな仲良くしてね！」

「よろしく」

一応軽く頭を下げるが、皆はポカーンとして盾男は納得してない様子だ。彼は静かに立ち上がると俺に正対して続ける。

「隊長、あんたの目を疑うわけじゃないが・・・その男の実力は本物なんだよな？」

「うん、本物だよ。この目で見た僕が保証する。それにヒースクリフ

団長のお墨付きでもあるからね」

ヒースクリフの名にわずかな反応を示した彼は、それ以上何も言わずに座った。最強たる団長の名が出るだけで説得力がまるで違う。

他の隊員も異論がないことを確認したシュガーは、全員に一枚ずつ半用紙を配った。偵察隊全員の位置取りと役割、ローテーションやパーティー編成などが細かく書かれている。

「じゃあ改めて、今回の偵察手順を説明します。前回の五十層ボスの偵察では危うく犠牲を出すところでした。再三言っている通り、生きて帰ることが第一優先任務であることを各員認識してください」

本戦では甚大な被害を出した五十層ボスの偵察を犠牲なしで完遂した彼らには驚きを隠せない。が、顔には出さないようにしてシュガーの話に耳を傾ける。

「まずは編成についてです。いつも通り、A B C Dの四班に分かれてスイッチ、ローテ、ヘイト管理、回復、サポートを行います。各班にタンクを二人配置していますが、ボスの攻撃パターンによって編成を急遽変更する場合がありますので柔軟な対応をお願いします」

「前回の二の舞いにはなりたくないな」

「大混乱だったもんね」

「まあ、クウオーターポイントじゃないから大丈夫だと思うけど」

「おいやめろ、フラグになりかねん」

「はいはい、みんな静かに！」

冗談が言い合えるほどには余裕があるらしい。これもシュガーが隊長だからできる事だろう。

「当初の目標をHP一本とします。削り切る前に攻撃パターン、弱点部位、有効なソードスキルを特定。一本削った時の行動パターンの変化を確認後、即撤退します」

ボスにもよるが、この人数でHPを一本削るのは簡単なことではない。でも隊員たちは当たり前のように了解の意を伝える。彼らに頼もしさを感じつつ、俺は気になっていたことを口にした。

「シュガー、俺の配置が書かれてないんだが」

何度見返しても紙に俺の名がない。

「サツキさんは自由に動いてもらって構いません。色んなソードスキルを色んな箇所当ててみてください」

「遊撃ってことか。まあその方がやりやすいけど」

パーティー戦は今回が初めてではないが、長いことソロだったので連携やスイッチなどに正直なところ自信がない。なのでシユガールの配慮はありがたい。

その後も会議は順調に進み、最後に携行アイテムの確認を終えた俺たちはボス部屋に向かった。

◆？

〈アスナside〉

「いらっしやいませ！リズベット武具店へよう——つて、アスナじゃない。珍しいわね平日に来るなんて」

「うん、今日はお休みになったの」

この世界で数少ない女友達のリズベット。彼女が経営する武具店へ私は足を運んでいた。

「あーそう言えばボス部屋が見つかったって今朝の新聞に書いてたわね。今日は偵察に行ってるの？」

「うん。二時間くらい前に出発したよ」

リズは慣れた手つきでコーヒーを淹れて私に差し出す。お礼を言っただけで息を吹きかけて適温に冷ます。

しばらく他愛のない会話をしていた。普段からいろんな人と関わるリズとの会話は、最前線に籠もりっぱなしの私にとって唯一普通の女の子でいられる時間だ。この時間が何よりも楽しい。

話が一段落したところでふと、壁に吊るされていた一振りの片手剣が目に入った。前に来た時はなかったので新作だろうか。黒一色でシンプルなデザインとは裏腹に強烈な存在感を放っている。

「あの片手剣スゴいね。リズが作ったの？」

「え？あつ、それはね・・・」

リズが言葉を詰まらせるなんて珍しい。そう思っていた私に、リズは意を決したように言った。

「・・・キリトが、持ってきたの。俺には必要ない、使う資格がない。リズが認めた人に渡してほしい、つて」

「・・・そう」

予想外の名前が出てきて思わず沈黙してしまう。

キリトくんが最前線を去ったことをリズは知っている。ただ攻略組を抜けるとだけ伝えられ、リズは何も聞かなかった。そっか、とだけ。

なぜ問い詰めなかったのかリズに聞いてみた。

『最初は聞こうと思ったわよ・・・でもね、あいつの目を見たら聞いても無駄だなんて。何を言っても折れないだろうなって思ったの』

そう言っただけ笑ったリズだったが、寂しさを隠そうとしているのにはわかった。

楽しい時間のはずなのに、なんだか気まずい雰囲気になってしまった。

今日は解散しよう、そう思っただけ席を立った瞬間。

「バンツ！」と店の扉が乱暴に開けられ、次いで大音量の音が室内に響いた。

「アスナさああああん!!大変です大変です大変ですよ!!!」

何事かと見てみれば、血盟騎士団の隊服に身を包んだ小柄な少女が目を見を浮かべながらわーわー叫んでいた。

「相変わらず騒がしいわね・・・いつものことだけど」

「ごめんね、リズ」

彼女はKOB所属のカタナ使い・ノノ。その姿からは想像できないほど戦闘能力が高い。が、何かある度に今のよう騒ぎ出すので見た目も相まって小学生扱いをされている。本人曰く成人しているらしいが。

「それでノノちゃん？どうしたのかな？アイスでも落としちゃったの？」

「落としてないもん！ってそうじゃなくて、本当にビッグニュースなんだから！」

ダンツと机を叩いて興奮気味に続ける。

「ボスが！五十一層のボスが倒されたの！」

「・・・え？」

素っ頓狂な声がリズムとハモる。

「もう！私もボスと戦いたかったあ！何で倒しちゃうかなー！偵察隊だけで！」

偵察隊だけ？

「ちよ、ちよつと待ってノノさん」

理解が追いつかないが、彼女の発言が間違いでないかを確認する。

「えっと、ボスを倒したの？偵察隊だけで？」

「そう！」

「撤退したんじゃないか？」

「うん！もう五十二層の主街区の転移門も有効化してきたって」
「・・・」
アクティベート

ノノさんが嘘やデタラメを言っている様には見えない。そもそもそんな人ではない。なら、信じ難いけど本当にボスを？

「信じられないなら本部に行きなよ！シユガーいるから！あと隊服着てない異端児も！」

その言葉に従い、私はリズムにまた来ると伝えて店を出た。人並みを避けて進み本部を目指す。

この時、私はまだ知らなかった。

〈剣豪〉たる彼に秘められた可能性を。

E p. 6 偵察戦

〈サツキside〉

第五十一層のボスは岩の巨人だった。

その見た目通り防御力が高く動きが鈍い。一撃一撃の威力は高いが、前衛のタンクたちががしつかり受け止めてくれるので俺たちダメージティラー攻撃役は動きやすい。攻撃後の硬直時間を逃さずに反撃のソードスキルを叩き込み、ボスのHPはみるみる減少していく。

好きに動いて良いと言われたが、下手にダメージを与えてヘイトが移ったりしたら面倒なので俺は戦闘開始してから後方でボスのモーションを確認しているだけだ。

だがシユガーにあれほど絶賛されて、ただ見ているだけでは終われない。俺はボスが両腕を振り上げたのを見て勢いよく走り出した。

後方付近で待機していたA班、スイッチのタイミングを伺っていたC班を追い抜いてボスへと迫る。C班で指揮を執っていたシユガーと目が合い、俺の意図を察したのか何も言わず頷いた。

「ゴオオオオオオオツツツ!!!」

雄叫びを上げてボスが両腕を振り下ろす。タンクたちは姿勢を低くして衝撃に備える。直撃したが、正面からしつかり受け止めたのでタンクたちのHPは一ドットも減っていない。ボスが苛立っているように見えるのは気のせいだろう。

「タンクーそのまま動くなー!」

ボスに反撃しようとしていたタンクたちに、俺は走りながら指示を出した。新入りからの突然の命令に戸惑っている様子だったが、黙ってそのままの体勢を維持する。

横一列に並んだ中の丁度真ん中―会議で発言した盾男―の背中に飛び乗り、ジャンプ台として利用して空高く跳躍。ボスの顔付近の高さまで届き、ソードスキルの射程内に入った。そのまま空中で構えを取り、ボスの顔面に叩き込む。

片手鎌カテゴリ三連撃技”イーグレット”

片手戦棍カテゴリ三連撃技”リガー”

「細剣カテゴリ三連撃技”コンクルージュオン”

斬・打・突の三属性でどれが弱点かを見極めるため立て続けに三種のソードスキルを放つ。どうやら顔面がウィークポイントらしく、クリティカル補正がかかった九発でHPはガクツと減少する。綺麗に着地してボスが悶えるのを見ながらシユガーに聞いた。

「HPの減りが大きかったのは何発目だった？」

「どれも同じくらいでした！」

ということは、顔面への攻撃は何系のソードスキルでも弱点ということか。分かってしまえばあとは簡単だ。

「ゴイツの弱点は把握した！もう一本削り切っていいか？」

「はい！やっちゃいましょう！今と同じようにカウンター作戦でいくからみんなよろしくね！」

「了解！！」

陣形を再編成してタンクがヘイトを集める。腕の振り下ろし攻撃を繰り返すがタンクがしっかりガード。さっきの跳躍を行うには両腕を振り下ろす攻撃の後でないといけないため、俺は中間距離を保ちつつその時を待つ。

怒涛の七連打に繋いで、ボスが両腕を大きく振り上げたと同時に俺は走り出す。今度は誰を踏み台にしようかと考えていたら、タンクのすぐ後ろにシユガーが両手剣を構えて待っていた。

「サツキさん！飛ばしますよ！！」

その構えから、シユガーが放とうとしているソードスキルを俺は瞬時に導き出した。

「マジかよ」

彼の意図を察して思わず苦笑いする。

両手剣カテゴリ二連撃技”リミック・エルプシオン”

下段からの斬り上げモーションに入ったシユガー。その動きに合わせて俺は跳躍し、彼の愛剣を踏み台に。強力なシステムアシストとシユガーの動きがリンクして両手剣は斬り上げられ、俺は先程の二倍近い高さまで飛んだ。ボスの顔面を優に超えている。

「うお！思ったより飛ぶもんだな」

眼下ではシユガーがあちやーとした顔をしている。

ここからでは顔面にソードスキルが届かないので、丁度射程内に収まっていた右腕を狙う。岩石が何重にも重なっていて見るからに硬そうなので打撃系で攻めてみることに。

片手戦棍カテゴリ二連撃技”ウエルプ”

両手戦棍カテゴリ三連撃技”ショート・ガバナー”

同じく単発技”ジェット・アンプリファイア”

両手剣カテゴリ単発技”セクター・コラプス”

打撃系三連発で表面を覆っていた岩石を粉碎し、トドメの斬り落とし技でボスの右腕は完全に破壊された。派手なエフェクトと破碎音とともにポリゴン片となって散る。

まだ終わらない。

何が起きたのか理解できないと言った感じのボスのマネケ顔に、さらに畳み掛ける。

「曲刀カテゴリ二連撃技”ダブルムーン”

同じく全方位技”カットダウン・シツクル”

両手斧カテゴリ二連撃技”テンペスト”

片手直剣カテゴリ三連撃技”シャープネイル”

短剣カテゴリ全方位技”スウイフトストローク”

技が決まる度にガクツガクツとHPが大きく減少し、とうとう最後の一撃で一本目のHPが消滅した。ボスは大きく仰け反りそのまま冷たい岩の床に倒れた。

落下ダメージを発生させないようにに着地し俺はボスの様子を窺った。隊員たちも陣形を保ち警戒する。

「一本目を削った！パターンが変わるかもしれないから注意して！」

「了解!!」

じつとボスが起き上がるのを待つ。

20、30と時間が過ぎてようやく、ボスがゆっくりと起き上がった。今のところ外見に変化はない。

「ゴオオオオオオオツツツ!!!」

咆哮と同時に、ボスの体を覆う岩石にヒビが入りその一部が剥がれ

落ちる。それが地面に転がると変形して歪な人型になった。カーソルが敵対モンスターを示す赤に染まる。

「取り巻きが湧いた!」

「BCD班で引き付けてください! A班とサツキさんでボスのタゲ取りを!」

「了解!!」

それぞれが瞬時に状況に対応した。

B班に向かおうとしていたボスをA班のタンクがタゲを取って誘導する。BCD班はそれぞれ距離を取って取り巻きを引き付けることに成功したようだ。最悪な状況である乱戦は避けられた。

右腕を欠損した分軽くなったのか、ボスは先程よりも早い動きで左腕を振り回す。早い分威力が増したのか、タンクたちのHPがわずかながらに減少し始めた。

「はあっ!」

ボスの背後からシュガーが攻撃を見舞う。

両手剣カテゴリ二連撃技”サブサイデンス”

岩石を削り赤いダメージエフェクトが飛散する。手応えはあるようだ。二本目のHPバーもわずかに減少を始める。

しかし。

「ええ!? また取り巻きが出ました!」

シュガーの攻撃により剥がれた岩石が人型へ。どうやら岩石が剥がれる度に取り巻きが湧くらしい。一体一体ではさほど脅威ではないが、数が増えれば厄介だ。

「隊長! このままでは囲まれてしまいます!」

「退くなら今です!」

「どうしますか! 隊長!」

隊員たちがシュガーに指示を求める。

当初の目標は達成したので撤退でも良い気がするがシュガーは悩む素振りもなく言った。

「このまま戦闘を続けます!」

その判断に少なからず意見する者もいた。

「隊長、取り巻きがこれ以上増えれば厄介だ！まだまだ湧く可能性だってある！一度体勢を整えた方が良いんじゃないのか!？」

もつともな意見である。

だがシユガーは冷静に続けた。

「取り巻きは、ボスにくつついている岩石が剥がれることで湧くと思われます。なので、岩石を全て剥がしてしまえば取り巻きは湧かないでしょう。一体ずつでは脅威ではありませんので落ち着いて対処してください」

「しかし—」

「作戦はこうです!」

シユガーがまだ納得のいかない隊員の言葉を遮る。

「ABC班で取り巻きの相手をお願いします!ボスの相手は僕と—サツキさん!お願いできますか?」

「あいよ!」

シユガーの判断は適切だと思う。

数の多い取り巻きは隊員たちに任せて、俺とシユガーでまずは取り巻きを全て吐き出させる。ボスを覆う岩石を全て剥がして取り巻きを殲滅すれば、あとは勝ち確だろう。岩石がなくなったこのボスなんてただのデカイ的だ。もはや偵察ではなく本戦になっている気がするが、シユガーの指示なので俺は何も知らない。あとで副団長に何を言われようが俺は知らない。うん、知らない。

俺は正面から、シユガーは右側面からボスに迫る。俺にターゲットしたボスは左脚をゆっくりと持ち上げた。俺がソードスキルの射程内に入ると否や、持ち上げた左脚を勢いよく下ろして踏み付け攻撃をしてきた。

「はあっ!」

それを左にステップして避け、カウンター。

片手直剣カテゴリ三連撃技”サベージ・フルクラム”

細剣カテゴリ二連撃技”パラレル・スティング”

岩石を抉り、剥がれ、取り巻きが出現する。C班の隊員が割り込み、タゲを取って引き付ける。

「せいっ！」

シュガーの攻撃も右脚に命中する。同じ手順でA班が取り巻きをシュガーから遠ざける。急ごしらえの作戦だが、みんな役割を理解して動いているのは流石としか言い様がない。

後ろに回り込んで臆に狙いを定める。

両手鎌カテゴリ二連撃技”ライテスネス”

片手鎌カテゴリ三連撃技”イーグレット”

岩石が全て剥がれたのか、赤い筋肉が露わになる。

「見るからに柔らかそうだ、なっ！」

カタナカテゴリ単発技”蜻蛉”

片手直剣カテゴリ単発技”プレダトリー・ガウジ”

二発の単発重攻撃で剥き出しの筋肉を斬り裂く。鮮血に似た赤いダメージエフェクトが派手に飛散し、ボスのHPが大きく減少する。

「流石ですサツキさん！僕もいきますよ！」

両手剣カテゴリ二連撃技”デブリス・フロウ”

熟練度700で解禁されるソードスキルだ。俺は〈剣豪〉スキルで既に習得しているが、他のプレイヤーが使うのは初めて見る。

「ゴアアアアアツツツ!!!」

両脚に大ダメージを負ったボスは絶叫する。シュガーの攻撃で二本目のHPバーが消滅し、最後の一本となった。取り巻きの相手をしてきた隊員たちから驚嘆の声が上がる。

「いいですねーこのまま倒しちゃいましょう!!」

ノリノリなシュガーに釣られて隊員たちの士気が向上する。まあ楽勝だろうな、と俺も思っていた。

だがこの世界は、そう簡単にはいかない。

ビキイツ！と何かが罅割れる音。次いで破裂音。

「オオオオオオオオオオオオツツツ!!!」

咆哮と同時に、ボスの体に残っていた岩石が全て弾け飛んだ。全身の筋肉が露になり、防御力は皆無に等しい。が、逆を言えば――

「おいおいマジかよ！どんだけ湧くんだ！」

「やべって！この数はさすがに・・・!!」

「集まれ！孤立したらリンチだぞ!!」

ボス部屋は、新たに現れた取り巻きで埋めつくされていた。その数およそ50。俺たちとの数の差が圧倒的だ。

「みんな落ち着いて！陣形を崩さないように！」

シュガーが指示を出す、迫る取り巻きたちの足音と呻き声で掻き消される。岩の巨人からただの巨人になったボスが、形勢逆転と言わんばかりにニヤリと笑った気がした。

「・・・本当にクソゲーだな！ええ!？」

ボス部屋の天井を、さらにその上を。

この世界の創造者であり、どこかでこの光景を見ているであろう茅場に向けて俺は叫ぶ。

「あんたは間違いなく天才だよ！普通ならこんなこと思いつかないし、やろうと思わん！いつそ清々しいわ！この状況で俺たちが慌てふためく様を見て、あんたは楽しんでるんだろうな！・・・でもな、正直この状況、めっちゃ熱いわ」

右手を振って呼び出したメニユーウィンドウを手早く操作する。

装備欄で左手を指定、アイテムリストからソレを選択する。

「サツキさん、落ち着いて・・・」

「ああ、すまん。久々に興奮してな」

背中に新たな重みが加わるのを感じながら、心配してくれたシュガーに応える。左手でその感覚を確かめながらシュガーに向き合う。「シュガー。突然で悪いが、俺の言う通りにしてほしい。確実にボスを倒して全員で生還するために」

俺のできる限りの誠意を込めて言う。

それが伝わったのか、或いは俺の雰囲気から何かを察したのか、シュガーは頷いた。

「分かりました、信じます！」

他の隊員たちも異論はないと頷く。

「よし、やってほしいことは一つだけ。全員で壁際に固まってひたす

ら防御して耐えること」

「え？それだけですか？」

「ああ、みんなには悪いが俺一人の方がやりやすい」

「なるほど！そういうことならお任せを！みんな聞いてたね？A班を先頭に前進します！行くぞ！」

シユガーは一瞬立ち止まって言った。

「……無理だけはしないでくださいね」

「死なない程度に頑張るさ」

グツと親指を立てて彼が走って行くのを見届けて、俺はボスと取り巻きの大群に向き直った。

「さて、実戦で使うのは初だけど大丈夫かな？今更ながら不安」

「ゴアアアアアアアアアアアツツツツ!!」

ボスの咆哮で取り巻きの大群が一斉に迫って来る。

俺は右手の愛剣を握り直し、左手で二本目の愛剣を抜き払った。

「目に物見せてやるよ、茅場晶彦」

〈剣豪〉スキル O オリジナル・ソードスキル S S ”擬似二刀流”

〈アスナside〉

敏捷力にものを言わせて走り続け本部に駆け込んだ私は、驚きながらも挨拶をしてくれた団員たちに構うことなく偵察隊の部屋へ向かった。部屋の前で一度止まって息を整え、いつもの落ち着きを取り戻してから扉を開ける。

「そこでサツキさんの超連続攻撃がズバババーン！ってボスの心臓を捉えたんだ！それで終わらずに、サツキさんはさらに空中で身を捻って次の連撃攻撃を——」

「た、頼むシュガー！止めてくれ!!恥ずかしくて死にそうだ!」

部屋の中には、偵察隊の他に大勢の隊員たちがいてシュガーくんの話を夢中になって聞いている。それを止めようと必死になっているサツキくん。状況がよく分からないが、偵察隊の人数が減っていないことに安堵して、私は手を大きく鳴らした。ピタッと喧騒が収まったところで私は続ける。

「はい、偵察隊の人以外は解散してください」

ぞろぞろと退室していく中にこっさり混ざったサツキくんを捕まえて座らせる。自然と全員が姿勢を正したところで本題へ移る。

「では、詳しく聞きましょうか」

「・・・はあ、シュガー任せた」

「はい！よろこんで!!」

何かを諦めた様子のサツキくんと、いつもよりテンションが高いシュガーくん。興奮冷めやらぬ彼が語ったのは、にわかには信じられないものだった。

「あれはまさに大ピンチの状況でした——」

◆?

〈サツキside〉

” 擬似二刀流

〈剣豪〉スキルを応用して二本の剣を同時に使うという、システムに規定されていないスタイルだ。今までに二刀流に挑戦した人は数多くいるが使い物にはならなかったらしい。当然だ。これもまた普通ならばシステムの不可能だからだ。

両手に剣を装備することはできる。だがソードスキルが発動できないのだ。これでは戦闘で使えない。見せ物程度で振り回すことは出来るだろうが。

だが俺は違う。

飛び掛ってきた一体の取り巻きを右手に握った純白の愛剣―カタルスで斬り捨てる。二連撃技” ホリゾンタル・アーク”

次いで迫る二体を左手に握った紅の愛剣―ディメンションで迎え撃つ。四連撃技” バーチカル・スクエア” +単発技” リニア―”

爆散したポリゴン片に目もくれず俺は走り出す。

走りながら敵を見据え、最も効率よく屠れるソードスキルを導き出して放つ。

単発突進技” レイジスパイク” で一体を斬り上げ、周囲に群がってくる数体を両手剣カテゴリ全方位技” ガストネード” で吹き飛ばす。リニア―で一体にとどめを刺し、近くにいた二体を曲刀カテゴリ四連撃技” ダルード・ルーネイト” を半分ずつ使って倒す。

背後から襲って来た数体を両手剣カテゴリ単発技” バックラッシュ” でまとめて消し飛ばし、俺は再び走り出す。少しでもソードスキルが途切れたり、その場に留まり続ければ立て続けに攻撃を浴びてしまうので気が抜けない。走る斬る走る斬るを繰り返して取り巻きの数を確実に減らしていく。

だが、俺の動きに付いて来れず倒されていく取り巻きと違って、ボスは反撃を試みたようだ。左腕を一直線に、先程とは比較にならない速度で突き出してくる。

「はっ！」

それをジャンプで躲し、地面に突き刺さった腕を伝ってボスの顔目がけて駆け上がる。しかし咄嗟の反応でボスが腕を振り、俺はその場から壁に向かって大きく跳躍した。でこぼこした岩壁に足がつくと同時に、カタルシスを構えて曲刀カテゴリ単発突進技”デイパルチャー”を発動。力強く壁を蹴って再び跳躍し顔面に一閃。その勢いそのまま今度はデイメンションで片手直剣カテゴリ”セレーション・ウエーブ”を見舞う。ガクツガクツとHPが削られ残り七割ほどになったそれを横目に、俺は着地と同時に片手鎌カテゴリ単発技”ジャックダウ”を連発し取り巻き五体を消し飛ばす。

「・・・凄い」

シユガアの、隊員たちの驚きの声が聞こえる。彼らの数が減っていないことを確認して、俺は再び眼前の敵に集中する。

片手直剣カテゴリ単発上段突進技”ソニックリープ”

デイメンションを一度鞘に収め、

カタナカテゴリ二連居合技”梁塵”

短剣カテゴリ六連撃技”ファッドエッジ”

両手斧カテゴリ二連撃技”オンスロート”

迅速に的確かつ効率的に。

”リニア”が最後の取り巻きの胸部を貫き、爆散させ、残すはボスのみとなった。

「あとはお前だけだ、さっさと終わらせるぞ」

愛剣を構えて走り出すと、ボスも俺目がけて向かって来た。もはや俺以外は眼中に無いらしい。その方がやりやすいのだが。

ボスが先に仕掛ける。

単純な腕の振り下ろし攻撃。パターンは出尽くしたようで、新しい攻撃もギミックももうないだろう。一気に畳み掛ける。

ステップで躲しつつ抜き際に一撃、股下を潜り抜けて右脚に”ホリゾンタル・スクエア”と”スネークバイト”。堪らず膝をついた隙にボスの軀を駆け上がる。

肩を蹴って跳躍し、ボスの顔面を射程内に。

カタルシスが真紅のライトエフェクトを、デイメンションが眩い白

銀のライトエフェクトをまとう。

” 擬似二刀流” 十三連撃技” ドウーム・フェイム”
紅白の軌跡がボス部屋を照らす。

副団長に言い忘れていた〈剣豪〉スキル最大の特徴がこれだ。

オリジナル・ソードスキル
O S S

『本来システムアシストなしには会得不可能な速度の連続技を、身体に無理がかからないモーションで、アシストなしに実行しなくてはならない』という矛盾とも言える厳しい条件をクリアすることで、自分だけのソードスキルを作成することができる。

俺が現段階で作成に成功したのは片手直剣カテゴリーで二つ、細剣カテゴリーで一つ、擬似二刀流で一つの合計四つだけだ。その中で”ドウーム・フェイム”は威力、手数、速度、使い勝手どれをとっても最高傑作と言える。

「終わりだ……！」

八発目が入ったところで、すでにボスのHPが二割ほどになっていたのを見た俺は勝利を確信した。だが手を緩めることなくシステムのアシストに動きを合わせてさらに加速する。そして――

「ゴアアアアアアアアッツツッ!!!」

十三発目がヒットし、ボスのHPは余さず消滅した。長い断末魔を響かせながらその巨躯をポリゴン片へと爆散させ、Congratulation!!の表示とともに勝利を告げるBGMが奏でられる。

俺が愛剣たちを鞘に落とし込むと、途端に隊員たちが歓声を上げた。

「おおおおお!!」

「すげえええ!!!」

「一人で倒しちまった！」

「かっけえええ!!」

「剣豪！剣豪！剣豪！」

「サツキ！サツキ！サツキ！」

「お、落ち着けお前ら！」

予想外の反応と盛り上がりには俺は驚く。隊員たちと次々ハイタッチを交わし、少々気まずい感じになっていたはずの大盾男も笑顔で握手を求めてくる。

「いやあーもう本当に凄かったですサツキさん!!僕なんか見とれてしまいました!」

赤い目をキラキラさせながらシュガーが言う。

「ありがとう・・・てか今更だけど大丈夫なのか?勝手に、倒しちゃつて。絶つっつ対、副団長に何か言われるぞ」

規律やら方針に厳しい”攻略の鬼”こと副団長が小言を言うのは想像に難くない。だがシュガーは懐かしむ様に言う。

「大丈夫ですよ、僕が隊長になった時にアスナさんが言ったんです。

”あなたの最優先任務は、犠牲者を出さないこと。どんな手段でも良から必ず全員で帰って来ることだ”って」

冷徹な指揮官として恐れられている副団長だが、そういうところはちゃんと自分の考えを持っているらしい。なんて口が裂けても言えないが。

「隊長!早く上に行こうぜ!」

「早く早く!」

「俺たちが次の層に初めての足跡をつけるんだ!」

先ほどの戦闘の疲れなど感じさせない走りで隊員たちが五十二層へ続く階段へ向かう。

「サツキさん!僕たちも行きましょう!」

「・・・ああ、行こう!」

普段の俺だったら疲れてそれどころじゃないはずが俺は敏捷力の許す限りの速度でみんなを追った。

ボスを倒した達成感と新しい仲間たちとの喜び。

未知のフィールドへの期待と興奮。

考えられるのはこれくらいだが、俺はこの気持ちにどこか懐かしさを感じていた。

◆？

〈血盟騎士団・本部・団長室〉

「――以上が、第五十一層ボス偵察戦の報告です」

「ありがとう、アスナ君」

「団長、一つよろしいですか」

「なにかな」

「彼が、サツキくんが、キリトくんの代わりになると本当に思いますか？」

「そうだね・・・訂正しよう。私は彼がキリト君を超える存在になると確信している」

「っ・・・そうですか」

「アスナ君はどう思うのかね？」

「・・・彼の实力は認めます。ですが、キリトくんの代わりにも、それ以上の存在にもなるとは思えません」

「そうか。アスナ君にとってキリト君はとても大切な存在だったのだね」

「・・・はい」

「彼を探さないのかね？アルゴ君なら知っているはずだろう」

「いいんです。邪魔はしたくないので・・・これが私にできるせめてもの恩返しですから」

「そうか」

「・・・失礼します」

「・・・使命から逃げ出した勇者と、運命に導かれた剣豪、か。想定外だが、展開としては悪くないな」

E X. 聖夜に願う

人は喪って初めて、大切な存在を知る。

人は失って初めて、何気ない日常にかけがえのないものがあることを知る。

人は喪って初めて、自分の弱さを知る。

人は――

◆?

「相変わらず無茶苦茶なレベリングをしているようだな」

語尾が特徴的なその声に顔を上げる。小柄だが俺よりも大人びた雰囲気のそいつは、両頬にヒゲのペイントを施していた。そこから由来した”鼠”の呼び名で有名な情報屋だ。

「酷い顔をしてるゾ。しばらく寝てないんだろ？」

「そんなことはいい。新しい情報は？」

自分でも驚くほど冷たい声が出た。別にこれ以降関わることの無い相手なのでさほど気にせず、心配を無視して要件だけを伝える。一瞬戸惑った様子を見せた情報屋だったが、すぐにいつも通りの振る舞いに戻る。

「売り物になるモノはないな。どこを探っても今までに売ったモノと同じことしか出てこない」

空振りか。

俺は無言で立ち上がりその場を離れた。情報屋が何か言っていた気がするが、行き交う人波の喧騒に掻き消された。

◆？

〈アルゴside〉

「そのままじゃ死ぬゾー！」

無言で去って行く客人に対しアルゴは叫ぶが、おそらく彼に届いてはいない。無意識のうちに拳を握るのは、彼を止めることが出来ない自分の無力さを痛感しているからか。

彼は二週間ほど前から接触してきて、とある情報だけを求めてくる。多くを語らない彼だが、少なくとも攻略組ではない。しかし、簡素なその装備からは想像できない、歴戦の戦士を彷彿とさせる気配をアルゴは感じていた。そこら辺のプレイヤーとは比べ物にならない実力者であることは確かだ。

だからアルゴは困惑した。自分の知らない、こんなプレイヤーがいたことに。

そんな彼が求めるのは、クリスマスに現れるイベントボスの出現場所だ。NPCや関連クエストから様々な情報を集めていくつかの目星はついてはいるが、確実と言えるものはまだない。

イベントボスなんてソロで倒せるほど甘くない。

会う度にそう言い聞かせてきたアルゴだが、それでも彼はソロで倒すことにこだわった。理由は、だいたい察しがつく。

イベントボス―背教者ニコラスは蘇生アイテムをドロップする、という噂はインクラッド中で物議を醸した。ありえない、NPCのバグという意見が大半だが、わずかながらの希望を持つ者もいる。

彼もそうなのだろうか？

彼の虚ろな瞳には何が、誰が映っているのだろうか。

◆？

鈍器で殴られたかのような激痛が頭を貫く。

堪らず発動しかけたソードスキルをキャンセルし、俺は後方へ大きく飛び退いた。左手で額を抑え痛みが引くのを待つ。

「ギシエエツツ!!」

耳障りな鳴き声とともにアリ型モンスターの巨大な顎が迫る。右前方へ転がるように回避して振り向きざまに単発技”スラント”を額に見舞う。甲殻を砕いて肉を裂き、頭部と胴体が分離されて爆散する。そのまま止まることなく片手斧カテゴリ水平三連撃技”アーデント・レンド”で二体をまとめて屠る。

ちらりと視界に入ったタイマーがすでに一時間近く経っているのを確認した俺は、両手剣カテゴリ全方位技”ガストネード”で近くの敵を一掃して猛然とダッシュした。ものの数秒で敵の探知範囲外まで離脱し、張っていた気が緩んでその場に座り込む。回復ポーションを飲み干して残り六割ほどだったHPが徐々に回復するのをぼんやり眺めていると、俺に近付いてくる足音が聞こえた。足音の主は俺の三歩手前で止まり、遠慮がちに声をかけてきた。

「なあ、あんた。本気でニコラスにソロで挑むつもりか？」

いつもの迷惑なお節介者だと思つて聞き流そうとしていた俺は、予想外の問いに思わず顔を上げた。武士風の防具に日本刀というサムライスタイルの男は憐れむような目で俺を見ていた。長時間の戦闘での疲れか、あるいは怒りからか軋む声で俺は言う。

「・・・お前には関係ないだろ」

「いやあるね。お前さんほど強いやつをおいそれと死なすわけにはいかねえし・・・放っておけねえ」

おそらくこの男は面倒みがいいのだろう。悪いやつではないようだが、今の俺にとっては邪魔でしかなかった。

「お気遣いどうも」

それだけを言い残して俺は歩き出した。男は止める様子もなかった叫んでいた。

「俺は風林火山のクラインってんだ！何かあったらいつでも頼れよ！」

男の声はやたらと俺の耳に残った。

◆？

〈クライン side〉

遠ざかる少年の背中を見つめながら、クラインはアルゴに言われたことを思い出していた。

『キー坊に匹敵する実力者のソロがいるんだガ、どうも危なっかしやつでナ。目をかけてやってクレ』

いつも世話になっている手前、快く引き受けたが件の少年は思っていたより深刻な事情を抱えているように見える。他人の自分が横から入っても邪魔扱いされるだけだろうが、どうにも放っておけない。「さて、どうしたものかねえ・・・」

その独り言は誰に聞かれることなく闇に消えた。

◆？

群がる雑魚共を適当なソードスキルで消し飛ばし、薄暗い道を進む。死角からの不意打ちも難なく返り討ちにして、まだ回収されていない宝箱を片っ端から開けていく。

ここは最前線ではないが十分に危険なエリアだ。初見だと様々なギミックや多発するトラップに対処できずに命を落とす可能性が高い。そんな所にクリスマス前の貴重な時間を割いてまで来ている理由は、ここでのしか入手が確認されていない希少な素材を集めるためだ。愛剣の強化成功率を飛躍的に上昇させるのでレベル上げと同じくらい重要な事だと思う。トラップ多発エリアなので宝箱があつて

も安全を優先してスルーしていることが多く一時間でかなりの数の宝箱を開けて目的数の素材を集め終えた。

街に戻ってさっそく強化しようと、俺が転移結晶を手にした瞬間だった。

「きゃあああつー！」

近くから女の悲鳴、さらに複数の焦りの声が聞こえた。それらに被さるようにビィービィーと不気味なアラーム音が大音量で流れる。

「・・・」

誰かがアラームトラップを引いてしまったことはすぐに分かった。だが俺はこの時でも、愛剣の強化とイベントボス、レベル上げなど自分のことしか考えていなかった。ここで助けに入ったところで貴重な時間が失われるだけで、俺にメリットは何も無いからだ。

頭の中はそんな考えで一杯だったのに、気が付いたら俺はアラーム音に導かれる様に走り出していた。

状況は予想される中でも最悪なものだった。

アラーム音が鳴り響く部屋の扉は完全に閉じられ、壁の隙間から見える中は大混戦だ。端っこに固まって陣形を取り、囲まれてリンチにされるのは免れているようだが、モンスターの数が尋常ではない。一体を倒す間に二体三体と湧いてくる。このままでは押し切られて全滅だ。転移結晶を握っている槍使いの少女の様子から察するに、おそらく稀に見る結晶無効化エリアなのだろう。

そんな中、一人奮闘する黒衣の剣士がいた。

遠くからでも見てわかる片手剣の鋭い輝き。

練り上げられた剣技は、どれも攻略組が使う上位ソードスキルだ。的確で効率的に押し寄せる群れを斬り伏せていく。

だが数が多い。

捉えきれない数体が彼の仲間にも迫る。レベル的には充分渡り合えるはずだが、恐怖で体が動かないのだろう。何も出来ずに直撃をくらい、HPが減ることで恐怖し、それが他の仲間へ伝染する。

「・・・クソが」

怒りが込み上げてきた。

おそらく後ろの仲間たちは、黒衣の剣士に頼りっぱなしのままここまで上がって来たのだろう。黒衣の剣士の力を自分たちの力と勘違いし、そしてトラップを引いた。相応の実力と経験があるならばあんなに取り乱すことはない。

どこか似ている、いやそっくりだ。

俺が一番嫌いな、俺自身と。

愛剣を抜き去り、分厚い扉に単発技を三連続で撃ち込む。止まらず両手剣カテゴリ三連撃突技”テフラ・ディーセント”、二連撃技”リミック・エルプシオン”で扉を突き破る。

突然のことで反射的にこちらを向いた黒衣の剣士に、俺は出せうる限りの声量で叫んだ。

「アフレームを止めろ！」

言うや否や、眼前の四体を四連撃技”ホリゾンタル・スクエア”で両断。爆散したポリゴン片を掻き分けて突進技”ソニックリープ”で道を開ける。ここで黒衣の剣士が喚き散らしていた宝箱を破壊し、モンスターの湧きが止まった。

そこからはただの作業だった。

片っ端からソードスキルを発動して近付いてくる敵を処理する。未だに動けない奴らは放っておいて黒衣の剣士とともにその作業を続けた。

五分もしないうちに大群は消え去り、部屋は久方の静寂に包まれた。わざと音を立てて愛剣を収めると、黒衣の剣士が歩み寄って来た。何か言葉を発する前にこちらが切り出す。

「あんた、本当は強いんだろ？」

「えっ……」

固まった彼に構わず続ける。

「どんな事情かは知らないし興味もないけど……そんなことはやめた方がいい。取り返しのつかないことになる前にな……俺みたいになるなよ」

返答は聞かず俺はその場を後にした。

◆？

去って行く恩人を見届けながら、言われた言葉の意味を考えていた。彼の虚ろな瞳は、とても大きな悲しみと後悔に染まっていたように見えた。

「……俺みたいになるな、か」

俺と同じなのだろうか。

もし、このまま偽った関係が続けたら俺も彼と同じようになるのだろうか。

そう確信したからこそ忠告してくれたのだろうか。

理由はいくら考えても分からない。ただ――

「なあ、キリト。さっきのって……」

「うん、ちゃんと話すから……一回戻ろう」

俺がすべきことは分かった。

◆？

「……ここだな」

拓けた森の中にポツンと立つ巨木を見上げた俺は、ここがイベントボスの出現場所であると確信していた。確かな情報があったわけではない。強いて言うならただの直感だ。

時刻は二十四時近く。

あと数分もしないうちに件のボスが現れる。

近くの木の幹に背を預けてその時を待つ。

ついさつき強化した真新しい片手剣に防具、ありったけ持ってきたポーションと結晶アイテムを一瞥していた俺の耳に、複数の足音が聞こえてきた。

「・・・お前」

「よお、奇遇だな」

クラインと風林火山のメンバーだった。さらに、彼らに囲まれるようにして小柄な人影が。

「鼠・・・」

「奇遇だな」

白々しい態度に腹が立つのをどうにか抑える。

「・・・なんのつもりだ？」

「誤解するナヨ」

いつもと違う、少し怒気を含んだその声色に思わず黙る。

「邪魔をするつもりはナイ。ソロでやりたいならやれば良いサ」

「ただし、お前さんが死にそうになったらそこで終わりだ。その時は俺たちが加勢する。報酬はドロップしたもんで恨みっこなし、蘇生アイテムもな。それで良いだろう？お前さんはこんなところで死んでいいやつじゃねえんだよ！」

必死の形相でクラインが訴えかけてくる。

「お前さんの力はこれから間違いなく必要とされる！だから蘇生アイテムなんて実在するかも分からないやつに命を賭けるのはやめろ！誰のためかは知らないが、そいつも今のお前さんを見たら悲しむんじゃないか？」

「・・・」

面白いことを言うなと思った。

誰のため？決まっている。

「俺のためだよ。蘇生アイテムを求めるのは、俺が俺を肯定するための言い訳に過ぎない。今の俺を見たら、あの人だったら悲しむどころか腹を抱えて笑い転げるだろうな……」

たった数ヶ月前の情景が遠い昔のことに思える。

思い出すのはあの人の笑顔だけ。

今の俺は、ただそれだけを求め、蘇生アイテムなんて幻想に過ぎない物に縋っている。

縋るしか、俺にはできないから。

クラインも鼠も何も言わない。音もなく雪が降り、不気味なくらいの静寂がこの場を支配する。

どこからともなく鈴の音が聞こえた。

上空を見上げれば、満月に浮かぶ大きな影が徐々に近付いて、いや落ちて来る。

地響きを鳴らして着地したソレは、サンタの衣装を着た醜い巨人だった。名は―背教者ニコラス。

俺はクラインたちに背を向けて愛剣を構える。

後ろで後退する気配。

前方のニコラスは、飛び出た眼球で俺を見据えながらイベント用のセリフか何かを発しようとした。

「黙れよ」

それを遮り、俺は走り出した。

◆？

〈アルゴside〉

まさに死闘だった。

トッププレイヤーの戦闘を間近で見るのは初めてではないが、それでも今までに見てきたものとは明らかにレベルが違っていた。全ての動作が洗練されていて無駄と隙が一切なく、まさに戦闘の、剣士の完成型と言えるものだ。到底不可能と言われていたソロ攻略が目前に迫る。だが決して余裕があるわけではない。

互いのHPはすでに真つ赤に染まり、次の一撃で勝敗が決まる。当初の計画では風林火山に加勢してもらはずだったが、この戦いのレベルに付いて行けた者は誰一人としていなかった。

どこかの木に降り積もった雪が、音を立てて落雪する。それが最後の合図だった。

ニコラスが少年目掛けて跳躍する。

少年は真正面からソードスキルの構えを取る。その刀身がライトエフェクトをまとい始めた直後だった。

空中で大きく息を吸い込んだニコラスが、歪な口から氷のブレスを放った。土壇場で初めて見せる動きだが少年は流石の反応速度でソードスキルをキャンセルし、それをギリギリで避ける。

それを予測していたかのように、ニコラスは巨大な鉤爪を振り下ろした。

AIとは思えない高度な攻撃だ。少年の顔にも驚きが見られる。

ガギギイイインと耳障りな金属音が響く。少年が片手剣を滑り込ませて鉤爪を防いだ。しかし、その衝撃で体勢を崩し不格好に雪の上を転がる。

「行くぞー！」

クラインが仲間とともに駆け出す。妥当な判断だろう。少年の負けは目に見えている。

両腕を大きく振りかぶり、歓喜の咆哮を上げ少年にトドメを刺そうとしているニコラス。その頸をクライン――

「・・・っ!？」

―ではない、漆黒に染まった少年の愛剣が斬り飛ばした。

◆？

無様に転がった俺は、不思議なことに死の恐怖を微塵も感じなかった。諦めとは違う、これが俺の限界なんだと納得していた。

俺の命を刈り取るニコラスの両腕を仰ぐ。

やけに時間経過がゆっくりに感じられた。

死を受け入れ、目を閉じた俺は取り戻そうとした過去の情景を思い出す。

『君いいね！センスあるよ！』

『これなんてどう？似合うかな？』

『ここ行ってみよう！面白そうじゃない？』

『これ美味しい！また二人で来ようね』

『君はもつと自分に自信を持って』

『世界最強の私が言うんだから間違いないよ！』

あの人はいつも笑顔だった。

いつも振り回されてばかりだったが、嫌だとか退屈だと思った日はない。

『え!?新しいスキルじゃん！私も聞いたことないよそれ！』

『君にぴったりのスキルだね！』

『君が私を超える日も近いかも、なんてね』

『じゃあ私のおきをおきを教えてあげる！』

何も無い俺に、たくさんのことを与えてくれた。

『いい？これから言うことを忘れないでね』

『君は、私みたいにならないでね』

『力があっても、誰に分けることも無くただ自分の欲を満たすためだけに使う』

『強い人は弱い人を助けてあげないとダメなの』

『私はそれができなかった』

『だから君は、君を必要とする人たちを助けてあげて』

『私にはできなかったことを成し遂げて』

『これはその時にきつと役に立つから』

『今は使えなくていい』

『大丈夫』

『君はこの世界最強の剣士——いや〈剣豪〉だから』

『どんな時も、絶対諦めないでね!』

その声が、俺を突き動かした。

今までに時折感じていたもの、生きてきた中で感じたことの無い激痛が頭を貫く。一瞬で意識を持つていかれそうになるがなんとか耐え、俺は”声”に導かれるまま体を動かす。それに応えるかのように、愛剣が紅から漆黒へとその刀身を変える。

かつてないほどの力で満たされた両足で地を蹴る。

瞬時に不細工な顔面の高さまで跳躍。

飛び出た眼球と目が合い、そこに何が起きているのか分からず困惑しているのを見た。

「・・・AIおまえには理解できないだろうな」

そして、ニコラスの頸を一閃で斬り飛ばした。

薄れていく意識の中、ニコラスがポリゴン片へと爆散する様とリザルト表示、そしてあの人の笑顔が見えた気がした。

気を失っていたのはほんの数秒らしく、目が覚めるとまだポリゴン

の残影が宙を舞っていた。相当な無茶をした代償か全身が思うように動かせないが、仰向けに寝っ転がったままなんとか右手を持ち上げてウインドウを呼び出す。うんざりするドロップアイテムの中からただ一つ、それを探し出す。

「……………あ」

それはあつさり目に飛び込んで来た。

《還魂の聖晶石》なるそのの説明は――

「……………はは、そうだよな」

対象が死亡してからおよそ十秒

取って付けたようなその一文が、過去に死んだプレイヤーの蘇生が不可能であることを物語っていた。

「……………ああ、あ……………あああああああ!!!」

絶叫し、泣きじやくり、絶望した。

この世界が、自分が憎くて仕方なかった。

壊したい、殺したい。

でもそんな力も度胸もなくて。

ただただ子供のように喚くだけ。

そんなことしか、俺にはできないから――。

Ep. 8 ビーストテイマー

「お願いだよ．．．あたしを独りにしないで．．．ピナ．．．」

静かに頬を伝った涙が、地面上の大きな羽根に弾けた。その淡い水色の羽根は、少女―シリカの友達でありパートナーであった使い魔・ピナが遺したものだ。ピナは危機に瀕したシリカを守り、モンスターの攻撃によって死んでしまった。

事の発端は数十分前に遡る。

パーティーメンバーとの些細ないざこざから単身、フィールドを駆けていたシリカだったが、そこは迷いの森と呼ばれる厄介な場所だった。地図を持っていなかった彼女は闇雲に走り回り出口を探したが見つからず、じりじりポーシヨンとHPだけが減っていった。焦りと恐怖からミスが目立ち始め、ついに死が目前に迫った時、ピナが彼女を守った。

激昂し、我を忘れてソードスキルを無茶苦茶に繰り出し、ピナを殺した敵に向かった。敵の攻撃など無視して突っ込み、自身のHPなど気にもとめなかった。死への恐怖はとうに消えていた。

デスゲーム開始以降初めて、HPバーが真っ赤に染まっていることに気付いたのは、助けに入ってくれた見知らぬ男性プレイヤーから回復ポーシヨンを手渡された時だった。

◆？

〈サツキside〉

ボス戦が終わり久々の休日。

暇つぶしと素材集めを兼ねてアルゴのお使いをこなしに下層へと来ていた俺は、二体の猿モンスターに囲まれていた少女を見つけた。

彼女のHPが赤表示になっていて危険だと判断した俺は”ホリゾンタル”で二体をまとめて消し飛ばして助太刀したが、どうやら間に合わなかったらしい。

「ごめんな、もっと早く来ていれば・・・」

遺された羽根を抱えて涙を流す少女に謝る。彼女は小さく首を横に振った。

「いえ・・・あたしが悪いんです。ありがとうございました、危ないところを助けていただいたて」

「あ、うん・・・」

会話が途切れる。

膨大な数のソードスキルは瞬時に出てくるのに、こんな時にかけるべき気の利いた一言が出てこない。俺は自分の対人スキルの低さにかっかりしつつ、どうにか言葉を絞り出す。諦めるのはまだ早い。

「えっと、その羽根にアイテム名ってある?」

「アイテム名、ですか・・・」

少女が羽根に触れて確認し、震える声で言う。

「《ピナの心》・・・」

途端にじわつと涙が溢れ、俺は慌てて続ける。

「ああ泣かないで!アイテム名があるなら蘇生できるよ!」

「え!?!」

「えーと、四十七層に咲く花が使い魔蘇生アイテムなんだよ。実際に蘇生させた人もい——」

「ほ、ほんとですか!?!」

俺が言い終わらないうちに少女は腰を浮かせて叫んだ。その瞳にわずかに希望が宿っているが、すぐに肩を落とした。

「・・・四十七層ですか・・・」

おそらくレベル的に厳しいのだろう。装備から中層プレイヤーであることは予想できる。あそこのモンスターは植物系が多いので俺は苦手なのだが、致し方ない。

「えーと、一緒に行こうか？」

「え？」

疑問符を浮かべた少女に続ける。

「俺の使っていないやつを代用すれば装備は大丈夫だと思う。四十七層くらいなら俺だけでも問題はないと——」

「あ、あのー！」

少女に遮られる。ますます分からないと言った様子だ。

「どうして、そこまでしてくれるんですか？」

もつともな意見だ。友人でもない見知らぬ人からの突然の誘いを怪しまない人はいないだろう。

「あー・・・蘇生可能なのは三日以内なんだよ。それを過ぎるとアイテム名が形見になって、蘇生ができなくなるんだ。だから急いだ方がいい」

「そうなんですか・・・じゃあ、お願いします！あたしはシリカつています」

「俺はサツキね。よろしく、シリカさん」

「呼び捨てで良いですよ、サツキさん」

「そ、そう？じゃあシリカも呼び捨てで良いよ」

「いえ、あたしはダメです」

「なんで!?!」

こうしてビーストタイマーの少女との臨時パーティーが結成された。

E p . 9 善悪の剣

〈シリカside〉

サツキに連れられて三十五層主街区に戻って来たシリカは、張っていた気が緩みどつと疲れを感じた。大きく息を吐いて気持ちを落ち着かせていると、顔見知りの男性プレイヤーたちが声を掛けてきた。シリカがフリーになったと聞いて早速パーティー勧誘に来たのだ。

「あの、お話はありがたいんですけど・・・」

やんわりと断りながらサツキをちらりと見ると、うへえとした顔をしている。シリカの視線に気付いた彼は勧誘組リーダーの前に割り込むと口を開いた。

「悪いな、この子はしばらく俺とパーティーを組むことになったんだ。出直してくれ」

飄々とした態度のサツキに、リーダーの男は彼を見下ろす格好で言った。

「見ない顔だけど、抜けがけはやめてもらいたいな。俺らはずっと前からこの子に声かけてるんだぜ」

「あー、すまん。緊急の用事なんだ」

予想外の返しだったようで男は聞き返す。

「なんだよ？緊急って」

「見て分からないのか？使い魔が死んじゃったから蘇生アイテムを取りに行くんだよ。時間がないから俺が手伝うことになったんだ」

そこで男はようやくピナがないことに気付いた様だった。申し訳なきそうにしつつ、それでもまだ引き下がらない。

「だけど、確か使い魔の蘇生アイテムって四十七層だろ？お前、そんなに強いのか？」

瞬間、サツキの雰囲気が変わった。

肌を撫で切る張り詰めた空気をシリカは感じた。

「あんたよりは強いよ」

「ッ！」

言い様のない威圧感を放つ彼に、シリカは戸惑う。さつきまでとはまるで別人だ。黙り込んでしまったシリカと勧誘組に、サツキは雰囲気に戻して言った。

「まあ、明日中には戻って来れると思うからさ」

「あ、ああ・・・分かった」

そう言い残して勧誘組の面々は足早に去って行った。ふうと息を吐いたサツキがシリカに向き直る。

「なんか・・・ゴメン」

「い、いえいえ！気にしないでください。ちゃんと断れなかつたあたしのせいなので」

謝るサツキにシリカは謝り返す。

気を取り直して二人は歩き始めた。

◆?

〈サツキside〉

「あら、シリカじゃない」

近くの宿屋に入ろうとしたところで、隣の道具屋から出てきた赤い髪の女性プレイヤーがシリカに話しかけた。知り合いかと思つて立ち止まったが、シリカの様子を見るにスルーした方が良かったらしい。

「・・・どうも」

「へえーえ、森から脱出できたんだ。よかつたわね」

赤髪の女は口の端を歪めるように笑いながら言った。

「でも、今更帰ってきてても遅いわよ。ついさつきアイテムの分配は終わっちゃったわ」

「要らないって言ったはずです！急ぎますから」

シリカは会話を切り上げようとしますが、相手はピナがいないことに気付いたのか嫌な笑いを浮かべる。

「あら？あのトカゲ、どうしちゃったの？」

シリカが唇を噛む。使い魔が主のそばにいない理由など一つしかない。当然赤髪の女もそれを知っているはずだが、薄い笑いを浮かべながらわざとらしく言葉を続けた。

「あらら、もしかしてえ……？」

「死にました……。でも！ピナは、絶対に生き返らせます！」

痛快という風に笑っていた女の目が、わずかに見開かれた。小さく口笛を吹く。

「へえ、じゃあ、思い出の丘に行く気なんだ。でも、あなたのレベルで攻略できるの？」

「びぎるよ」

シリカが答える前に、俺は口を開いた。

「あの程度のダンジョンなら俺と一緒に行けば問題ない」

女は俺を値踏みするように見回した。そして笑みを深めて言った。

「ふーん、あんたもこの子にたらしこまれた口？あんま強そうに見えないけど」

「行こう」

女の声を見無視し、シリカの手を引いてその場を離れる。女はまだ何か言っていたが振り返らずに宿屋に入った。

宿屋の一階は広いレストランになっている。奥まった席にシリカを座らせ、俺はフロントでチェックインと注文を済ませた。シリカの前の席に座ると、彼女が申し訳なきように口を開いた。

「あの、さつきはすみません……」

「いや、大丈夫だけど……さつきの人と何かあったの？」

「……はい」

シリカは赤髪の女——ロザリアとのささいなケンカからピナを喪ってしまったことを話してくれた。

「・・・なるほど。そんなことが」

「すみません、巻き込んでしまつて」

「いやいや全然」

NPCが運んで来たマグカップを受け取り、シリカとカップをきちんと合わせる。赤い液体を一口するとスパイスの香りと甘酸っぱい味わいが口に広がった。同じく一口すすったシリカがおそろおそろといった様子で口を開く。

「あの、これは・・・？」

「ああ、これはギルドの倉庫からパク——じゃなくて、貰ってきたんだ。カップ一杯で敏捷力の最大値が1上がるんだよ」

「そ、そんな貴重なもの・・・」

「ただ倉庫に置いといても意味ないからな」

カップの中身を一気に飲み干してテーブルに戻す。NPCがそれを下げるのを見届けたシリカが問う。

「サツキさん、ギルドに入っているんですか？」

「ん？ああ、言つてなかつたな」

俺は所属ギルドの欄を可視化してシリカに見せる。最強の攻略ギルドと名高い血盟騎士団のそれを。

「えっ、え——」

「シート！」

叫び出しそうなシリカを制する。両手で口をおさえたシリカがおそろおそろの小声で言う。

「血盟騎士団・・・攻略組なんですか？」

「新人だけど、一応ね」

シリカのような中層プレイヤーにも名が知られているのは流石の知名度と言ったところか。改めてとんでもないところに入ったなと感じる。周囲を見回して俺は小声で言う。

「・・・誰にも言わないでね」

「は、はい。言いません・・・でも良いんですか？攻略の方は・・・？」

「大丈夫大丈夫、しばらく休みだから」

NPCが運んで来た料理や飲み物を口に運びながら、俺たちは他愛

もない話で盛り上がった。攻略組の話聞くのは初めてらしく、シリカは最前線やボス戦の様子、トッププレイヤーたちについて熱心に聞いてきた。攻略組になってから日が浅い俺は答えるのにだいぶ苦労したが。

話の一段落がついた頃シリカが呟いた。

「・・・なんで、あんなこと言うのかな・・・」

「ロザリアのこと?」

悲しみを浮かべた顔のシリカが小さく頷く。

「MMOをプレイするのはSAOが初めて?」

「はい・・・」

「そっか・・・俺は結構な数を遊んだけど、どんなMMOにもロザリアみたいなやつはいるよ。悪人になったり、善人になったり。現実とは違う自分になれるのがMMOの良いところだとは思うけど——」

「でも、SAOは・・・」

「そう。この世界はゲームだけど遊びじゃない。俺はSAOを、インクラッドをもう一つの現実だと思ってる。攻略組・・・この世界で必死に生きている人はみんなそう思ってるんじゃないかな。それでも中には平気で犯罪に手を染める奴もいる。全員で助け合うなんて出来ないことは分かっている。でも、あまりにもそんな人間が多い」

言い終わると空気が張り詰めているのを感じた。緊張した様子のシリカに頭を下げる。

「ごめん。最近愚痴る相手がなくて、つい」

「いえ・・・その通りだと思います」

視線を落としたシリカが小さく続ける。

「確かに悪い人もたくさんいます。でも良い人がいるのも確かです。サツキさんみたいに」

信頼と感謝が宿った瞳に見つめられ、俺は自分の行いに間違いがないことを確信した。

「ありがとう。じゃあ、明日はさくつと蘇生アイテムゲットして帰ってこよう」

「はいー!」

今夜はお開きにして二階へ上がり、俺はシリカが部屋に戻ったのを見届けた。そして俺はそのまま自分の部屋、ではなく一階へ戻る。

「……」

人気の疎らなレストランの端の席、さっきまでシリカと座っていたそこから少し離れた壁の前に立つ。一枚の絵が飾っているだけの何の変哲もない壁だ。普通はそう見える。

「こんなところで何してんだ」

はたから見たらヤバい人に見えるだろうが、幸いこちらに視線を向けた人はいない。俺がそのままじっと壁を見続けていると、突然ぐにやりと壁が歪んだ。

「ニシシ、やっぱりバレてたカ」

現れたのは小柄なプレイヤー、鼠のアルゴ。

「俺の索敵舐めんな。で、何してんの」

「報告が遅いカラ、サー坊がちゃんとお使いをしているのか確認しに来たんダヨ」

「あ……」

すっかり忘れていた。

「悪い。でもすっかり頼まれたものは——」

「いや、それは後で良い」

お使いの品を渡そうとした俺を止めたアルゴは、いつもより真剣な顔をしていた。このアルゴを見るのは二度目だ。

「サー坊にしか頼めない依頼がアル」

今夜は長くなりそうだ。

Ep. 10 アウトラップ

◆?◆?◆?

『せいっ!』

気合いの掛け声とともに簡素な剣を振る。

淡い水色をおびた刀身が、駆け出そうとしていたイノシシの首を捉えた。直後、間抜けな断末魔を上げて爆散する。勝利の余韻に浸りながら表示された獲得アイテムと経験値を一瞥していた俺は、後ろから背中を叩かれてよろめいた。

『やるじゃん!初心者とは思えないセンスだよ!』

満々の笑みを浮かべた彼女に応える。

『教えるのが上手だからですよ』

『まあね!』

堂々と胸を張る彼女と狩りを始めてすでに二時間近くが経過していた。根っからの初心者だった俺もだいぶ様になる戦闘ができるようになってきた頃だ。彼女自身の技術はもちろん、教え方が抜群に上手いおかげだろう。

夕日が沈む方角を指さして彼女は言った。

『さあ!このまま次の村まで行っちゃおう!』

『ハイペース過ぎませんかね...』

誰かとゲームをするのは久しぶりだったけど、一人でやるより何倍も楽しく感じていた。

この瞬間までは。

『わわっ!何だ何だ!』

『これは...!』

突然、俺たちの体を青い光が包み込んだ。初めての現象だったが、彼女が興奮気味に教えてくれた。

『これは転移だよ!光に包まれて次の瞬間には!』

言い終わらないうちにちに視界が奪われ、気が付くと目の前には見覚えのある街並み広がっていた。

『別の場所に移動するんだ!』

彼女の説明は、正直頭に入って来なかった。理由はこの場所の状況にある。

ガヤガヤと喧騒が溢れるここは、はじまりの街の中央広場だ。ここには俺たち以外にも大勢のプレイヤーが転移して来ている。中には、早く出せ!と不満を吐いている者もいた。

『なんだろうねー? イベントかな?』

相変わらず呑気な彼女だが、俺はこの時、言う様の無い嫌な予感がしていた。

それから数分後。

デスゲームは幕を開けた。

◆?◆?◆?

〈サツキside〉

翌朝。

シリカと合流して軽く朝食を済ませてから、俺たちはフィールドに出た。延々と続く花畑の中を進み、時折沸いて来る植物系モンスターを相手にしながら目的地を目指す。最初はモンスターの気色悪い見た目に抵抗を感じていたシリカだったが、戦闘を重ねるごとに慣れていった様でエンカウトした瞬間に弱点に斬りかかるようになった。一刻も早く視界から消したいという強い意志を感じたのはおそらく気のせいだろう。

何度目かの戦闘を終えたところで、シリカが突然こんなことを言い

出した。

「・・・サツキさんって、妹さんいますか？」

「んえ？なんで？」

いきなりのことで間抜けな声が出てしまう。

「その、あたしへの接し方が慣れてるなって思ったので。なんかこう、お兄ちゃんみたいなきもちがして・・・」

「あー、妹はいないけど・・・妹みたいな存在はいったんだ」

久しぶりに現実世界のことを思い出しながら続ける。

「俺の家の隣の子で、三つ下だったかな。小さい頃からよく遊んでたんだ。公園、遊園地、動物園、水族館とか色んな所に行ったり、家でゲームもたくさんやったなー・・・だから慣れてる、のかな？」

勉強やら部活やらで忙しくしている様で会えていなかったが、元気にしているだろうか。

「すっごい仲良しなんですね」

「まあ、悪くはなかったと思うよ」

シリカは納得とどこか嬉しそうな表情をしていた。真意は分からないが、それ以上は突っ込まずに花畑の進む。

蘇生アイテムがあるという丘はもうすぐだった。

◆？

〈シリカside〉

「ほら、あそこだよ」

サツキが示す方向は大きな岩がある丘だ。周りにモンスターがないことを確認したシリカは、早まる気持ちを抑えられず走り出した。丘を駆け上がり何の変哲もない岩に辿り着く。だがそこには何も無かった。

「ない・・・ないよ！サツキさん！」

涙を堪えながら追いついたサツキに問う。彼は落ち着いた声で答えた。

「大丈夫だよ。ほら」

シリカが視線を岩に戻すと、何も無かった岩から光が伸び始めた。それは徐々に形を成し、一本の花が咲いた。

「サツキさん、これが・・・？」

「うん。蘇生アイテムだよ」

ゆっくり手をのばして掴み、優しく引き抜く。

「その花の雫を形見に使えばピナを蘇生できるよ。でもここは危険だから、街に戻ってから生き返らせてあげよう」

「はい！じゃあ戻りましょう」

来た道を引き返ししながら、シリカは安堵と嬉しきで心を躍らせていた。もうすぐピナが生き返る、そう思うだけで生きる希望が湧いてくる。

来た時と同様にサツキの助けをもらいつつ順調に敵を倒して進み、街まであと半分ほどになった時、サツキがシリカの肩を掴み、歩みを止めさせた。

「サツキさん？」

シリカが問いかけるが、初めて見るサツキの険しい表情に口を閉じる。彼は視線を進行方向、小さな橋の近くの木に向かって声を発した。

「そこに隠れている奴、出てこいよ」

「え？」

その言葉の意味にシリカの理解が追い付く前に、木陰から一人のプレイヤーが姿を現した。

「ロ、ロザリアさん!? どうして・・・」

シリカの問いに答えることなく、ロザリアは意外そうな声で言った。

「私の隠蔽スキルを見破るなんて、なかなか高い索敵ね。侮ってたかしら？」

シリカは嫌な予感を感じていた。そしてそれが確信に変わる。

「じゃあ、蘇生アイテム―プネウマの花、早速渡してもらおうかしら？」

「な、何を言ってるんですか・・・!?」

ロザリアはニタニタと嫌らしい笑みを浮かべる。

「プネウマの花って今が旬なのよねえ。結構な高値で——」

「悪いけど」

ロザリアを遮ってサツキが前に出る。

「渡すわけにはいかないな・・・犯罪ギルド・タイタンズハンドさんのリーダーさん」

ロザリアの顔から笑みが消えた。同時にシリカは驚愕に見舞われる。

「犯罪ギルドって・・・でも、ロザリアさんはグリーン・・・」

「全員がオレンジってわけじゃないんだ。グリーンの間が獲物を見繕い、圏外におびき寄せて襲う・・・一週間前にもこの方法で小規模ギルドを襲ったよな?」

「ええ、あんまり美味しい連中じゃなかったけど。よく知ってるのね?」

クスクスと笑うロザリアにシリカは背筋がゾツとした。

「じゃあ、あたしとパーティーを組んでいたのも・・・」

「そうよ? たんまりアイテムを溜め込んで美味しくなるのを待ってたの。でも途中で抜けちゃうからどうしようかと思ってたけど・・・たった二人でレアアイテムを取りに行くって、これはもう襲ってくださいって言ってるようなものでしょ?」

シリカは体の震えを抑えられなかった。もし、サツキと出会ってなければ今頃——そう考えるだけで恐ろしかった。

「でも、そこまで分かかっててホイホイ付いて来るなんて。どんな手でたらしこまれたのかしら?」

「なっ!?!」

その言い様に怒りが込み上げた。ぎりぎりのところで短剣にのびそうになった手を止めてロザリアを睨みつける。それを制してサツキが変わらない落ち着いた声で言った。

「いや、俺もアンタを探してたんだ」

「へえ?」

「アンタらが一週間前に襲ったギルドの生き残りが仇討ちを依頼してきたんだ。と言つても、殺しじゃない。牢獄に入れてくれってな」

その言葉にわずかな怒りが込められているのをシリカは感じた。

「なるほど、正義の味方ごっこってわけね。でもそれならもつと人数を増やした方が良かったわね?」

「俺一人で充分だよ」

「フフツ、威勢がいいわねえ・・・遊びは終わりよ。大人しく花を渡せば楽に死なせてあげる」

ロザリアがパンツと手を叩く。仲間への合図だろう。

「サツキさん・・・!」

「大丈夫。俺から離れないで」

サツキが背中の中の片手剣を握る。

ロザリアはサツキが攻略組であると知らないからか余裕の笑みを浮かべている。

張り詰めた空気の中。

ロザリアのさらに後方の木から人影が現れた。

ゆっくりと歩いて来るソレの違和感に気付いたのは日の下まで出て来た時だった。

ソレは武器を持っていなかった。

鎧の類も身に付けていない。ボロボロのシャツとズボン、靴は履いていない。

一見、完全な丸腰に見えるがソレが放つ気配は尋常じゃないものだった。

「な、なんだいアンタ!?!」

ロザリアが動揺を見せたことから、ソレが仲間ではないことが分かる。

誰もがソレに対応出来ずにいた。

場を動かしたのはソレだった。

「お前で九人目だ」

悦びを抑えられない様子で言い、ソレはロザリアを指さした。その顔が狂気の笑みを刻み、そしてソレは消えた。

「——え」

瞬間。

ロザリアの首が宙を舞った。

「は——」

最期の言葉を言い終わることなくロザリアは頭を、体を爆散させた。

シリカが初めて目にするプレイヤーの“死”だった。

呆気ない、物の消失と何ら変わらないその現象が人の死だとはとても思えなかった。

ロザリアだったポリゴン片が消え、残ったのは右拳を振り切った体勢のソレだけだ。ソレが、シリカには視認できなかった一撃でロザリアを殺したのだとようやく理解した。

途端、シリカの体を恐怖が支配した。

今日の前にいるのは人の命を何の抵抗もなく奪えるPKプレイヤーだ。それもおそらくかなりの手練。昨日の迷いの森での出来事が霞むほど死に近い状況と言える。

サツキに助けを求めようにも、声を発することもソレから目を離すことも出来ない。

ゆっくりと右拳を下げたソレがシリカを見る。目が合ったシリカは息をするのも忘れて体が硬直した。

「次は……お前だ」

ソレが消える。視認できない。

——嫌だ……死にたくない……

シリカの眼前で真紅の輝きが一閃した。

Ep. 11 襲撃者

〈サツキside〉

片手直剣カテゴリOSS”デッドリーダンス”

威力が低い単発技だが、ほぼノーモーションからの発動が可能な緊急対処用OSS。

シリカに迫った敵の拳を真紅の刀身が的確に捉え、両断する。手首から拳がずれ落ちて敵の動きが止まり、好機と見た俺は追撃を開始する。

片手直剣カテゴリ三連撃技”シャープネイル”

片手斧カテゴリ水平三連撃技”アーデント・レンド”

六つの斬撃が敵を刻む。そこで止まることなく体を回転させる。

片手直剣カテゴリ単発重技”プレダトリー・ガウジ”

斬り下ろしたその一撃が敵の右肩から左腹部へ鮮やかな一線を描く。クリティカル判定を意味する派手なエフェクトが宙を舞った。
だが――

「――ッ！」

連撃技を立て続けに喰らったのに、敵は不気味に嗤っていた。視線が交差する。新しい玩具を見つけた時の子供のようなその目に今までにない気味の悪さを感じた俺は、咄嗟に次の技を放った。

両手剣カテゴリ二連撃技”リミック・エルプション”

下段から敵の顎を斬り上げ、上段から地面に叩き斬る。またしてもクリティカル判定。凄まじい勢いで叩きつけられた敵は、そのまま数メートル地面を吹っ飛んで仰向けに転がった。

「サ、サツキさん……！」

左手でシリカに退るように伝える。

敵は動きを見せないが、まだ油断できない。ディメンションを握り直して敵の様子を見ながら、俺は頭をフル回転させて思考を加速させる。

蘇生アイテムを狙ってロザリアたちが襲って来ることは昨夜アルゴから聞いていた。タイタンズハンドの犠牲となったギルドの生き残りからの依頼を引き受けた俺は、実力の差を見せつけて諦めさせ、大人しくしてから回廊結晶で収監する予定だった。だが突然現れた謎の敵によって、状況は大きく変わってしまった。

(さつきロザリアで九人目と言っていた。なら、タイタンズハンドは全滅か)

タイタンズハンドのメンバーが現れなかったのはすでに殺されていたからだろう。俺たちに気付かれないように殺したのか、或いは速すぎて俺たちが気付かなかったのか。確実に言えるのは、この正体不明の敵が只者ではないということだ。俺の連撃技をまともに喰らってHPを全損していないことからそう言える。

クリティカルヒットが多発したため総ダメージ量はフル装備の攻略組プレイヤーのHPを黄色に変えるくらいはあるだろう。今の様に決まればタンクでも三割は削れる。なので防具の類を身に付けていない敵はHPを全損してもおかしくないのだ。しかし――

「いいなあ・・・いいなあ・・・最高の気分だ」

敵はゆっくりと立ち上がった。その動きから大ダメージを受けたとは思えない。それは外見からも明らかだった。

「お前は・・・何だ？」

連撃技による斬撃痕、斬り落としたはずの拳がすでに再生している。これは有り得ないことだった。

通常、体についた傷や欠損した部位の回復にはそれなりの時間がかかる。手の切断は最短でも十五分は必要だ。だが敵は俺の連撃技が終わってほんの数秒で完治している。

さらに、敵のHPが急激に回復しているのだ。

回復アイテムを使ったわけではない。ただ立っているだけだが、頭上に表示されたHPバーは確かな速度で増え続け、黄色から緑色にその色を変える。

「教えても良いけどよお・・・オレも聞きてえな」

「・・・？」

「オレの手を斬った技に、絶え間ない連続攻撃。オマエも何か隠して
るんだろお？腹割って話そうぜ」

それが、ニヤニヤと笑みを浮かべた敵の本心なのか挑発なのか分
らなかつた。

視線を敵に向けたまま、構えを崩さず後方のシリカに指示を出す。

「・・・シリカ、今すぐ転移結晶で街に戻れ」

正直、このままシリカを守りながら戦闘をする自信がなかつた。こ
の敵とは全力を出さなければ勝機がないと直感している。

「・・・わかりました」

一瞬の迷いを見せたものの、シリカは俺の指示通りに転移結晶を取
り出す。転移する直前に絞り出したような声で言った。

「・・・昨日の宿屋で、待ってます。ピナの蘇生のお祝い、一緒にやり
ましょう」

俺は力強く頷く。

「ああ。すぐ行くから、待ってて」

結晶が碎ける音とともにシリカの気配が消える。感じるのは敵の
圧迫感と燃え盛る闘気のみ。改めて対峙した正体不明の敵に意識を
集中させる。

「いいなあいいなあ！見ただけで分かるぞ。お前、攻略組だろう？初
めて戦うなあ、興奮するなあ！」

敵が地を蹴り、一直線に俺まで迫る。俺は充分に引き付けてから姿
勢を低くし、敵が振り払った裏拳を避けてからカウンターを見舞う。

だが――

「シャアツツ!!」

「!」

振り払った反動をそのまま生かし、今度は蹴りを放ってきた。反撃
のソードスキルを中断して愛剣でそれを受ける。刀身が悲鳴をあげ、
完全に蹴りの威力を殺すことが出来ず後方へ大きく飛ばされる。

「ははははっ！もつとだもつと!!」

敵は止まることなく俺を追従して拳を振るう。左右から迫る高速
の連撃に対して最適なソードスキル――同じく左右へのカタナカテ

ゴリ二連撃技”ダンス・マカブレ”で受ける。この技は特殊効果として幻惑効果がある。回避するのは至難の業だ。

「おもしれえなあ！オラツ!!」

だが敵は回避などするつもりはない。軌道そのままに拳を打ち込み、デイメンションにあつさりと腕を両断される。

「無茶苦茶だ・・・!」

その戦い方に俺は動揺を隠せなかった。敵はHPが減ること、死に近付くことを恐れていないのだ。それは現実を受け入れられずSAOがただのゲームだと思いついでいるのか、俺の想像を超える胆力なのか、それとも絶対に死なないという自信があるのか。

「オラオラオラア!」

「チツ!」

接近した敵の胴に右斜めからの斬り下ろしを見舞う。そこから繋げて七連撃技”メテオブレイク”を放つ。斬り上げ、左肩タツクル、中段右水平斬り、右肩タツクル、上段左水平斬りと、ヒットする毎に敵のHPは大きく減少していく。しかし――

(ツ!!なんて回復速度だ・・・!!)

減少したと同時に、HPはまた回復を始めた。その速度はハイポーションを上回っている。七連撃目がヒットした瞬間で、すでに総ダメージ量の七割の回復が終わっていて、数秒後には全快してしまう。

「はっ・・・ハハハハツツ!!」

その狂った笑いに、俺はこのままでは勝てないと確信した。敵に目を向けたまま最低限の動きでメニューを呼び出し、気づかれないように操作する。

「・・・強いな」

「そうだろう!だがお前も強い!誇って良いぞ、その強さは」

「勘違いするな」

ピタツと敵の表情が固まった。スッと笑みが消え、怒気を孕んだ眼光が俺を捉える。

「・・・なんだと」

「俺が言ったのは、お前のスキルの事だ。尋常じゃない回復力、正直そ

れがある限り勝てる気がしない。逆を言えば、それが無いなら勝てる気しかない。なんの工夫もなく拳を振り回してるだけの脳筋なんだよ、お前は」

「・・・」

敵は黙ったまま静かに空を見上げる。大きく息を吸い込んで目を閉じると、狂った様に笑い出した。

「ハハハハハハハッ！最高だ、やっぱりお前は最高だよ！！ああ！確かに俺は脳筋だが、この世界は力が全てだ！弱ければ生きられない中で俺は生きている！何人も殺してきた！勝って生き残ったヤツが正しいんだよ！！」

敵は右脚を前に踏み込み、何らかの構えを取った。無駄のないその動きに俺は警戒を強める。

「殺してしまう前に教えてくれ、お前の名を！」

「・・・KOBの”剣豪” サツキ」

” 剣豪” サツキ！覚えておけ、俺は” 不滅” のカグマ！お前を殺し、アインクラッドを破壊する者だ！！」

両手を紅いライトエフェクトが包み込む。敵が初めて見せるソードスキル——俺は右手で最後の操作を行った。

凄まじい勢いで地を蹴った敵が急接近する。それに合わせて俺も走り出す。同時に左手を背中に伸ばして現れたソレを握り、勢いよく抜き去った。

片手直剣カテゴリー単発技” スラント”

カタルシスが描く純白の軌跡が敵の右手を斬り飛ばす。逆から迫るもう一撃をディメンションで受け流し、体を回転させて二本の愛剣で敵の頸を狙う。

「——シッ！」

だがカグマは流石の反応速度で後退してこれを避けた。剣先が掠り、わずかながらにHPが減少する。逃がさまいと俺は愛剣を構え、必殺のOSSで一気に勝負に出た。

” 擬似二刀流 十三連撃技” ドウム・フェイム”

フロアボスをも屠った超連撃が” 不滅” を名乗るカグマを削る。

一撃決まる毎に急激にHPが減少していく。その速度はカグマの超回復も追い付かない。

「ガッ・・!!」

反撃も出来ず攻撃を受け続けるカグマも、回復が追い付いていない事に気付いたのだろうか。初めて動揺を見せた。

十撃目で残り二割になったところで、俺は勝ちを確信した。瞬間、頭に浮かんだのは人を殺すことへの罪の意識だ。

いくら相手が大勢の人を殺し、仲間を殺そうとしたPKだとしても、人の命を奪うことに変わりはない。彼だつてSAOの被害者なのだから、どんな綺麗事を並べても罪の意識が消えることはない。

俺はこれから一生背負って行かなければならない。

十二撃目で残り数ドットとなったカグマの命の残量を余さず消すため、俺は十三撃目を振りかぶった。もう覚悟は出来ていた。

そう。

覚悟が出来ていたのは俺だけではなかった。

「アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ
!!!」

耳を劈く絶叫。

それは自らの死を恐れているものではなかった。

振り下ろされる十三撃目を凝視し、カグマは強引に上体を捻った。現実世界なら背骨が折れるであろうものだ。体を真っ二つにするはずだった十三撃目はわずかに逸れて空を斬る。俺は反撃に備えてもう片方の愛剣を構えるが――

「シヤアアアアツツ!!」

「!?」

カグマはライトエフェクトをまとった右拳を、俺の胴ではなく空振りしたデイメンションに向けた。予想外の行動に反応が遅れ、刀身と拳がぶつかり合いそして――

パキイイイインツ!!

愛劍の悲鳴が響き渡り、真紅の刀身が半ばから砕け散った。

E p. 12 黒衣の剣士

〈シリカside〉

「だれか、誰か助けてくださいー！」

五十層主街区・アルゲートの転移門前広場でシリカは叫んだ。その悲痛な叫びに通行人が何事かと歩みを止める。が、誰一人としてシリカに近付く者はいなかった。関心興味はあるが、巻き込まれたくないという本心が如実に表れている。それでもシリカは構わず続けた。

「あたしの仲間が、一人でPKと戦っていますー！このままじゃ殺されちゃいます、誰か助けてくださいー！お願いしますー！」

PK、という単語にざわつきが強くなる。モンスター相手の救援はこれまでもあったが、PK相手は例がない。深刻な状況であることは伝わったが、誰もがどうしたら良いのか分からずにいた。

一人を除いては。

「俺が行くよ」

声を上げたのは、全身黒ずくめの少年だった。

「あ、あなたは」

「俺はキリト。君は？」

「シリカです・・・キリトさんお願いします、助けてくださいー！」

「うん、必ず助けるよ。場所はどこ？」

「四十七層の思い出の丘・・・小さな川に架かった橋のところですよ！」

「わかった。他に仲間は・・・君はギルドに所属してる？」

「あたしは所属してません・・・でも残った仲間は血盟騎士団の人ですー！」

「・・・血盟騎士団」

その名にキリトは戸惑った様な反応を見せた。が、すぐに表情を切り替えてシリカに優しく言った。

「よし、俺はすぐに救援に向かう。シリカは三十九層にあるKOBの

本部に行つて増援を頼んで来てくれ。俺の名前を言えばイタズラだとは思われないはずだ」

「わ、わかりました」

「じゃ、また後で」

そう言つてキリトは、姿が霞むほどの速度で走り去つて行つた。

〈サツキside〉

側方から迫る渾身の一撃を上体を反らしてギリギリ躲し、勢いそのままに花畑を駆け回り距離を取る。すかさず起き上がり後方へ大きく跳躍すると、空ぶつたカグマの拳が花畑を抉つた。花びらが無惨に宙を舞う。

「オイオイどうしたあ！剣豪さんよオ!!」

「ッ!」

すっかり元通りになつた拳を振るうカグマが挑発じみた声を発する。だがそれに応える余裕はなかつた。テイメンションを振り切り、三度拳を切り落としてそのまま間合いを開ける。だがカグマは拳の欠損が治らないまま距離を詰めてくる。

「ウラアッ!!」

「チッ!」

絶え間なく放たれる連撃を弾き、躲し、斬る。終わりの見えない攻防に俺は徐々に焦りを募らせた。このままでは異常な回復力を有するカグマには勝てない。ジリ貧だ。

「なめ、るなあ!」

俺は状況を打開するため、賭けに出た。

「ヴッ!?!」

迫る拳を無視し、単発技“ホリゾンタル”でカグマの頸を狙う。カグマの攻撃を防ぐのではなく、ダメージ覚悟で攻めに転じたのだ。結果、カグマの左拳は俺の鳩尾に、俺の剣はカグマの頸を深く―と言つても斬り落とすまでではないが―抉つた。

派手なダメージエフェクトを撒き散らし、互いのHPは3割ほど減少した。だがそこで終わらない。

「シッ！」

「はあっ！」

気合いの声とともに再び攻撃。

四連撃技“ホリゾンタル・スクエア”の描く軌跡が、カグマの身体を削る。同時に、俺の心臓クリティカルをカグマの右腕が貫いた。吐き気がする程の不快な神経ショックとともにHPが急速に減少する。

「ッ！ああああ!!」

絶叫して地を蹴り、後ろへ大きく跳躍してカグマの腕を胸から抜き取る。さらにガクツとHPが減少し、ついに俺のHPバーは危険域を示す赤に染まった。

「逃がさねエー！」

カグマもまた大きく踏み込み距離を詰めてくる。突き出された片方の拳を反射的に斬り飛ばすが、もう一方を振りかぶっている。それに意識を集中させていたためか――

「やばっ……」

花畑エリア特有の柔らかい土に足を取られ、俺は不格好に尻もちをついた。咄嗟に視線を上に向けると、拳を振りかぶったカグマの顔は歡喜に歪んでいた。それだけでなく、その顔にわずかな失念と憐れも俺は感じた。

この世界でここまで死に近付いたのは3回目だ。我ながら多い方だと思うが、今までと違ってまだ俺は諦めていなかった。ギリギリで躲せばまだ反撃の余地があると。

再びカグマの拳に全意識を集中させる。

だが。

わずかな拳動も見逃さないとしてた俺の目に映ったのは、俺の後方から飛来した何かが、カグマの両眼に直撃する光景だった。

〈アスナside〉

「アスナさん！」

後方から大声で呼ばれてアスナは振り向いた。

ギルドホームには人気はない。団員の半数以上は最前線の迷宮区に出払っているからだ。今日はオフだったアスナは、自室で久々の昼寝でもしようかと思っていたのだが、自分を呼ぶ声が緊迫していたので休日モードから頭を切り替えた。

「どうしたの、シユガーくん」

「大変です！今、中層の人が来て、仲間がPKに狙われてるって！自分だけ逃げて来たけど、助けてほしいって言ってて……」

「PK？」

訝しげに呟いたアスナにシユガーは続ける。

「その人の仲間が、サツキさんなんです！今、サツキさんがPKと戦っているんです！」

「サツキくんが……？」

これにはアスナも驚いた。

その時、切羽詰まった様子の子のシユガーの背後から一人の少女が現れた。アスナを正面から見つめ、確かな決意を込めた声を発する。

「お願いします、助けてください！あたしのせいで……」

「……」

正直、アスナは一瞬だけこの少女こそがPKではないかと勘繰った。だが新興とは言え攻略組であるKOBをわざわざ狙うはずがない。なら、この少女の話は本当なのだろう。

「……わかりました。すぐに行きましょう」

腰に愛剣を装備しなおして、アスナは2人とともに四十七層へ向かった。

〈サツキside〉

カグマの両眼に飛来したのが投擲用のピックだと気付いたのは、貫通継続ダメージ特有の赤いエフェクトが飛散した時だった。SAOでは斬られたり刺されたりしても痛みは感じないが、突然視界を奪わ

れたことでカグマは攻撃を止めて驚きの声を上げた。そこで我に返り、俺は地を蹴つて大きく後退する。

「間」髪だったかな」

後ろからの声に振り返る。

俺は思わず目を見張った。

黒。

全身が黒で包まれた剣士がそこに立っていた。意図せず口が動く。

「ク——」

「だああっしやあ!!」

言いかけた言葉は、カグマから迸った絶叫で掻き消された。派手なダメージエフェクトを撒き散らしながら両眼からピツクを抜き取る。それらを投げ捨てた時、すでに両眼は回復していた。狂気に満ちた眼が俺を、次いで黒衣の剣士を捉える。

「・・・アイツは、何だ？」

「イカれたヤツ。見ての通りの異常な回復速度だ。さつきから斬り刻んでるけど全然倒せない」

「・・・無茶苦茶だ」

貴重な回復結晶を使ってHPを全快させ、俺と全く同じ感想を零した黒衣の剣士に礼を言う。

「でも助かった、さつきので死んだと思った」

「礼はシリカに言わないとな」

「なんでシリカを・・・ってそうか、助けを呼んでくれたんだな」

「そういうこと」

シリカの顔を思い浮かべつつ、俺は思考を加速させた。この黒衣の剣士は何者なのかと。

シリカから話を聞いて駆け付けたにしては、速い。

黒のロングコートは見た目のシンプルさに対して高性能を誇る存在感を醸し出している。背中の鞘から抜いた片手剣もなかなかの業物だ。さらに先程の投擲センスも素人ではない。

間違はなく俺と同じ、いやそれ以上の実力者。

そこまで辿り着いた時、カグマが口を開いた。

「いいなあ、お前も強い。こんなに楽しいのは久しぶりだ・・・」
カツカツカツと笑うカグマは、俺たちに向き直ると再び拳を構えた。

「そんじゃあ、第2ラウンド始めるか!!」

三人が同時に地を蹴り、拳と刀身がぶつかり合う。

激戦の最中、舞う様な美しい剣戟を魅せる黒衣の剣士と、かつての
想い人の姿が重なった気がした。

〈アスナside〉

「ごつちですー！」

何度も躓きながらも懸命に走る少女——シリカの後を追う。四十層は主に植物系モンスターが湧くので、その見た目が得意でないプレイヤーは余程の理由がない限りは訪れないだろう。かく言うアスナもその一人であるが、ギルドメンバーの危機となればアレこれ言っ
ていられない。

「でも、妙じゃないですか？」

隣を走るシユガーが口を開いた。

「どういうこと？」

「PKが攻略組を狙うなんて、今までなかったじゃないですか。最初はシリカちゃん狙いだっただけですけど、今度はサツキさんを狙うなんて……」

「攻略組だって分からなかったんじゃない？だって、ギルドの隊服着てないんだもん！」

子供っぽく反論したのは一番後ろを走るノノだ。アスナと同様にオフだった彼女も文句を言いながらも付いて来てくれた。

「ならもう決着はついてるってことですか？」

「多分ね。見た目の割に強いから、K O Bの異端児」

「なるほど……あの、異端児ってなんですか」

「隊服着ない！ユニークスキル持ち！普通じゃないから異端児！」

「な、なるほど」

二人の会話を聞きながらアスナは考える。

ノノが言う通り、シリカ——中層プレイヤーを狙ったPKならサツキが遅れを取ることはない。だが、シリカの話で気になることがあった。

そのPKは、その場に居合わせた他の中層プレイヤーの頭を一撃で

吹き飛ばして殺した。その攻撃はシリカに見えないほど速かったという。

頭を吹き飛ばすほどの一撃は、誰でも出せるものではない。大振りの武器で一発が強力なソードスキルをクリティカルヒットさせれば可能性はあるが、聞けばそのPKは素手だったらしい。素手での攻撃ならエクストラスキル〈体術〉によるものだと考えられるが、そんな一撃を出せるとは考え難い。

ほぼ即死と言つていい攻撃。これが本当なら無視はできない。

攻略組をも上回る高レベルプレイヤー。

または〈神聖剣〉〈剣豪〉に次ぐ3つ目のユニークスキル持ちか。

様々な可能性を考えながら、アスナは走り続けた。

〈キリトside〉

——強い。

右側方から迫る拳を避けながらガラ空きの腹に一閃見舞う。しかし刻まれた赤い剣痕は、すぐに消えてなくなる。HPも減りはするものの即座に回復してしまう。

戦闘を開始した直後、いや正面から対峙した時から違和感を感じていた。それがようやく見えてくる。

さきの少年が言っていたように、異常な回復速度だ。ダメージを喰らったその瞬間から回復が始まり、部位欠損も5秒あれば完治している。

プレイヤーどころか、モンスターでさえ有り得ないほどの回復速度。異常だ。“不死身”という、か弱きプレイヤーに相応しくない単語が脳裏にチラつく。

「らあっ！」

「シッ！」

そんなバケモノと単独で渡り合っていた少年もまた異質な存在だと気付いたのは、彼の戦いぶりを見た時だ。

主武装は俺と同じ片手剣。盾はなし。防具はK O Bの象徴とも言える赤と白の騎士服ではなく、かなりの高性能品であると思われる黒と青のハーフコート。暗い銀髪に青い瞳。最近まで攻略組にいた俺だが、この少年を見た記憶はない。おそらく新人だろうが、それでは説明がつかないことがある。

歴戦の剣士、と形容したくなる美しくも強い少年の剣技は、俺が未だ到達できていない領域のものだった。戦闘に参加していなければ思わず見とれてしまうほどに。

そして、彼がただ者ではないと決定付けたのは――

「せあっ！」

片手直剣カテゴリ三連撃技”シャープネイル”

曲刀カテゴリ二連撃技”ダブルムーン”

主武装と異なるカテゴリのソードスキルを使い、かつ硬直時間なしで技を連発していることだ。本来ならシステム的にありえない芸当だが、それを可能にしているということは、考えられるのは一つ。

「・・・ユニークスキル」

思わずこぼれた呟きは、胸の真ん中を”リニア”で貫かれた不死者の絶叫に掻き消された。

〈サツキside〉

救援に来てくれた黒衣の剣士のおかげで何とか死を免れたが、まだ油断できる状況ではない。二対一になったとは言え、カグマの回復速度を超えるダメージを与えるのは困難だ。即席パーティーゆえに連携が不十分なのが主な理由だが、それを今言ってもどうしようもない。一人の時と比べれば格段に戦い易いのだからこれ以上に何を望もう。

「ハハハッ！良いなあ、最高だぜお前ら！」

「こっちは最悪だよ、このバカが！さっさとくたばれ！」

二連撃技”オメガ・ポイント”、”ライトスネス”

両腕を肘から斬り落とし、動きが止まったその一瞬を黒衣の剣士は見逃さない。

「はあっ！」

体術と片手直剣の合わせ技“メテオブレイク”の七連撃が、カグマを捉える。ガリガリとHPが減り始めるが、やはり圧倒的な回復量で無意味なものとなる。吹き飛んだカグマから距離を取った黒衣の剣士は、剣を握り直しながら言った。

「・・・作戦を変えよう」

「と、言うത്？」

黒衣の剣士は一瞬だけチラツと視線を移動させた。その動きで視界に小さく表示されている時計を見たのがわかる。

「もう少しでKOBの援軍が駆け付けるはずだ。それまで時間を稼ぐことに集中しよう。今は無理に倒そうとしなくてもいい」

「でも、今倒さなきゃ他にも犠牲者が出る」

「俺たちがここで死ねば、ヤツの情報、ヤツに対抗できる実力者が減ることになる。その方が最悪だ」

「だが—」

「何をごちやごちや言ってるんだあ!？」

「ッ！」

目にも留まらぬ連撃を、培った経験と直感を頼りに捌き躲す。二対一になってこちらが有利になったと思えば、攻撃の速度を上げて手数を増やしてきた。以前として苦しい状況は変わらない。

「何を企んだるかは知らねえが、殺す気で来ねえと俺には勝てねえぞ！」

「分かってるって、の！」

片手直剣カテゴリ全方位技“セレーション・ウエーブ”で牽制、次いで曲刀カテゴリ四連撃技“ダールド・ルーネイト”。黒衣の剣士も俺の動きに合わせてソードスキルを発動させる。カグマの身体を削り、修復し、また削る。

「せあっ！」

黒衣の剣士の気合いの一閃。流麗な二連撃がカグマの両腕を肩か

ら斬り落とした。

「今だ！」

黒衣の剣士が作った僅かな隙を逃さない。両腕の修復を待つカグマに接近する。俺に気付いたカグマは蹴りの構えを取った。それを見て俺はヤツに見舞う技を決める。

片手直剣カテゴリOSS〃ファントム・レジエナント〃

放たれた蹴りをスレスレで躲すと、途端に俺の体をオレンジ色のライトエフェクトが包み込んだ。全身に力が漲る感覚。

「おおおおお！」

側方から一閃。初見の技に、すかさずカグマは修復した両腕で防ごうとした。それを容易く両断し、純白の刀身がカグマの頸を捉えた。「そんな一撃で頸が斬れるとでも——」

その言葉は驚愕の表情とともに途絶えた。頸に斬り込んだ刀身が確かな勢いで進んでいるのだ。このままいけば斬り落とせる。

OSS〃ファントム・レジエナント〃は、敵の攻撃をシステムが判定できるコンマ単位のギリギリで回避することで一時的に自身を強化する。筋力値が強化されたことにより、剣を振る力が強くなったのでカグマの頸も力づくで斬り進めれるのだ。

「落ちろおおお！」

「クツッがあああ!!」

カグマが右脚を蹴り上げる。顎に向かってくるそれを無視して、俺は剣を斬り込ませ続けた。分かってたから。

「はあっ！」

「んなっ!？」

黒衣の剣士が防いでくれると。

片脚を斬られ、バランスを保てなくなったカグマが倒れ始める。抵抗力がなくなり、倒れる勢いに乗せて剣を振る。

——斬れる!!

だが。

「アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ

!!!」

「!?!」

さきも聞いた、耳を劈く絶叫。それに気を取られ、反応が遅れた。「がっ!?!」

目が眩む衝撃。カグマの頭突きだ。予想外の攻撃に手が止まる。それをカグマが見逃すはずがなかった。修復した両腕で身体を支え、左脚で俺を蹴り上げる。鈍い不快感が腹からこみ上げてきて、剣を握る力が弱まった。そこに追撃の拳が正面から俺の顔面を捉えた。三度の衝撃。俺は為す術なく吹き飛ばされる。

「いつ・・・てえ」

愛剣を握り直しながら起き上がると、俺の前で黒衣の剣士がカグマと対峙していた。

「悪い、仕留め損ねた」

「気にするな、それより回復しておけよ」

見ればHPは四割ほどまで減少している。ポーチから取り出したハイポーションを一気に飲み干して空き瓶を投げ捨てた。

「んー、そろそろ本当にヤバいな」

「ああ、勝てる気がしない」

「だよなあ・・・」

修復を終えたカグマが近付いてくる。五メートルほどの距離を取って立ち止まったカグマは、嗤った。

「お前たちは、強い。俺が今まで殺してきた誰よりもな」

「そりやどうも」

「もう少し遊んでみたかったが、流石にこれ以上の人数を相手にするのは骨が折れる」

「なに?」

援軍の件は悟られないように最小限の音量で話していた。バレるようなヘマはしていないはずだが、カグマはなぜか援軍が来るのを知っていた。

「なんで分かった?」

「教えない。次に会うまで考えておけよ」

黒衣の剣士が一步前へ踏み出す。

「逃がすと思うか？」

「逃げるさ」

瞬間、カグマは拳を振り上げた。紫色のライトエフェクトが光り輝いている。反射的に剣を構えるが、エフェクトをまとった拳はそのまま真下に振り下ろされた。一撃だけで終わらず、何度も何度も放たれた攻撃で地面は抉られ、土埃が視界を遮る。

地面を揺らす衝撃が収まり、土埃が晴れて視界が開けたときには、カグマの姿はどこにもなかった。周囲を見回しても発見することは出来なかった。

「・・・逃がしたな」

「だな。はあー！疲れたあ！」

俺は今までの戦闘で荒れ果てた花畑に寝っ転がった。張っていた気が緩み、全身の力が抜けていく。黒衣の剣士も剣を背中の鞘に収めてからその場に座り込んだ。彼にはいろいろ言いたいことがあるが、今は久々に訪れた静寂に身を委ねたかった。

しばらくの間無言で風の声を聞いていたが、黒衣の剣士が口を開いた。

「アイツ・・・なんなんだろうな」

「普通のPKじゃないだろう・・・あの回復力は十中八九、ユニークスキルだろうな」

「ユニークスキル、か。君も持っているんだろう？」

「まーね。その話はゆっくりしよう、飯でも食べながら」

俺は立ち上がって死闘を共にした純白カタルシスの愛剣を鞘に収めた。黒衣の剣士に向き直り、笑みを浮かべて言う。

「助けてもらったお礼に、奢るよ」

「・・・それじゃあ遠慮なく。さっきの戦い分だから覚悟しろよ？なんてな」

「望むところだ」

黒衣の剣士が立ち上がった時、ふと思いついて俺は言った。

「そういえば名乗ってなかったな」

「たしかに。てか名前も知らないやつに奢ろうとしたのか」

「命の恩人だからな」

「・・・それはこっちのセリフだよ」

なんのこっちゃと聞こうとしたが、やめた。

黒衣の剣士が驚いた表情で目を見開いていたからだ。その視線は俺の後ろに向いている。それを辿って俺も後ろを向くと、こちらに向かってくる人影が見えた。みるみる近付いてくるそれらの正体は、遠目からでも分かった。

「サツキさん！」

「サツキさん！」

俺を呼ぶのは先頭を走るシリカと、彼女のすぐ後ろのシュガー。さらにその後ろには副団長とノノがいる。

「少数精鋭だなーって、他は迷宮区に行ってるのか」

「そっか、そういえば君はKOB所属だったね」

「新人だけだな」

肩をすくめながら言い、俺たちは四人と合流した。

副団長がやけに驚いた様子だったのが少しだけ気になった。

◆?

〈アスナside〉

案内されるままに着いた場所は、記憶に残っていた美しい花畑ではなかった。あちこちの地面が抉れ、花が無残に散っている。この惨状がプレイヤー同士の戦闘によるものだとはとても思えなかった。

すでに戦闘は終わっているようで、荒れ果てたその場の中心には二人の人影が見える。一人はサツキくん、そしてもう一人を確認した時に心臓が止まるかと思った。

「・・・キリトくん」

その眩きが聞こえたわけではないはずなのに、かつての相棒であり

想い人である黒の少年はこちらを見た。目が合う。その夜空のような黒い瞳から、こちらの様子をうかがっているのが分かった。

言いたいこと、聞きたいことが山ほど頭に浮かんだ。数多の会話パターンが導き出されたが、実際に口から出たのは自分の心とは真反対のものだった。

「援軍、感謝します」

ひどく事務的で、無感情の一言。

自分自身に失望しながら、逃げるように去って行く彼をただ見つめることしか出来なかった。

Ep. 14 思惑

〈キリトside〉

「援軍、感謝します」

それが久しぶりに再会した元相棒の第一声だった。

謎のPKとの死闘を終え、駆け付けた四人の中に彼女―KOBサブリーダー〈閃光〉アスナがいた。俺は、いや俺たちは驚いたと思う。まさかこんな形で再会するとは俺も、彼女ですら思っていないかっただろう。俺は驚きのあとに嬉しくも思った。だがそう思ったのは俺だけのようだ。さきの第一声がそれを証明している。

それも当然、俺の自業自得だ。

あの時、大切な存在のために攻略組を抜けると決め、かつての同士たちと決別したあの瞬間から、こうなることを決意したはずなのに。実際にその現実を目の当たりにすると、どうしても心が揺さぶられる。

みんなに気付かれないように、いつも通りの何気ない感じを取り繕って俺は口を開く。

「危なかったけど、何とかなったよ・・・じゃあ、俺はもう行くから」

「え、飯は―」

「じゃあ」

共に死闘をくぐり抜けた彼の声を遮って、俺は街への道を走り出す。アスナから、目を背けた責任から逃げるように。

「キリト、どうしたの?」

逃げ帰ったホームで俺を迎えてくれた彼女に一言だけ返して俺は自室に籠った。

◆？

〈サツキside〉

「どーゆーこった」

走り去って行く黒衣の剣士を見詰めながら俺は思わず呟いた。その背中に、どこか後悔の念を感じるのは過去の出来事のせいか。それに副団長が関係しているのは先程の二人の態度からも分かる。気にはなるが追求はしない。誰にでも触れられたくない過去の一つや二つはあるだろう。

「なんでアイツが・・・」

ノノはいつもと真逆な態度で嫌悪感丸出しの声をこぼした。

「知り合い？」

「元ね。二度と会わないと思ってたけど」

ふんと鼻を鳴らすノノとは対称的に、シユガーは悲しそうな表情を浮かべていた。彼の背中を見続ける副団長は、今まで見た事のない表情をしていた。そこから彼女の心情を察することはできない。

「と、とにかく無事で良かったです、サツキさん」

「おう、来てくれて助かったよ。数にビビって相手が逃げてなきや殺られてた。シリカもありがとな」

「いえーあたしなんて何にも役に立てなくて・・・間に合って本当に良かったです」

「帰ったら何か奢ってよね」

「本当はさっきの彼に奢るつもりだったけど・・・アルゲートに隠れた名店を見つけたから、そこ行くか」

「いいんですか！ありがとうございます！」

「あんな広いとこでよく見つけたわね」

「大都市の裏路地に隠れスポットがあるのはRPGの基本だからな・・・副団長も付き合ってくれ、色々と報告したいことがあるから」
「・・・ええ」

「荒れ果てた花畑を後にして俺たちは街へ続く道を歩き出した。

「……で、どういう冗談なの？」

「……と、言うത്？」

「だから……」

「ふるふると震えるノノは、俺たちの前に居を構えるお世辞にも綺麗——どころか誰がどう見てもボロツボロの店を指差しながら大声を上げた。

「これのどこが名店なのよ！今にも潰れそうじゃない！」

「なんて失礼なことを……って、まあその通りなんだけど」

「お、落ち着いてくださいノノさん。まずは食べてみましょう、ね？」
「そうですよ、意外と美味しいかもしれませんし」

「シユガーとシリカが論しつつ店に入ると、中もやはりボロツボロ。外見だけなのでは？と僅かな希望を抱いていたノノは再び不満が爆発しそうになるが、なんとか堪えて壁際の席についた。みんなもそれに続いて着席すると木製の椅子がギシギシと音を立てる。

「で、何が美味しいの？ここは」

「アルゲートそば。まあこれしかないんだけど」

「とんだ名店ね……」

「おっちゃん店主にアルゲートそば五人分を注文して全員分のコップに水を並々まで注ぐ。

「この店主はインクラッドで一番やる気のないNPCだと思う。まあ現実味があつて気に入っているんだけど」

「確かに……お店の雰囲気といいNPCの人間味といい、本当に現実世界みたいですね」

「そうですね、老舗みたいであたしは好きです！」

「この際、美味しければなんでも良いわ」

「……」

水を一口飲んで咳払いを一つ。幾分か真剣さを増して、俺はさきの死闘を繰り広げた“不滅”について話し始めた。

「ここから真剣な話なんだけど」

みんなも真剣な顔で俺の話に耳を傾けた。

「襲って来たヤツは、簡単に言えばユニークスキル持ちのPKだ」

「ユニークスキル!？」

「本当ですか!？」

「間違いないと思う」

「ユニークスキルって・・・神聖剣みたいなやつですよね？」

「そうそう」

三人は流石に驚いた様子だ。今まで沈黙していた副団長が冷静を保ちつつ口を開く。

「どのようなスキルですか？」

「回復系だな。それもアホみたいな速度だった。ほぼ不死身と言っていいほどのな」

「・・・不死身」

「バトルヒーリング戦闘時回復的な感じだな。ダメージを受けた瞬間から毎秒・・・1000以上は回復してたと思う。連撃を喰らわしてる間なんかは回復量がダメージを上回って、減るところか逆にHP増えてたし」

「サツキさんのソードスキルのダメージを上回るならバトルヒーリング戦闘時回復のように10秒毎じゃなく・・・常時回復の可能性がありますね」

さきの戦闘を振り返ると、シユガーの考察通りに常時回復の説が正しいと思う。ドゥーム・フエイム十三連撃を見舞ってる時も、ヤツのHPバーは鬩ぎ合うように動いていた。バトルヒーリング戦闘時回復のような回復の仕方なら、HPバーは減少から増加の動きをするはずだ。

「部位欠損も数秒で完治してたな」

「・・・まさに不死身ですね」

「他にわかることは？」

「ええと・・・剣士ってよりは武闘家？みたいな格好だった。ポロポロのシャツとズボンで裸足。武器は持ってなくて、攻撃は体術スキルを使ってきたな」

「武闘家・・・」

「そういうスタイルのプレイヤーも結構いますからね。そこから探すのは難しそうです」

「中層でもたまに見かけますよ」

「・・・」

「名前は？何か言ってますませんでしたか？」

狂気に満ちたヤツの声を思い出す。

「アインクラッドを破壊する者」 “不滅” のカグマと名乗ってた」

「不滅の・・・」

「カグマ・・・」

シユガーと副団長の呟きは、白いドンブリを持って来たおっちゃん店主の「お待ち」にかき消された。

その後アルゴに情報を提供し、瞬く間に“不滅”の名はアインクラッド中に知れ渡った。攻略組でも倒せなかつたPKとして恐れられたが、あの死闘以来カグマが姿を現すことはなかつた。

◆？

失わない。喪いたくない。

そう思っているても、願っても、縫っても。

世界に絶対なんてものではない。

この世界での弱者には、守られる存在には、傍観者には、待つだけの者には、何の権利もない。

どれだけ自分を憎もうとも、恨もうとも、蔑もうとも。間違えた選択と過去は変わらない、変えられない。

——それでも。

これからは、未来は変えられる。
命を賭して守ってくれた最愛の人に、自分に意味を持たせるために
剣を握った。仮装の体を奮い立たせた。死の淵から何度も這い上
がった。

全ては醜いエゴイズムのため。

“不滅”はいらない。存在してはいけない。

「……やっぱり生きてたんだ」

沸き立つ怒りと憎しみで復讐の刃を研ぐ。

まだ見ぬ“不滅”との邂逅を夢見て。

◆?◆?◆?

『なんだか大変なことになったねー』

紅く染まった無限の上空から視線を外して呑気な声の方を向くと、外柵沿いに設置されたベンチに腰掛けた少女と目が合う。底のない深い闇のような瞳からは、一切の恐怖も怯えも戸惑いも後悔も疑念も感じられない。

数分前のデスゲーム開始チュートリアルについて、俺は彼女に問うた。

『・・・さっきの話、信じますか?』

一瞬だけきよんとしてから、んーと考えて彼女は言った。

『今は信じることしかできないよ。本当に死んじゃうのかなんて、確かめようがないもん』

彼女らしい冷静で合理的な答えだった。

視線を戻して流れ行く雲を見つめながら再度問う。

『これからの予定は・・・このまま街の中で外からの助けを待ちますか?』

『んー・・・』

彼女にしては珍しく歯切れが悪かった。何かに悩んでいる様子の彼女にかける言葉が見つからず、しばらく静寂が続いた。

『私が・・・』

意を決したように話し始めた彼女の方を向く。彼女は外柵の外の上空へ視線を向けていた。

『街を出て、この世界を冒険したいって言ったら、君は一緒に来てくれる?』

『・・・』

すぐには答えられなかった。

彼女の質問の真意を見極めようと思いを加速させる。彼女がこちらを向いて視線が交差する。やはりその瞳からは何も感じられない。

数秒の思考では真意など分からなかったが、分かっているでも答えは変わらなかっただろう。

『・・・街に残って助けを待つより、あなたについて行った方が楽しそうだし、生き残りそうな気がします』

彼女の目がわずかに見開かれる。

『そっか。じゃあ、よろしくね!』

『こちらこそ』

握手を交わして俺たちはパーティー、いやコンビを結成した。どちらともなく笑みがこぼれる。

『あつ!一つだけお願いがあるの』

『なんですか?』

『それ!敬語禁止!相棒なんだから』

『・・・わかった』

『それでよし!』

『んで相棒、これからどうする?』

『RPGの定番、レベル上げだよ!序盤はとりあえずレベルが高ければなんとかなるから、今日中に5にはしたいね』

『マジか』

『うん!でもその前に受けたイクエストあるから、ついて来て!』

一切の迷いなく歩き始めた彼女の後を追う。

陽はすでに沈みかけていた。

俺と彼女はこの日から約一年間、デスゲームという極限状態の中で目が眩むような日々を共に過ごし、死に別れた。

◆?◆?◆?

〈サツキside〉

「いやあ・・・嫌よ・・・やめて・・・」

恐怖に震えたか細い声が、冷え切った仮装の空気を揺らした。

かなりの間隔で壁に立てられた松明だけが光源のここは、目先2メートルすら容易に見渡せないほどの暗闇に包まれている。それでも、襲って来る敵の姿だけは、ありがたいことにはつきりと視認できる。

その理由は、至ってシンプルだ。

「オオオオオオオオ・・・」

不気味な気配、地の底から響くような声。咄嗟に振り向いた先に、ソレは立って、いや浮いていた。

白いワンピースみたいな服、背中まで伸びる長い髪、生者とは思えない白い肌、簡単に折れそうなほど細い首と腕。

アインクラッド広しと言えど、特定の層・エリアでしかお目にかかれないアストラル系モンスターである。この世界でも霊的な存在とされるこの系統のモンスターは、暗闇でもはつきり視認できるのだ。

幽霊のイメージをそのまま体現したソレは、俺の方を見ずに壁に迫って行く。その方向から、声にならない悲鳴を上げる気配がしたので、俺は音を立てないように愛剣を鞘から抜いた。

「せいっー」

「ゆらゆら揺れる亡者に四連撃技”バーチカル・スクエア”を見舞う。実体なき亡者を純白の刀身が捉え、斬り裂く。」

幽霊に物理攻撃とはこれ如何に？と思うかもしれないが、SAOではちゃんとした設定がある。通常の武器では攻撃が透けてしまっただメージを与えられないが、街にある教会で自分の武器に聖属性を付与してもらおうと、アストラル系モンスターにも攻撃が当たるようになる。一時間という制限があるが、元から聖属性が付与されている武器も存在していて、俺の愛剣・カタルシスもその一本だ。故に俺の斬撃は亡者を捉えることができる。

不気味な断末魔を響かせた亡者が爆散すると、壁際で頭を抱えて蹲

る人影が一つ見えた。暗闇でも映える赤と白を基調とした騎士服に栗色のロングヘア。

「副団長——」

“ 攻略の鬼 ” と呼ばれる我がギルドのサブリーダーは、俺の呼び掛けに華奢なその体をビクリと震わせた。それからいくら待っても蹲ったまま動かない。初めて見る彼女の様子に俺は動揺を隠せなかった。

——え、なにこれ？ どういうこと・・・？

呆然と立ち尽くす俺は、原因を探るためにこうなつた経緯を振り返ることにした。

事の発端は数時間前、ギルドホームでの事だった。

「霊剣・レーヴァーティン？」

「はい！」

ギルドホーム 田舎屋敷の庭でシュガーと手合わせしていた俺は、シュガーの発した名前に興味を引かれた。

ここ数日、カグマに折られた紅の愛剣デイメンションの代わりを探しているのだが、同等の性能を有する剣は見つかっていなかった。最初はオーダーメイドを頼もうと思つたのだが、現段階での鍛冶スキルでは不可能だと判明したのでダンジョンの宝箱かモンスタードロップで探そうとしていたのだ。

アルゲートの武器屋で見繕った片手剣を鞘に収めてその場に座り込み、詳しい話を聞くことにする。

「詳しく聞かせてくれ」

「はい！最近なんですけど、二十五層の迷宮区で新しい隠し通路が発見されたんです」

「迷宮区で？見落としがあったのか」

「いえ、どうやら見落としじゃないみたいです。最初に入った人は四十層でも戦えるレベルだったらしいんですが、隠し通路に出現するモンスターはもつと強かったみたいです。HPを真つ赤にしてなんとか逃げて来たとか」

「四十層クラスで手に負えないとなると・・・今の最前線くらいか？だったら、上層への到達が条件で解放されたエリアか」

「そうだと思います」

シュガーは俺の向かいに座ってさらに続ける。

「隠し通路が解放した日から二十五層主街区のNPCたちが、こぞつて同じ情報を口にするようになったんです。『開かれし道は、忘却されし剣の御室へ。頂ノ王を討たんとせん』。さらに新しく出現したクエストの報酬で、『忘却されし剣』の名前がレーヴァテインと判明したそうです」

その剣の名は有名な魔剣として現実世界でも聞いたことがある。隠しダンジョンに隠されているとなれば、この世界でもかなりのスペックを誇るに違いない。それに――

「『頂ノ王』って・・・百層ボスのことか？」

「アインクラッドの頂って意味なら、そうなりますよね。もしかすると、百層ボス戦に必須な剣かもしれないですよ」

「なにその熱い展開」

確証はないが、なんともロマン溢れる展開だ。

「二人してなにやってんのー？」

子供っぽい声に振り返ると、休日だというのに律儀に隊服を着たノノが腰に手をあてて立っていた。さつそくダンジョン攻略のために人を集めようと考えていた俺はなんて良いタイミングかと、普段は全く信じていないシステムの神に感謝した。

すぐに俺はノノをこの話に引き込む妙案を思い付いた。それはシュガーも同じだったようで、お互いに目で合図して仕掛ける。

「おつす、ちよつと興味深い話を、な？」

「ええ、とつても面白い話を」

「・・・なによ？気になるじゃない」

そう言つてノノは俺たちの横に座つた。

子供のような探究心の塊であるノノは、こんな感じで焦らせば高い確率で食い付いてくる。

「教えてもいいけど・・・協力してもらおうぞ」

「なに、変なクエストじゃないでしょうね？」

「クエストじゃなくて未踏破ダンジョンだな。目標はそこに眠る霊剣・レーヴァテイン」

「・・・詳しく教えて」

彼女のこのノリの良さは嫌いじゃない。

俺とシュガーは嬉々として今までの話をした。

「・・・！」

記憶の振り返りがそこまで来た時、後方からアストラル系モンスター特有のポップ音が三つ聞こえた。反射的に剣の柄を握るが思い止まる。動けない副団長の近くで戦闘をするのは危険だ。レベル的に安全でも何が起こるか分からない。

「・・・少しだけ我慢してくれよ」

俺は羽織つていたハーフコートを蹲る副団長にそつと被せた。途端に副団長の姿が見えなくなる。ハーフコートの隠蔽ボーナスが発動したのだ。この暗闇の中では触れない限り分からないだろう。誤解されがちだが、アストラル系モンスターは見た目に反して視覚でプレイヤーを補足するので、意外なことに隠蔽スキルは有効だ。

「・・・すぐ戻るから」

俺は愛剣を抜いて三体の亡者に斬りかかった。

E p. 16 暗闇の二人

〈アスナside〉

——もう嫌だ。怖い、恐い。

何も見えない暗闇の中、時折聞こえてくる不気味な呻き声すら無視して、アスナは蹲って震えていた。目をぎゅつと瞑り、恐怖を必死に耐える。

「副団長」

突然かけられた声に思わず体がビクリとするが、顔を上げることはできない。顔を上げればまた見てしまうかもしれないから。苦しみや憤怒、憎悪を染まった亡者たちの顔が。

オバケの類いがいつから怖くなったのかを、アスナ自身は覚えていない。何かきっかけがあったわけでもなく、気付いたら怖いものと認識していたのだ。それはこの世界でも変わらず、今までアストラル系モンスターとの戦闘はおろか出現エリアに近付くことすら避けていた。

しかし今、アスナは亡者たちの巣窟のど真ん中にいる。こうなってしまった原因は、さきほどアスナに声をかけた少年にあると言っている。

数時間前。

二十五層迷宮区で見つかった新ダンジョンの攻略前偵察に行こう！とノノから誘いを受け、特に予定がなかったアスナは深く考えずに同行することにした。サツキ・シュガー・ノノと四人だけで行くことに心配があつたが、あくまで偵察だと言うサツキの説得に負けた。しかし同時に、この四人は最前線でも充分過ぎる安全マージンを取っているので大丈夫だろうとも思っていた。

そうして迷宮区の隠し通路から未踏破ダンジョンに足を踏み入れたのだが、スタートからわずか十本歩いた瞬間に、床が無くなった——つまり落とし穴トラップにサツキと二人して引つ掛かってしまった

のだ。シユガーとノノの声が急速に遠ざかり、サツキの絶叫と自分の悲鳴の中為す術もなく落下していった。そうして着いた所が暗闇の中、亡者たちの巣窟だったのだ。亡者を見た瞬間に戦意は消え失せ、恐怖で体が動かなくなってしまう、遂には立っていることすら出来なくなってしまう。

——そうだ。ずっとずっと前にも、似たようなことが・・・

遠く懐かしい記憶が蘇る。

あの時は今ほど暗くもないし亡者もいなかったけど、今と違って独りだったし武器も無くしていた。

一杯考えて、勇気を出して、戦って、そして――

『・・・頑張ったな』

彼の優しさに包まれて、温かさに触れて――

「キリトくん・・・」

彼の名がぼつりと零れ、一筋の涙が頬を伝った。

◆？

〈サツキside〉

「・・・どんな反応すればいいんだ」

亡者たちを難なく蹴散らして戻った俺は、副団長が零した名前にどう反応すべきか悩んでいた。人が危機的状況の時に助けを求める相手は、かなりの信頼を寄せている者に限る。副団長にとっては、決別したとはいえ今でも“黒の剣士”がそうなのだろう。

なんとも言えない気持ちになりつつ、俺は周囲を見渡しながらこれからの事を考えた。

状況を打開するには、やはり出口を目指して動かなければならないだろう。しかし副団長がこの状態ではとてもそうはいかない。かと言って、救助が来るまでここに留まるのも難しい。俺とて亡者たちを

相手に無限に戦えるわけではない。なのでやはり、副団長を連れてここから動かなければならない。

そのためには、副団長の状態について原因を探らなければならぬ。と思った時にはすでに、俺の中で答えは出ていた。

「なるほど・・・オバケが怖いのか」

副団長―“閃光”や“攻略の鬼”の異名を持つ彼女もまた、生身のプレイヤーであり、一人の少女なのだ。その類いが怖くても何ら不思議ではない。

『きゃー！オバケだよオバケ！初めて見たなあ』

『生でアイドルを見た時みたいな反応するな』

『だって、アイドルよりもレアでしょう？』

『そうだけどその反応はおかしい』

ずっと昔、アインクラッド初のホラー系フロアに行った時のことを思い出す。かつての相棒が雰囲気をぶち壊したので全く怖くなかったが、そんな相棒に影響されたのか俺は色んなことが麻痺しているみたいだ。

「・・・隣、座るぞ」

暗闇でもぎりぎり視認できるであろう二メートルの間隔を取り、俺は壁に背を預けて座った。少し考えてから、最低限まで落とした声量で口を開く。

「えつと・・・大丈夫？」

「・・・」

副団長は何も言わず頭を小さく横に振った。

「その、ちよつと意外だったな。オカルト系は信じていないと思ってた」

「・・・幻滅したでしょう？」

「え？」

副団長は顔を上げないで続けた。

「普段は攻略攻略って口うるさく偉そうに言ってるくせに・・・いざこ

んな状況になったら何も出来ない。目を瞑って逃げているだけ」

「いや、誰でもいきなりこんな状況になったら混乱するよ」

「・・・あなたは？いつも通りだと思うけど」

「俺は慣れっ子なんだよ」

「・・・慣れっ子？」

「ああ。この手のトラップは、相棒に振り回されてアホみたいに引っ掛かって来たから、今さら混乱なんてしないよ。今回なんてまだマシな方さ」

そう、攻略組になる前なんて、こんな事は日常茶飯事だった。あの目も眩むような日々は今でも懐かしく思う。

「・・・あなたも、元βテスターとコンビを組んでいたの？」

「ああ、はじまりの街の隠れ武器屋で会ってからな。そういえば副団長も——」

言いかけてこの話題はマズいと止めるが、副団長は特に気にする素振りを見せずに続けた。

「私が、キリトくんと出会ったのは・・・一層の迷宮区だった。自暴自棄になって無茶な戦闘を続けていた私を気にかけて、声をかけてくれたの・・・それから、気絶した私を野営用の寝袋を使って安全な所まで運んで——」

それから副団長は饒舌にキリトとの冒険譚を話し始めた。どこへ行き、何を見て、戦い、笑い、泣き、喜び、悲しみ——。いつしか彼に抱いた感情。

彼女という剣士が生まれたその物語は、とても美しくて眩しいものだった。多くの人に影響を与える彼女に、大きな影響を与えたキリト。彼の強さではなく、人間性に初めて興味を持った。

「・・・良い人だな。会ってみたいよ」

「えっ？」

素直な俺の感想に、副団長が初めて驚きの声を発した。それに驚いた俺が隣を見ると、顔を上げてこちらを見ていた副団長と目が合う。ヘイゼルの瞳から恐怖は消え、代わりに疑問に染まっていた。

「な、なに？」

「会ってみたって、もう会っているでしょう？ていうか、一緒に戦ってたじゃない」

「・・・まさか、カグマの時の助っ人？彼が“黒の剣士”？」

「そうよ」

「そうだったのか・・・」

トッププレイヤーに相応しい実力だったと今でも思う。あの日以来会えていないが、今度見かけた時は奢る約束を果たそうと決めている。

「名前も知らないで、奢るなんて言っていたの？」

クスツと笑った副団長は俺を見ながら言った。彼女が俺に笑顔を見せたのはこれが初めてだ。そんなこと未来永劫ないと思っていた俺は、その破壊力にどうにか耐えながら視線を逸らして言った。

「いや、聞こうとしたらタイミングよく副団長たちが到着したんだよ。それでそのまま行っちゃうし・・・知ってたなら紹介してくれればよかったのに」

「あの時は・・・突然のことで頭と気持ちの整理ができなくて、あんな態度を取ってしまったの。それに、キリトくんは私といると居心地悪いだろうし」

「そんなことは・・・」

二人のことをよく知らない俺には、それ以上言葉を続けることが出来なかった。二人のことは二人にしか分からない。部外者の俺がどうこう言うべきではない。

しばしの沈黙を破ったのは、すっかり普段の調子を取り戻した副団長の声だった。

「・・・あなたは？」

「というと？」

「私の話ばかりじゃない。あなたのこと話してよ」

「俺のことでもなあ・・・」

俺は腕を組んで考える。別に過去について話すことに抵抗はないが、何せ誰かに話すのは初めてなので、どう話せばいいのかわからない。やや遠慮がちに副団長が口を開いた。

「相棒さんについて、話してよ」

副団長が相棒について知りたいとは予想外だった。とは言え、俺の過去の話は相棒の話でもあるので好都合だ。

俺はダンジョン内ということも忘れて懐かしい過去について話し始める。

「じゃあまずは出会った時からだな。さつきも言ったけど、はじまりの街の裏路地にある武器屋で初めて相棒に会ったんだ。俺はたまたま行き着いただけなんだけど、相棒はβ時代の知識を活かして——」

暗闇の中、副団長は何も言わずに静かに俺の話を聞いていた。

Ep. 17 前進と光

〈ノノ&シュガー side〉

「アスナさーん！ サツキー！ どこー!?」

「ノノちゃん静かに！ 敵が集まって来ちゃうよ」

狭い通路にノノの声がこだまする。

白い息を吐きながら二人は暗闇の中を早足で進んでいた。

「もう！ どうなってるのよ・・・入口は閉まっちゃやし、教会行ってないからアストラル系と戦えないし！」

「完全に初見殺しのダンジョンですね」

二人の愛刀・愛剣には聖属性が付与されていないため、ダンジョン内を彷徨う亡者たちと戦闘が出来ない。かと言って、一度街に戻ることも出来ない。落とし穴が発動したと同時に入口の扉が閉ざされてしまったからだ。さらにダンジョン全域が結晶無効化エリアになっているようで転移も出来ず、仕方なく二人は亡者たちを避けながら奥へ進んでいた。

「でも、こんなに暗いダンジョン初めてじゃないですか？ 最前線の迷宮区でももつと明るいですよね」

「そうね。素敵がないと迂闊に動けないし」

「それに・・・もしかするとこのダンジョン、クリアしないと出られないんじゃないですか？」

「・・・その可能性はあるね」

入口が閉まり、転移できないとなればそういう事だろう。となると、このダンジョンでまともに戦えるのはサツキだけになる。加えて

「早く二人を見つけないと。特にアスナさん」

「なんでですか?」

「・・・苦手なのよ。アストラル系」

前にギルドの女子会でアスナが言っていたのをノノは覚えていた。サツキが一緒だとまだ良いが、もし一人だったらと考えるだけでゾッ

とする。

「まったく、この借りは高く付くわよー！」

毒づきながらノノは暗闇の中を進み続けた。

◆？

「やはり、最初の挑戦者は彼らか」

表示された管理者専用のウインドウを見ながらヒースクリフは微笑した。ウインドウは左右二つに分かれており、片方には座り込む二人、もう片方には暗闇を慎重に進む二人が映し出されている。

四人が足を踏み入れているダンジョンは、現時点で最高難易度に設定されている。理由は、ダンジョン最深部に安置されている“霊剣”にある。

シユガーの考察通り、“霊剣”は魔王・ヒースクリフを倒すために大きな役割を果たすのだ。それに加えて、この世界で5本の指に入る圧倒的なスペックを誇るためそれに比例した入手難易度となっている。

このダンジョンは第五層クリアで開放されるが、その難易度は最前線のそれと同期する仕様になっている。つまり、上層を開放すればするほどこのダンジョンの難易度も上がっていくのだ。現在は五層クラスの難易度になっている。

この程度では攻略組にとっては最前線と何ら変わらないが、加えられた様々な要素が難易度を押し上げている。

光源がほぼない暗闇。

通常武器では戦えないアストラル系。

数々のフィールドトラップ。

結晶無効化。

クリアまで脱出不可能。

「……流石に……現状では……困難……ではないか……？」

途切れ途切れの声にヒースクリフは顔を上げた。いつの間にか部屋の隅に立っている人物が一人。顔馴染み―鬼を模した仮面を被っている。表情は見えない―の来訪にヒースクリフは息を一つ吐いた。

「君か。来るなら一報くらい入れたまえ」

「・・・心配しなくとも・・・一人だと・・・確認してから・・・来ている・・・」

そうか、とだけ返してヒースクリフはウインドウに目を戻して言った。

「公正フェアネスさを保つためにももちろん対処法は用意してある。それを見つめられるかは彼ら次第だ」

「・・・期待・・・しておこう・・・」

「そうだね・・・こんな所で負けるような彼らではないよ。君も負けないうよう精進したまえ」

「・・・分かっている・・・」

彼が転移するのを見届けてから、ヒースクリフは再度ウインドウに目を向けた。一方は先程より近く―いや密着していて、もう一方の二人は叫びながら全速力で亡者の群れから逃げていた。

◆？

「おはよう、今日もいい天気だね」

少女の声に返事はない。

清潔感のある一室で眠る彼の元へ訪れるのが日課になって、もう一年と少しが経つ。返事がないと分かっているけど挨拶は欠かせない。そのうち本当に返事をしてくれると期待しているからだ。

見舞いの品をテーブルに置いてベット脇の椅子に座り、眠ったままの彼の手を握る。酷く痩せ細っているが、確かに感じる温もりと彼に繋がった機械の音が生存を示している。しばらくそうした後、暗い空気を晴らすように少女は口を開いた。

「そうだ、嬉しいお知らせがあるんだよ」

鞆から一枚の紙を取り出して彼に見せる。

それは、彼に背中を押されて追い続けた夢が叶った証だった。

「じゃーん！なんとオーデイションに合格しました！まだまだこれからだけど、頑張る、から……だから……」

——ああ、だめだなあ……

耐えられず両目から涙が流れる。

どうしても恐怖や不安に押し潰されそうになって、何もできない自分が悔しくて、涙を我慢することが出来ない。

「頑張つて……絶対、帰つて来て……」

加速する彼の心拍を示す機械音と少女の嗚咽が室内を満たしていった。

◆？

〈サツキside〉

この世界の体は酸素を必要としない。

しかし今、現実世界の俺の体は激しく呼吸し、脈拍は天井知らずに加速しているはずだ。病室に横たわる俺の近くに誰かがいれば、俺が今この瞬間に命を懸けた戦いをしていると思うだろう。

現状、当たらずも遠からずと言ったところだ。

暗闇の中、動けない仲間が一人、出口が分からず仲間と分断されている状況に変わりはない。かと言って、亡者たちが強くなつたわけでも、愛剣をなくしたわけでも、ポジションが切れたわけでも、空腹になつたわけでもない。ただ——

「……あの、副団長」

「……」

ニメートルの幅を取って座っていた副団長が、今は俺の胸に顔を埋めて固まっているのだ。こんなに接近されたのは初めてで、今や俺の心臓は破裂しそうな勢いで脈打っている。

「やっぱり、無理？」

「・・・」

副団長は頭を高速で上下させて肯定した。

こうなったのは俺の話が序章を終えた時だった。

俺と相棒のコンビ結成から始まり、徹夜のレベル上げ、装備の強化、ねぐらの確保、クエストの消化。そして、相棒曰く第一層の裏ボス―《アスタルテ》と繰り広げた激闘を熱弁していた時、それまで聞き入っていた副団長がピタリと動きを止めたのだ。その視線が俺の後ろに向いていて、徐々にヘイゼルの瞳から生気が失われていくのを見て俺は瞬時に悟った。いるな、と。

同時に、俺の胸に副団長が飛び込んで来て今に至る。隠蔽スキルとコートのおかげで亡者に見つからずに済んでいるが、この体勢は非常に良くない。ダンジョン内ではあまりに無防備であり、何より俺のメンタルが持たない。

「副団長、落ち着いて、離れて」

「・・・いや」

聞いたことのない弱々しい声に言葉が詰まるが、精神力を振り絞って続ける。

「やっぱり移動しないと、流石にずっと留まるのは危険だから・・・」

「・・・手」

「え？」

短過ぎる返答に間拔けな声が出た。

副団長はわずかに顔を上げて再度言った。

「手・・・繋いで」

「わ、わかった・・・」

深く考えずに差し出した俺の手に、副団長の白く細い手が触れる。確かな温もりと震えが伝わって来たその手を軽く握ると、俺よりも強く離さまいと握り返してきた。そのままゆっくり立ち上がる。

「・・・ありがとう」

「これなら大丈夫？」

「・・・うん」

「よし、じゃあ移動しますか・・・とりあえず出口を目指しつつシユガー

たちを探そう」

と、言ったものの早速左右に分かれた道をどちらに進むかで迷ってしまった。

『道に迷った時は、このコインの裏表で決めると良いよ。絶対良い結果になるから！』

ふと相棒の声を思い出してポーチから黒色のコインを取り出す。表・裏とだけ大きく描かれたこのコインは特に何の効果も持たないが、相棒はよくこれで進む道を決めていた。それが何故かよく当たっていたりする。システム外スキルなんて相棒は言っていたが、あながち間違っていないのかもしれない。

指で弾いて落ちてきたコインを掌で受け止める。出た面は――表。

「・・・右に行こう」

コイン投げを不思議そうに見ていた副団長だが、特に何も言わなかった。

索敵で亡者を見つけ、隠蔽でエンカウントを避けて暗闇の中を進む。途中、何度も分かれ道に直面したがコイントスを信じて歩を進めた。

「ここって・・・」

「・・・うん」

そうして進み続けた末に、俺たちは久しぶりに明るい場所に辿り着いた。青白い炎が揺らめくそこは、かなり広い円状の部屋だ。どう見ても出口ではないのだが、俺の目は部屋の奥の祭壇に突き立ったソレに釘付けになった。

周りの空間すら歪んで見えるほどの強烈な存在感を放つ、一振の剣。

サイズの片手剣だと思われるが、離れていても分かる空恐ろしい

ほどの流麗さは、魔剣クラスである俺の愛剣カタルンスをも凌ぐ性能であることを示している。間違いない――

「あれが、霊剣・レーヴァーティン」……

「……みたいね」

部屋の入口ギリギリから中を覗きながら小声で話す。ここが最深部なのは間違いない。思っていたよりだいぶ早めの到達だった。最初の落とし穴に引っかけたことが近道になったのかもしれないが、素直には喜べない。

「どう見ても、ボス部屋だよな」

「……でしょうね」

このだだっ広い部屋で何も起きないわけがない。十中八九ボス戦になるだろう。フロアボス並の強さであるはずなので、仮にシユガーたちと合流できても勝率はかなり低い。

「まあ、場所は把握できたから今回は撤退しよう」

「……どうやって?」

「え?」

暗闇から解放されて少しだけ落ち着いた様子の副団長が続けた。

「結構探索して来たけど、一度も上へ続く道を見ていないでしょう? ここへ来るのだから穴を落ちて来たり、下り坂を滑って来たじゃない。降りたら登れなくなるようなところばかりだったわ」

「つまり……」

「歩いては出られない」

「じゃあ転移結晶で――」

「無効化エリアよ。もう試したわ」

「……え、じゃあボス倒すしかない?」

「……そうね」

「……」

「……」

あまりに絶望的な状況に二人して黙ってしまふ。

「とりあえず、シユガーとノノが来るのを待とう」

「……うん」

ここで無茶をするほど俺もバカではない。少しでも勝率を高めるために俺たちを探しているであろう二人を待つことにする。

部屋から漏れ出た光で照らされた場所に座ろうとした俺の耳に、冷たく重い男の声が響いた。

「――来たか、剣士よ」

ぱつと辺りを見回すが声の主はいない。だが頭上から何かかが落下して来る気配を感じた。

「アスナー！」

咄嗟に名前を呼び捨て、俺は副団長を抱きかかえて青白い部屋の中へ飛び退いた。直後、入口近くに数本の剣やら槍やらが突き刺さった。あのままあの場にいたら串刺しになっていただろう。

「あ、ありがとう」

「ああ、大丈夫」

副団長のお礼への返事を止め、部屋の中央から感じられた何者かの気配に目を向ける。そこには、先程まではいなかった者がいた。

全長は3メートルほど。煌めく金色の王冠を被り、見事な白髪と白髭が長々と伸びている。不気味なくらい青白い肌の最小限を甲冑と金属メイルで覆っているが、その全身は薄く透き通っていておまけにゆらゆらと浮いている。足はない。だらんと力なく垂らした右手で、同じく透けている直剣を握っている。間違いなくアストラル系の、このダンジョンのボスマンスターだ。

恐怖心が蘇った副団長は目を瞑りはしなかったものの再び俺の左手を握ってきた。俺はその手をそつと握り返し、腹を括って正面のボスに視線を向ける。ボスはその巨体に見合わない小さな瞳で俺たちを見据え、口を開いた。

「――待っていた。この時を、何百年と」

「はぐ。」

意味不明なセリフに拍子抜けした声を出してしまった。構わずボスはしみじみと感慨深そうに続けた。

「――頂ノ王に敗れ、この御室に剣を安置し、我らの遺志を受け継ぐ者

が現れるのを、死して尚、待っていた」

意味ありげなセリフだが、何か口を挟めるわけもなく黙って聞くしかなかった。

ボス―ザ・ロイヤルゴースト《亡霊王》が語り始めたのは、この世界の創世記。

プレイヤーには明かされていないなかった、浮遊城アインクラッドの成り立ち。

《大地切断》と《古の決戦》の記憶だった。

〈アスナside〉

——はるか昔。

地上は豊潤な魔力に恵まれ、魔法により数多の国が栄えていた。

人間族は九つの国家《九王国連合》を築き上げて、深く交流していたという。

しかしある日、主要な100の都市とその周辺の地帯が円形に切り抜かれ、柱とパネルにより補強され上空へと浮かび上がり、それらが重なり合って浮遊城アインクラッドとなった。

これが《大地切断》

巻き込まれて混乱している人間たちの前に現れたのが、この大災害を引き起こした《頂ノ王》だった。

——曰く、これは遊戯^{ゲーム}である。

地上に還りたくば最上層で待つ我を討ち滅ぼしてみよ。さすれば帰還を約束する。王はそう言った。

人間たちは層を超えて結束し《頂ノ王》を討たんと準備を進めた。しかし、地上では魔法の力でドラゴンすら圧倒していた人間だったが、この浮遊城では魔力が致命的に枯渇していた。最大の武器であった魔法では戦えないと判断した《九王国連合》は、残された魔力を全て使って三本の神器——^{レウァーティン}《霊 剣》^{バルムンク}《星 剣》^{テイル・フライング}《邪 剣》を鍛え上げた。

強大な力を秘めた剣を授けられた三人の英傑は、多くの仲間とともに《頂ノ王》に戦いを挑んだ。

そして——。

血みどろの戦いは——人間たちの敗北で決着した。

何とか逃げ延びた三人の英傑は、自分たちの遺志を継ぐ者が現れると信じて、剣を三大都市がある層の奥深くに安置した。

しかしその願いは叶わず、残された人間たちは英傑たちの敗北に絶望し、地上への帰還を諦め浮遊城でその一生を終えていった。そうして最初の“遊戯”は幕を閉じた。

これが《古の決戦》

「・・・なんか、壮大なストーリーだな」

「・・・そうね」

ザ・ロイヤルゴースト
亡霊王が語ったアインクラッドの創世記は、二人の想像を遥かに超えるスケールだった。

《大地切断》についてアスナは少しだけ聞いたことがあった。キリトとのコンビ時代、初めての大型キャンペーンクエストで出会ったダークエルフのキズメルが、エルフ族の伝承として口にしたのだ。そして、隔てられた階層を一つに繋ぐために、異世界から剣士―プレイヤーが召喚されているとも。

アスナの刹那の思考は、続く亡霊王の声に断ち切られた。

「――人間たちが全滅した後《頂ノ王》は各階層を守護する下僕を配置し、無人となった街に仮初の命を与えた人形を住ませ、人間を模した新たな種族《エルフ》を生み出した。そして、再び決戦を目論んだ《頂ノ王》は別の世界から剣士をこの城に召喚した・・・」

「下僕つてのがフロアボスのことで、人形はNPC？別世界の剣士つてのは俺たちだな。つまり、第二の遊戯^{ゲーム}がSAOって設定か」

合点がいったようにサツキが呟く。

「アインクラッドの成り立ちなんて、考えたこともなかったわ」

「俺も。公式の事前情報ですら、何一つとして明かされてなかったからなあ。それが、こんな形で知ることになるとは・・・」

うんうんと二人で頷き合う。

ふと、アスナはすっかり自分が普段通りの振る舞いになっていることに気付いた。ただ一つ違うのは、右手に感じた自分のものではない温もりだ。無意識のうちに握っていたらしいそれを見て、アスナは顔から火が出るほどの恥ずかしさに見舞われた。放そうと口を開きかけたが、狙っていたかのように亡霊王が声を発したためタイミングを逃してしまった。

「――実に長き年月を待った。この御室に辿り着く者が現れるのを・・・」

冷たさの増した声色に何も返せない。

「——《頂ノ王》を討ち滅ぼすのに神器は大いに役立つだろう。だが同時に、その秘められた強大な力は、使い方を間違えれば破滅を招きかねない」

亡霊王は音もなく反転し、祭壇に突き立った《靈劍》を見つめた。

「——かの剣は、魂と心意を宿し、未来を繋ぐ力を秘めている。決して途切れることなく繋がれた力により、剣を手にした英傑はさらなる高みへと到達するだろう……」

「魂と、しんい？」

聞き慣れない単語にアスナは困惑した。サツキも同様に首を傾げている。

「——世界の理を超越した力だ。《頂ノ王》が最も恐れ、また欲している力でもある」

「そんな凄い力が宿っているのか。確かに、使い方を間違えたらヤバそうな剣だな」

感心した様子のサツキに、背を向けたままの亡霊王は静かに告げた。

「——そうだ。だから過去の英傑たちは、悪しき者の手に神器が渡らぬよう、自らの遺志を継ぐ者を選別する試練を遺した……」

直後、アスナは自分がぐるぐると回転するのを感じた。次いで固い石床の上を転がる衝撃と何かが碎ける音。顔を上げると、目先四メートルに透けている大振りな直剣——亡霊王が右手に提げていたもの——が突き刺さっていた。

アスナの視界の端で赤い断片が舞った。見れば、サツキの頬に一本の鮮やかな剣痕が走っている。彼が亡霊王の攻撃から庇ってくれたのは明らかだった。

「サツキくん……！」

「気にするな」

ゆらゆらと移動した亡霊王は、突き刺さった直剣を引き抜いて構え直し、アスナたちを見下ろした。

「——試練を始めよう《靈劍》を求める者よ。そなたらが神器を手にするに相応しい英傑であるか、この我が見定めてくれよう」

部屋の炎が激しさを増し、亡霊王の頭上に三本のHPバーが表示された。

「やるしかなさそうだ」

「・・・ええ。でも」

アスナの武器ではアストラル系であろう亡霊王にダメージを与えられない。アスナの言いたいことを察したサツキが言う。

「ああ、副団長は下がっててくれ。何か気付いたことがあったら教えてほしい・・・でも大丈夫か？アイツもアストラル系みたいだけど」

「・・・もう慣れたわ」

「ならよし」

愛剣を抜き去り亡霊王と対峙したサツキからアスナは距離を取った。戦いに参加できないのはもどかしいが、足でまといになってサツキまで危険にさらすわけにはいかない。

純白の愛剣を構えたサツキをターゲットした亡霊王が直剣を振りかぶった。同時にサツキは亡霊王の右側方に走り出す。それを捉えようと亡霊王が直剣を音もなく水平に振り切ったが、ギリギリで射程外に滑り込んで避けたサツキは亡霊王の背後で跳躍し、空中でソードスキルの構えを取った。純白の刀身がライトエフェクトをまとう。

「曲刀カテゴリ二連撃技”アドマイアー”」

亡霊王はすかさず背後への回転斬りを放った。それを予測しての二連撃技だろう。初撃の斜め斬りで亡霊王の攻撃を相殺し、続く回転水平斬りを見舞うつもりだ。双方の刀身が肉薄し、接触して大量の花を――

「ッ!？」

――散らさなかった。

ぶつかり合うはずだった二本の刀身は、確かに接触した。だが、目を疑うことが起こった。

亡霊王の直剣がサツキの愛剣をすり抜けたのだ。見た目のまま、まるで実体がない幻かの如く。

「な――」

さすがのサツキも為す術なく、無防備な胴体に亡霊王の直剣が――こ

ちらはすり抜けることなく――直撃した。

回転の勢いそのままに斬り払われた一撃は、サツキを部屋の壁際まで軽々と吹き飛ばした。激しく床に叩きつけられ転がったサツキはそのまま動かない。アスナの視界左上に小さく表示されたパーティーメンバーのHPバー、そのうちの一本が急激な勢いで減少していく。

「いやっ……サツキくん！」

アスナは倒れたままのサツキに駆け寄った。彼のHPは真っ赤に染まっていた。

〈サツキside〉

最後に覚えているのは、途方もない衝撃と急減少する自分のHPバー、叩き付けられた硬い石床の冷たさだ。

そして、亡霊王の一撃で気を失った俺が次に目覚めたのは、冷たく重い空気が満ちたボス部屋ではなく、暖かな陽光が差し込む花畑だった。

「……どうなってるんだ……?」

一瞬、あのまま死んで天国に来てしまったかと思ったが、次に感じたのは既視感と懐かしさだった。

ここは、相棒に連れられてよく訪れていた思い出の場所だ。フラワーガーデンの別名を持つ四十七層と比べても遜色ないと俺は思っている。あるクエストで見つけた時に相棒が気に入ったらしく、昼寝やピクニックなどをしによく来ていた。

相棒が死んでからは一度も訪れていなかったが、相変わらずの和やかさと美しさにしばし沈黙した。

花畑の中央には樹齢何百年という大きな桜の木がある。俺はそこへ通じる小道を無意識に、いや、何かに引き寄せられるように歩き進めた。そこで初めて気が付いた。俺の手が、体が仄かな光をおびて透けていることに。

「……本当に、どうしちゃったんだ」

混乱状態のままとりあえず歩いた。

そして、美しく咲き誇る桜の木の下で、俺は信じられないものを見た。

『……で、見事なまでの完敗だったわけだが、何か作戦は思い付いたのか?』

『もちろん! いい? 君が蜂の巣にされてる間に私がボスの頸を取る、なんてどう?』

『俺の死を前提にするな』

木陰に並んで座り、くだらない冗談を言い合う二人は—もう一人の俺と死んだはずの相棒だった。

◆？

〈ノノ&シユガースide〉

「ノノちゃん！待って待ってストップ！」

後ろからシユガーに手を掴まれたノノは我に返って足を止めた。

「なに？急がないと」

「そうだけど、一回落ち着いて・・・」

「落ち着けないわよ！早く二人を見つけないと」

珍しくノノは焦っていた。

少し前、突然視界左上のサツキのHPが真っ赤に染まったからだ。その減り方から、たった一撃によるダメージだと予測できた。ボスと交戦しているのは明白だった。仲間のHPが危険域になるのを見るのは初めてではないが、それは目の届く範囲で助けに行けた時の話で、今のような状況ではない。

減少したままのHPバーが、次の瞬間には音もなく消滅してしまうのではないかと、ノノは気が気でなかった。最悪の場合を考えて心臓が破裂しそうなほど鼓動が荒ぶった。普段から馬が合わないサツキでも同じギルドに所属する仲間に変わりはない。何よりも、また自分が何も出来ないまま終わるのが嫌なのだ。

ノノは再び歩き出そうと振り向いて、止まった。

「やばっ」

前方十メートルほどに亡者がポップしたのだ。まだ見つかる距離ではないが、こちらに向かってゆっくり近付いて来ている。

「来た道に戻り—って、こっちにも湧いてる！」

後方からも亡者が迫り、二人は完全に挟まれてしまった。狭い通路に他の道はない。

「厳しいわね・・・」

「ノノちゃん、こっち！」

「なにを——」

突然シュガーに手を引かれ壁に押し付けられた。いわゆる“壁ドン”という状態になり、ノノはさつきとは違う意味で鼓動が早くなった。

だがシュガーは構わずノノに密着し、いつの間にか手に持っていた物で二人を覆った。途端に隠蔽率が急上昇したのを見て、ノノはシュガーの意図、隠蔽でやり過ぎそうとしていることを察した。

「・・・前から思ってたけど、意外と大胆よね」

「そ、そうかな？ごめん」

「別にいいわよ・・・」

偵察隊長を任されるだけあって、判断が早いのは流石だと言える。気を使つてか、シュガーは赤い瞳をノノから逸らして亡者の動きを注視していた。ノノも動かずに亡者の動向に意識を向けた。

だからか。

何の前触れもなく、寄りかかっていた壁が消滅したことに、二人は即座に対応できなかった。

「うわあああつ!？」

「きやあああつ!？」

はぐれた二人と同様に、暗闇の中を為す術なく落下していった。

◆？

〈アスナside〉

「サツキくん！起きて！」

ぐったりしたまま動かないサツキの体を、アスナは必死に呼びかけながら揺らした。

手早くハイポーションを取り出して無理矢理飲ませる。もどかしいほどゆっくり回復するHPバーが焦りと混乱を加速させていく。

「——ほう、アレで死なぬか」

ゆらゆらと近付いて来る亡霊王が感心したように言った。サツキを抱きとめながら亡霊王に視線を向けたアスナは思考を加速させる。

——聖属性が付与されているサツキくんの愛剣でも、攻撃を受け止められなかった。アストラル系への唯一の対抗策が通用しないなんてことは、今まで一度もなかったし聞いたこともない。何か別の、このボスを倒すための特別な条件かアイテムがあるはず——

刹那のその思考を読み取ったかのように、亡霊王は一つ頷き肯定した。

「——左様。今のそなたらでは我を討つどころか、触れることすら叶わぬ」

亡霊王が直剣を振りかぶる。アスナは無意味と分かりつつ、愛剣を引き抜いて構えた。

無情な一撃が振り下ろされるその直前——

「うわああっ!?!」

「きやああっ!?!」

上空から二つの絶叫がこだました。反射的に見上げたアスナが見たのは、頭上にいくつも開いた穴の一つから落下して来た二つの人影——はぐれていたノノとシュガーだった。

「——ほう、まだいたか」

振りかぶった直剣を水平に持ち変えた亡霊王は、アスナから落下中の二人に狙いを変えたようだ。それに二人も気付いたらしく、絶叫を止めて迎撃のためかそれぞれの愛刀・愛剣を手に取る。アスナは悲鳴にも似た声を発した。

「だめー避けて——!」

その声と亡霊王が直剣を振るったのは同時だった。無音で迫る透けた直剣に何かを感じたらしく、二人は迎撃をやめて空中で身を捻って亡霊王の一撃を避けた。攻略組でもモノにしている者が少ない高度な技術だが、それを咄嗟にやってのける二人は流石としか言いようがない。

落下ダメージを発生させない見事な着地を魅せた二人は、意識を

失ったままのサツキを見て表情を歪ませた。

「サツキ! どうしたの!？」

「サツキさん!？」

それに答えるよりも先に、亡霊王が再び攻撃モーションに入った。

「そいつの攻撃は受け止められない! 避けて!」

縦横無尽に振り回された直剣を二人は危なげなく躲す。だが、初めて見るモーションと微妙なカスタマイズのせいで、時折二人の体を直剣が掠める。反撃ができない以上、このままではジリ貧だ。

「もう! なんなのよコイツ!」

「やっぱりアストラル系ですよね!? 僕たちの攻撃は!」

「違う! サツキくんの攻撃も当たらなかった... 何か条件があるんだと思う!」

「条件って...」

「ギミックみたいなのありますか!? 何か仕掛けが!」

ダンジョン内にある仕掛けは、そのほとんどがボタンやレバーだ。だがボス部屋にそれらしきものはない。広い部屋にあるのは――

「まさか...」

「...その、まさかだ」

腕の中から聞こえた声にあすなは視線を落とした。どこか翳りが見える青い瞳とぶつかる。

「サツキくん!」

「悪い、もう大丈夫... これ、どんな状況? あの副団長がサービス良いな」

「なっ! 今はそんな場合じゃないでしょう!」

我に返ったあすなは抱きとめていたサツキを離す。冗談冗談と言ってサツキは立ち上がった。

「さて、ここからは真面目な話なんだけど!」

前方で練り広げられる激しい攻防を見据えながら、サツキは真剣味の帯びた声で言った。あすなも立ち上がって隣に並ぶ。

「アイツを倒すには、アレを使うしかないと思う」

あすなはすでに検討がついていた。

「でも、どうやって？」

「誰でもいいから、他が時間を稼いでいる間に引き抜けばいい」

不敵な笑みを浮かべ、サツキは部屋の最奥の祭壇に突き立った《霊剣》を見つめた。

◆?◆?◆?

『いやー負けた負けた! すっごい強かったね!』

『マジで死んだと思った』

『ね!』

真つ赤に染まった互いのHPバーを横目に、俺たちは馬鹿みたいに笑った。かつてないほど死に近付いたというのに、俺は恐怖よりも楽しかったという感情で満たされていた。それは間違いなく、隣に座った相棒の影響だろう。

彼女は大きく背伸びをして後ろへ倒れ空を仰いだ。

『でも、おかしくないか?』

『なにがー?』

相棒は目を瞑って聞いてきた。

『自惚れてるわけじゃないけど、俺たちで勝てないって相当だろ? ゲームバランスがおかしい』

『んー・・・』

相棒はしばし沈黙して言った。

『君はSAOってどんなゲームだと思う?』

『なんだ突然・・・まあ悪い意味で神ゲーだな』

『じゃあもし、SAOが普通のゲームだったら?』

『それは良い意味で神ゲーだろ』

『具体的にはどんなところが良いと思うの?』

『具体的・・・MMORPGにしては、ゲーム内のバランスが取れていると思うよ。コルの価値だったりモンスターのポップ率やアイテムドロップ率とか』

『うん、SAOは基本的に公平フェアネスさを貫いている。ならさっきのボスも今のプレイヤー、私たちなら倒せるはずだよ』

『いや無理だろ。どう考えても勝てる相手じゃないって』

『確かに、あのままならね』

『は?』

相棒は起き上がって続けた。

『戦ったことあるでしょう? 特定の条件かアイテムが揃わないと倒せなかったモンスター』

『いたけど・・・つまり、さっきのボスも?』

『だと思っよ。部屋の床とか壁に変な模様が彫られたスイッチがあったから』

『あの戦闘でよく見つけたな』

『褒めないでよ、好きになっちゃう』

『黙れバカ。じゃあ部屋のギミックを使えば、ボスが弱体化かなんかして戦えるようになる?』

『多分ね! 私の経験によると、RPGで理不尽なまでに強い敵って、何かしらの攻略法が隠されてるものなんだ。だから、そんな敵が相手ならまずは周囲をよく観察すればいいよ!』

『なるほどね、覚えておくよ・・・で、見事なまでの完敗だったわけだが、何かいい作戦は思い付いたのか?』

『もちろん! いい? 君が蜂の巣にされてる間に私がボスの頸を取る、なんてどう?』

『俺の死を前提にするな』

俺のそのツツコミは、相棒の中でお気に入りの迷言となったらしい。

◆? ◆? ◆?

へサツキside

起こっている現象に理解が追い付かないが、少なくとも目の前の光景には覚えがあった。

あれは確か―三十何層の小さな村にいたNPCのクエストのことだ。ダンジョンの奥地に落としてしまった指輪アイテムを取って来るだけのお使い系かと思えば、指輪が落ちているのがボス部屋でそ

のまま戦闘になった。その有り得ない強さに即時撤退してこの場に逃げ帰って来たということだ。

死にかけてたというのに、冗談を言い合ってバカ騒ぎする二人を見て、我ながらこの時は頭がおかしかったなと思う。相棒のせいだけだ。

だが、偶然か必然か。

この会話はまさに現状に当てはまるではないか。昔のことで忘れていたが、おそらくあの御室にも、亡霊王を倒すためのギミックが隠されている。

そして、それらしきものは一つしかない。

「・・・ありがとな、——」

純白の光に包まれ、かつて取り戻そうとした光景が遠ざかっていく。最後に見えた二人は、やはり笑っていた。

◆?

〈アスナside〉

愛剣を握り直したサツキは、亡霊王が直剣を振り回す様を見ながら言った。

「見る限り、ヤツは殲滅型だと思う。間を空けずに接近して躲し続ければ時間を稼げるはずだ」

モンスターのアルゴリズムにも様々な種類がある。その一つ〈殲滅型〉は、文字通り近づくプレイヤーを片っ端から攻撃するものだ。その特性故にタゲ取りはさして苦労しない。

「でも、あっさり霊剣に近付くことを許してはくれないと思うわ」

「だろうな。多分霊剣に近付いた奴を優先攻撃すると思う。だから、ちよつと無茶する」

「・・・どういふこと?」

サツキは全快した自分のHPバーを見て言った。

「霊剣までなかなか距離があるからな。急がないとこつちがもたな

い。だから俺がさつききの要領で、ヤツの攻撃をわざと受けて吹っ飛ばされる。あの威力なら方向が合えば一瞬で霊剣のどこまで行ける」「なに言ってるの!?!そんな危険なこと―」

激昂したアスナにサツキは続ける。

「大丈夫だつて、今度は上手くやるよ。他の方法も時間もない」

見れば、ノノとシユガーのHPは六割ほどまで減っていた。一撃でもまともに被弾すれば、耐えられないだろう。

アスナは葛藤の末、無言で頷いた。

「わかった、その方法でいきましょう」

「おっけ、じゃあ―」

「でも」

アスナはサツキのコートの袖を摘んだ。彼の青い瞳をしつかり見つめながら、一言だけ零した。

「・・・死なないでね」

「フラグになるからやめて。次の予定は、みんなで霊剣ゲットのパーティーだからな!」

不敵な笑みでそう言い、サツキは愛剣を手に走り出した。アスナもそれに続く。二人の接近に気付いた亡霊王の目に剣呑な光が宿った。

「――数が増えたとして、無意味」

「お待たせ! 次の攻撃を避けたらスイッチ頼む!」

亡霊王が直剣を振りかぶったと同時にサツキは叫んだ。ノノとシユガーは彼の復活に安堵し、そして困惑した。

「こんな透けてるヤツ相手にどう戦おうっていうのよ!」

「何か策があるんですか!?!」

「ああ! 信じろ!」

サツキのその気迫に、二人は頷いた。

「ああもう! これで死んだらアンタのこと呪ってやるから!」

「僕はどこまでもついて行きますよ!」

「サンキュー! いくぞ!」

正面からサツキ、左からノノとアスナ、右からシユガーが同時に接近する。対する亡霊王は直剣を低く構えた。直後、サツキが叫ぶ。

「ガストネード―全方位攻撃だ！巻き起こされる風に注意！」

その警告通り、音もなく回転した亡霊王を中心に旋風が巻き起こった。被弾していればダメージに加えて大きく体勢を崩していただろうが、全員射程外に退避できていたので問題ない。

「硬直時間は3秒！今だ！」

旋風が収まった瞬間に再び全員が走り出す。

「――おもしろい」

ぎらりと亡霊王の目が光った。硬直が解けるや否や最も近くにいたシユガーを目掛けて直剣を斬り払うが、彼はそれをステップで避けていく。入れ替わるようにノノとアスナがタゲを取り、亡霊王が攻撃モーションに入る。

「――む」

そこで気付いたようだ。

亡霊王の背後―頭上の位置まで跳躍したサツキが空中でソードスキルの構えを取った。

亡霊王は足下の二人からタゲを変更して直剣を水平に持ち直した。そのまま猛烈な勢いで音もなく回転し、サツキに一撃を見舞う。さきに見たものと全く同じ光景。透き通った直剣がサツキを捉える。

「ぐっ！」

短い呼吸とともにサツキが吹き飛ばされる。一度見ている光景でも、やはり心臓に悪い。

「サツキ!？」

「サツキさん!」

捨て身の作戦を知らない二人が血の気を引かせるがすぐにサツキの考えに気付いたのだろう。呆れたような笑みを浮かべた。

受け身が良かったのか、サツキのHPは赤に染まるギリギリ手前の四割程度で減少を止めていた。ハイポーションを啜えながら愛剣を頼りに立ち上がった彼は、したり顔でその柄を握った。

祭壇に突き立った《レヴァーティン霊剣》の柄を。

◆？

〈サツキside〉

間近で見るとその神々しさに圧倒された。

戦闘中でなければ、何時間でも眺めてしまいそうなほどに美しい。

《霊剣》レーヴァーティン

間違いなく現在入手可能な武器の中で最強と言える剣の柄を握る。冷たい刀身に魂が宿るような錯覚。

「——ほう、その手に取るか」

亡霊王が俺を見据える。

俺は空になったハイポーションの瓶を投げ捨てて愛剣^{カタルシス}を背中の鞆に収めた。

「《霊剣》を使うに相応しいかを選別する試練なら、実際にこれを使ってアンタを倒せばそれが証明になるだろう？」

「——如何にも。我はすでに果てた者……《霊剣》の力で現世に留まっている魂に過ぎぬ」

亡霊王はゆっくりと俺に近付いて来る。祭壇の少し手前で止まると、俺を見下ろしながら言った。

「——さあ、抜いてみせよ。さすれば我が肉体は復活し、そなたらと剣を交える真の試練を始めよう」

「ああ——」

亡霊王の後ろで成り行きを見守っていた三人は、全員が準備万端と言わんばかりの目をしていた。

「——やってやるよ」

俺は右手で握った《霊剣》を引き抜いた。半ば以上刺さっていた流麗な刀身が何の抵抗もなく姿を現し、冷たく重い空気を鋭く斬り裂く。

途端に、部屋を照らしていた青白い炎が揺らめき、その色を金色に変えた。冷たく重い空気が消え去り、部屋に光が満たされる。

変化はそれだけではない。

ゆらゆらと透けていた亡霊王が、その輪郭を鮮明にしていく。途切

れていた足が現れ、眼光は鋭さを増し、直剣は鈍い輝きを放つ。俺は《霊剣》を構え直して言った。

「これで、アンタと戦えるわけか」

「——左様。さあ、始めよう」

ニヤリと笑った亡霊王が、先ほどよりも速く重い一撃を放つ。しかし、不思議と今の俺には欠伸が出そうな程度の一撃に見えた。右手の《霊剣》でそれを受け止める。耳を劈く金属音が鳴り響き、大量の火花が散った。

俺を押し潰そうと亡霊王が渾身の力を振るう。しかし、つばぜり合いは完全な均衡を保っている。《霊剣》から無限の力が流れ込んで来るような感覚が、俺の全身を満たす。

「はあああつー！」

つばぜり合いの状態から無理やり亡霊王の直剣を弾き返し、間髪入れずに三連続技“サベージ・フルクラム”を発動させる。がら空きの胸に鮮やかな剣痕が刻まれた。

「二スイ——ツチ!!」

副団長以外の三つの声が重なる。後退した俺と入れ替わりにノノとシユガーが前に出た。二人の武器がライトエフェクトをまとう。

カタナカテゴリ二連撃技” 梁塵”

両手剣カテゴリ二連撃技” デブリス・フロウ”

両足にそれぞれ命中させ、亡霊王のHPは目に見えて減少する。さらに副団長が助走から跳躍し、顔面に四連撃技“クオータニオン”を見舞った。

「——存外やるな」

体勢を戻した亡霊王が俺たちを見下ろして言った。

「——どうだ？ 《霊剣》の使い勝手は」

「怖いくらい扱いやすいよ」

流麗な刀身を見つめながら答えた俺に、亡霊王は試すような目を向けた。

「——うむ。そなたが耐えられるか見物だ」

「……？何を言って——」

次の瞬間、目の前の光景が急変した。

金色に満たされた部屋も亡霊王も消え、色を失った白黒の世界。深い森の中、大量のモンスターに囲まれている……。目の前で俺の知らない誰かが為す術なくミンチにされ、その体を爆散させて——大音量で頭の中に響くのは、恐怖と絶望に染まった悲鳴、絶叫。その人の仲間だろうか。簡素な片手剣を振り回し、モンスターに斬りかかる一人の男が、攻撃を弾かれ、剣を折られ、袋叩きにされ散っていく……

「——ッ!?!」

仮想の体から魂が抜けるような感覚。そして見える光景が変わり、どこかの街の、どこかの広場。並んでベンチに座る男女は、愛おしそうに互いを見つめ、笑い合う。春のひだまりの様な温かい気持ち溢れ……

「なんっ……。だ、これ」

「サツキくん!」

「サツキさん!大丈夫ですか!?!」

「どうしたのよ!」

三人に答える間もなく再び光景が移り変わる。

見えるのはどれも俺の記憶にないものだ。知らない誰かが死ぬ場面、武器強化の成功を願う場面、食事をする場面、ホームを購入する場面……。喜び怒り哀しみ楽しい苦しい憎い。好意、悪意、憎悪、友情、愛情、嫉妬——。

数多の感情が濁流となって襲いかかる。頭がどうにかなりそうだが。震える手から《霊剣》がすり抜けて石床に突き立った。

これは——

「——どうだ?見えるか?」

元の光景に戻ったところで亡霊王が言った。

「どうなってるんだ……。?」

「——そなたが垣間見たものは《レヴアールティン霊剣》に宿された魂と心意である。全て、この世界で散っていった者たちのものだ」

「今のが、死んだ人たちの……。?」

「——左様。それこそが《霊剣》を手にする英傑の使命である。遺志を

背負い、誰一人として見捨てることなく未来へと繋ぐ。そなたに出来るか？」

「俺は……」

とてもゲーム内の話にしては現実味のないものだった。しかし先ほどの現象は、亡霊王の言うことと一致する。何らかの仕掛けで、《霊剣》という装備オブジェクトにプレイヤーの記憶が書き込まれている可能性も否定できない。仮にそうだとしても、今までゲーム内で死亡したプレイヤー、約三千人の遺志を背負うなど俺にはとても出来ない。

黙り込む俺の胸中を察してか、副団長が毅然とした声で言った。

「大丈夫よ、サツキくん」

優しい笑みを浮かべた副団長は俺の右手をそつと握った。暗闇の時とは違い、その手からは怯えも恐怖も感じない。

「あなた一人に背負わせないわ」

「そうですよ！僕たちも一緒です！」

「そーゆーこと！さつさと持って帰るわよ」

「みんな……」

頼もしい仲間の励ましを受け、俺は再び《霊剣》を手に取った。再び感情の濁流が押し寄せて来るが、もう怖くはなかった。

「やってやるよ。俺が、俺たちが……」

「——ほう」

「誰も見捨てない。全員の思いを背負って、ゲームをクリアする……！」

右手に《レイヴァー霊剣》左手に白の愛剣カタルシスを構えて走る。

激化する戦闘の中、がんばれ、と励ます声が聞こえた気がした。

Ep. 21 黒の片鱗

〈アスナside〉

「副団長！右斜めに避けてパラレル！」

サツキの声に従って亡霊王の直剣を回避し、反転して腕に二連撃技”パラレル・ステイニング”を見舞う。アスナの愛剣が岩石にも似た腕を深々と穿ち、亡霊王のHPを減少させる。

「前方範囲攻撃―シュガーはセクター！ノノは―」

”醒睡”でしょー！」

「ああ！頼んだぞー！」

薙ぎ払われた直剣を、シュガーが前方宙返りで避けて反撃の一撃。ノノは直剣の下を潜って一閃。

「はあああっー！」

間髪入れずにサツキが仕掛ける。

白の愛剣で片手戦棍カテゴリ二連撃技”フェアウエル”。続けて霊剣で短剣カテゴリ三連撃技”マーシフルマシナリー”、片手直剣カテゴリ七連撃技”デッドリー・シンズ”。

「スイッチ！」

亡霊王の反撃を捌いたサツキに代わり、ノノとアスナが前に出る。ノノが先行して亡霊王の攻撃をパリイして隙を作り、アスナが渾身の四連撃―カドラプル・ペインを放った。

「――ぬう」

一時間近く続いた戦闘でようやく亡霊王のHPバーは残り一本となった。初めこそ何度か危ない時があったが、一本目を削る頃にはパターンを把握して連携も取れていたので安定して戦えた。

「――なかなかやりおる。こんなに気分が高揚したのは”決戦”以来か」

亡霊王の目は幼い少年のように輝いていた。純粹に戦いを楽しんでいる剣士の目だ。

「やっぱり、アンタが霊^{レイヴァー}剣^{ヒーロー}を手にした英傑か」

「——左様。もはや、そう名乗る資格はないがな」

自虐的な笑みを浮かべる亡霊王を見て、アスナはずっと感じていた違和感の原因を見つけた。

ダークエルフの友人・キズメル同様、この亡霊王もNPCとは思えないほど人間味がある。キリトの考察では、あらかじめ決められたプログラムに従って行動するのではなく、自ら学習し判断する高度なAIなのではないかと。それにより、プレイヤーとの自然な会話も成立させているのではないか。

現実世界でもそういった分野に疎いアスナは、今の技術がどこまで進歩しているのか分からない。しかし、キリトの様子からS.A.O以外で例を見ない代物なのではないかと推測していた。

らしくない思考は亡霊王の声に断ち切られた。

「——あの時ほど、私の弱さと愚かさを呪ったことはない。勝てる、帰る、守る、助ける……虚言を吐くだけの我にできたのは、仲間の死を横目に敗走するのみ」

「なんだか、聞き入っちゃうわね」

「あくまで、これも設定なんですよね？」

「そういうバックストーリーに基づいてはいるだろうな。やたらリアルだけど」

「——」決戦で全てを失った我だが、一つだけ得たものがある」

亡霊王は左手を上へかざした。

「——それが《頂ノ王》との戦いに必要不可欠の力……世の理すら超越する《心意》だ」

鋭さの戻った目で亡霊王は見下ろした。

「パターン変わるぞ！注意！」

各々が武器を構えて素早く戦闘モードに入る。

アスナは先頭に立つ”剣豪”を見つめた。

霊剣による”あの現象”が度々起きていたのか、時折耐えるように顔を歪めているのをアスナは見逃していなかった。彼のためにも早期決着が望ましいが、焦ってはならないと自戒する。

再度攻撃を仕掛けようと走り出す直前、亡霊王が直剣を高々と掲げ

た。神々しい初見のライトエフェクトが輝く。

「――刮目せよ、我が《心意》を」

「くるぞ！回避――！」

刹那、サツキの声を掻き消す轟音と衝撃がアスナを襲った。視界が真っ白に染まり、硬い石床の感覚が消えた。全ての感覚が遠ざかる。立っているのか倒れているのかすら分からない。耳鳴りと込み上げる嘔吐感で意識が朦朧とする中、アスナは叫んだ。

「みん、な・・・大丈夫!?!」

その声が届いているのか、誰かが返事をしているのかすらアスナには認識できなかった。頭をフル回転させて考える。

初見だった亡霊王のソードスキル、いや《心意》がこの現象を引き起こしているのは間違いない。今この瞬間に全員が同じ状況になっているのならば、最悪の結末になってしまう。もしかしたら既に誰かが――

「いやっ・・・!」

感覚がない全身に動けと命令する。立て、剣を取れと心を燃やすが、魂と体の接続が切れているかのような錯覚に押し潰される。必死にもがきながらアスナは考える。

どれくらい経っただろう。

時間の経過すら忘れかけていたアスナは、突然自分の体を包んだ温かさに驚いた。陽光のように温かさが全身に伝わってくる。失われていた感覚が急速に戻っていく。

真っ白に染められた視界が晴れ、至近距離で映ったのはサツキの顔だった。体勢からして、抱きとめられているのを理解したアスナだったが、そんなことを咎める余裕はなかった。

「サツキ、くん・・・?」

魂が抜けてしまったような光のない瞳だった。まるで別人のような彼にアスナは困惑した。いつもの彼じゃない、それを確信させるモノが彼の右頬にあった。

水にインクを垂らしたような、漆黒の不気味な痣。SAOでは体にタトウーを入れることはできるが、この痣のようなデザインはない。それ以前に、痣はまるで生き物のように頬を蠢いているので、タトウーでないのは明らかだ。

状況が呑み込めないアスナが呆然としてしていると、ふいにサツキの目が閉じられた。そのまま力なく石床の上に倒れてしまう。

「サツキくん！しっかりして！」

体を揺さぶるが反応はない。そこで気付く。

サツキの隣に転がった二本の剣——レーヴァテインとカタルシスの刀身が漆黒に染まっていた。ソードスキル特有のそれよりも強く、かつ儚いライトエフェクトだ。アスナは今までに見たことがない。漆黒のライトエフェクトは徐々に弱まり、やがて消えた。二本の剣が本来の姿を取り戻す。

視線をサツキに戻すと、先ほどまで蠢いていた痣は消えていた。彼が規則正しい呼吸をしているのを確認し、気絶しているだけだと分かったアスナは少しだけ安堵する。

「アスナさん！」

背後から突然呼ばれてアスナは振り向く。そこには満身創痍の二人——シュガーとノノが互いに支え合いながら立っていた。

「二人とも！良かった、無事だったのね」

「なんとかね・・・サツキは？」

「大丈夫よ、ちよつと疲れただけみたい」

全員の無事を確認したところで、アスナはようやく気付いた。

「二人も、もしかしてさっきの光で？」

アスナの問いに二人は頷いた。

「はい。突然何も出来なくなってしまうて・・・」

「私も。シュガーに起こされるまでずっとね」

「・・・」

シュガーとノノも同じ状況に陥っていた。なら、二人に聞いても分からないだろう。

消えた亡霊王の行方は。

◆？

何も感じない、見えない

俺は、何をしてたんだっけ……

そうだ、レーヴァアインを……

……みんなは？

何が起こった？ 確か妙な光が……

死んだ、のか……？

いやだ。

まだ死ねない、死んでられない

やり残したことが、多すぎる

怒られてしまう

起きろ

まだ休む時じゃない

還るんだろう、あの世界へ

一度決めたら、途中で投げ出すな

何度でも、無様に這ってでも、そう誓っただろう

あの日から

思い出せ——

『じゃあ、私のとっておきを教えるね！』

この世界で最強だった剣士を——

◆？

亡霊王の言う《心意》とは、意思の力でシステムすら超越することを指している。これは生身の人間であるプレイヤーたちが成せる奇跡であって、AIである亡霊王に起こせるものではない。故に、彼の《心意》とは紛い物―システムを超越する力を、システムで再現しているだけなのだ。

だが紛い物とは言え、人間が起こす奇跡なのだからその力は強大だ。

亡霊王による《心意》の攻撃は、自身を中心とした半径三十メートルにも及ぶ広範囲なものだった。御室を丸々範囲に収める広さなので、回避は不可能。唯一の対処法は、掲げた直剣への攻撃でキャンセルさせることだが、初見で見破るのは困難だ。

範囲内にいる全員への瞬間衝撃波ダメージに加え、プレイヤーたちには知られていない”五感の全てが失われる”《ゼロ・ファイル零化現象》を強制的に引き起こす亡霊王の《心意》攻撃は、喰らってしまえば死を待つだけの反則級のものだ。事実、亡霊王は不格好に倒れる三人を順に仕留めようとしていた。

——そう、倒れていたのは三人だった。

視界の端で漆黒の軌跡が閃き、亡霊王は振り上げていた直剣を咄嗟に引き戻した。重い衝撃が立て続けに襲う。

「——な、ぬ」

想定外の攻撃に亡霊王は初めて混乱した。何十連にも及ぶ斬撃を見舞った攻撃者―”劍豪” サツキが音もなく石床に着地する。

「——おぬし」

亡霊王に向き直ったサツキの右頬に、不気味な漆黒の痣が浮かんでいた。両手に握った剣は漆黒のライトエフェクト、いや、心意特有の過剰光オバレイを発している。

憎しみも怒りも殺意も、何の感情もない虚ろな瞳で亡霊王を捉えた

サツキが、消えた。視認できない速度で漆黒の刀身が迫る。

「――その《心意》は」

片手直剣二連撃技” スネークバイト”

片手斧六連撃技” イザード・ヴェジテーション”

片手戦棍六連撃技” トランセンデンス”

細剣八連撃技” スター・スプラッシュ”

怒涛の超連撃が亡霊王を斬り、貫き、砕く。

「――これほど、とは」

大振りな反撃は紙一重に、しかし確実に躲される。途端にサツキの体を鮮やかなオレンジ色が包んだ。

片手直剣カテゴリOSS” ファントム・レジエナント”

追撃が重く、速くなる。HPの減少が止まらない。

人間に限りなく近い思考力と判断力を有する亡霊王は、すでに自らの敗北と消滅を悟っていた。最期に導き出したのは、サツキの《心意》の根源を探ることだった。覚醒の状況からしてそれは――

「――悪く思ふな」

亡霊王はサツキから視線を外し、力なく倒れるアスナに直剣を構えた。サツキの気配がわずかに揺れる。そのまま直剣を勢いよく投げ放つ。

一瞬だった。

世界が反転した。

天地が逆さになり浮遊感、そして落ちて行く。

目前を漆黒の軌跡が通り抜ける。

放たれた直剣が無残に砕かれて空中で爆散した。

衝撃とともに石床が視界に映る。

離れた所でアスナを抱きとめるサツキが見える。

「――やはり」

全てが白に染まる中、亡霊王は確信した。

サツキはあの一瞬で頸を跳ね飛ばし、アスナに迫る直剣を破壊し助けた。

ありえないことだ。

ステータスで定められた絶対的限界を超えた速度。

システムを超越した力―《心意》

「―仲間を守る。それがそなたの《心意》か」

満足気に笑った亡霊王は、その体を爆散させた。

〈サツキside〉

雲一つない快晴の下、俺は柔らかな芝に寝転がってチヨウチヨを数えていた。

人通りの多い転移門広場が近いこともあって、行き交う人々が遠慮のない視線を照射してくる。理由は簡単。俺の傍らに置かれた^{レーヴァーティン}霊 剣の圧倒的存在感に無意識のうちに引き寄せられているのだ。

レーヴァーティンをゲットしたのは三日前らしい。らしい、というのは戦闘の途中から記憶がないからだ。最後に見たのは亡霊王が放った神々しい光で、次に目が覚めたのはギルドホームの自室だった。副団長の話では、亡霊王が消滅したあと結晶無効化が解除されたらしく、気絶したままの俺を連れて帰還したと言う。その後丸一日寝ていたらしい。とても信じられないが、レベルが一つ上がっていたので亡霊王が倒されたことに間違いない。意識がない中で戦ったのか、単に憶えていないだけなのかは分からないが結果オーライというこ
とで片付けた。

そして昨日は祝勝会と称して三人にアホみたいに高級レストランのフルコースを奢らされた。あのダンジョンの難易度を考慮すれば安すぎる報酬だと思っただが、今後の活躍を約束して免じてもらった。その祝勝会の際、副団長に親友である鍛冶屋を紹介してもらうことになり、その待ち合わせで俺はここにいる。

予定時間の五分前に副団長は現れた。

「こんにちは、サツキくん」

「おっす・・・」

起き上がって挨拶を返した俺は固まった。副団長の装いがいつもと違ったからだ。あくまで今日は私用だからか、見慣れた赤と白の騎士服ではなく、何だかキメてきているようなオシヤレな格好だった。思わず見とれていると、副団長はぷいと横を向いた。

「・・・何見てるの」

「いや、なんでもない」

立ち上がったって仕切り直す。

「んじや、行こうか。案内よろしく」

「うん」

すれ違う人の視線が痛い。素知らぬ顔を取り繕う。俺の少し前を歩く副団長は、心做しか楽しそう。親友に会いに行くのだから当然だろうが、出会ったばかりの頃からは想像もできなかった姿だ。霊剣のダンジョンでの一件以来距離が縮まった気がする。

そんなことを考えながら移動すること数分。

着いたのは巨大な水車を備えた一件の職人用プレイヤーハウスだった。店頭立つNPCの歓迎を受けて俺たちは中に入った。

「やつほーリーズ！」

扉を開けるや否や、今までに聞いた事のないくらい明るく大きい声を発する副団長に驚いた。

店内はきちんと整理整頓がされており、ずらつと並んだ棚には中々の業物が掛けられている。プレイヤーの鍛冶屋を訪れるのが初めての俺から見ても、かなりの腕前だと推測できる。

「いらつしやい、アスナ」

奥から現れた店主と思わしき女の子が笑顔で出迎えてくれた。ピンク色の髪に鍛冶屋とは思えないウェイトレスのような可愛らしいユニフォーム。ここまでなら、あの副団長の親友と聞いても納得できた。だが、幼さが残る顔と華奢な体に不釣り合いなゴツイハンマーを軽々と肩に乗せ、俺に剣呑を込めた眼光を送っているのだ。

正直に言おう。なんだコイツは、と思った。

副団長は相変わらずの笑顔で親友に話しかけた。

「あ、もしかして作業中だった？」

まあ見ればそう思うだろう。

「んーん、あたしの親友が初めて男を連れて来るって言うから、変なヤツだったらぶっ飛ばしてやろうと思って」

もう一度言おう。なんだコイツは。

「なっ、別にそんなのじゃないよ！」

「ふくん？」

親友さんは俺の前まで来るとじっと見つめてきた。

「な、なにか？」

「・・・」

数秒間膠着状態が続き、いたたまれなくなってきた頃に親友さんは表情を緩めて俺の肩をバシバシ叩いた。

「うんうん、良かった。変な男に引っかけたんじゃないやなくて。アンタなら大丈夫そうね」

「ど、どうも・・・？」

よく分からないが評価は良いみたいだ。副団長が間に入って場を改める。

「えーと、彼女が私の親友で鍛冶屋のリズね。で、彼がウチのメンバーの”剣豪”くん」

「正式名称で紹介してくれ。サツキです」

「へー！アンタが噂の新人ね。あたしはこの店主のリズベット、よろしくね！敬語なんて使わなくて良いし、気軽にリズって呼んで」

「わ、わかった。よろしく」

差し出された手を握り返す。さつきと真逆の友好的な態度に混乱するが、これが彼女の本心なのは見てわかる。前言撤回、めっちゃ良い人だ。

「それで、今日はメンテだっけ？」

「うん、サツキくんのね」

「ああ、頼む」

ストレージからカタルシスを実体化させてリズに手渡す。見ただけでわかる消耗ぶりに、リズは呆れた声を漏らした。

「どうやったらかんなボロボロになるのよ」

「ちよっと無茶したからなあ」

「ちよっと、じゃないでしょう」

言われてみればそうかもしれない。

「じゃあ研磨するから待ってて」

そう言つてリズは奥の工房へと引つ込んで行つた。作業を見たいとも思つたが、邪魔をしてはいけないと自制して大人しく店内に並ぶ武器を眺める。

そして、それを見つけた。

カウンター横の壁に吊るされた一振の片手剣。

引き寄せられるように手を伸ばして壁から外すと、見た目からは想像できない重量が加わる。カタルシスやデイメンションより重い。刀身を抜き出すと、ほとんど漆黒に近い色の肉厚な刃がざらりと光る。かなりの業物―《魔剣》であることは明らかだ。

「スゴい……」

俺の感嘆の呟きとは反対に、副団長がやや暗い声で言った。

「……それ、キリトくんのなんだ」

「『黒の剣士』の?」

「うん。五十層ボスのLAボーナスみたい……リズが認めた人に渡してほしいって」

「なんなら使つてみる?」

工房から戻つて来たリズが、新品同様の輝きを取り戻したカタルシスを手に言った。

「いや、俺はそんな器じゃないよ」

「あら、随分謙虚ね」

「そこが売りだからな。ありがとう」

カタルシスを受け取つてストレージに格納し、お代の百コル銀貨を払う。毎度、と笑つたリズの視線が俺の肩に向いた。

「ねえ、それがレーヴァー||テイン?見せてよ」

興味津々のリズに答える。

「ああ、落とすなよ」

鞘ごとリズに手渡すと、彼女はその流麗さに圧倒されつつ慎重に手に取つた。驚きから悔しそうに表情が変化する。

「悔しいけど、今のあたしにはこれ以上のモノは作れないわね」

「今はなき魔法の力で作つたらしいからな」

「そう……って何これ、強化もメンテもできないんだけど」

可視化されたリズのウインドウを覗くと、鍛冶屋スキルのメニューにあるはずの数種類の項目が全て消えていた。

「エラーってわけじゃなさそうだな」

「熟練度が足りてないとか？」

「それならメツセージが表示されるわ」

「魔法で作られた剣だから、普通の方法じゃ扱えないみたいな設定かもしれない」

無茶苦茶な仮説だがそれしかない。

「ま、なにせよそんなスゴい剣を持つてんだから、じゃんじゃん攻略していったよね！」

「が、頑張ります」

一時間ほど雑談をした後、リズとフレンド登録をしてその日は解散となった。

Ep. 23 アレンジメント

〈サツキside〉

「サツキさん、この後お時間ありますか？」

「どうした？改まって」

六十二層ボス戦の後、リズにメンテを頼もうかと考えていた俺をシユガーが引き止めた。誰もいないギルド本部の前庭の木陰まで移動すると、シユガーは内緒話をする子供のように言った。

「実は、来週ノちゃんの誕生日なんですよ」

「そうなのか、んじやパーティーやんないとな」

「はい、それで何かプレゼントを準備したいと思うんですが……ご協力いただけないでしょうか？」

「おう、いいぜ。何か候補はあるのか？」

俺の快諾を喜んだシユガーは一枚の紙を差し出してきた。独特なフォントで羅列されているのは、石やら布やら花やらの素材アイテムだった。首を傾げる俺にシユガーが説明する。

「六十一層主街区セルムブルグのNPCが、特殊効果付きのアクセサリを作ってくれるそうなんです。これが必要な素材なんですが……見たことのないものばかりで」

「んんん、確かに」

元から素材アイテムに疎い俺に分かるはずもなく、名前からどんなものかを推測するのも難しい。

「聞き込みをしようにも、恥ずかしながら僕は知り合いが少ないので……サツキさんのお知り合いで詳しくそうな方はいませんか？」

「知り合いってもなあ……」

KOB以外の攻略組ともだいぶ交流が深まったと思うが、気兼ねなく話ができそうなのは数少ない。今ぱっと思いつくのは小柄な情報屋と世話焼きのカタナ使いくらいだ。

「まあ、金がかかるけど信頼できる情報屋に聞くのが確実だろうな」

「まさか《鼠》って方ですか!？」

「そ、そうだけど」

予想外の食い付きに驚く。

「有名な方ですよ、僕会ったことないんです」

「へえ、意外だな。じゃあ一つアドバイス、アイツと話す時は気を付けろよ。知らないうちに500コルくらいの情報を取られるからな」

言いながらアルゴへのフレンドメッセージを打ち始める。いつか聞いた噂話に、シユガーは真面目な様子で聞き返した。

「サツキさんも取られたんですか？」

「俺は多分10万コル分くらい取られてるよ」

自虐とともに送信ボタンをタップした。

〈ノ side〉

肉薄する歪な拳をギリギリで躲し、腰の鞘から愛刀を抜き去って一閃を見舞う。真紅の輝きをまとった刀身が空ぶった敵の腕を捉えて斬り飛ばした。そのまま大きく後退して距離を取る。

「ガアア・・・アアア」

呻き声を上げるのは、HPを黄色に変化させた人型モンスター《アイアン・パウンド》。アインクラッド第三十二層の闘技場跡エリアに一日一体だけ出現するレアモンスターだ。と言っても、最前線で戦う私にとっては脅威でない相手である。

ボス戦の後わざわざ戦いに来たのには理由がある。

さつきも言った通り、一日一体しか湧かないのでチャンスを逃したくないから。

もう一つは・・・誰にも言えない。

守られるだけの弱虫だった私を、攻略組にまでのし上がらせた醜く歪んだ感情など誰に言えよう。その根源となった忌まわしいあの日を忘れたことはない。けれど、少しでも懺悔になればと、来るべき日に備えてこうして地道な努力を積み重ねている。

「……らしくないわね、私ったら」

いつもなら無心で機械的に戦闘をこなすのに、今日はボス戦の疲れもあってか余計なことを考えてしまう。パウンドが残った片方の腕を構えるのを見て頭を切り替える。

構えと輝くエフェクトから技を予測した私は愛刀を鞘に収めた。居合いの構えのままタイミングを待つ。

「ギエエアアッ!!」

パウンドは咆哮とともに突進してきた。見計らった射程内に入ったところで愛刀を抜く。リズが鍛えた渾身の一振であるカタナ《霞桜》が、システムアシストと私の動きで極限まで加速する。流星にも似た一撃がパウンドの腕を肩から斬り飛ばした。

そこで止まらない。

「——ッ！」

続くシステムアシストに逆らわず動きをリンクさせ、超高速の九連撃を放つ。音すらも置き去りにした連撃は、半分ほどだったパウンドのHPを呆気なく全損させた。

爆散するポリゴン片に目もくれず、私は霞桜を切り払って鞘に収めた。右手に残った連撃の感覚を噛み締めながら、私はすっかり沈みかけた夕陽を見つめる。その美しさに思わず呟いた。

「……まだまだ、もっと強くならないと」

焼けるような夕陽は、全てが始まった日、全てを失った日のそれとよく似ていた。

〈サツキside〉

「初めまして 《鼠》さん！僕は血盟騎士団のシユガーです！」

「噂には聞いてるぞ、偵察隊長サン。オレっちはアルゴ、よろしくナ」
すっかり闇に覆われた大都市ギルトシユタイン、その一角で挨拶を交わす二人を俺は欠伸を我慢しながら見届けた。

メッセージの送信からものの数秒で返信は来たものの、他に用事が

あつたらしく会えるまで時間がかかってしまった。別にメッセージだけで済ませてしまつてもよかつたのだが、丁度アルゴも俺に依頼があつたようなので直接会うことにした。シユガーも会いたいと言つていたし一石二鳥だろう。

「それデ、サー坊が聞きたいことつてなンダ？」

「ああ、何個かの素材アイテムの入手方法だな。最前線近くのレシピだと思ふんだけど、頼めるか？」

「これです」

シユガーが例のメモを渡す。受け取つたアルゴはそれを一瞥してから頷いた。

「お易い御用ダネ。おねーさんに任せておきな。報酬は……こつちの依頼とでチャラにしとくヨ」

ニシシ、と笑う情報屋に問う。

「随分と気前がいいな。何か裏があるのか？」

「おつ、察しがいいなサー坊」

「面白い話には裏がある、つてやつだ」

「えつ、本当に何かあるんですか？」

シユガーは相変わらず純粹だった。そんな彼をすっかり気に入つた様子のアルゴは一枚の半用紙を取り出した。一番上に見覚えのあるギルドマークが表記されている。

「なにこれ？」

「へ風林火山がクエストの助っ人を探してるんだガ、なかなか見つからなくてナ。ボス戦で顔は合せてるダロ？手伝つてやつてクレ」

「どんなクエストなんですか？」

「よくあるスローター虐殺系ダ。五十三層のクエなんだガ、とにかく数が多くて大変だから人手を増やそうつてわけダナ。ちゃんと報酬は用意してるみたいだから心配するナ」

「ほーん、じゃあやつてみるか。風林火山に連絡入れておいてくれ」

さらりと言つた俺をアルゴと、さらにシユガーも「え？」みたいな顔で見た。

「……どした？」

「・・・サー坊、クラインとフレンド登録してないノカ？」

「してないよ」

「よく話していたので、てっきり登録してるのかと思ってました」

呆れた感じのアルゴがたったかメッセージを打ち始めた。返事はあとで連絡することにしてアルゴと別れ、俺とシュガーは適当な酒場で一杯やってからそれぞれのねぐらに戻った。

アルゴからメッセージが来たのは翌日の昼前のことだった。書かれていた集合場所と時間をシュガーにも伝え、簡単な準備を終えた俺は時間に余裕を持ってねぐらを後にした。

Ep. 24 武士と商人戦士

〈サツキside〉

アルゲードでシュガーと合流した俺は、怪しげな屋台で買った串焼き肉を片手に指定された合流場所に向かった。昼時であつて人通りも多く賑わっている広場の一角、そこに武士風のものに統一した集団―ギルド〈風林火山〉の面々を見つけた。食べ終えて残った串が消えるのを見届けてから、俺はギルドリーダーであるクラインに声をかけた。

「おつす、クライン」

「おお、サツキ！昨日ぶりだな」

手を上げて応えたクラインに同じように応える。

「ほんと、何でボス戦でもないのにお前と顔を合わせないといけないんだか」

「ひつでえヤツだな！」

「あはは・・・」

冗談混じりの挨拶を済ませて、俺はさっそく本題に入った。

「てか、わざわざアルゴに依頼しなくても攻略組の連中に声かければよかつただろ」

「いやあ、攻略組つてもまだまだ新参者のオレたちがお願いするのも気が引けてよ」

「変なところは真面目なんだな」

「遠慮しないでくださいよ！あ、僕はシュガーです！ちゃんと話すのは初めてですよね」

「おう、アンタの偵察のおかげで本戦がかなり楽だぜ！ありがとな」
「いえ！お役に立ててよかつたです！」

アルゴ同様がっちり握手を交わす二人に既視感を覚える。俺の時もそうだったがシュガーの人懐っこさ、コミュ力はスゴいと思う。現実世界でも友人が多いんだろうな、なんて考えていた俺の肩を、背後から誰かが豪快に叩いた。

「痛っ!?!」

「どうやらオレが最後みたいだな」

豊かな張りのあるバリトンに振り返ると、俺を見下ろす巨漢の男と目が合った。背中に大振りの両手斧を軽々と提げたその男を、俺はやはり知っていた。たしか五十五層、六十層のボス戦に参加していた攻略組唯一の雑貨屋。名前までは覚えていないが、最近アルゲードに店を構えたと風の噂で聞いた気がする。

「よおエギル!店は大丈夫か?」

「おう、おかげさまで繁盛してるぜ」

豪快に笑ったエギルという男は、俺とシュガーに向き直ると言った。

「お前らさんと話すのは初めてだな。噂には聞いてるぜ、K O Bの剣豪と偵察隊長。俺はエギル、メインは雑貨屋だが、戦力が足りない時はボス戦に参加している。今回はレベル上げを兼ねての参加だ、よろしくな」

「よ、よろしく」

「よろしくお願いします!」

差し出されたごつい手に応えながら、本当に雑貨屋?なんて失礼な考えが頭をよぎる。時は来たと言わんばかりにクラインが仕切り始めた。

「うっし!メンツは揃ったな。三人も来てくれて嬉しいぜ!これも俺の人望が厚いおかげだな」

「それはない!」

「あはは・・・」

初対面でハモる辺り、エギルとは気が合いそうだ。ガツツリ否定されたのに落ち込む様子もなく、クラインは意気揚揚に続けた。

「クエストは至ってシンプル!湧きまくる植物型モンスターを倒して倒して倒しまくる!以上!」

「雑だなあ」

「風林火山の皆さんでも、処理しきれない程の数なんですよね」

「そうなんだよ!一個体の強さはそうでもないんだが、少しでも処理

が遅れると支えきれないんだ。でも、このメンツならいけるはずだぜ！」

いつになくハイテンションになったクラインを筆頭に、風林火山＋α？の臨時パーティーは目的地のフィールドへ向かい始めた。

◆？

〈ノノside〉

ボス戦の翌日もあつて昼過ぎに起床した私は、寝起きの頭で書物室に足を運んだ。他の団員は滅多に来ることがないので一人になりたい時によく訪れるのだが、今日は珍しく先客の姿があつた。

「あれ、珍しいねアスナさん」

「おはようーって、もうお昼過ぎてるけどね」

そう笑うアスナさんは同性の私でも惚れてしまうくらいに美しい。向かいの席に座った私の目は、自然とアスナさんが開いていた本に引き寄せられた。

「何の本ですか？」

「これ？シユガーくんにおススメされた本だよ。覚えてない？新人挨拶の時に言つてたの」

「・・・ああ、言つてましたね」

遠い昔に感じるギルド加入時のことを思い出す。

新興にして多大な注目を浴びていた血盟騎士団からの勧誘を、当時の私は唯の通過点だと思つていた。同じ団員でも馴れ合うつもりがなかった私は、新人挨拶の時も緊張などしておらず戦うことしか考えていなかった。

その時一緒に加入したもう一人がシユガーだった。

別室で待機中、緊張から石化でも喰らつたかのようにガチガチになったシユガーを今でも鮮明に覚えている。何度も小声で挨拶の練習を繰り返している彼が気になりつつも無関心を装つていた。だから彼が突然ぎこちなく話しかけて来た時は驚いたものだ。

『あの、君も新人さんだよね・・・？』

『・・・え、そうですけど』

『よかったあ、僕だけじゃなくて。あ、僕はシュガーです！よろしくね！』

『は、はあ・・・』

それからの彼は今までの緊張が嘘のようにアレコレと話し始めた。そのままの勢いで新人挨拶も難なく、と言うか喋り過ぎなくらいだった。その中で彼はSAOプレイヤーでは珍しい読書家であると語っていたのだ。SAOに無数に存在する本の中でも名作だと豪語する作品が、今まさにアスナさんが手に取っているものだった。

「面白いですか？」

「うん。まだ半分も読んでいないけど、なかなか面白いわ」

読書なんてからつきしだった私は読もうとは思わない。後で簡単な内容だけでも教えてもらおうかと考えて気付く。

「あれ、そういえば休みなのにシュガーが居ないなんて珍しい」

「シュガーくんなら、サツキさんとクエストに行ったみたいよ」

「へえ・・・仲良いのね」

彼がああの異端児とどこで何をしているのか、少しだけ気になった。

◆？

〈サツキside〉

「東方向から新手、十五！」

「南からも十は来てるぜ！」

「やべっ！裏から三匹来てる！」

「両隣の奴らのカバー忘れるな！マズいと思ったらすぐ呼べ！」

「了解！」

五十三層の薄暗い密林エリアでの戦闘は、俺の想像を大きく超える大混戦になっていた。

四方から絶え間なく湧き続ける身の丈二メートル弱の植物人間は、決して強敵と言える強さではない。三連撃以上のソードスキル、単発でも急所を捉えれば一瞬で屠れるが、ステータスの弱さを補うかのように数で圧倒してくる。ソードスキルのタイミングを見誤れば、技後の硬直時間でリンチにされるのは目に見えている。

しかし、俺たちはその限りではない。

「サツキさん！西方向準備おつけーです！」

「今行く——スイツチ！」

シュガーの前に身を躍らせ、二本の剣を縦横無尽に振るう。十三連携技“ドウム・フェイム”が、いい具合に集められた十一体を跡形もなく爆散させる。

「——オラアッ！」

後方で野太い雄叫びとともに派手なエフェクトが輝いた。次いで地面を穿つ衝撃と強烈な風。両手斧カテゴリー二連撃技“アナイアレーション”。技後のわずかな硬直を課せられたエギルをターゲットに、三匹の新手が触手による攻撃モーションに入った。

「——へっ、させるかよ！」

クラインが三連撃技“帚木”を一撃ずつ命中させて新手を仕留める。キメ顔を披露するクラインだが、すでに背後に回った一体にタゲられてることに気付いていない。

「——はあっ！」

さすがの反応速度でシュガーが援護に入った。突進技“サージ”が正確に急所を捉える。

メンバー全員が攻略組であり戦闘経験が豊富なおかげだろう。戦闘開始から約一時間もの間、互いにカバーし合いながら最大火力かつ最大効率の戦闘を維持できている。倒した数は千に迫るだろうが、一向に湧きが収まる気配はない。だが、俺はもう少して状況が大きく変わるだろうと推測していた。

風林火山が受領したクエスト《邪な森の王》は、森エルフの領土を占領した“悪しき王”を倒すという内容だ。王を倒す過程で、大量に

生み出された下僕を倒さないといけなく——依頼主のエルフ情報——その数は千体ほどらしい。故に、あと少しでメインターゲットである“王”が現れるはずだ。

「自爆型が東より二体接近中！」

「北にも三体！」

風林火山のメンバー・カルーとオブトラが叫ぶ。自爆型とはその名の通り、一直線にプレイヤーまで近付いて来て近距離で爆発するタイプだ。通常タイプよりも厄介かつ危険なので優先して排除する必要がある。

「シユガー！」

「任せてくださいー！」

シユガーが東の二体へ向かい、他のメンツは通常タイプのタゲを素早く取る。全員が俺の意図を汲んでくれた。俺も彼らに伝えるべく三体の自爆型の処理に向かう。

通常タイプと比べて明らかに肥大している頭部が特徴の自爆型は、ある距離まで詰めると頭部を勢いよく弾け飛ばす。その中から種子のような黒い粒を無数に高速射出する広範囲攻撃を行うのだ。弾けさせずに倒す方法は一つ。

ダツシユで先頭の一体に瞬間移動じみた勢いで肉薄する。すかさず最速のOSS“デッドリー・ダンス”で頸を捉え、斬り飛ばす。頭部は弾けることなく落下しポリゴンと化す。頭部を傷付けないように一撃で屠れば、自爆型でも脅威ではない。そのまま後続の二体も同様に“イーグレット”で瞬殺する。

「いいぞー！」

「こつちも終わりましたー！」

「ナイスだぜ二人とも！」

賞賛に応えて元の陣形に戻ろうとした時だった。

モンスターの、フィールドの雰囲気が変わった。

一際派手なモンスターの出現エフェクトが周囲を照らした。光は徐々に形を成していく。歪で巨大だ。もはや間違いない。

「ボスだー！」

「へっ！ようやくお出ましかあ！」

枯れた巨木がそのまま巨人型モンスターとなったようなボス《レーシエン》の頭上に長大なHPバーが表示される。不気味なうめき声を響かせたレーシエンが両腕を大きく振り上げ、それが合図となった。

正面から俺とシュガーがレーシエンに斬り掛かる。他のメンツは残った取り巻きたちのタゲを引き付けた。

「まずはパターンと弱点を把握する！」

「わかりました！」

走りながら右手のレーヴァルティンを中段に構えて突進技“リーバー”を発動させる。シュガーは二連撃技“デブリス・フロウ”の構え。鮮やかなエフェクトが刀身をおおった瞬間、レーシエンが動いた。

「フウウルルルウウウ・・・」

両腕を自らの足下に突き立て、そのまま動かずに沈黙した。一見隙だらけに見えるが、今までの戦闘経験から培った第六感が警鐘を鳴らす。俺はシュガーと瞬時にアイコンタクトを交わした。彼も何かを感じ取ったらしく、その赤い瞳から攻撃を中止するという意思が伝わって来る。俺は“リーバー”をキャンセルしてレーシエンを警戒しつつ、シュガーの援護に回った。

そう、前方のレーシエンを見ていたせいで足下から迫る脅威に気が付かなかった。

「ッ!?なに——」

「サツキき——」

地面が割れる音とともに真下から急速に伸びてきた木の根が足、胴、腕、首に巻き付いた。動きが完全に封じられるだけでなく、体がミシミシと締め付けられて俺のHPはわずかだが確実に減少していく。

「なん、だ、これ・・・!」

「う、動けません!」

シュガーも木の根に囚われてしまったようだ。ソードスキルの構えのまま固まっている。

「おい！どうなってるんだ!？」

「二人とも大丈夫か!？」

後方から聞こえたクラインとエギルの声に、俺は出せうる限りの大声を返した。

「身動きが取れない！この根を切れるか!？」

返ってきたのは切羽詰まった声だった。

「ダメだ！雑魚共が多すぎて手が回らねえ!！」

「サツキさん！ボスが——」

レーシエンが地面から腕を引き抜いてこちらに歩いて来る。随分ゆっくりした速度だが、俺にはそれが死へのカウントダウンに見えた。

思考を限界まで加速させて打開策を探す。

ボスを、フィールドを、周囲の状況を、巻き付いた木の根をよく見る。

何か。

何かないのか——!？」

脳神経が焼ききれんばかりに極限化された視界。

それ故か。

群がる数十体の取り巻きと、レーシエンの両腕、俺とシユガーを拘束していた根を一瞬で斬り捨てた斬撃の軌跡を捉えることができたのは。

拘束から解放されて尻もちをついた俺は、眼前に現れたその剣士を見上げた。

「・・・危ない、ところ・・・だったな・・・」

鬼を模した仮面を被った剣士は、俺を見下ろしながら静かに、途切れ途切れの声で言った。

◆?◆?◆?

——動け動け動け動け動け!!

嵐のように吹き荒れる激情に反し、石化してしまったかのように固まった両足に少年は何度も命令する。しかし、一向に動く気配はない。その間も最悪の結末——自分の命よりも何よりも大切な人が、目の前で消滅する未来が近付いてくる。

少年——血盟騎士団二軍所属片手直剣使い・ノーチラスは、自分への失望と怒り、そして絶望に染まった絶叫をあげた。

「ユナ——ッ!」

二十を超えるモンスターが、自分よりも軽装な少女、ユナに群がっていく様をノーチラスは見ていることしか出来なかった。彼女の姿が群れに埋もれていく。このままでは数秒も経たないうちに、鮮やかで儂いポリゴン片が舞ってしまう——

「ああああああああ! やめろおおおお!!」

ノーチラスは自分の弱さを呪った。

大切な人が危なくても、足が竦んで動けない自分が憎くて仕方がなかった。

この世界に囚われたと知った時よりも深い絶望に呑まれたノーチラス。
全身の感覚が薄れる。あらゆる色が褪せ、音が遠ざかる。

瞬間。

モノクロームに染まった彼の視界を、漆黒の軌跡が横一線に斬り裂いた。

「——え？」

前方でユナを囲っていた群れの半数以上が動きを止め、一瞬のタイムラグの後ポリゴンとなって爆散した。ノーチラス同様、何が起こったか分からない様子のユナが見えた。ノーチラスがわずかな安堵を感じていると、彼の後ろから凜とした声が響いた。

「私は『歌チャン』を助けるから、君はボスを手伝ってあげて！」

「あいよー！」

未だ固まったままのノーチラスの横を通り過ぎる黒の剣士。フードを目深に被っているが、わずかに覗く左頬に不気味な痣が見えた。剣士は瞬間移動してみた速度で残った数体に接近すると、右手に握った漆黒の片手剣を見舞った。初めて見るその技に、ノーチラスは状況を忘れて魅入った。瞬く間の連撃で残党を処理した剣士が、剣を背中の鞘に落とし込むと同時に、ノーチラスの後方で一際派手なエフェクトが爆ぜた。Congratulationの文字がボス戦の終わりを告げる。

その瞬間、ノーチラスの足はさつきまでが嘘のように動くようになつた。その足でユナの元へ駆け寄る。

「ユナー！」

「ノーくん！」

HPバーを真っ赤に染めて防具も損傷が激しい姿を見て、ノーチラスは心を痛めた。互いに言いたいことが頭に浮かぶが、今は視線を二人の剣士に向ける。

「終わったぞ」

「おつかれー！」

ハイタッチを交わす二人は、最前線であることを忘れていたかのようになつた。だが決して油断しているわけではないことが分かる。二人の強さは、今まさに四十層のボス戦に赴いている攻略組たちに匹敵するだろう。黒の剣士が思い出したように全員の安否確認をし、最後にユナの手を握った。

「あなたの素敵な歌は、これからも沢山の人を救うものになる。世界最強の私が保証するから、あなたは自分の信じる道を真っ直ぐ進ん

で」

ユナが黙って頷くと、黒の剣士は満足気に笑った。そのまま手を振ってダンジョンの外へ歩いて行く。ユナの助けに入った黒の剣士の仲間——こちらでもフードを目深に被っていて顔は見えない——も、後を追って去って行った。背中に提げた純白の片手剣が見えなくなるまで、ノーチラスはその姿を見続けた。

第四十層ボス戦と同時刻に行われた救出作戦は、危ういながらも犠牲者を出さずに完遂された。

指揮を執ったノーチラスと、危険を顧みず助けに入ったユナは多くの人から称えられたが、二人は何も言わずに姿を消した。

二人が再び姿を現すのは、この日から約一年後のことになる。

◆?◆?◆?

〈サツキside〉

目の前に現れた剣士を、俺は呆然と見つめた。

鬼を模した仮面を被っていて顔は見えない。少し赤みがかった長い黒髪を後ろで一つに束ねて下げている。身につけている着物と袴のような防具は初めて見るものだ。手には大振りの刀。クラインとはまた違った“侍”スタイルの剣士は、俺から視線を外すと両腕を再生させたレーシエンを見据えた。

「・・・斬ったところで、すぐに、再生・・・するのだ・・・核を、心の臓を討たねば・・・攻撃は、無意味・・・」

「心の臓・・・?あのデカいやツか?」

レーシエンの体の中央にある膨らんだ部位を指しながら剣士に言った。

「左様・・・アレを破壊すれば、容易く葬れる」

「・・・なるほどね」

色々聞きたいことはあるが、今は戦いに集中しなければならない。立ち上がって愛剣を構え直し、俺は剣士の右側、シユガーが左側に並ぶ。

「下僕は、他の者に、任せ・・・私たちが・・・ヤツを、叩く・・・良いな・・・?」

「はい!」

「ああ——クライン! エギル!」

「おうよ! こっちは任せな!」

「派手に暴れてこい!」

仲間たちの頼もしい声を受け、俺とシユガーは先行した剣士を追従する。攻略組でもトップクラスの俺たちと遜色ない速度で駆ける剣士は、やはりかなりの実力者だろう。

「シイイイッ!」

レーシエンが咆哮とともに、今度は両腕を真っ直ぐこちらに伸ばしてきた。仮面の剣士は疾走しながら刀を構えた。

目にも止まらぬ神速の連撃が、レーシエンの両腕を細切りにする。ソードスキルではない。無防備になったレーシエンの正面に俺とシユガーが身を躍らせる。

「はあああつ!」

俺の“リニア”とシユガーの三連撃突き技“テフラ・ディーセント”が大きく膨らんだレーシエンの胸部に迫る。だが剣先は胸部を守るように伸びてきた木の壁に阻まれた。

「チッ!」

舌打ちし、背後から迫って来た小枝らをカタルシスで斬り伏せる。そのまま追撃を躲しつつ一度後退した。

「厄介ですね」

「ああ、めんどくさいタイプだな」

「・・・」

即座に修復を終えたレーシエンがゆっくり近付いて来る。仮面の

剣士が前に出て言った。

「・・・私が、斬り込む・・・短期決戦だ・・・お前たちは、私の動きに、ついてこい・・・できるか・・・？」

仮面越しに向けられた試すような視線に答える。

「当然！」

「合わせますよ！」

「・・・うむ・・・では、行くぞ」

再び走り出した俺たちを見て、レーシエンは両腕を地面に突き刺した。言葉を交わさずとも、俺たちはそれぞれ散開して真下からの拘束攻撃を避ける。

「・・・ッ」

仮面の剣士が仕掛ける。

四方から伸びる幹を処理しつつレーシエンに接近していく。無駄がない最高効率の攻撃だ。遅れまいと俺も二本の剣を振るって後を追う。どちらからともなく互いの背中を守る形になり、あれほど鬱陶しかったレーシエンの攻撃に難なく対処できる。

結局、危ない場面は最初の拘束攻撃を喰らった時だった。そもそもレベル的にも余裕だったので、戦い方が分かってしまえば手こずる相手でもなかった。

だが戦闘の間、一つ気付いたことがある。

仮面の剣士は、一度もソードスキルを使わないのだ。余裕ぶっているのではなく、使わなくても問題ないほど圧倒的に強い。

怖いくらい安定した戦況の中、さらに加速していく剣士に俺は動きを必死で合わせていった。

◆？

・・・まだ、ついてくる・・・私の動きに・・・

久方ぶりに気分が高揚する。

流麗、練り上げ、極められた”剣豪”の剣戟に私は目を見張った。
想像以上、ここまでとは。

さすが、あの方が選別した者だ。

さすが、あの女が遺した男だ。

仮面の下で、私は笑う。

木の魔物は、息絶える寸前だった。

〈サツキside〉

大量のポリゴン片となってレーシエンが爆散するのを見届け、クエ
ストクリアを知らせる表示を一瞥した俺は視線を仮面の剣士に向け
た。ゆつくりと様になった動作で腰に提げた鞘に刀を収めた剣士は、
再び途切れ途切れの声を発した。

「・・・流石だな、攻略者を・・・」 剣豪 を名乗るだけは、ある」

「そりやどうも」

レイトアーティン カタルシス
霊 剣と白の魔剣を鞘に落とし込んで言う。激戦の余熱が冷めてい
くのを感じながら、俺は仮面の剣士に疑問を問いかける。

「あんたもかなりの実力者だけど、攻略組じゃないよな」

「・・・如何にも」

「入る気はないのか？」

「・・・そう、だな・・・その気は、ない」

「なぜですか？」

シユガーが問う。

「・・・私は・・・」 死 が、怖い・・・何よりも」

「誰だつてそうだろう」

「・・・それに、私は・・・満足、しているのだ、この世界に・・・お
前たちは、どうなのだ・・・まだ、還りたいと、願うか？・・・あち
らの世界に」

あちらの世界——本当の俺たちがいる、現実世界。

命のやり取りとは縁遠い、平凡な日常。

そう、何もない平凡な日々だった。

「・・・私は、この世界で剣技を、極めたい・・・未だかつて、誰も到
達したことのない・・・そんな領域を、追い求めている・・・」

「随分なエゴイズムだな」

現代人とは思えない考えだった。だが、少しだけ分かる気がする。
かつての俺も、そうだったから。

「還りたくないってことですか？」

一瞬だけ迷う素振りを見せたが、剣士は肯定した。
戦後処理を終えたエギルたちが合流して来る。

「お疲れさん、みんな無事だな」

「助かったぜ、兄ちゃん！」

クラインが差し出した手を、意外なことに仮面の剣士は握り返した。笑みを深めたクラインが言う。

「おめえの名前は？なんていうんだ？」

「……ルナ」

「ルナ、ルナルナ……うっし、覚えてぜ！」

そこから風鈴火山メンバー、エギルにシュガーと自己紹介の流れが続き、最後に俺の番となった。

「えっと、俺は」

「……知っている……」剣豪「サツキ」

「お、おう……もしかして俺って有名人？」

「もしかなくとも、お前さんは有名人だろう」

「ユニークスキル持ちでKOB所属なんて、有名にならない方がおかしいだろうが！」

エギルとクラインに言われ、それもそうかと納得した。咳払いを一つ、話を戻す。

その瞬間。

「——うっ!？」

突然視界がぐにやりと歪んだ。自分のものではない何かが流れ込んで来る感覚、最近は落ち着いていた^{レヴァーティン}霊。剣特有の感応現象だ。

血で塗られたかのような真つ赤な月。

その下で蹲る一人の剣士、いや、侍。全身に幾多もの剣跡が刻まれ、血にも似たダメージエフェクトが舞っている。呻きながら、立ち上がろうと体を震わせている。

それを正面から見つめる俺の視界が、普段より少しだけ低いことに気が付いた。

そして、全身を満たす、退屈という感情。

今までに経験した感応現象とは少しだけ違った。流れ込んで来る誰かの記憶を第三者的視線で見ているのに対し、今見えているのはまさにその人目線の光景だ。さらに、流れ込んで来た感情。何百人という死者の感応現象の中で、初めての感情だった。新しく買ったゲームが全くの期待外れだった時のような、デスゲームに囚われたプレイヤーのものとは思えない呑気な感情。

「……大丈夫、か……」

「おい！どうしたサツキ！」

「サツキさん！」

名を呼ばれてはつとす。感応現象は収まり、目の前に心配そうな様子の仲間たちの顔があつた。

「ああ、悪い。少し疲れたみたいだ」

「……何か、あつたのか……？」

「……いや、なんでもないよ」

ルナに問われドキツとするが、なんでもない様を取り繕つて答える。感応現象については大つぴらに公表はしていない。知っているのは亡霊王と対峙した三人、クラインとエギル、アルゴにヒースクリフくらいだ。

先程の光景、映っていたのは今と格好が少し違うがルナであるのは間違いない。聞いてみたい気持ちを抑え、俺は話題を逸らす。

「んじや、クエストクリアってことで戻ろうぜ」

「そうだな、手伝いを頼むつもりが親玉の相手させちまってすまねえ」

「報酬はたんまり貰うから気にすんな」

「じ、常識の範囲内で頼むぜ！」

「とりあえずはクラインの奢りで打ち上げだな」

「少しは遠慮しろよ!？」

くだらないやり取りをしながら歩き始めた俺たちに、ルナが立ち止まって言った。

「……すまない、私は……まだ、やることがある……ここで……別れよう……」

「そうだったのか、じゃあ今度はオレたちが手伝うぜ！」

その申し出に、ルナは首を横に振った。

「・・・生憎・・・ソロの、クエストなのだ・・・気持ちだけでも・・・感謝する・・・」

「そうか、ならしようがないな・・・」

心底残念そうに肩を落とすクライン。と思つたらすぐさまウインドウを操作し始めた。

「だったらよ、フレンド登録しようぜ！」

んな無茶なと思つた俺とは裏腹に、ルナはまた意外なことに承諾した。その流れで俺とシュガー、エギルも互いに登録し合った。

「・・・では、私は行く・・・また会えるのを・・・楽しみに、している・・・」

「おう！またな！」

「今度俺の店に来てくれよ、サービスするぜ」

「さようなら！」

「お疲れさん」

ルナは手を振って応え、深い森のさらに奥へと姿を消した。

「・・・あんなに強い人も、いるんですね」

感嘆の声を零したシュガーに肩をすくめる。

「そりゃあSAOには何千人つているんだ。俺たちが知らない高レベルプレイヤーもいるだろうさ」

かつての相棒、“不滅”のカグマ、ヒースクリフの3人が脳裏を過ぎる。4人目のルナの姿を思い浮かべながら、俺たちは街へ向かつて歩き出した。

依頼主のエルフから報酬を受け取り、風林火山主催——実際はクラインのポケットマネーだが——の打ち上げで、俺たちは夜が更けるまで飲み明かした。

風林火山の面々が現実世界でも友人であり、徹夜で店頭に並んでSAOを買ったこと。ニュービーから攻略組まで上り詰めた今までの旅路。

斧戦士として戦い続けるつもりが、あるきっかけで商人魂に目覚めていつの間にか兼用していたこと。現実世界でも店を経営していたこと。

大学（かなりの名門）に在籍していて、やたらと上から目線で話してくる恋人がいること。K O Bに入団するまでの戦いの日々。

全員がなんの抵抗もなく現実世界の話を持ち出したことに驚いた。たった一回パーティーを結成しただけでここまで打ち解けるなんて、以前の俺からは想像もできない。

俺もみんなに倣って、なんてことのない、平凡で退屈だった日常に刺激が欲しくてS A Oを買ったこと、ピーターの相棒がいたこと、K O Bに入団するまでの流れをざっくり話した。

クラインが俺の相棒とシュガーの恋人について熱心に聞いてきたが適当に流し、店の準備があるエギルを皮切りに解散となった。

みんなと別れて一人になった時、アルゴからのメッセージが届いていることに気が付いた。内容を要約するも、シュガーの依頼した情報を入手したこと、風林火山の手伝いお疲れといった感じだ。

シュガーにも連絡はしたようで、改めて会いに行く約束を取り付けて俺はねぐらに戻った。

◆？

「ずいぶんと大胆な行動に出たものだね」

全面ガラス張りの壁を背に主は言った。その不思議な真鍮色の瞳には、対峙した者を静かに圧倒する威圧感がある。最強プレイヤーとしての目ではなく、私だけに見せる神の目だ。

「・・・支障は、ない・・・必要だと、判断したゆえ・・・勝手ながら接触した・・・」

「そうか、君の判断ならば何も言うまい・・・それで、感想は？」

「・・・想像以上、だった・・・流石と言った、ところか・・・」

「今の君は勝てるかね？」

「・・・まだ、断言はできない・・・だが」

私は真正面から主を見据える。

「・・・私は、もう・・・二度と負けない・・・」

〈サツキside〉

「うくん・・・」

手元のウインドウに視線を落としながらシュガーが唸る。彼にしては珍しく判断に迷っているようだ。この状態になって既に二十分は経過している。

だが、それも無理はない。

「どれがいいと思います？サツキさん・・・」

「俺に聞かれてもなあ・・・」

異性へのプレゼントなど送ったことのない俺に、的確なアドバイスができるはずもなく言い淀む。

アルゴから貰った情報を元に、俺たちはさくつと素材を収集した。ところまでは良かったが、肝心のアクセサリを作成するにあたって決めなくてはいけないことが山ほどあったのだ。デザインやら大きさやら色やら効果まで決められるらしく、そういった知識が乏しい俺は一覧を見ただけで目が回ってしまった。

「ノノが好きそうな物に心当たりはないのか？」

「入団の時から一緒ですけど、そんな話をしたことがないので・・・」

「まあ、デザインは正直わからんが・・・ノノみたいなスピード系カタナ使いが喜ぶアクセサリって考えれば、敏捷力補正がいいんじゃないか？」

「そうですね・・・ノノちゃんって基本は隊服着てるので、白か赤にすれば似合うと思うんですけど」

「だな。シンプルでいいと思うぞ」

言いながらシュガーがウインドウを操作する。何個か案を作っては比べてを繰り返し、ようやく完成したのは小型のペンダントだ。純白に赤い剣、KOBのギルドマークに酷似した装飾が施されている。

名は《冥白のラメント》。気になる敏捷力補正は——+50。

「えっ!？」

あまりの高性能に驚きの声がハモる。ラメントを作ってくれた女性NPCが微笑みながら首を傾げたのは気のせいだろう。

「なんだこのぶっ壊れ性能は・・・最前線でもドロップしないだろ、こんなもの」

「バグじゃないですよね?」

「・・・ありえないほどの高性能品がドロップしたり作成されたのは稀に聞くからな。今回は大当たりを引いたってことだと思おう」

カタルシス
白の魔剣や副団長の愛剣、キリトが残した黒の魔剣エリユンデーターのような代物、世界に一つしかないユニーク品に違いない。これほど上出来なプレゼントはないだろう。

「ま、何にせよプレゼントは確保できたな」

「はい!まさか、こんなに良いものになるとは思ってたんです。ご協力に感謝します!」

「おう、あとは当日のパーティー準備だな。副団長とか他の皆には話してるのか?」

「はい、ノノちゃん以外の皆には話を通しています。当日の会場や食事の準備は、ダイゼンさんが指揮を執っています」

「あのおっちゃんなら任せてても大丈夫だな」

KOBの経理係の顔とその手腕を思い出す。少数精鋭のKOBは他の大規模ギルドと比べると資金が少ないはずなのにフロア攻略毎にパーティーを行うし、最近なんて本部を田舎屋敷から巨大な城に移したばかりだ。どこからそんな額が出てくるのか、KOB七不思議の一つである。

「こんな高性能品が作成されたなんて広まれば、このNPCは大儲けだな」

「そうですね。でも確率でしょうから、むやみに広めるのは止めておいた方がいいかもしれません」

「苦情言われるのも面倒だしな」

不確かな情報ほど危険なものはない。アクセサリを作るNPCは

他に見つかっていないので、自然と情報は広がっていくだろう。

ラメントをプレゼント用にラップピングしてもらったシユガーが、表示されたままのウインドウを見て言った。

「あー残った素材でもう一個作れますよ」

「残っててもしょうがないから、作っちゃえば？」

「じゃあサツキさんにあげます！手伝ってもらったお礼です」

「マジで？ありがたい」

シユガーの操作が終わると、先ほど同様にNPCが手際よく作成を始めた。完成したのは、蒼い宝石が埋め込まれた小さなイヤリングだった。

「・・・イヤリング付けてる男、見たことある？」

「ピアスならありますけど、イヤリングは見たことないですね」

「だよな、まあ一応取っておくか」

当初の目的は達成したので良しとし、俺たちは密かに事を進めているであろうダイゼンを手伝うためにギルド本部へと向かった。

◆？

〈アルゴside〉

「・・・なん、ダト・・・？」

正面に立つ男が発した言葉に、アルゴは絶句した。

第五十層主街区の複雑極まる裏路地の一角、陽の光も遮られ昼間でも薄暗い場所だ。加速する鼓動を抑えるため沈黙したアルゴに、男は再度告げた。

「だから、ラフコフのアジトを教えるって」

ラフコフ——ラフィン・コフィン笑う棺桶

その名を知らない者はいないだろう。

アインクラッド最大にして最悪の殺人ギルド。結成から今まででその犠牲者は三桁をゆうに超えており、ある意味ボスマンスターよりもプレイヤーの敵と言える危険な存在だ。

ゆえに早期の撲滅を目指し、ヤツらのアジトを探し続けていたがアルゴですら手がかりを掴めずにいる。

そんな、喉から手が出るほど欲していた情報を、この男はあっさりと持って来た。何の前触れもなく接触してきた男が。

「その情報、どこから仕入れた？」

情報屋として、この男を見極めなければならぬ。冷静を装ってアルゴが放った質問に、男は再びとんでもないことを言い出した。

「仕入れたも何も、オレがラフコフのメンバーだからな」

「ッ!？」

衝撃と同時に全身を怖気が支配する。混乱し、停止しそうな頭をフル回転させる。

「・・・何が目的だ!? だいたい、メンバーの話信じるわけが——」

「あー落ち着け落ち着け、らしくないぞ? 鼠」

暗がりを目深に被ったフードで見えづらいが、男は愉快そうに口元に笑みを浮かべていた。

「たしかにオレはメンバーだが、なんつーか、良心の呵責? みたいなヤツだよ。今更だが、後悔してると感じか。だからアンタらに、攻略組に潰してもらいたい」

「・・・」

情報屋としての勘が警告を鳴らす。情報が確かでこの男の言うことも本当ならば、すぐにでもラフコフを壊滅させることはできる。だが異なった場合、レベル的有利がある攻略組にも被害が出るかもしれない。

この判断は、とても一人では下せない。

「・・・正直、信用できないナ。しつかりウラを取ってから、攻略組に話すか判断するヨ」

「まあそれが妥当だろうな。俺のことが信用できないならラフコフが解散するまでの間、黒鉄宮に入ってもいいぜ?」

「・・・考えておくヨ」

そう言い残してアルゴは早足にその場を去った。去り際に見た男は、笑っていた。

「思ったより用心深いな・・・まあ、あの様子だと時間の問題か」

◆？

「すっげー！これがゲームかよ、信じらんねえ！」

キラキラと目を輝かせた親友を横目に、俺も目の前に広がる世界を一望する。果てしなく続く地と空。全てが創られたものだとはとも思えなかった。

「わっ！」

すぐ後ろで馴染みの声が聞こえた。振り向くと、小柄な少女がほんのわずかな段差にツマづいて転んでいる。

「大丈夫か？」

「う、うん！平気だよ」

「ははっ！——は相変わらずドジだなー！」

「もうっ！からかわないで！」

いつもと変わらない、他愛なく下らない会話だ。

「よし！きつそくモンスターと戦いに行こうぜ！」

「その前にスキルを選ばないと。武器は決めた？」

「いや、男は黙って拳で語るだろ」

「“ソードアート”なんだから剣使おうぜ・・・」

「私は・・・魔法使いがいいな」

「剣しかないよ」

「えっそうなの？」

「お前らゲーム説明読んだ!？」

二人がここまでアホだったのは初めて知った。

「そんじゃあ、とりあえずテキストに選ぶか」

右手を振ってメインメニューを呼び出す。確か初期レベルでもスキルは二つ選択できたはずだ。

「ん？」

今度は三人の声がハモる。

「なあ、もうスキル一個埋まってんだけど」

「私も！」

「俺もだ」

ウインドウを可視化して互いに見せ合う。

「えーと・・・〈拳闘士〉？」

「・・・〈超回復〉」

「俺のは・・・」

この時、俺はまだ知らなかった。

知る由もなかった。

与えられた力の意味を。

〈ノノside〉

「「ノノちゃん、誕生日おめでとうー！」」

シュガーを筆頭とした祝いの合唱に、私は思わず目を丸くした。クラッカーと拍手の嵐で、ようやく今日が人生で19回目の誕生日だったことに気が付く。

早朝にフィールドへ向かう時にはなかった様々な飾り付けが本部のあちこちに施されている。会場の中央には豪勢な料理が並べられ、長時間の戦闘で疲れた体がそれらを求める。

「びつくりした・・・いつの間準備してたの」

「ふふ、サプライズ大成功ね。気付かれないように準備するの大変だったんだから」

アスナさんがグラスを差し出しながら言った。

「ありがとうございます。私の誕生日、知ってたんですね」

「もちろんよ。ここまでの規模になったのはシュガーくんのおかげだけだね」

「僕はただ案を出しただけで、皆さんのご協力があったからこそ実現できたんですよ」

「一番頑張ったのはシュガーだろ」

サツキが肩をすくめながら言った。その後ろから意外な人物の声が続く。

「そのシュガー君に誰よりも助力したのはサツキ君だろう」

真紅のローブを身にまとった長身の男、KOB団長ヒースクリフだ。私は反射的に姿勢を正す。

「団長！」

「そうかしこまらないでくれたまえ。このパーティーの主役は君なのだから、私など気にせず楽しむといい」

「しかし・・・」

「いいっていいって、団長さんもこう言ってるんだし」

「あなたはもう少し遠慮しなさい」

アスナさんに耳を引つ張られたサツキが子供のように喚く様を見て、会場が笑いに包まれる。

現実世界でもこれほど盛大に祝われた経験がなかった私は、最初こそ緊張していたが、たくさんさんのメンバーと色々な話をするうちにそれも無くなった。顔を合わせる程度で話したことのないメンバーともすぐに打ち解けられた。余興もいくつか用意されていて、会場が静まる暇もなかった。

中でも大盛況だったのが、予定になかった団長の飛び入りエピソードだった。

「では、せっかくなので私も一つ話そうかな」

「「おおっ!?!」」

「団長自らとは珍しいな」

「本当ね」

「激レアエピソードですね、これは!」

「うむ、あれは五十層ボスを倒した翌日のことだった……薄暗い迷宮区の奥底で、単身モンスターを屠る剣士がいた。私の目から見てもかなりの実力者であった。私はその剣士に強い興味を持ち、声をかけた。＼私のギルドに入らないか?」と」

「二目で団長が認めるって、何者なのかしら」

「……」

「剣士の返答は……誰だお前?」だった」

「ピースクリフ団長を知らないなんて、そんな人がいたんですね」

「……」

「私は自分が攻略組であり、私が率いる攻略ギルドに君を迎え入れたいと伝えた。剣士は言った。＼決闘^{デュエル}であんたが勝てば入ってやる。

あんたが負けたら全財産を寄越せ」と」

「強欲な上に命知らずね」

「……」

「私はその条件を呑んで剣士と戦った。その最中、私は信じられないものを見た。剣士の主武装は片手剣だが、放たれるソードスキルが違

うカテゴリの技だったのだ」

「「えっ？」」

聞き入っていたメンバーたちの視線が一齐に一箇所へ集まる。顔を引き攣らせて外を見ているサツキへと。

「みなも承知の通り、そんな芸当ができるのはこの世界に一人しかいない・・・これが私と彼の出会いだった」

「へえー！サツキさんの入団経緯は知らなかったです」

「まさか団長にボコられてたなんてね」

「言うな恥ずかしい」

開き直ったサツキが飄々に言う。

「俺の話はいいんだよ。それよりシュガー、そろそろメインイベントを見せてやれ」

「了解です！」

シュガーがウィンドウを操作し、その間にアスナさんが私を誘導した。手に小さな小包を持ったシュガーが私の正面に立ち、やや緊張した様子で口を開いた。

「えつとノノちゃん、改めて誕生日おめでとう！これからもよろしくね！」

差し出された小包を受け取って中を確認すると、純白のペンダントが輝いた。

「綺麗・・・ありがとう」

「見た目だけじゃないぜ、スペック見てみろよ」

「なによ・・・って、敏捷力補正+50!？」

私の声に周りがざわついた。

「こんなのどこで・・・」

「NPCに作ってもらったんです。ここまでの出来になったのは、かなりラッキーでしたが」

「スゴいじゃない！良かったわねノノちゃん」

「は、はい。でもこんな貴重なもの」

「誕生日プレゼントなんだから遠慮すんなって」

「そうですよ！ぜひ使ってください」

「そう、ならありがたく使わせて貰うわね。ありがとう」

早速ウインドウを操作して装備してみると、首に掛けられたペンダントが純白の輝きを放った。

「綺麗、似合ってるわよ！ね？」

「おお、悪くないな」

「うむ」

「良かった、似合ってますよ！ノノちゃん」

「う、うん。自分でもびっくりするぐらい合ってると思う」

大いな賑わいを見せたプレゼント回を終えてもう一度乾杯した後、私の誕生日パーティーは幕を閉じた。

プレゼント―《冥白のラメント》は正直に言って嬉しかった。純粹にシュガーの気持ちと、団員たちの祝いの言葉、その全てが。

でも、何よりも――

「はあっ！」

闇に覆われた視界を数多の剣閃が斬り裂いた。一瞬の間を空けて重低音の剣戟音が響く。ギリギリ視認できる訓練用カカシには深く抉れた痕が残されていた。

「・・・やっつと、ここまで来た」

目指していた高みに到達できたことに、私は歓喜した。

◆？

〈サツキside〉

「楽しかったな・・・」

本部の天蓋テラスから蒼い月を見上げながら俺は呟いた。

辺りはすっかり闇に包まれ、夜風だけが流れる静かな世界だ。つい

一時間ほど前の賑わいの余熱が冷めずに眠れなかったのも、外の空気でも吸おうかと出てみたら見事な月夜だったわけだ。

ここ最近、というか相棒が死んでからの今までで一番楽しかった時間だったと思う。

元の世界では独りが好きだったのに、気が付いたらこんな大人数と過ごすのも苦にならなくなっていった。きつかけは間違いなく相棒だ。はじまりの日に彼女に出会わなければ、俺は今ここにいない。

「なにしてるの？」

背後から遠慮がちにかけられた声に、過去を振り返っていた俺は内心かなり驚いた。顔に出さないように振り向くと、寝起きなのかだいぶ軽装な副団長がいた。

「ん、いや寝れなくてな」

「そう・・・私もなんだ」

そう言っただけで俺と同じように蒼い月を見上げた副団長は、その容姿と月夜が相まって一枚の絵画のように美しかった。しばし見入っていると副団長が口を開いた。

「・・・ありがとう」

「え」

「ノノちゃん、最近元気なかつたみたいだから・・・君とシュガーくんのおかげで今日はとても楽しそうだったよ」

「・・・そうか、なら良かったよ。でも俺とシュガーだけの力じゃないぞ。団員全員のおかげだ」

「君はもう少し自分を評価しても良いと思うなあ」

「いやいや、全然だよ。俺なんて」

周りから見ればそれなりの評価にはなると思っている。でも、そんなのでは全然足りないのだ。俺が目指す場所には。

「あつ、そうだ」

ふと忘れていたことを思い出した。ウインドウを操作してそれを実体化させる。月光に照らされて輝く小さなイヤリングを見た副団長が首を傾げた。

「それは？」

「あのペンダントを作った時に余りの素材で出来たやつ。男が装備するのは抵抗あるから・・・あげるよ」

「えっ」

ぶつきらぼうに言った俺に驚きつつも、副団長はイヤリングを大事そうに受け取った。

「・・・ありがとう、大切にするね」

「そんな使えるスペックじゃないから、無理に装備しなくていいぞ。なんなら質屋に入れてもいいし」

「もうっそんなことしないわよ!」

言ったあと、副団長は手早くウインドウを操作した。手元のイヤリングが一度消滅し、副団長の小さな両耳に装備された。

「・・・どうかな?」

「どう・・・って・・・」

少し照れた様子の副団長に俺は言葉を詰まらせた。

「に、似合ってると思うよ」

「そ、そう・・・よかった」

何とか返したが微妙な空気になってしまった。しばらくの沈黙を破ったのは、何やら機嫌が良さそうな副団長だった。

「じゃあ、私はそろそろ戻るわ。君もあまり夜更かししたらダメよ?」

「りよーかい、おやすみ副団長」

「ええ、おやすみなさいサツキくん」

軽く手を振って副団長は中へ戻って行った。それを見届けて俺は再び蒼い月を見上げた。

『どう?似合ってるかな?ねえねえどうどう?』

『あーはいはい、ニアツテマスネー』

クエスト報酬で貰った耳飾りを身に付けた相棒とのやり取りが鮮明に思い起こされる。先ほどの副団長と相棒の姿が重なって見えたのだ。まあ、態度と対応が全然違うけど。

「・・・寝るか」

眩いた俺は静かに自室へと戻った。夢の中で、俺は相棒と会っていたのかもしれない。

◆？

「おりやあああつっ!!」

気合いの咆哮とともに放たれた親友の高速連打が、イノシシ型モンスターを軽々と吹き飛ばした。地面にバウンドしてポリゴン片となつて爆散するのを見て、爽快感からか彼は喜びと興奮の声を上げる。

「はあーっ！たまんねえぜ！」

「ホントに素手で倒してるよ・・・」

「そりやあ、そういうスキルなんだからな」

「初期でこんな規格外のスキルがあるなんて大丈夫なのかな・・・」

「いやいや、オレなんてまだ可愛い方だって！アレに比べたら」

そう言つて彼が指差すのは、少し離れたところで同じくイノシシと戦っている小柄な女の子だ。短剣を構えて突進して来るイノシシに一閃――

「きゃっ！」

――できず、正面から直撃を喰らつてしまった。

「全く、――はてんでダメだ、な！」

尻もちをついた彼女を心配して親友がイノシシを横から蹴り上げた。浮いて隙だらけの胴体に高速の三連打を見舞い、爆散させる。

「あ、ありがとう」

「派手にやられたな」

「大丈夫？」

手を引いて彼女を立ち上がらせる。服に着いた汚れを払っている

彼女の頭上に表示されたHPバーは黄色に染まっていた。

「うーん、なかなか難しいね」

「慣れるまで練習するしかないよ。いろんな武器使ってみたら？」

「だな。それに——なら何回ト突かれても平気だしな」

「数值的に問題なくても怖いもん！」

ケラケラと笑う親友に頬を膨らませて言う彼女のHPは、何もして
いないのに緩やかに回復を始めていた。そのままバーは全快し緑色
に染まる。

「しつつかし、マジでこのスキルはなんなんだろうな」

「すっごい低確率で配布されるものとか？」

「こんなチートじみたものを初期に入れるとは考え難いけどなあ……」

「まあ、せつかく貰えたんだから使わないと損だろ」

フィールドに出てから一時間ほど、俺たちは与えられたスキルのお
かげで初心者ながらかなり安定して戦闘をこなしていた。特に親友
の暴れっぷりが凄まじく、ここら一帯の敵はほとんど狩り尽くしただ
ろう。

「つし、どーする？もうちよつと周り探してみるか？」

「いや、一回街に戻ろう。——の武器も買い替えたいし、何かクエスト
を受けてみたいから」

「うん！」

「りよーかい、んじゃ行くか」

俺たちは街へ向かって歩き出した。

この世界の本当の姿に気付かないまま。

◆?

「・・・予想よりも、だいぶ、早かったな・・・」

「そうだね・・・でも想定内ではある」

ルナの問いに、ヒースクリフは目を細めながら応えた。すでに太陽は沈み、代わりに蒼い月が静かな夜を照らしている。

「君は参加しないのか？彼らも探しているようだったが」

手元の資料に目を落としながらヒースクリフが言う。ルナは窓から蒼い月を見据えたまま応えた。

「・・・私が、私たちが介入、すべきモノではない、だろう・・・」

「そうだね。今回の件に関しては、関わるべきではないね。不安事項はあるが、彼らなら上手くやるだろう」

手元の資料——『ラフィン・コライ笑う棺桶』殲滅作戦概要』を捲りながら、ヒースクリフは不敵な笑みを浮かべた。

時は、3日前に遡る。

◆?

〈サツキside〉

「・・・みんな、急な招集に伝えてくれて感謝するゾ」

「なんだ？改まって」

いつもの陽気な態度とは違った真剣な表情で頭を下げるアルゴに、反射的に声が出てしまった。

KoB本部の大会議室には俺と副団長、シユガーやノノを筆頭とする団員の他に《聖龍連合》《風林火山》といった攻略組の主力メンバーが集まっていた。昨日、64層のボスを倒した後アルゴから要請を受けた副団長が集めたらしい。

集められた理由がわからず疑問符を浮かべている俺たちの前で、ア

ルゴは一度大きく深呼吸してから意を決したように口を開いた。

「これから言うことは、極秘情報だということ。肝に銘じてほしい。ここに集めたメンバーは、オレっちが最大の信頼をよせているから、つてことを覚えていてもらいたいタイ」

「なんだあ？美味しいクエストでも見つけたか？」

普段なら絡むクラインの茶化しもスルーし、アルゴは少し震えた声でそれを言った。

「ラフコフの……」ラフィン・コフイン 笑う棺桶“のアジトを、見つけタ”

「……は？」

その言葉の意味を理解するのに時間がかかった。実際は数秒だろうが、おそろしく長い沈黙が場を支配した。そして、理解が追い付くと同時にそれは、とてつもない衝撃となつて俺たちを襲つた。

「なつ……！」

「ラフコフ!?!」

その名を知らないプレイヤーはいないだろう。

「アイコンラッド最大にして最凶の殺人ギルド」——ラフィン・コフイン 笑う棺桶“。通称・ラフコフ。

今年の元旦に結成が宣言された後、分かっているだけで既に3桁に上る犠牲者を出している。ある意味ボスモンスターよりも俺たちの敵と言える最悪の存在だ。これまで幾度となく撲滅のために動いてはいたが、肝心のアジトの場所を特定出来ずにいた。厳しさのこもつた声色でシュガーが問う。

「どこで情報を入手したのですか？」

「ラフコフのメンバーが接触して来たンダ。罪悪感に負けて……潰してほしいってナ」

「嘘に決まつてるじゃない！絶対に罠よ」

「イヤ、情報は間違いナイ。オイラがこの目で確認済みダ」

「っ!?!お前まさか——」

「一人で偵察に行ったの!?!」

「何考えてるの!?!そんな危険なこと!」

ノノと副団長がアルゴに詰め寄るが、アルゴは二人を制しながら続

けた。

「言いたいことは分かっているヨ、でもこれはオイラの戦いだ。裏が取れないまま情報を流して、みんなに万が一のことがあってはならナイ」

「さすがの情報屋魂だな・・・で、どこだ？」

俺の問いで場に緊張が走る。静寂の中アルゴは確かな声で言った。

「第七層迷宮区セーフティエリアの安全圏、そこがヤツらのアジトだ」

ざわつきが起こった。

「七層、そんな下の迷宮区に？」

「それじゃ見つからないわけね」

「でも各層の迷宮区は調べ尽くしてるんだよな？」

「もちろんダ。密告者の話によると、ヤツらは定期的にアジトの場所を変えているらしい」

「なるほどな。どーりで見つけられなかったわけだ」

ヤツらの周到ぶりには無駄な感心を抱く。そこまでして殺人に手を染めるなんて、やはり危険な連中だ。

「でもよお、それなら早いとこケリを付けないとマズくねえか？また見失うかもだぜ」

「だな。どうする？副団長」

今この場で最も発言力のある彼女は、少し考えてから口を開いた。

「・・・早急に討伐隊を編成し、アジトを襲撃します」

その言葉に異を唱える者はいなかった。ボス戦前のミーティングのような、しかしそれよりも空気が張り詰めているのを感じる。

「アルゴさん、アジトにはどれくらいの人数が？」

「およそ40人くらいだな」

「わかりました・・・迷宮区内での戦闘、それに奇襲作戦となると大人数では行けません。討伐隊は少数精鋭とします」

一度言葉を区切り、全員を一瞥したあと副団長は続けた。

「討伐隊と言いましたが、あくまで拘束を目的とします。しかし、相手はプログラムされたAIではありません。私たちと同じ、生きた人間です。ですが相手は命を奪うことに一切の抵抗がありません。生半

可な気持ちでは戦えないでしょう」

「・・・」

「強制はしません。どうするかは各人の判断に任せます・・・明日の昼、有志の方はここに集まってください。以上です」

様々な心境をのぞかせる表情でぞろぞろと退室して行くのを見送り、5人になった会議室は重い空気に満たされた。アルゴもシユガーもノノも副団長も、そして俺も何も言わない。沈黙を破ったのは、いつもの声を取り繕った副団長だった。

「私、団長に報告してくるね」

「一緒に行こうか?」

「・・・ううん、大丈夫。ありがとう」

それだけを言い残して副団長は出て行った。俺は冗談まじりに肩を竦める。

「フラれちゃった」

「・・・おめでと」

「おいこら」

ノノは呆れ顔から至極真面目な顔になって言った。

「・・・で、アンタは参加するの?」

「当たり前だろって俺は言うけど、お前らは無理しなくていいからな?」

「何よ、柄にもなく心配してるの?」

「柄にもないってのが心外だが、まあそうだな」

「大丈夫ですよサツキさん、前からラフコフを止めたいと思ってましたし・・・覚悟もできてます」

「そうね、今回で終わらせましょう」

そんな会話をする俺たちの横でアルゴが暗い顔をしていた。何かを悔いているような、葛藤しているような顔だ。

「アルゴ、どうした?」

「いや、今更だが・・・怖くなってナ」

聞いたことの無い消え入りそうな声でアルゴは言った。

「何か、嫌な予感がするンダ・・・こんなことは初めてダ。とても、悪

いことが起きそうナ・・・」

「おいおい、縁起でもないこと言うなよ」

「そ、そうですよー！らしくないですよアルゴさん」

普段とは明らかに違う様子からタチの悪い冗談ではないことが分かる。ラフコフが関わっている以上、俺たちもボス戦並の準備と覚悟をするが、この世界に絶対はない。

「大丈夫よ、必ず成功させるわ」

そう言うノノの声にも、隠し切れていない不安の色が表れていた。

◆？

「ふざけんじゃねえぞ！出せよ！おい！」

紅に染まった仮想の空に向かって親友が怒鳴り声を発した。

だが、それを遥かに上回る大音量の“声”が一瞬にして掻き消す。

怒号と絶叫、怒りと恐怖に呑まれたここは、アインクラッド第一層・はじまりの街。のべ一万人のプレイヤーが集められた大広場で、つい数秒前に宣言されたのは、おそらく世界初である死の遊戯デスゲームの開幕だった。

クリアするまで脱出不可能、HPの全損は現実世界の死に直結するという、小説や“ゲーム”なら大いに盛り上がる設定だ。

だがこれは、紛れもない現実。

視界左上に表示されたHPバーがなくなれば、俺は本当に死ぬ。すでに死者は2000人を超え、現実世界でも大変な騒ぎになっていると報道されているらしい。タチの悪い冗談でもなんでもない。

ヤツは、茅場晶彦は本気なのだ。

本気でこのデスゲームのためだけにナーヴギアとSAOを創り、地位や名誉を全て捨て、この剣の世界の神となった――。

酷く冷静になった頭でそう結論した時、左手を控えめに引かれた。

「ねえ・・・どうなっちゃうの？私たち、死んじゃうの？もう、帰れないの・・・？」

目に涙を溜めて震える声で縋る彼女に何も返してやれない。俺は黙って彼女と喚き散らす親友の手を引いて人の輪を離れた。

細い路地裏まで二人を連れて来ると、少し落ち着いた様子で親友が口を開いた。

「なあ——、どうすればいい？オレは馬鹿だから分かんねえ」
「……」

後先考えずに思うがままに突っ走る親友と、それに勢いよく続く彼女。何かあれば二人の保護者的存在となっている俺がアレコレ考えるようになってる。

二人が無言で見つめてくる中、俺は決断を下した。

自分と世界を呪い、取り返しのつかない過ちへと繋がることになる決断を。

「……大丈夫、俺たちは“普通”じゃない。何かを選ばれた存在だから、この世界でも生きていける。死なない程度に、冒険してみよう。俺たち三人なら大丈夫だ」

二人は安心した顔で頷いた。

◆?◆?◆?

『・・・なんだ、これ』

『んー?どしたの』

芝生に寝っ転がって表示したステータス画面を見ていた俺の眩きに、横から相棒が興味津々に食い付いてきた。俺のすぐ近くまで顔を近付けた相棒に可視化モードでスキル欄を見せる。本当はスキルの公開は御法度なのだが、俺は相棒に言われるがままに習得してきたのを見せても問題はない。

『えー!』

相棒の驚きはわかる。数時間前のレベル上げで増えたスキルスロット、まだ何も取っておらず空白になっていたはずのそこに新たな名前——《剣豪》があつたのだから。

『新しいスキルじゃん!私も聞いたことないよそれ!』

『んなの?』

『うん!』

ビーターであり世界最強を自称する相棒でも知らないとなると、いよいよ未知のスキルだ。以前、イベントクエストの謎解きに挑んだ時のわくわく感が蘇る。

『ねえねえ、どんなスキル?』

『えーっと・・・装備している武器のカテゴリに関係なく全てのソードスキルを使用できる、らしい』

『へー!すごいね!』

『ほんとは?』

『全っ然わかんない!』

『だろ?』

至近距離で笑う相棒はとても満足そうだ。軽快な身のこなしで立ち上がり、俺に手を差し出す。

『実際にやってみた方がわかり易いよ』
『だな』

手を引かれ、新たなスキルを試すべくフィールドへと向かう。前を行く相棒もどこか嬉しそうなものも、気のせいではないだろう。

『前にやり残してたクエストあつたよね？』

『あつたな、^{スローター}虐殺だった気がする』

『よしっ！じゃあそれ行こう！』

『ぶっつけ本番だなあ』

『大丈夫大丈夫！』

相棒は弾けるような笑顔で言った。

『危ない時は、私が君を守るから！』

コンビ結成から何度も言われた言葉。

いつからだろう。

——俺も、君を守るよ——

その言葉が喉に詰まるようになったのは。

◆?◆?◆?

〈サツキside〉

五十名。

これがラフコフ討伐隊に自ら志願した者の数だ。俺の予想よりも多い。毎回ボス戦に参加している者は全員、それに加えてKOB偵察隊や相応の実力がある者が数名といった具合だ。

大会議室は定員ギリギリで窮屈であるが、それに反して静まり返っている。部屋を満たしていた重苦しい空気を、副団長の凜とした声が切り裂いた。

「みなさん、ご協力に感謝します」

全員が無言で頷く。

「・・・これから」ラフィン・コフィン 笑う棺桶「殲滅作戦の会議を始めます。手元の資料をご覧ください」

事前に配布された資料を見ていく。細かい箇所まで正確に描かれたエリアマップに様々な注記がされており、見慣れたその字からアルゴが作ったものだとかわかった。

「敵のアジトは、かなり広めのドーム型安全圏セーフティエリアです。3つある入口から一斉に突入します。敵の数、レベルや装備もこちらの方が優れています。油断しないでください」

「耐毒ポーションを忘れないでください。ヤツらの十八番おはこですから」
シユガールの補足に俺も続く。

「アジトってことは、アイツらがいる可能性も十分にある。もし交戦したらすぐ応援を呼ぶように」

具体的な名前を出さなかったが、みんな俺の言った意味は分かったようだ。

アイツら——《P O H》《赤眼のザザ》《ジョニー・ブラック》の三人はその強さ凶悪さが頭一つ飛び抜けている。危険な存在だが、この三人を捕らえなければラフコフ壊滅とは言えない。

「アジトまでのルートをいくつか用意しタヨ」

アルゴが七層迷宮区のプロアマップをみんなの前に貼り出しながら言った。

「討伐隊を3班に分けて一斉に突入するわけだが、この人数で歩いて行ったらバレるのは目に見えてル」

「まあ、ヤツらもバカじゃないだろうしな」

「そこで、各班毎に時間を空けて違うルートで入口付近まで進んだ。全班的準備が整ったラ突入すル」

アルゴの説明に聞き入る者、資料にルート案を書き込む者、装備とアイテムを確認する者。その中の一人が声を上げた。

「班の内訳は？」

「今日中に決めます。連携が取り易いように同じギルド同士で組むように考えますが、詳細は後ほど連絡します」

「了解」

他に質問がないことを確認した副団長は、一呼吸置いて言った。

「決行は明後日、敵が犯行を終えてアジトに集まると思われる早朝に仕掛けます。それぞれ準備を怠らないように」

全員が頷いて会議は終了した。

すっかりガラガラになった会議室に一人残った副団長は、討伐隊の名簿を見ながら頭を抱えていた。その姿が、現実世界の数少ない友人と重なる。迷い続けて、自分でも気付かないうちに擦り切れてしまふ、そんな未来が見えて俺は思わず声をかけた。

「大丈夫か？」

「・・・ええ、ありがとう」

その声から全然大丈夫じゃないことは俺でもわかる。俺は副団長から名簿をひったくり一瞥した。

「班決めに迷ってるのか？副団長らしくないな」

ボス戦の振り分けでも編成迷う素振りを見せたことがない副団長には珍しいことだった。

「違うの、だいたい決まったんだけど・・・」

「それじゃ何を悩んでるんだ？」

「・・・」

しばらく沈黙した副団長は、窓の外を見つめながら静かに言った。出てきたのは意外な名前だった。

「・・・キリトくんも、参加してくれないかなって」

「黒の剣士？まあ、戦力的にはかなり助けになると思うけど・・・」

最前線から離れたとはいえ、彼のレベルなら今でも俺たちと引けを取らないくらいだろう。聞いた話だと幹部3人とも面識があるようだし、参加してくれるなら心強い。

「どこにいるのか知ってるの？」

「いえ、でもアルゴさんは知ってるみたい」

「そうか、じゃあ話は早いな」

「どういうこと？」

アルゴ宛のメッセージをたったか打ちながら俺は言う。副団長は驚いて目を見開いた。

「直接聞いた方が早いだろ？黒の剣士に」

◆？

「そう・・・明後日なのね」

込み上げてくる不安を抑え込むように、リズベットは手にしたマグカップを口に運んだ。

時刻は昼過ぎ。昼食がてらメンテナンスに来た客はいなくなり、休憩中の看板の提げていたリズベット武具店をノノとシュガーが訪れていた。珍しいタイミングでの来店に驚きながらも歓迎したりズベットだったが、二人の話を聞いて気持ちが曇る。

「大丈夫ですよ！僕たちの方がずっと強いですし、アスナさんやサツキさんもいますから」

明るく振る舞うシュガーだが、その声がいつもより固いことにリズベットは気付いていた。彼なりに心配をかけないようにしていることも。リズベットもそれに答えるようにいつも通りを装う。

「負けるとかそういう心配はしてないけど、お得意様のアンタ達がいなくなったら店の売上に影響出るんだから」

「そっちの心配ですか!？」

笑い合う声が響く中、ノノだけが思い詰めた顔で沈黙していることに二人は気付かなかった。

◆？

「おい見ろよ——ここ大量にあるぜ！」

親友に呼ばれて見れば、彼の足下には銀色に輝く鉱石がごろごろと転がっていた。見ただけでわかる良質な素材、俺たちが二時間近く探していたモノに違いない。

「ホントだ、おーい！——こっちだ！」

「待ってよ二人とも！」

遅れて来た彼女は息を切らしながらも、鉱石を見た時には目を輝かせて夢中で拾い始めた。俺もそれに続く。

アインクラッド第一層の西にある沼地で良質な鉱石が採掘できることは、たまたま寄った道具屋に置いてあった攻略本を見て知った。無償提供であるのに書かれている情報量は凄まじく、右も左も分からない俺たち初心者パーティーにとっては大変ありがたい代物だった。まだ誰も来ていないのか手を付けられた様子はなく、俺の片手剣と——の短剣の強化に必要な数は余裕で採掘できそうだ。

「おっし、こんなもんか。——、ちゃんとアイテム欄に格納できてるか？またポケットとかに入れて持つてくくなよ？」

「もうそんなミスしないよ！大丈夫だもん！」

親友がケラケラと彼女をからかう。

SAOという名のデスゲームが開始してから早くも一ヶ月が経とうとしていた。最初は不慣れだったウインドウ操作や戦闘にも慣れ、すっかりこの世界の住人になっている。それは良いことだが、一ヶ月が経った今でも最初の層すら突破できていないことに、俺は少し焦りと不安を感じていた。積極的にゲームクリアを目指している訳でもない俺が文句を言う資格はないのだが、このまま状況が動かずに終わってしまうのではないかと考えてしまう。

「さて、じゃあ帰ろうか」

縁起でもない思考を断ち切り、ガーガー言い合う二人に声をかける。やれやれと親のような気分になると、二人の頭上の木が揺れた。次いで薄い赤のラインが二人を切り裂くように伸びていく。

俺は咄嗟に叫んだ。

「上だ！」

親友は流石の反応速度で右に跳んだ。しかし俺の声に驚いた彼女は回避が間に合わず、上からの奇襲を喰らってしまった。

「きゃっ！」

「——！オラッ！」

親友がすかさず攻撃者に蹴りを見舞うが軽々と躲かされてしまう。攻撃を受けた彼女の前に立ち、距離を取った相手に愛剣を抜き去り構える。攻撃者は、攻略本にも載っていた要注意モンスターだった。レベル7猿型モンスター《ハイロリス》。小型ですばしっこく、何より厄介なのが毒攻撃を使ってくることだ。左端に小さく表示されたパーティメンバーのHPバーの一つが毒状態を意味する紫色に染まる。「運悪いな、長居しないから大丈夫だと思っただけど」

「へっ何言ってるんだ。運が悪いのはアイツだろ？」

不敵な笑みを浮かべる親友は拳を構えた。彼の言いたいことはわかる。

「まあ、どんなに速くても俺には見えるし、この程度の相手だと——なら一撃だし、せつかく喰らわせた毒も——には意味ないし。確かに可哀想になる」

親友の拳が鮮やかなエフェクトをまとう。

「もう、びっくりしたよ！」

後ろで言う彼女のHPが減っては急激に回復しているのを確認した俺は、視線を《ハイロリス》に集中させる。ヤツが短く吠えた直後、親友に向かって薄い赤のラインが一直線に伸びた。

「真正面から直進！」

「あいつよお!!」

俺の声に合わせて親友は大きく一歩踏み込み、渾身の右ストレートを放った。エフェクトをまとった拳は跳躍して来た《ハイロリス》を的確に捉え、一撃でHPを消し飛ばした。

「やい！」

「息ぴったりじゃん！」

ポリゴンの残片が漂う中、二人とハイタッチを交わして喜びを分かち合う。デスゲームという異常な状況の中でも、こんなに楽しいと感じるのは二人と一緒にいるから、与えられたスキルがあるからだとは信じて疑わなかった。

Ep. 31 月夜の黒猫団

〈サツキside〉

「ここか」

「・・・そうみたい」

アルゴから買った“黒の剣士”^{キリト}の居場所、中層ギルド《月夜の黒猫団》のホームはそこそこ広めの一軒家だった。団員は六人だけなのでかなり頑張つてコルを貯めたのだろう。外見や玄関周りも手入れが行き届いており、大切にしていることが分かる。

「行くか」

ギルドマークが装飾された扉を二回ノックして返事を待つ。少しして、中から若干怯えた感じの女性の声が聞こえた。

「・・・どちら様でしょうか？」

「えーっと、俺らキリトに会いに来ただけど、今いる？」

「えっ、キリト・・・？」

「ちよつと、あなた少しどいてなさい」

何やら疑心暗鬼にってしまったようだ。自分のコミュニケーション能力の低さに嘆いていると、副団長が俺をどかして前に出た。打つて変わって優しい笑顔で話し始める。

「はじめまして、私は血盟騎士団のアスナといいます。こちらはサツキくん」

「えっ、血盟騎士団・・・！」

驚きの声と同時に扉がゆっくり開かれ、一人の少女が目を輝かせながらこちらを見てきた。少し青みがかった黒髪を揺らす少女に副団長は改めて続けた。

「突然ごめんなさい、キリトくんに急ぎの用事があつて伺いました」
目を輝かせていた少女だが、キリトの名を聞いてから困惑気味になつた。

「あつ・・・キリトは今、他のみんなとレベル上げに行つて・・・い

ません」

「留守か、何時頃に帰って来るかわかる？」

極力穏やかに問いかけると、少女は慌てることなく答えてくれた。

「えっと、多分あと一時間もしない内に帰って来ると思いますが・・・」

「そうですか・・・ではまた後でお邪魔しますね」

「あつ、待つてくださいー！」

そう言い残して立ち去ろうとする俺たちを、少女が呼び止めた。

「良かったら、中で待っていてください」

「こんなモノしかないですけど、良かったらどうぞ」

「ありがとうございます」

「どうも」

丁寧に飲まれたコーヒー的な飲み物を頂きながら、キリトが帰って来るのを待つ。通されたのは広々としたリビングルームだ。様々なインテリアが置かれていて、俺が見たどの部屋よりも生活感があり暖かい。部屋を見ただけでこのギルドの雰囲気分かる。

「・・・良いギルドだな」

「えっあ、ありがとうございます」

思わず零れた眩きに少女は笑った。並んだ俺たちの正面に座った少女は、おずおずと緊張した様子で話し出した。

「まだ名乗ってませんでしたね・・・はじめまして、私はサチといいます」

改めて聞くその声と揺れる黒髪にどこか既視感を感じるが、答えを出す前にサチが続けた。

「あの、お二人は攻略組・・・なんですよね？」

「ええ、血盟騎士団というギルドに所属しています」

「知ってます、少数精鋭の最強ギルド・・・それにあの、副団長のアスナさんと、剣豪のサツキさん、ですよね」

「おお、いつの間にか俺も有名人だな」

副団長はともかく、俺の名前が出たのは意外だった。

「有名ですよ、キリトもよく話してくれます」

「へえ、例えば？」

「“ステータス的な強さはもちろんだけど、彼の剣には俺が持っていない強さが込められている” って」

「めっちゃ褒めるな」

そんなに評価が高かったとは素直に嬉しい。最初とは打って変わってサチと順調なやり取りを交わしていることに安堵していると、今度は副団長が口を開いた。

「サチさん、すごく個人的な質問なのだけど」

「は、はい」

どこか鬼気迫る感じの副団長にサチが身構える。俺は大方の予想はできていた。

「キリトくんとは、どうやって知り合ったの？」

だろうな、と思った。

副団長が今一番知りたいであろう疑問、かく言う俺も気になるところだ。ずっと独りで戦って来た彼が、このアットホームな雰囲気を中心に引かれるのはわかる。だが片や単独で最前線に挑む者、片や中層で安全な狩りをする者。両者に接点などなかったはずだ。

「・・・キリトと最初に会ったのはレベル上げの帰りでした。ちよっと大きめの群れと戦闘になったんです。安全マージンは十分に取っていたんですが、後退しながら戦っていたらどんどん他のモンスターを引っかけちゃって。私は元々戦うのが怖くて役に立てなくて、みんなも焦りが大きくなっていったんです・・・その時に助けてくれたのがキリトでした」

その時のことを思い浮かべているのか、サチはほっとした嬉しそうな表情を浮かべていた。

「みんなで協力して一体ずつ倒して、全部やつつけた時はすごい盛り上がりしました。それで、そのままキリトを連れて当時ホームにしたた宿屋で打ち上げをしたんです。そこでキリトがギルドに加わってく

れました」

「そんな経緯だったのか」

見知らぬ人でもフィールドで危険な状況に陥っていた場合、助けに入るのが攻略組では暗黙の了解になっている。戦闘後に短く礼を言うだけで済ませている俺たちからすれば、打ち上げなんて大袈裟だと思うが彼らにとってはそれほど恩を感じる事だったのだろう。

「あの、お二人はキリトと・・・?」

「俺も危ないところを助けてもらったんだ」

カグマとの死闘が脳裏を過ぎる。

「私は・・・私も、彼に助けてもらったの。数え切れないほどね」

過去を懐かしんでいるのか、副団長は優しい笑みを浮かべていた。それは同時に、何かを抑え込んでいるかのように俺には見える。天井に吊るされた照明を眺めながら俺は呟いた。

「じゃあ俺らが今こうして話してるのは、キリトのおかげってわけだ」
「そうね・・・」

キリト自身は気付いているか分からないが、彼は周りに大きな影響を与え続けている。そんな存在が最前線からいなくなったのはやはり痛手だと思うが、それを非難するつもりは毛頭ないし、ユニークスキルを持ちながら今まで攻略に参加してこなかった俺にそんな権利はない。

「ところで、キリトに急ぎの用事ってなんですか?何か困ったことでも・・・?」

いきなりズバツと聞かれて答えを言い淀む俺に対し、副団長はその問いを想定していたようではつきりと答えた。

「皆さんが揃ったらお話しします。キリトくんだけに判断できる話ではないと思うので」

副団長らしい回答だと思った。キリト一人に話せば、きっと彼は誰にも相談することなく悩むだろう。だから最初からギルドメンバー全員の前で話し、みんなで相談するように配慮したのだ。

だがそれは副団長の知っているソロプレイヤー・キリトの話で、月夜の黒猫団・キリトの話ではない。

緊張の戻った表情のサチに、俺は雑談でもするかのように声をかけた。

「ところで、キリトが『ビーター』だって知ってる?」

一瞬で空気が変わったのは気のせいではないだろう。

「ちよつと、サツキくん」

副団長が俺を咎めるが、サチの回答は俺の予想通り、副団長にとっては予想外のものだった。

「はい、知ってます。話してくれました」

驚きと何かを察した様子の副団長が俺に視線を送ってくる。俺の言いたいこと、キリトは変わった、もう独りじゃないと理解したようだ。

「どう思った?」

「その当時は『ビーター』に悪い印象しかなかったので、とても驚きました。でもキリトが自分の気持ちを正直に話してくれて、誰も責めませんでした」

「キリトくんが自分から・・・?」

「はい、きつかけはクリスマス・イブの日でした・・・新しい家具を買うお金を稼ぐために迷宮区に行きました。目標額を稼ぎ終えて帰ろうとした時、まだ手付かずだった隠し部屋を見つけて、中に大きめの宝箱があつてみんな喜んでいたんですけど、キリトだけが開けない方がいいって言ったんです」

迷宮区の隠し部屋、しかも宝箱が置いてあるとなれば俺の経験上八割方がトラップだ。キリトもそう勘繰ったのだろう。

「結局、多数決で宝箱を開けたんですが・・・その瞬間にモンスターの大量が押し寄せてきて、部屋の端っこに追いやられました。みんなパニックの中、キリトが一人でモンスターを相手にしていたんですが数多くて・・・このままここで死ぬんだ、って・・・」

ここでふと記憶が呼び起こされる感覚があった。サチの話、その時の光景が鮮明に思い浮かぶ。

「その時でした、誰かが塞がれていた入口を破壊して助けに来てくれたんです」

——俺やん！

心の中で俺は盛大なツツコミを炸裂させた。俺の記憶とサチの話が見事にリンクした途端、急な小っ恥ずかしさが全身を襲う。

そんなことあつたな、と思えばキリトがそれっぽいことを言っていた気がする。俺に助けられたとかナントカ言ってたのはこの事かと合点がいった。

「モンスターを全部倒した後、助けに来てくれた人はキリトと話してすぐにいなくなっちゃったんですけど・・・その日帰ってからみんなにビーターだと教えてくれました」

「その助っ人が何か言ったのかしら？」

「そ、そうじゃないかな？」

ややこしくしないように助っ人が俺だったとは黙っておく。正直、その時キリトとどんな会話をしたのか覚えていないし、俺のせいでキリトが攻略組離脱を決意したのなら目も当てられない。

俺は冷や汗をかきながら、誤魔化すようにサチが出してくれたコーヒーに手をのばした。

◆？

〈アスナside〉

攻略組から離脱し、動向が分からなかったキリトくんがギルドに所属していた。

驚いたと同時に私は安堵した。ビーターの蔑称を背負い、独りで戦い続けていた彼にも、ようやく帰る場所、守るべき仲間ができたのだ。自分がそういう存在になれなかったことに胸が痛むが、それでも私は嬉しかった。

そして彼にはもう頼れないという現実が、再び私にのしかかってくる

る。

押し潰されそうな心を誤魔化すように、私はサチさんに彼についてもっと詳しく聞こうと口を開きかけた、その時だった。

「二「ただいまー!」二」

玄関の扉が開かれ、元氣よく合わさった四人の声が室内に響いた。遅れてもうひとつ、聞き慣れた、懐かしい声。

「ただいま」

帰宅した5人の黒猫団メンバーは、私とサツキくんを見て固まった。誰も状況を理解できていない中、キリトくんだけは驚いて目を見開いていた。

「おっす、久しぶり」

サツキくんの挨拶が沈黙の中に消えていった。

◆?

〈サツキside〉

遠巻きに俺たちを見ていたメンバーから、KOBや攻略組、剣豪といった単語が聞こえてくる。副団長の格好や俺たちの頭上に表示されているであろうギルドマークから一目でわかったのだろう。

「サチ、この方たちは?」

先頭の男が俺たちとサチを交互に見ながら言った。それにサチが答える前に、彼の肩にキリトが手を置く。

「俺の知り合いだ、ケイタ」

知り合い。その単語に副団長が微かに反応したことを俺以外は気付いていない。キリトは一步前に出るといつもの笑顔で俺たちに言った。

「久しぶりだな、二人とも。びつくりしたよ。突然どうしたんだ?」

「急に押しかけて悪いな、キリト。話がある」

「・・・聞こうか」

何かを察したのか、キリトは真剣な様子でサチの隣に座った。

「あの、僕たちは聞かないほうがいいですか？」

「いや、全員聞いてくれ」

まだ状況が分からない様子のケイタを始め、残りのメンバーも流されるままに席についた。副団長を見るが、キリトを前に緊張しているのかとても話せるような感じではないので、代わりに俺が切り出す。

「単刀直入に言う、キリト。お前の助けが必要だ」

「・・・ボス戦なら参加しないぞ」

「ああ、それは分かっている。だが今回はボスよりも厄介な相手だ」

「どういう意味だ？」

俺はここを訪れた目的の核心をつく。

「ラフコフだ」

「ツ・・・!？」

その衝撃はキリトだけでなく、黒猫団メンバー全員を襲った。それもそうだろう。アインクラッドでラフコフの名を知らない者はいないのだから。衝撃が収まらない彼らに俺は続ける。

「明後日、俺たちは討伐隊を編成してアジトを襲撃する。キリト、お前にも手伝ってほしい。元攻略組の実力と判断力、ラフコフ幹部との接触経験。それを俺たちに貸してほしい」

「・・・」

伝えるべきことは伝えた。後は彼ら次第だ。

重苦しい沈黙が部屋を支配する。沈黙デバフを喰らったかのように誰も何も話さない。気まずさを誤魔化すためのコーヒーはすでに飲み切ってしまった。

体感数十分の沈黙を破ったのは、サチだった。

「・・・それは、キリトに人殺しの手伝いをしろ、ってことですか・・・？」

一瞬、理解が追い付かなかった。

「違うわ、サチさん。あくまで捕縛が目的です」

俺よりも頭の再起動が早かった副団長が言うが、続くサチの言葉はもつともなことだった。

「でも、もし捕まえることが出来なかったら・・・その時は、どうするんですか？相手は本物の人殺しですよ・・・？どうしようもなくなったら・・・」

その先は続かなかったが、サチの言いたいことは分かる。それは俺も考えていなかったわけでないし、副団長もそうだろう。ここは誤魔化さないで、正直にぶつかるべきだ。

俺は普段と変わらない調子を取り繕って、確かに告げた。

「そうだな、もし捕縛することが困難な状況になったら・・・その時は、殺すしかない」

全員が息を呑んだ。言葉にした俺の動悸も加速する。だが言わなければならぬ。

「どんな理由があっても殺人は罪だ・・・相手がラフコフでもな。けどヤツらがいなくなること救える命があるはずだ。そのためなら俺は、自分の剣を血で染める覚悟、罪を一生背負っていく覚悟はできている」

ラフコフの被害者に会ったのは一度や二度ではない。残された者の悲しむ姿はもう見たくないし、繰り返ししてはいけない。そのためにはラフコフを潰さなければならぬ。間違っていると叫んでも、その手段しかないのなら俺は迷わない。

「サツキ・・・」

「サツキくん・・・」

「キリト、強制はしない。みんなでよく考えて決めてほしい・・・」

何かと葛藤するキリトと、様々な思いが交錯しているであろう黒猫団メンバーたちを見て、俺はこれ以上何も言うことはないと思った。副団長を見ると、彼女も同じように俺を見て小さく頷いた。

帰ろう、副団長にそうアイコンタクトして立ち上がろうとした時だった。

——けて

ねがい

助けて！

「ツ……！」

頭に聞き覚えのない、まだ幼さが残る少女の声が響いた。 レーザァーティン 霊 剣
の感応現象、ここまでハッキリと聞こえたのは初めてだ。俺の異変に
気付いた副団長が何かを言う前に、俺は何でもない様を装って立ち上
がる。

「じゃあな」

「……失礼します」

俺と副団長は黒猫団のホームを後にした。本部への帰り道、どちら
からも話すことはなかった。

無言で歩き進める中、先ほどの少女の声が妙に頭に残っていた。

Ep. 32 作戦前夜

〈アスナside〉

作戦を数時間後に控えた夜、アスナはギルド本部の自室から外を眺めていた。

他のメンバーはすでに眠りについてはいるはずだが、ベッドに入ってから一時間が経過してもアスナは眠れずにいた。準備したアイテムや装備の点検をしたり、すでに暗記してある作戦概要を見直して眠気を待つが時間だけが過ぎていく。

キリトの元を訪れてから一日が経ったが、未だに彼から連絡はない。

ふと、自分がリーダーを務めるA班の編成に目が止まった。サツキを始めとする血盟騎士団メンバーの名が連なる中、一番下に新しく書き加えられたキリトの名。彼も参加するかもしれないと伝えた時は微妙な空気になったが、心強い助っ人が来てくれるという認識で収まっていた。なぜ自分の班に加えたのかはアスナ自身も分からない。夜空を照らす蒼い月を見上げる。

サツキがみんなに吐露した覚悟は、向き合わなければと分かっているながらアスナが目を逸らしてきたものだった。殺人に手を染めた人間を相手にして、こちらの思い通りの状況になるわけがない。様々なパターン、最悪を想定しなければ。

消えない不安を紛らわすため、アスナは月明かりに反射したイヤリングにそっと触れる。覚悟を決めた彼は、今どうしているのか少しだけ気になった。

◆？

〈キリトside〉

サツキとアスナが去ってから、部屋は沈黙に包まれていた。いつもなら一日の振り返りで賑わう時間だが、今はとてもそんな空気じゃない。俺は天井を仰いで考える。

ラフコフの殲滅は確かに必要だと思う。このまま放置しておけば確実に犠牲者は増え続ける、その前に止めなければならぬ。以前の俺なら何の躊躇もなく討伐隊に加わっただろう。しかし今は――

「キリト」

ケイタに呼ばれて視線を戻すと、心配そうに俺を見つめる五人の仲間が映る。

そう、今の俺は独りじゃない。大切な仲間、帰る場所ができたんだ。今までの全てを捨ててこの五人を守ると決めた。

そう、守りたいから。だから俺は――

「みんな、俺は・・・行くよ」

「・・・そっか」

サチは頷いた。彼女だけじゃない、みんなもただ頷いた。否定の声はなかった。

「反対しないのか？」

「しないよ、キリトが決めたことだから」

「俺たちじゃあ力になれないしな」

サチが瞳に強い意志を宿しながら俺に言った。

「キリト、二つだけ約束して。絶対生きて帰ってくることを、そして・・・何があつたか正直に話して。例え最悪な結果だったとしても、私たちは受け入れるから」

「サチ・・・」

みんなが頷く。もう、迷いはなかった。

◆？

「期待の新人 史上最速で全国ツアーへ！」

大手ネットニュースサイトのトップに大きく掲載された見出しに、私は複雑な気持ちになっていた。

一度は諦めた幼い頃からの夢——歌手になってから半年余り。右も左も分からないまま、ただ我武者羅に活動を続けてきた。自分が思ったこと、感じたこと、考えたことを込めた歌はネットを通して広がり多くの反響を呼んでいる。今や注目の新人歌手としてテレビ出演も珍しくない。

だが世間が私に注目する度、忘れられているように感じる。死者が3000人を超え、未だに7000人近くが仮想世界に囚われている《SAO事件》のことを。忘れてはいけないのに忘れようと、目を背けているのではと思ってしまふ。

私一人の力ではどうすることも出来ないのは分かっている。だから、せめて私だけは忘れないようにと毎日願う。

「・・・頑張って、咲月」

自分の夢を応援し続けてくれた彼に、もう一度会いたい。その想いが全身を満たしていた。

◆？

「私たちも、攻略組になろう」

「・・・は？」

テーブルを囲んで夕食を食べていた時、彼女が突然言ったことに俺と親友は間抜けな声を揃えた。彼女は至極真面目な表情で続ける。

「今まで考えてきたけど、やっぱり私たちの力はゲームクリアに使うべきだと思うの。本当は二人もそう思ってるんでしょ？」

否定は出来なかった。

デスクゲーム開始から八ヶ月、俺たちは与えられたスキルを自分達の

為だけに使って中層ゾーンで安定した生活を送っていた。行ったことがないが、最前線でも十分に通用する自信がある。攻略組に、と考えたことがないわけでないが、生還することを第一に考えるとやはりそんな考えは霞んでしまう。てつきり二人も同じだと思っていたので、彼女からの進言には本当に驚いた。

「――、なんで急にそんなこと言うんだ？」

親友が食事の手を止めて彼女に聞いた。俺も手を止めて彼女の回答を待つ。

「・・・最近仲良くしてる子が、怖いんだって」

「いつも話してる子？」

「うん」

いつの間に関り合ったのか、彼女は最近はじまりの街で閉じこもっている女の子と仲良くなっていた。俺と親友は直接会ったことはないが、彼女が毎日その子について話すのでだいたいの人物像は把握している。

「いつか突然モンスターが街に入って来て殺されるんじゃないか、ゲームクリアまで現実世界の体が耐えられないんじゃないか・・・ってね」

「まあ、その不安は分かるよ」

二つとも考えられることだ。でも今の俺たちにどうこう出来る問題ではない。

「なあ――、今の攻略ペースだとどれくらいで百層までいけると思う？」

「え？そうだなあ、今のペースを維持できれば早くて一年、長く見積もっても二年でいけると思うけど」

「人間って寝たきりで二年も持つのか？」

「植物状態でも二年以上生きた人もいるから、多分大丈夫だと思う。そこから普通の生活に復帰した人はいないから、何とも言えないけど」

親友は珍しく頭を回転させているようで、難しい顔をして黙った。話題を切り出した彼女も同様に黙りこくっている。

らしくない二人を見ていたからか。

「・・・じゃあ、試しに行ってみる？最前線」
俺らしくない判断をしてみたのは。

〈サツキside〉

夜の帳に包まれた第七層の辺境村には、俺と副団長を始めとするKOBメンバーで構成されたA班の面々が集まっていた。時間帯もあつて俺たち以外のプレイヤーはいない。各々が作戦前の最終準備に取り掛かっている中、俺はいつも以上に険しい顔をしている副団長に話しかけた。

「大丈夫か？」

「・・・ええ、心配ないわ」

とてもそうは見えないが言及はしない。俺は近場にあつたベンチに座り蒼い月を見上げた。アインクラッドの月は基本的に蒼色だが、ごく稀に血で染めたかのような真っ赤な月が昇ることもある。条件は不明だ。

「ねえ、サツキくん」

「ん？」

視線を戻すと、副団長は俺から微妙な間を空けてベンチに座った。

「あなたは、怖くないの？」

「なにが？」

「これから戦うのは私たちと同じ人間・・・殺人に手を染めているとはいえ、私たちと同じSAOの被害者なのよ。あなたはもしもの状況になったら、殺す覚悟があると言ったけど・・・」

「ああ、殺すよ」

あまりに自然と言ったからか、副団長が目を見開く。俺は背中に吊った鞘からレイヴァーアイン 剣を引き抜いた。流麗な刀身に月明かりが反射する。

「殺して、ソイツの魂も連れて行く。呪われようが構わない。全部背負って、ラスボス倒して、みんなでここから還る。そうすれば、死んでいった人たちも少しは報われるんじゃないかって思ってるから」

俺のただの自己満足かもしれない。だが死者の記憶を垣間見ると、何かしてやりたいと思ってしまう。

「サツキくん・・・」

「まあ、そうならないのが一番なんだけだな」

霊剣を収めて笑った俺の手を、副団長が閃光の速さで掴んだ。突然のことで驚く。

「ど、どうした!？」

「サツキくん」

至極真面目な表情で、正面から俺を真っ直ぐ見つめた副団長は告げた。

「前も言ったでしょう、あなただけじゃない。私も、シユガーくんもノちゃんも、みんなで背負うから。一人で無理はしないで」

「あ、ああ。そうだったな」

俺が言うと、副団長は穏やかな笑顔を浮かべ頷く。しばらく沈黙して見つめ合っていたからか、突然かけられた声に俺と副団長は驚いた。

「取り込み中のところ悪いんだけど・・・」

バツと勢いよく視線を前に戻した俺は、いつの間にか目の前に立っていた人物を見てさらに驚いた。

「来たか、キリト」

「ああ。二人とも何してたんだ?」

「は、話してただけだ、気にすんな」

夜の闇に溶け込む全身黒づくめの剣士は、訝しげに辺りを見渡すと言った。

「これで全員なのか?」

「いや、これが俺たちの班——ってそうか、作戦の詳細は話してなかったな」

「まだ時間があるから説明するわ。キリトくん、それにサツキくんも、もう一度よく聞くように」

「ああ」

「りょーかい」

資料を広げながら始まった副団長の説明を俺とキリトは黙って聞いた。何度も復習した俺はともかく、キリトは途中でいくつか質問を挟んだだけで理解したようだ。

「揃ってるようだな」

特徴的な語尾に俺たちは視線を向けた。またしてもいつの間にかたのかアルゴが俺たちのすぐ傍に立っていた。

「お前ら隠蔽スキル高過ぎない?」

「サー坊の索敵が低いんじゃないノカ?」

ニシシと笑うアルゴはキリトに向き直った。

「久しぶりだな、キー坊。協力に感謝するゾ」

「アンタには返せてない借りが山ほどあるからな」

「これから返してくれば良いサ、ちようど人手が欲しい仕事があるンダ」

「・・・時間があればサツキと一緒に手伝うよ」

「俺を巻き込むな」

口を滑らせたなど内心笑っていた俺は、思わぬ飛び火に異を唱える。

「さて、冗談はこれくらいにしテ・・・この班は準備ができたみたいだな」

気付けば俺たちの周りに他の班員が集まっていた。準備万端、というのが雰囲気から感じ取れる。俺も気持ちを切り替えて立ち上がった。

「作戦通り、待機場所まで前進してクレ。B・Cの突入準備が完了したらまた伝えに来るヨ」

「わかりました、お気を付けて」

「見つかるなんてヘマすんなよ」

「オイラはそんなミスしないヨ。サー坊こそトチ狂って勝手に飛び込むナヨ?」

「その時は俺とアスナが止めるさ」

「ええ」

「お前ら俺をなんだと思ってるんだ」

音もなく去って行くアルゴを見届け、俺たちA班は迷宮区内の待機場所まで前進を開始した。

◆?

〈ノノside〉

「ノノちゃん、大丈夫？」

「ええ、心配ないわ」

口ではそう言いつつ、愛刀《霞桜》を握る私の左手は微かに震えていた。しかしこの震えは、シユガーが危惧しているであろう恐怖や怯えから来るものではない。長い間夢見てきた局面をようやく迎えることが出来る武者震いだ。

一度大きく深呼吸して心を落ち着かせる。

目先20メートルほどには、ラフコフのアジトとなっている安全圏特有の光が見えている。B隊がこの場に待機してからおよそ十分、もうすぐ全班の準備が整って突入するはずだ。

主力であるA班の突入を合図に、KOB数名と風林火山で構成されたB班と聖龍連合オンリー構成のC班が、一斉に突入する。逃げ道を無くして一網打尽にする戦法だ。圧倒的な力の差を見せつけられ、いかに狂った殺人者と言えど戦意を喪失して降伏するだろう。

だが私の戦いはそこで終わらない。

間違いなく、確実にアイツは現れる。

アイツにとつてこんな絶好のチャンスはないし、これも運命と呼ぶべきか全ての役者が揃っている。

「・・・絶対に、逃がさない」

誰に聞かれることなく、私の眩きは消えていった。

◆?

〈サツキside〉

「準備はいいカ？」

「ああ」

通路の陰に身を潜めた俺たちは、アルゴの問いに静かに頷いた。予定通りに全班が配置に着き、あとは俺たちA班が突入して作戦を開始するだけだ。各人が武器を手にとって副団長の指示を待つ。

「・・・サー坊、最後に一ついいカ？」

「この直前にどうした？」

俺にだけ聞こえる極小のボリウムでアルゴが言った。

「オイラの杞憂だといいいんダガ・・・ノノっちを気にかけてクレ」

意外な名前が出てきて疑問符が浮かぶが、俺は反射的に答えていた。

「心配すんな、誰も死なせないよ」

「・・・ああ、待ってるからナ」

そう言い残してアルゴは隠蔽スキルを発動させて姿を消した。俺たちの帰りを街で待つのだろう。俺は頭を切り替え、両手の愛剣を握り直し、その時を待った。

数秒、あるいは数分か。

「——行きます」

副団長の一声で、俺たちは鬨の声を上げつつアジトへ突入した。

「全員動くな！大人しく降伏しろ！」

勢いよくなだれ込んだ俺たちは武器を構えて叫んだ。一呼吸置いて残りの入口からB・C班が突入して来る。

「なんだてめえら!!」

怒号を発するのは、アジト中央に固まったラフコフメンバーの八人。俺たちのそれと比べれば遥かに劣るであろうエモノを手に、戦闘態勢に入った。俺も愛剣たちを構えるが、ここで異様なことに気付く。

「残りはどこだ・・・?」

そう、視認できた敵はこの八人だけなのだ。咄嗟にアジト内を索敵するが、マップには突入直前に確認した時と同じ四十近くのレッドが表示されている。

どういうことだ——思考を加速させようとしたその瞬間、俺たちの頭上から狂気に満ちた幾多もの奇声が降り注いだ。

「殺せえええ!!」

「ヒヤツハアアアアアツ!!」

「攻略組イイイ!!」

上を仰げば、どこに隠れていたのかラフコフのメンバーが俺たちに向かって飛びかかって来ていた。俺は反射的に横に転がり回避する。だが俺の耳には、恐怖に染まった絶叫が聞こえてきた。

「うわあああ、やめろ！来るなあ！」

「ハハハハハッ！死ぬ！死ぬえええ！」

逃げ遅れた一人が、ラフコフ二人に囲まれていた。彼だけでない、他にも数名が倒れたり武器を刺されたりして動きを封じられている。B・C班も同様に奇襲を受けたようで混乱しているようだ。

「なんで・・・情報が、漏れていたの・・・?」

狼狽する副団長にかける言葉が瞬時に出てこない。代わりに俺は出しうる限りの声量で叫んだ。

「みんな落ち着け！態勢を立て直すんだ！」

「自分より仲間の心配かあ？随分余裕だな剣豪さんよお!!」

「——ッ！」

より狂気じみた声とともに振るわれた小型のダガーを弾き返して攻撃者と距離を取る。微かに黄色く光るダガーを構えていたのは、不気味な頭陀袋を被った男だった。見間違えようのない――

「ジョニー・ブラック・・・！」

「いよお、初めましてだなあ？」

ふらふらと体を揺らしながらジョニーは笑った。ラフコフ幹部の一人で、麻痺毒を使い自由を奪った後ゆつくりと捌り殺すのを楽しみとするコイツの最大の脅威であるダガーに意識を集中させる。

「いやあ、まさかここまで正確な情報だったとわなあ。一体どこから流れて来たんだか」

やはり作戦の情報は流れていたようだ。だが今さら悔やもうと意味はない。周りで響く怒号と絶叫で耳が痛い。

「それでえ、どうすんだ剣豪さん？俺たちを殺す覚悟はあるって聞いてるぜえ？邪魔が入る前に殺す気で楽しもう！」

「・・・ああ、来いよ。相手してやる」

俺は愛剣たちを握り直してジョニーとの戦闘、いや殺し合いを始めた。

〈アスナside〉

ラフコフの待ち伏せを受けて戦場は大混戦に陥っていた。一体一では勝てないと踏んでか、討伐隊一人に対して三人がかりで襲って来る。それも連携なんてものはなく、殺意に動かされるままの無茶苦茶な攻撃だ。

「死ねえええ!!」

振り下ろされた粗雑な剣をアスナはステップで避ける。続く攻撃を愛剣で弾き返す。性能の差で軽々とパリイできるが、敵は構うことなく武器を振るってくる。

拘束するには足や腕の部位欠損をしなければならぬが、この局面

でもアスナはプレイヤーに剣を向けることに躊躇いがあつた。同時にそれが自分と仲間を危険に晒すことだと理解している。周りではすでに拘束すべく剣を交えている者もいる。すぐ近くではサツキが幹部のジョニー・ブラックと死闘を繰り広げていた。

「大丈夫だ、アスナ」

攻略組であつた頃と遜色ない剣戟で敵の足を切り飛ばしたキリトは、アスナに語りかけた。

「何も怖がることはない。俺たちは勝てる」

あの頃と変わらないその声に、アスナは徐々に冷静さを取り戻した。そうなることで周りの状況も見えてくる。幸いと言うべきか、まだ犠牲者は出ていないようで、どの班も態勢を立て直して戦闘を始めていた。

「黒、の、剣士」

「・・・相変わらず趣味の悪い格好だな」

「お前、には、言われ、たくない、な」

途切れ途切れの不気味な声。アスナは遭遇するのが初めてだが、その異様な存在感から只者ではない。そして特徴とも言える骸骨マスクから覗く赤い眼。

「・・・赤眼のザザ」

零れたアスナの眩きに、キリトは片手剣を構えながら言った。

「ああ、俺はヤツの相手をするから、アスナは他を頼む」

「・・・わかった、気を付けて」

頷いてザザに向き直ったキリトから目を離し、アスナは激化する戦場を走った。

◆？

〈サツキside〉

対毒ポーションを一気に流し込み、空になった瓶を投げ捨てて迫る

ダガーを白の魔剣で弾く。間髪入れずに霊剣で“スラント”を発動させるが、素早いバックステップで避けられる。対毒ボーナス時間を確認しつつ決定打になる技の組み合わせを模索するが、まだ導き出せない。

「いやあ、やっぱ強えよ攻略組」

子供のように無邪気なジョニーは心底愉しそうだ。俺は挑発も兼ねてわざとらしく言う。

「そんな余裕こいてて良いのか？お前ら如き、真つ向からぶつかれば俺たちの敵じゃないんだぜ？」

「言うねえ！ま、その通りなんだけど」

すでにA班はラフコフメンバーのほとんどを拘束している。B・C班も勢いを取り戻して士気も高いため、戦況は俺たちに傾き始めていると言っているだろう。リーダーのPOHが姿を見せないことが気がかりだが、この場で幹部二人を拘束できれば戦果は大きい。

「もう降伏したらどうだ？」

「バカ言え！こんなパーティーを早々に切り上げるなんて有り得ねえよ！」

突進して来るジョニーのダガーが仄かにライトエフェクトをまとう。俺はそれを見て発動したソードスキルが“ラピッドバイト”であること、そして俺の勝利を確信した。

加速して一筋の光となったダガーが、俺の心臓目掛けて迫る。避けるか弾く、ジョニーはそう予測してるはずだ。

だから俺はその場から動かなかった。腕をだらんと下げて構えもしない。何か察知したのか、ジョニーは技をキャンセルしようとした。だがその瞬間に、俺の射程内に入っていたジョニーの右手が宙を舞った。

OSS“デッドリーダンス”

初見での回避は不可能と自負している最速の一撃がジョニーを捉えた。呆気にとられている間に、二連撃技“リバース・サイクロン”で両足を切り飛ばし動きを封じる。

「ガハッ！」

為す術なく地面に倒れたジヨニーは、俺を見上げて強気に笑ってみせた。

「なんだ今の？何しやがった」

「誰が教えるか。大人しくしてろ」

念の為にもう片方の手も切り落とそうかと考えていた俺に、ジヨニーは続けた。

「ハハハッ！剣豪さんよお、一つ良いこと教えてやろうか？」

「なんだよ、ふざけた事だったらその頭陀袋引つ剥がしてやるからな」

「マジでお前たちにとって良いことだぜ・・・」

ジヨニーは口元に歪な笑みを浮かべ、耳を疑うことを言った。

「実は最近よお、四人目の幹部が誕生したんだ」

「・・・はっ！」

戦慄が全身を駆け巡った。

〈アスナside〉

「拘束した者は入口付近に集めてください！」

向かって来る敵の足を“リニア”で穿ちながら、アスナは近くの団員に指示を飛ばした。

拘束されたラフコフメンバーが喚き散らしながら連れて行かれるのを見届け、改めて辺りを見渡す。ラフコフの大半は無力化・拘束されているが、幹部を相手にしているサツキとキリトは未だ激しい戦闘を続けていた。早く残りを片付けて加勢しよう、アスナがそう思った時だった。

「なっ、んだ・・・お前」

後方から驚きと戸惑いの声が聞こえた。反射的に振り返ったアスナが見たのは、入口付近で不自然に倒れているKOBメンバーと、それを見下ろす一人のプレイヤーだ。

白。目が痛くなるくらい白い。ショートヘアも軽量化重視の最低限金属防具もロングブーツも、全てが汚れ1つない純白だった。ダンジョン内どころか街中でも目立つであろうその姿に、今まで気付かなかったことに強烈な違和感をアスナは感じた。間違いなく討伐隊のメンバーではない、ラフコフの一員だ。

アスナは倒れている仲間を助けるため、白の剣士目掛けて走り出した。突っ立ったまま動かない白の剣士に“リニア”を見舞う。流星の如き一閃、しかしわずかに掠めることもなく軽々しいステップで避けられてしまった。

——強い。

その動きだけで、相手がかなりの實力であるのアスナには分かった。意識を集中させ愛剣を構えたアスナ、そこで異変に気付く。

「あ・・・っ・・・が、あああ・・・！」

足元に倒れるKOBメンバーが、アスナに何かを伝えようとしてい

る。しかし言葉にならず内容が分からない。麻痺状態時の音量制限かと思われるが、今は自分でポーションを使ってもらうしかない。そんな隙を敵が見逃してくれるわけがないからだ。

そう視線で訴えた時だった。注視していたため頭上に表示されたKOBメンバーのHPバー、麻痺状態を意味する緑色の枠に囲われたその横に、2つのデバフアイコンがあった。攻撃力低下と防御力低下。2つともモンスターの特殊攻撃かフィールドトラップでしかかかる事の無いものだ。今かかるのは有り得ないし、なにより七層にこのデバフを使うモンスターもトラップも存在しない。

考えられるのは――

「まさか……!」

一つの恐ろしい仮説を導き出したアスナ、しかしその直後に白の剣士が動いた。右手に提げた赤紫色の細剣を中段に構えて疾駆する。同じ武器の使い手であるアスナは、その動作から相手のソードスキルを予測する。だがまだまだ射程外の距離で、白の剣士の左手が閃いた。

「うっ……!」

空気を斬る音と同時に飛来したのは投擲用のピックだ。その速度と小型ゆえに回避が出来ず右肩に被弾し、HPが0.5%ほど減少する。だが構わず追撃に備える。

が、突然アスナの視界がぐにやりと歪んだ。

「……え」

全身の力が抜け、立っていられずその場に崩れ落ちる。腕が足が口が全く動かない。かろうじて動く目を上に向けると、白の剣士が虚ろな瞳でアスナを見ていた。

遠くからでは分からなかったが、白の剣士はとても殺人ギルドの一員とは思えない幼い少女だった。アスナより年下だろう。しかし彼女が放つ雰囲気は常人のものではない。

白の剣士はゆっくりと近付き、なんの躊躇いもなく赤紫色の刀身をアスナの体に突き立てた。

「あっ……」

不快な神経ショックとともにHPが二割ほど減少する。見れば、麻痺状態に加えて攻撃・防御力低下、さらにもう一つ見たことの無いデバフアイコンが並んでいた。死の恐怖がアスナの頬を撫でる。抜け出そうとするが意思に反して体は動かない――。

だが白の剣士は一度細剣を抜くと、再度アスナに突き立てることなく身を翻した。そのまま入口付近に集められたラフコフメンバーの元へ歩みを進める。拘束を解くつもりだろう。異変に気付いたA班の班員たちが阻止に動くが、白の剣士は臆することなく正面から斬りかかった。

それはあまりに一瞬のことで、アスナは目を疑った。一撃。細剣によるソードスキルでもなんでもない、ただ斬っただけの一撃。ダメージにしたら微々たるものだ。それなのに、装備やスキル、ポーションによって底上げされているはずの状態異常耐性を簡単に貫通し、白の剣士の足元には四人が麻痺状態で転がっていた。

白の剣士はアスナたちに目もくれず、拘束されていた約20名を解放し、狂気の殺人者たちは、無抵抗に転がった四人を囲って、鬪り殺した。あまりに呆気なく散っていったプレイヤーだったポリゴン片。まだ足りない、と言いたげな殺人者たちの眼は、次の標的としてアスナを捉えていた。

「・・・あ、っ・・・いや・・・！」

誰にも届かない声。動かない体。

「オイオイ見ろよ、KOBのサブリーダー様だぜ」

「噂通り良いことオンナだなあ」

「殺すのもつたいねえな。白ガキがいるんだから、永遠にマヒらせて俺たちの遊び相手にしようぜ」

「それいいな、賛成！」

下卑た会話に違う意味の恐怖が込み上がってくる。

耳鳴りに似た笑い声。

それを掻き消す、もう聞き慣れた声。

「悪く思ふなよ、クソ野郎共」

黒と青のハーフコートを翻して現れたサツキ。次の瞬間、彼の近く

にいた5人はポリゴン片となって爆散した。

◆?

〈サツキside〉

「四人目の、幹部だと?」

「おオ? やっぱ興味ある?」

片手両足を落とされていることなど意に閑せず、ジョニー・ブラツクは嬉嬉として言った。時間稼ぎのためのハツタリとも考えたが、この反応を見る限り本気で言っているようだ。

俺は^{レレツァアヒテン}霊 剣でジョニーのダガーを破壊し、反撃のチャンス絶つてから問い詰めた。

「誰だ? 洗いざらい吐け」

「そう怖い顔するなよお! 一から説明するからさあ... っても、マジで最近入ったばかりだから俺も詳しくはないんだけど」

ジョニーはケタケタ笑いながら続けた。

「スカウトしてきたのはP.O.H^{ヘッド}だよお、初めて見た時は何の冗談かと思っただぜ。お前より小せえガキで、オレ様が話しかけても何にも喋んねえんだよ。剣の腕とイカれたスキルがあつたから許したけど、じゃなかったら速攻で殺してたわあのガキ」

「イカれたスキル...? それは何だ?」

「実際に殺り合ってみればいいじゃねえか、ちようど今来たところだよお? ハハハッ!」

ジョニーの視線を追って振り向くと、遠くからでも分かる異質なオーラをまとった白一色の剣士が、ぼうつと突っ立っていた。だがそれよりも衝撃的な光景が――

「ッ!? 副団長!」

倒れた副団長に拘束されていたはずのラフコフメンバーが群がって行く。ニタニタと卑しい笑みを浮かべている連中を見て、俺は暫くぶりの怒りを感じた。

守る。殺す。

どちらの感情が勝っていたのか分からない。

「悪く思うなよ、クソ野郎共」

俺は瞬間移動じみた速度で距離を詰め、最も近くにいた5人を二本の愛剣で斬り捨てた。そこで止まらず爆散するポリゴン片を掻き分け、硬直している2人の首をハネ飛ばす。愛剣を切り払い、唾然とする残党たちを睨めつけて俺は言った。

「死にたくないなら、降伏しろ」

性懲りも無く勢い任せにかかってきた1人を一撃で葬り、もう一度同じ問いをすると残りは全員武器を捨てた。残ったA班の隊員がそいつらを拘束していく。それを見ながら俺は必死に冷静さを保ち続けた。

重くのしかかって来る8人の命を受け止める。後悔はない。仲間を守れたのだ。そのための罪なら、いくらでも背負う覚悟ができてくる。

倒れたまま泣きそうな目で見つめてくる副団長に、俺は心配ないと頷く。俺が何か言葉をかける前に、後方から俺を呼ぶ声が聞こえた。

「サツキさん！大丈夫ですか!？」

「まったく、どういう状況よ」

合流して来たのはシユガーとノノだ。B班の方は片付いたらしく、風林火山のメンツが拘束したラフコフメンバーを見張っている。C班ももうすぐ片付くようだ。俺は動きを見せない四人目の幹部を警戒しながら、ポーチから取り出した解毒ポーションを二人に渡した。

「副団長ともう一人を頼む。俺はアイツを捕まえる」

「PKらしくない格好ね」

「あの子もラフコフなんですか?」

「そうだ、四人目の幹部らしい」

「四人目の!?!すぐに加勢しに行きます」

「ああ、頼む」

二人は俺が8人を殺すところを見たはずだが、いつもと何も変わった様子がない。それに僅かな安堵を感じた俺は、こちらを静観する四

人目の幹部に向かつて走り出した。俺を標的としたのだろう、収めていた細剣を引き抜き右手に提げた。赤紫色の刀身に視線が吸い寄せられるが、左手が閃いたことを俺は見逃さなかった。

カタルシスを前方に振ると、ガキインと金属音が響き小型のピックが床に転がった。それを見た幹部が翠色の瞳をわずかに見開く。さらに加速して距離を詰める俺にもう一度ピックを投擲してくるが、それを跳躍して躲す。そのまま落下の勢いを乗せて、俺は二本の愛剣を振るった。

細剣では受け止められないと判断したのだろう。軽やかな、しかし俊敏なステップで回避してみせた幹部は、反撃と言わんばかりに“リニア”を放ってきた。副団長と遜色ない完成度のそれを逆手に取り、俺は技の側面からカタルシスで細い刀身を叩く。横からの衝撃に弱い細剣の弱点をついた武器破壊を狙ったのだ。しかし、赤紫色の刀身は激しい火花を散らしたものの折れることはなかった。見た目に反してかなりの耐久値だ。

鏢迫り合いの最中、俺は幼さの残る殺人者に疑問を問いた。

「あんた、強いな。なんでラフコフなんかに入ったんだ？」

「・・・」

答えはない。虚ろな瞳に感情はなく、そこから真意を読み取ることが出来ない。ならば剣で語ろうと、俺はレーヴァーIIティンを上段に構えた。

その瞬間だった。

殺してやるよ、全員。壊してやるよ、こんな世界。それが望みなんだろう・・・？

頭の中で響く憎悪と殺意に満ちた声で、意識が飛びかけたのは。

「あッ・・・!？」

「・・・」

押し込む力がなくなり、鏢迫り合いに負けた俺は後ろへ大きく押し返された。体勢を崩して不格好に尻もちをついた俺に、赤紫色の刀身

が一直線に肉薄する。

「——はあっ！」

それをギリギリでシュガーの両手剣が弾き返した。相對する二人を見ながらも、俺の頭の中では様々な情景がフラッシュバックする。

——俺たち三人なら大丈夫だ

——なんだよ怖いのか？チグネはビビりだもんなあ

——ビビりじゃなくて慎重なだけだもん！カイトは危機感なさすぎだよ！

聞いたことの無い三人の声。いや、一人だけ微かに聞き覚えのある、しかしどこか違う感じ。

——おい見ろよこれ！めっちゃ美味そう！

——そんな金ないよ

——じゃあ三人で一個食べようよ！

どこかの露店で楽しげなやり取りをする三人。顔は靄がかかったように見えない。

——やっぱ最前線は油断できねえな

——でも思ってたより戦えてるよね、私たち

——ああ、攻略組とも肩を並べられると思うよ

見覚えのある、遺跡をテーマとした迷宮区。戦闘を終えた後なのか、余裕のある表情で互いを讃えあっている。

——攻略組になるって、ギルドに入ればいいのか？

——ギルドに入らなくても、ソロで攻略組になっている人もいるらしい

——でも、ギルドに入ってた方が安全じゃない？

——それはそうだけど、馴染めるかなあ？

——別に馴染めなくても、俺らが一緒だから大丈夫だろう？

——そうだよ！私たちはいつでも一緒だから

なんて強い絆だろう。この世界に囚われる前から、この三人は長い時を共に過ごしてきたのだろう。状況を忘れて、俺は素直に羨ましいと思った。

だがそんな思いも、次の瞬間には消え去った。

——いや！やめて、放してよ！

——テメエら！何のマネだ！

——チグネ！おい！早く助ける！

蟻地獄のようなすり鉢状のフィールド。その上で暴れる三人を押しさえ付ける数十人の、見覚えのある集団。

——これがテメエら攻略組のやり方か!?

——いやっ！助け

少女―チグネは、手足を拘束された状態で蟻地獄の底へと蹴り落とされた。それを察知したかのように、底から巨大なイモムシ型のモンスターが姿を現し、無数の牙を連ねた口を大きく開き――

——やめろおおおお!!

少年―カイトの絶叫とともにフラッシュバックは終了した。意識が元に戻った俺は、自分が大量の冷や汗をかいていることに気付く。

レーヴァルテインの感応現象で誰かが死ぬ瞬間を見るのは初めてではない。だが今見たMモンスター・プレイヤー・キル P Kは、あまりに惨すぎる。そして更に恐ろしいのが、その犯行を行ったのが――

「・・・お前らなのか？DDA」

10人ほどを拘束してシュガーと幹部の攻防を遠目から見ているC班に、聞こえるはずはないが俺は問いかけた。もちろん答えはない。だが俺は、彼らに大きな疑心を持たざるを得なかった。感応現象で見たメンバーに見覚えはないし、装備から推測してもDDA創設から間もない頃の出来事だろう。今すぐ問い質したい衝動を抑え、俺はまず幹部を捕まえることにする。

俺の代わりに幹部の相手をしているシュガーは、流石の技量で敵の攻撃を捌き続けていた。幹部は相変わらず無表情で思考が全く読めない。シュガーは、敵が何か奥の手を隠しているのではと勘ぐっているのだろう。いつも以上に集中しているのが分かる。

俺は立ち上がり愛剣を手に加勢しようとした。

その瞬間――

「なに・・・!?!」

ドガアッ!と俺の耳を、いや部屋全体を震わせる破壊音が響いた。音の発生源はC班が突入して来た入口。

ダンジョン内では珍しい開閉式の扉が跡形もなく粉々に砕かれ、破片がポリゴンとなつて散つていく。

その異様な光景に誰もが、俺や戦闘中だったシユガーや幹部までもが動きを止めて視線を向けていた。一瞬で辺りが静寂に包まれる。

そして忘れることの出来ない、狂気に満ちたあの声が静寂を打ち砕いた。

「愉しそうだなあ・・・オレも混ぜてくれよ」

「ッ!?!お前・・・!」

現れた乱入者——《不滅》のカグマは、俺たちを一瞥すると不敵な笑みを浮かべた。

◆?◆?◆?

あの人と出会ったのは、デスゲームが始まってから半年以上が過ぎた頃だった。

圏内で外部からの助けを待っていた私は、その日も太陽が昇る前にある場所へ足を運んでいた。毎朝、一部のプレイヤーの善意により配給される食料アイテムを受け取るためだ。私のようにフィールドに出ない人はコルを稼ぐことが出来ず、毎日の食事を摂ることが困難になっていく。この世界で餓死の心配はないが、どうしても我慢できずに私も朝食分だけ受け取るようになった。廃れきった私の一日の中で、唯一人間らしい行動だ。

配給時間の二時間も前に会場となる広場に着いた私は、休憩用ベンチの端に腰掛けて時間を待った。時間帯もあって他のプレイヤーはいない。耳鳴りのする静寂の中、死ぬ時もこんな風に独りで静かなんだろうと考えていた私は、突然背後からかけられた声で心臓が止まりかけた。

「あの、なにしてるの?」

声の主は、思考も体も停止した私を見て心配そうに首を傾げていた。

これが私とチグネさんの出会いだ。

◆?◆?◆?

〈サツキside〉

「よおよおよおよお、こんな愉しそうなことしてんならオレも呼べよ」
最悪な状況を目の前に、俺は頭をフル回転させた。

四人目の幹部を拘束すれば終わると思われた作戦も《不滅》の乱入で振り出しに戻ったと言っても過言ではない。俺は最善の案を導き出すため各人の状態を把握しようとした。

その俺を、背後から冷たい声と呼んだ。

「サツキ、アイツは私に任せて」

聞いたことのない底冷えする声。ノノは愛刀を手に《不滅》を睨め付けながら言った。その瞳は冷たく、または何かが燃え盛るように揺らめいていた。

「何言ってるんだ、一人で勝てる相手じゃ——」

今にも飛び出しそうなノノの肩を掴もうと手を伸ばすが、それを払いのけてノノは言った。

「いいから！アンタはあっちの相手してて」

「馬鹿言え、一度アイツと戦ったことのある俺が相手するのが定石だろ！」

こんな時まで反りが合わないのに気が立つが、ノノがここまでカグマに執着する真意も分からない。研ぎ澄まされた殺気に近いオーラが肌を撫でる。そんな俺たちを見つけたカグマが、歪んだ笑みを一層深めて言った。

「お、久しぶりだなあ剣豪。また会えて嬉しいぜ」

「こっちは全然だけどな」

「連れねえこと言うなよ、お前のために俺もそれなりに鍛えたんだぜ？」

得意気に拳を鳴らしながら俺に近付いて来るカグマ。その間にノノが割って入った。

「なんだお前？オレとサツキのリベンジマッチを邪魔すんな」

「・・・あら、奇遇ね。じゃあ私もリベンジしても良いかしら？」

愛刀に手を添えたノノはカグマを見据えて静かに言った。それが、何かが発する寸前の声音であることが俺には分かった。

「何わけのわからんこと言ってるんだ・・・邪魔すんなら、お前から消し

てやるよ」

言った瞬間、カグマの姿が霞んだ。流石の速度だ。

だが俺は見逃さなかった。カグマよりも先に閃いた一筋の光を。

「・・・あ?」

カグマはノノのすぐ前で動きを止めていた。ノノの心臓を狙って放った一撃は届くことなく、突き出された拳が宙を舞っていたのだ。一瞬のタイムラグの後、派手なダメージエフェクトが血のように吹き出した。

「がら空き」

「——チッ!」

再び一瞬の閃がノノの手元で閃いた。それを察知したカグマが反射的に上体を反らすのが、胸部に三本の剣痕が刻まれる。もはや間違えようのない、ノノの攻撃だ。

距離を取ったカグマは、自らのHPが全快するのを見届けてノノを睨めつけた。

「お前、なんだ?」

「そつくりそのままお返しするわ、カグマ。いえ——」

ノノは《不滅》に告げる。

「——アニマさん」

初めて聞く名前に俺は困惑したが、カグマは違った。一瞬の驚愕から疑惑、そして怒りの表情に変わった。ノノを睨めつける眼には明らかな殺意が宿り、軋む声が発せられた。

「・・・てめえ、何者だ?」

「あら、久しぶりに本当の名前で呼ばれて驚いた?」

挑発するノノに、カグマは何かを抑え込むようにしながらも激昂する。

「その名で呼ぶな!俺は”カグマ”だ・・・」

「まったく哀れね。いつまでそうやって継るつもりなのかしら?もう二人は死んでしまったのに・・・ああ、ごめんなさい。あなたが自分で殺したんだっけ」

「ツ!? テメエエエエツ!!!」

先ほどよりも速く強い一撃がノノに迫るが、彼女は避けようとせず愛刀を握った。そして三度の剣閃。

「ガッ・・・!?」

カグマの頸にクリティカルヒットのエフェクトが輝き、HPが一気に四割近く減少した。頭を抑えて後退したカグマをノノが追撃する。

「ねえ、どんな気分だった？大切な人を自分の手で殺すのは？」

「ッ!? 黙れ！」

「教えてよ、それを聞くために私はここまで来たんだから」

カグマを超える速度で次々と剣戟を見舞うノノ。それを啞然と見ていた俺はある違和感に気付く。それは《剣豪》たる俺にとって久方ぶりの、初見のソードスキルを見た時の感覚だった。

現在判明している全カテゴリーの全ソードスキルを自在に扱えるほど熟知している俺でも、ノノが繰り出すソードスキルは初めて見るものだった。考えられるのは一つ。

「ノノ、お前も・・・？」

困惑しながらも切り替えて加勢しようとした俺は、後ろから聞こえたシュガーの声に足を止めた。

「サツキさん！後ろですー！」

「ッ！」

振り向きざまに構えたレーヴァーIIティーンに衝撃が加わる。火花を散らすのは赤紫色の刀身――

「忘れてたぜ、お前もいたんだったな！」

「・・・」

無言の幹部は俺を斬らんと体重を乗せてくる。その虚ろな瞳がわずかに見開かれたその瞬間、横から流星の如き一閃が放たれた。反応が間に合わなかった幹部の肩に命中し、勢いそのままに大きく吹き飛ばされた。

「大丈夫!?!」

「やっと来たか、こっちは大盛り上がりだよ」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょう！」

駆け付けた副団長は俺を引っ張り立たせると、最悪な状況を前に表

情を歪めた。

「まさか彼が乱入して来るなんて……」

「完全に想定外だったな。何やらノノと因縁がありそうだし」

「ノノちゃんと……？分からない、どうすればいいの」

「早々にケリを付けるしかない、だろ？サツキ」

もう一人の声に振り向くと、キリトが若干の疲れを顔にしながら立っていた。

「終わったのか？」

「ああ、遅くなつて悪い。あとはあの二人だけだ」

見ればラフコフの残党は全て拘束されていた。討伐隊の面々が監視しながら、こちらの状況を遠巻きに窺っている。

「どうする？」

「……」

俺に判断を迫るキリトと副団長。答えはもう出ていた。

「俺が幹部の相手をする。お前たちはノノに加勢してくれ」

「一人でなんて無茶よ！何か仕掛けがあるのか分からないけれど、普通の攻撃じゃないわ」

「アスナの言う通りだ。麻痺を喰らったら終わりだぞ」

「ああ、間違いなく普通じゃないな。あの幹部もノノも、ユニークスキル持ちだろう」

俺の発言に二人は目を見開く。俺は構わずに続けた。

「幹部の方は大丈夫だ、一瞬でケリを付けれる。問題はカグマだ。拘束は無理だから……殺す」

「……どうやって？」

「……」

俺は前回の戦闘から推測した《不滅》の倒し方を二人に話した。成功する可能性が限りなく低いその作戦は、俺に全てがかかっていると云ってもいいものだった。

◆?◆?◆?

『私のとっておきを教えてあげる!』

新たなスキルを試していた俺に、相棒は突然声高らかに言った。ドヤ顔で胸を張る相棒に呆れながら俺は言う。

『いや、アンタのソレも世界唯一ユニークだろ?俺には使えんよ』

『わかんないじゃん!だって全部のソードスキルを使えるんでしょう?』

『本当に全部だったらチートだよ』

『まあまあ、とりあえずやってみよー!』

いつも通り俺の意見などガン無視で話を進めた相棒は、心底楽しそうに愛剣を振るい始めた。仕方なく俺も続いてカタルシスを抜いた。

『いやー無理だー!』

乱れた呼吸のまま俺は芝生に倒れ込んだ。空を仰いで呼吸を落ち着かせている俺を覗き込む相棒は、息一つ上げずに笑っていた。

『惜しいなあー、形は出来てるんだけどね。やっぱり気持ちだよ気持ち!』

『気持ちって言ったって、じゃあ——はどんな気持ちでやってんの?』

『おっしえなーい!』

『斬るぞ?』

『まだ一ミリもHPを減らしたくない私初めてを奪うの?でも、君ならいいよ』

『変な言い方をするな』

もうすっかり慣れてしまった相棒とのやり取りを交わし、俺は起き上がった。理解していたはずの相棒との圧倒的な差、改めて直面する

とやはりそれなりのダメージがある。そんな俺を察してか、相棒は穏やかに言った。

『まあ大丈夫だよ。君なら必ず使えるようになる、私が保証するよ』
『・・・だといいな』

何の根拠もない。

でも相棒の言葉だけで、俺は誰よりも強くなれる気がした。

◆?◆?◆?

ノノがユニークスキルを習得したのは、デスゲーム開始からちょうど一年が経過した日だった。

それまでに圏外に出たことのなかった彼女に、そのスキルが与えられたのはカーディナルシステムの気まぐれか、もしくは運命か。

全プレイヤーの中で最も優れた集中力を持つ者に与えられるユニークスキル《抜刀術》。その速度・威力は習得者の能力に比例し、限界はない。

現段階でノノが使う《抜刀術》は、生存プレイヤーの中で最強と言って良いほどの領域に達していた。

それが、復讐のために研ぎ澄まされた力であることを、本人以外知る由もない。

◆？

〈ノノ side〉

最高に気分が良い。

追い続けた仇を切り刻みながら、私はかつてないほど高揚していた。この瞬間のために、磨き鍛え極めた一撃一撃がいつも簡単に通用していく。やっと今までの行いが報われたと思うが、まだだ。ヤツの頸を落として、その身が消え去るまでは。

「どうしたの？ ずいぶんと余裕がないように見えるけど」

「うるせえ！ 殺してやるー！」

何の考えもなしに振るわれる右拳に意識を集中させ、私は《霞桜》を閃かせる。

《抜刀術》二連撃ソードスキル・夕霧^{ゆうぎり}

右腕を肩から斬り飛ばし、二発目でアニマの左眼を抉る。アニマが被弾を認識した時、私は既に追撃の構えを取っていた。

《抜刀術》九連撃ソードスキル・濔標^{みおつくし}

アニマの全身を、ダメージエフェクトすら置き去りにする超速度で切り刻む。たまらずアニマは逃げるように後退した。納刀した私はさらに挑発を繰り返す。

「なあんだ。サツキが苦戦したって言うから期待してたのに、大したことないのね」

「ああ？」

「あなたの強さって、結局はその異常な回復力でしよう？それに甘えて何の策もなしに突っ込んで、無理矢理ねじ伏せて来たんだろけど……その程度なら、ボスモンスターの方が何倍も手強いんじゃない？」

わざとらしい笑みを浮かべて言う。はたから見たら酷く歪んだ表情だろうが、関係ない。この戦いが終わったら全てを終わらせるつもりなのだから。

「そしてその強さも、あなたのモノじゃない。仲間^{チクネさん}を殺して奪った……本当に救いようがないわ」

「黙れ……俺は、殺してない……俺は……」

狼狽するアニマに私は頭に血が上る。

「いい加減認めたらどうなの？守る、助けると妄言だけを吐き散らして、最期は裏切り、その手で殺したってね！」

「アアアツ！黙れえええ!!」

感情任せの乱舞をあえてギリギリで躲しながら、私は愛刀を握り直した。

「もういい、これ以上話していると私まで頭が狂いそうだから……終わりにしてあげる」

「クソがア!!」

《抜刀術》最上位ソードスキル・華藪龜裏^{カナキリ}

視認できない神速かつ最高威力の一閃が、狙い続けた仇^{アニマ}の頸を落と

す――

◆？

かつてないほど死を予感した。

ここまで死に近付いたのは、全てが終わり始まったあの日以来か。

――あなたが殺したんでしよう!?

違う……いや、違わない、か。

殺した……そうだ、俺が殺した。

あの時の選択を間違わなければ、こんなクソみたいな道を歩むことはなかった。

――死んでも、私が守るから

――俺たちは、いつでもどこでも一緒だからな!

交わした約束は、今となつては呪いのよう。

無力な、見ていることしか出来なかつたオレを地獄へと導く。

今さら死んでも、二人と同じ所へは行けない。

それなら、忘れてしまうまで生きて、殺し続けよう。殺戮の限りを
尽くそう。

二人と同じ苦しみを、この世界に教えよう。

オレは久々に《眼》を開いた。

光すら置き去りにした神速の一閃、それが欠伸が出そうな速度で見

える。

頸に迫る刀を、オレはいとも簡単に躲してみせた。

◆？

〈ノノside〉

「——なっ！」

奥の手と言える最上位ソードスキルを躲されたことに、私は驚愕を隠せなかった。誰にも、ヒースクリフにすら看破されることはない。自負していた一閃が不発に終わり、代償として致命的な硬直時間に陥る。

「・・・オレも、とっておきを見せてやるよ」

今までと違う底冷えする声が聞こえた直後、私の腹部を強烈な衝撃が襲った。次いで浮遊感。冷たい床に転がり、吐き気を抑えながら視線を上げた瞬間、正面から衝撃。さらに右、左、上、下とあらゆる方向から止まらない衝撃が全身を穿いた。何が起こっているのか分からないまま、私はHPを黄色に染めた。

「なに、が・・・」

「お前の負けだ」

朦朧とする意識の中顔を上げると、アニマが私を見下ろしていた。

「お前は俺に力が無いと言ったが、それは間違いだ。俺にも力はある。二度と使いたくないと思ってた力がな」

アニマは自分の“眼”を指差しながら続けた。

「俺が持つユニークスキルは3つある。《拳闘士》と《超回復》・・・あの二人のモノの他に、俺自身が授かった《修羅眼》だ」

「なによ、それ・・・！」

近くに転がっていた《霞桜》を手に取り攻撃する。が、難なく刀身を掴まれた。

「この《眼》は全てが見える。ステータスからスキル、装備の耐久値な

んかも視界に入るだけで手に取るように分かる・・・これを使つて俺たちは安全で高効率なレベル上げをしていた」

《抜刀術》三連撃ソードスキル・千空せんくう

手首を斬り飛ばして頸を狙った攻撃、しかし膝蹴りが刀身を捉え、その衝撃で愛刀が手から放れてしまった。技がキャンセルされたことにより発生した硬直時間、がら空きの腹部に強烈な回し蹴りが入った。

「がつ・・・あ！」

「全てが順調だった。もしかしたら現実世界にいた時よりも生き生きとしていたかもしれない。三人でいければそれで充分だった」

こちらに歩み寄るアニメは、取り戻せない遠い過去を懐かしむように続けた。

「そんな時だ。彼女が、チグネが攻略組になろうと言い出したのは「っ！」

最愛の人の名に、私は反撃の動きを止める。

「俺たちも攻略組に、なんて考えたことがなかったわけじゃない。だが俺は手にした平穏な日々を手放したくなかった。だから言い出さなかった。それなのに、一番臆病なチグネが言い出すなんて予想すらしてなかったな」

「チグネさんが、なんで・・・」

「さあな、あの世で直接聞いてみるといい。今から殺してやるからよ」振りかぶった拳をライトエフェクトが包み込む。《拳闘士》の技であろうそれを見ながら、私は自分の中で諦めがついていることに気付いた。

3つ目のユニークスキルは完全に誤算だった。《超回復》と《拳闘士》だけならまだ押し切れる自信があったが、攻撃を見破る補助系のユニークスキルと《抜刀術》は相性が悪い。どんなに速く強力な一撃も当たらなければ意味がない。

無様に転がり、最期の瞬間を待った。

拳を振り下ろすアニメがどこか哀しそうな表情をしているのを見て、短かったチグネさんとの思い出が脳裏をよぎる。

色を失った絶望の日々を鮮やかに染め直してくれた。生きる意味を教えてくれ、戦う力をくれた。

・・・頑張ったよ。

たった一人で攻略組にまで上り詰めて、チグネさんを裏切り殺したヤツを追い詰めたよ。

殺せなかったのは悔しいけど、でも、頑張ったよ。

だから、次に会ったら褒めてね？チグネさん。

せめて目は背けまいと、迫る必殺の拳を凝視する。

刹那。

再び色が失われていく世界を、漆黒の軌跡が縦横無尽に斬り裂いた。

「えっ・・・？」

「・・・ほっ。」

腑抜けた声が漏れると同時に、アニマの全身から真っ赤なダメージエフェクトが溢れ出た。

「・・・もうやめろ、アニマ」

声の主はサツキ。彼は霊剣を漆黒に染め、右頬に不気味な痣を浮かべていた。

Ep. 37 黒の剣技

〈サツキside〉

——お願い、彼を助けて！

頭に響くのは、初めて聞く女の子の声だ。

「・・・君は、誰だ？」

問いかけても返事はない。当たり前だ。この声はレーヴァーティンの感応現象、死者の遺した遺志の幻聴なのだから。今までと違うのは、現象が声だけに留まっていることだ。悲痛な声は続ける。

——彼を救って、解放してあげて。悲しみを断ち切って。貴方にしかできない！

さらにもう一つ、知らない男の声。

——アイツを止めてくれ、頼む

この状況から考えるに、ノノが言っていたチグネとカイトの声だろう。二人の遺志が強く干渉している影響か、鈍い頭痛に目を細めながら俺は目前の敵に意識を集中させる。

「・・・」

赤紫色の細剣を無言で構えるラフコフの幹部は、虚ろな翠色の瞳に俺を映していた。俺は警戒しながら口を開く。

「アンタも、なんだろう？」

「・・・」

返事はないが俺は続ける。

「さっきの攻撃、少し掠っただけで麻痺状態になったな。普通じゃない。俺やノノと同じ、世界唯一なんだろう？」

返答は言葉ではなかった。速く重い突きをレーヴァーティンの横腹で受け軌道を逸らし、勢い任せに押し返す。それに怯むことなく、好機と見た幹部は体を振ると再び神速の突きを見舞って来た。副団長の流星にも似たそれに近い速度、常人ならば回避どころか目で追う

こともできないだろう。

だが俺の目はその軌跡を正確に捉えていた。

知っているから。

これよりも速く、重く、美しく、そして儂い技を。一番近くで誰よりも見てきたから。

いつかその高みに達するのを夢見て、俺自身何度も何度もその技に打ちのめされた。その度に感じた、遠すぎる道のりに挫折しそうになったのは数え切れない。

それでも、彼女は笑って言った。君ならできる、世界最強の私が保証するよ、と。

その言葉に救われた数もまた、数え切れない。

肉薄する刀身を見据えレーヴァルテインを構えながら、俺は遠い日の記憶を垣間見ていた。目も眩むような快晴の日。思い出の場所に立つ桜の木の下で、日課となっていた決闘デュエルの時の会話。

『いいね！動きは完璧に再現できてるよ！あとは“気持ち”！君の心を剣に込めて、解放してみて！』

システムアシストのない、形だけの俺の剣技をいとも簡単に捌きながら相棒は笑った。息を切らしながらも技を繰り返し、俺は言った。

『気持ちって、言ったって、例えばどんな？』

『なんでもいいの！怒りだったり悲しみだったり憎しみだったり、いろいろあるでしょ？でも、そうだなあ・・・君が一番強く持っているのはアレだね』

『なんだよ？』

相棒は、慈愛に満ちた表情と声色で告げた。

『仲間を守りたい、その気持ちだよ』

「——ッ!!」

雷に打たれた如き衝撃が全身を貫く。視界が端から色を失い、モノクロームの世界に入った。相棒が見ていたという世界、そこに足を踏み入れる。

その世界で唯一、俺の胸を穿かんとする細剣レイピアだけが赤い光を放っていた。

「サツキー！」

キリトの切迫した声が響いた。

しかし、細い刀身が無防備に晒された俺の胸を穿くことはなかった。

刀身が捉えたのは実体なき黒い影。

幹部が驚愕に染めた目を見開き、キリトと副団長が状況を飲み込まずに固まっていた刹那、幹部の右手は細剣を持ったまま肩から切り飛ばせられて床に転がった。幹部の後ろで、俺は漆黒のエフェクトを振り撒きながらレーヴァーティンを斬り払う。その流麗な刀身は、恐ろしくも懐かしい闇色に染まっていた。

ユニークスキル〈暗黒剣〉

今は亡き相棒、世界最強を自称した女流剣士が使っていた剣技を、俺はこの瞬間初めて体現した。

無理をした代償か、激しい頭痛が襲ってきてその場にしやがみ込む。その最中、頑張ったね、と懐かしい声が聞こえた気がした。

「サツキくん！大丈夫!?!」

顔を上げれば副団長が心配そうに俺を見つめていた。その後ろではキリトが戦意喪失した幹部を拘束している。俺は安堵で息を一つ吐いて続けた。

「大丈夫、あとは、アニメだけだ」

俺はレーヴァーティンを頼りに立ち上がった。噴き出した汗が頬を伝る。仮想の身体が限界だと訴えてくるが、こんなところで止まるわけにはいかない。一瞬でも気を抜けば意識を持っていかれる。

暗転しそうな視界、ノノにトドメを刺そうと拳を振り上げるアニメに狙いを定め俺は床を蹴った。同時に懐かしい声。

『この技に限界なんてないの。自分の心が、想いがどこまでも自分を強くする——』

——ああ、知ってるよ。一番近くで見えてきたから

俺はレーヴァアーンティンを上段に構えた。

「——ツッ・ハアアアアツッ！」

雷光じみた速度でアニマに接近し、その全身に剣戟を見舞う。いつもより速く重い連撃だと手応えがあった。

驚愕に振り向いたアニマと目が合う。その眼もまた、モノクロームの世界で真っ赤に染まっていた。

「……もうやめろ、アニマ」

俺は黒を纏うレーヴァアーンティンを構え直す。全身を満たす力に、もはや間違いようなない懐かしさを感じていた。

〈サツキside〉

「やっぱお前は面白えな、剣豪・・・」

狂気に表情を歪めたアニマは、倒れているノノから視線を外すと俺に向き直った。モノクロームの世界でアニマの拳が赤い光を放つ。

「——シッ！」

「——ッ！」

上体を反らして一撃目を躲し、続く二撃目をレーヴァーIIティンで斬り飛ばす。反撃の“バーチカル”を振り下ろした瞬間、アニマの両眼の赤い光が輝きを一層増し、確実に捉えたと思つた一撃は驚異の反応速度で躲された。

「チッ！」

即座に腕を修復したアニマは、真正面からの正拳突きを放つ。それをギリギリまで引き付け跳躍し、空中で回転して右肩を斬り捨てる。腕がぼとりと落ち、アニマの眼がわずかに開かれる。着地と同時に振り向くと、横なぎに払われた左手が迫っていた。

「——！」

頬に触れる直前だった左手は、しかし俺を捉えることは無かった。手応えのない黒い影を払ったアニマ、その後ろで俺はレーヴァーIIティンを構え直す。同時にアニマの左腕が肩からぼとりと落ちた。

全部で15ある〈暗黒剣〉のソードスキル、その一つである回避と攻撃を併せた“あんこうそえい暗香疎影”。発動したのは初めてだが、相棒の言う“きもち気持ち”が込もっているおかげかシステムがソードスキルとして認識しているようだ。相棒のそれには遠く及ばないが使うことが出来た。

切り落とされた両腕が消滅し、同時に瞬時に再生してみせたアニマはゆっくりとこちらを見据えた。

「相変わらず妙な技だ。それも世界唯一ユニークか？」

「だとしたら？」

「なら、オレたちは同じじゃねえか。世界唯一ユニークを複数所持している選ばれし者だ」

浮かべるのは不気味な笑みだが、以前とはどこか違うモノが混ざっているように俺には見えた。

「一緒にすんな。お前と違って、俺は使い方を間違えない」

「へえ、オレが間違っているか？それは違うな」

アニマが構える。その全身を赤い光が包み込み、俺は全神経を集中させた。

「間違っているのは、このクソツタレな世界の方だろうか!!」

「ッ！」

目にも留まらぬ連撃で視界が真っ赤に染まる。それらをギリギリで避けようとするが、時折体を掠めHPが擦り減っていく。だが俺は焦ることなくアニマの連撃に隙が生じる瞬間を探った。嵐のような乱舞を繰り出しながらアニマは怒りと憎しみ、そして悲しげな絶叫を上げた。

「攻略組テメェらにとってはここは天国だろうよ！自分よりも強えヤツらがない、その気になれば全てを手に入れることも出来る！そうさ！結局はこの世界も弱肉強食！強者は生き、弱者は淘汰されるんだ！何も失ったことの無いお前に分かるか!? 剣豪！」

「・・・ああ、死ぬほど分かるよ」

激情の中に生まれた一瞬の隙を、俺は見逃さない。

〈暗黒剣〉単発重ソードスキル・闇夜やみよノ幻閃げんせん”

漆黒の焰のように揺らめいたレーヴァテイン、その刀身をアニマは危険だと察知したのかギリギリで躲す。だが届かないと思われた黒の軌跡は、アニマの首元から胸にかけて斬痕を刻んだ。

「面白い技だ！もつとだ、もつと全力を見せろ！死力を尽くせ！不滅オレを殺してみろ！剣豪オツ!!」

「安心しろ、すぐにケリを付けてやる」

防戦一方だった俺は一転し、攻撃に転じる。

“暗香疎影”で乱撃を回避し後ろに回り込むと、すかさず“バーチ

カル”を振り下ろす。変幻自在の不意打ちだが、流石の対応力でアニマはレーヴァンテインを躲すと拳を横風に払った。技をキャンセルしてそれを回避し、続け様に”バーチカル・スクエア”、”ホリゾナル・アーク”でアニマの身体を削る。

「どうした!? そんな技じゃオレは殺せないぞ!」

「・・・なら、これはどうよ?」

記憶の中に鮮明に刻まれた相棒の動きを完璧に模倣し、俺はレーヴァンテインを中段に構えた。

〈暗黒剣〉 刺突技” 戒暗餓突”

黒い彗星の如き威力・速度で放たれた一撃は、アニマの反応速度を上回って胸部に命中し、大きな風穴を開けた。ごっそりと八割近くHPを減少させたアニマは、直撃を受けた勢いそのままに吹き飛び、床に仰向けで転がった。

「ガッ・・・ハハ、ハハハハハッ!!」

狂った笑い声を上げるアニマ。そのHPが回復していくにつれて胸に空いた穴も徐々に塞がっていく。やはり回復が追いつかない連続技かHPを一撃で消し飛ばす超威力の技でないと殺すのは不可能なようだ。

「・・・やるしかないな」

思い当たる技は、ある。相棒が気まぐれで思い付いた〈剣豪〉たる俺だからこそ可能性のある技が。

『どう言えればいいかなあ・・・ぐううつと溜めて、バアアアッ! つて一気に解放する感じだよ』
『なるほど、わからん』

遠い記憶の中に答えを見出す。かつては理解できなかった相棒の言葉が脳を、全身を巡る。

「行くぞ剣豪!!」

全快したアニマが構える。と同時に、俺は左手を背中に回しカタルシスを引き抜いた。純白の刀身がレーヴァンテインと同じように漆

黒に染まり、そして。

「――」
漆黒の二刀がアニマの全身を切り裂き、四肢をその根元から分断した。本来赤いはずのダメージジエフェクトは黒く輝き、周囲を夜の帳が包んだような錯覚に陥る。

「なニ・・・ハッ・・・ガ？」

状況を理解出来ないままグリグリと動かしていたアニマの眼が一瞬開かれ、そしてその頸が断ち切られた。

二本の愛剣が本来の姿に戻るのを見届けながら、俺の意識は闇の中に消えた。

——なにが、起きた？

全身を満たしていたはずの、暴力的な生命力が消えていくのを感じた。

力が入らない……〈拳闘士〉のステータス補助が切れたのか、体が鉛のように重く引き寄せられるように地面が近づく。

思考がまとまらない……〈超回復〉が発動していないのか、不死身と思えた体は斬り刻まれたまま再生しない。

意識が遠のいて行く……〈修羅眼〉を無意識に使っているのか、時間がコンマ単位で過ぎていく。

漆黒の剣を二本携えた“剣豪”と目が合う。底のない深淵のように黒く、どこか憐れみを含んだその目はゆっくりと閉じられ、剣豪は事切れたように倒れた。ふと視界左端に表示されたHPバーが目に入る。久しぶりに見たそれには色がなかった。

そして察した。オレは負けた、死ぬんだと。

〈拳闘士〉と〈修羅眼〉をもつオレの反応速度を超える速さに〈超回復〉が間に合わない威力の剣技。ありえない、そんなものは存在しないはずだ。オレは殺せない、不死身だ。こんな所で死ぬわけにはいかない。まだ殺し切れていない。オレはまだ……

受け入れ難い“死”という事実には頭がどうにかなりそうだった。否定を続けるオレに、光を帯び始めた体が現実を突き付ける。

『死ぬ時くらいは、ほんの少しでもこの世界に来て良かったと思えるようにしよう』

かつての遠い記憶、デスゲームが始まったその日に三人で誓った約束。なぜ、今これを思い出す？ 殺された二人は良かったなんて微塵も思っていないだろう。二人がいなくなってから、オレにそう思える日

は永遠に來ない。だからせめて、この苦しみを他のヤツらにも——
「・・・あアガツ、まダ・・・まだ、終わらねえ、必ず、全員、殺し・・・
オレは、死なねエ——」

より一層強まる憎悪を吐露し、オレは意識を手放した。

◆？

〈アスナ side〉

何が起きたのか、目の前の状況を説明することはアスナには出来なかった。

漆黒に染まった二本の剣を構えたサツキに、全てを破壊するかの鬼気を爆発させた“不滅”が攻撃を仕掛けたところまでは見えていた。しかし、瞬き一回の間に“不滅”の四肢と頸は斬り飛ばされ、その不死に近い身を爆散させた。

生き残ったみんなが歓喜の声を上げる中、倒れた彼の元へ駆け寄る。頬に浮かんでいた痣は消え、漆黒に染まっていた目と髪そして剣は本来の姿に戻っている。

あの時と、亡霊王と戦った時と同じ現象だ。

「サツキくん・・・」

あの技は何なのか、彼は何者なのか、過去に何が、相棒と呼ぶ人は——？自分の中に生まれた、彼についてもっと知りたいという感情に戸惑いながら、辛そうに唸させられているサツキの頭を優しく撫で続けた。

◆？

〈サツキside〉

身を切り裂くような、鋭い後悔。

底が見えない深海のような、深い悲しみ。

全てを焼き尽くすかのような、激しい怒り。

世界そのものを歪めかねない、とても強い感情だ。

だが不思議なことに、これほど強い感情現象を引き起こしている彼らの記憶は、俺に流れて来なかったのだ。いや、正確には見たことを覚えていないだけかもしれない。あの激闘の後に目覚めた俺は、とても長い夢を見たような気がしたからだ。それがどんなものだったのか、思い出せない以上知ることは出来ない――。

「・・・以上で、本作戦の報告を終わります」

「うむ、ありがとう」

副団長の簡潔丁寧な事後報告を受けて尚、ヒースクリフは眉一つ動かさずに頷いた。

いつもは団長殿の威を借りてふんぞり返っている幹部たちは一人もおらず、ただっ広く感じる大広間で顛末を知らない俺とヒースクリフへの報告が行われていた。あの夜から丸二日経過している。俺は配られた資料に視線を落としながら呟いた。

「ラフコフは6人、俺たちは14人か・・・」

それは犠牲になった者の数。6人は俺が殺め、14人はユニークスキル持ちの幹部に殺された。二十五、五十層のボス戦に次ぐ被害だ。重い沈黙をヒースクリフの声が切り裂く。

「犠牲は出た。しかし、これでアインクラッドの秩序は少なからず良くなるだろう。今はただ、彼らが安らかに眠れるよう祈ればよい」

「・・・はい」

「そうだな」

ヒースクリフの言葉に頷く俺は、その言葉とは裏腹に氷のように冷めきったヤツの目に、言いようのない違和感を感じていた。

「おっす、調子はどうだ？」

「サツキさん・・・あなたこそ、もう大丈夫なんですか？」

「ああ、ぶっ倒れるのには慣れてる」

冗談混じりの返答にシュガーは苦笑いする。それがどこかきこえないのは、彼の後ろで窓の外をじっと見つめるノノが原因だろう。ベットの上で石像になったかのように微動だにしない。丸二日間、食事も摂らずにこの状態らしい。あの血戦を境に魂が抜けてしまったようだ。

「ノノちゃん、体に障るわ。何か食べましよう？」

副団長が優しく話しかけても反応はない。俺はこのような状態のプレイヤーを下層で腐るほど見てきた。生きる希望・目的を無くした故に陥る、抜け殻の状態。ノノにとつてのそれは、不滅^{アニメマ}への復讐だったのだろう。

だがヤツが死んだ今、自分は何のために生きればいいのか分からな
いのだ。彼女の心情は苦しいほど分かる。本音を言えば、俺だつてこのままそつとしておいてやりたい。

しかしそれは出来ない。彼女の持つ〈抜刀術〉はこれからの攻略において必ず力になる。それだけでない、彼女の攻略組としての経験、判断力、胆力は随一だ。たとえそれが復讐のためだけに磨かれたもの
だとしても、ここで失うわけにはいかない。俺はベット脇まで近づき、その名を口にした。

「チグネさん、DDAに殺されたんだつてな」

反応はない。それでも俺は続けた。

「ヤツらの事だ、ユニークスキル持ちを仲間にして戦力強化を狙ったんだろうが・・・ネットゲーマー特有の嫉妬かなんかで目障りになり、他に渡すくらいだったら——ってところだろ」

「サツキくん」

副団長が咎めるが、俺は止まらない。

「チグネさんの仲間だったカイトさんも殺されてる。

モンスター・プレイヤー・キル
M P K

でな。アニマはその光景を見せつけられ、そしてどういう訳か、死んだ二人のユニークスキルを受け継いだ」

「・・・何が言いたいのか」

ここでノノが囁き程度の反応をした。二日ぶりの声に副団長とシユガーは驚いたようだが、この話には必ず反応すると俺は思っていた。

「お前は、アニマがチグネさんを殺したと思いついでヤツに復讐しようとした。そしてアニマは、大切な人を殺したこの世界——アインクラッドで生きるプレイヤーたちに復讐をしていた。多少は違えど、復讐に取り憑かれたって意味では、お前たちは同じだよ」

「・・・ふざけないで」

怒りに染まった声。窓の外から俺に視線を向ける。

「あんな人殺しと、一緒にしないで」

「人殺し、ね。じゃあ俺もヤツと同類ってわけか」

「動機が違うでしょう。あなたは正しい動機で殺した。私もね」

「殺人に正しい動機なんてあるかよ。殺しはどうあっても、一生背負わなければならぬ罪だ・・・俺には、お前にそんな“覚悟”があるようには見えないんだがな」

「・・・ええ、そうね。最初から覚悟なんてしてないわ」

「それなら——」

「アイツを殺したら、死ぬつもりだったから」

冷たく吐き捨てるように放たれた言葉に、副団長とシユガーはもちろぬ俺も思わず息を呑んだ。重たい沈黙の中、ノノは続ける。

「私が今まで生きてこれたのは、アイツに復讐するっていう目的が

あつたから。そのためなら、どんな事でも苦にならなかつた。攻略組になつたのも、ただの気まぐれ。最前線で戦つていればもつと強くなれるし、腕利きの情報屋に接触しやすいつたから。ゲームムクリアとか、現実世界に還るためなんて思つたことは、一度もないよ」

息苦しさを感じる中、俺は密かに安堵した。今のノノなら、俺が伝えなかつた本題に食いついてくれるだろうと思つたから。

「じゃあお前は今、死にたいと思つているのか？」

「そうよ」

「そうか。まあ、良いんじゃないか？」

即答したノノに、俺は冷たく言い放つ。予想外の返答だつたのかノノは固まり、空気が張り詰める。

「死ぬな、なんて言うと思つたか？俺はそんな聖人じゃないからな。お前が苦悩した末の決断なら俺は止めないよ。理不尽なこの世界だ、最期くらいは自分の思うままにしたらいい。でもな」

冷たい声色に若干の怒りが込められる。

「お前にはまだ、やり残したことがあるだろ」

「・・・アイツは死んだでしょ」

「違うな。お前はアイツに囚われ過ぎで、本当の敵が見えていない」

俺はこの悲劇の確信をつく。

「DDA・・・〈聖龍連合〉に行くぞ。アイツらにもツケを払ってもら
う」

Ep. 40 罪の竜

〈アスナside〉

“最強”と謳われる血盟騎士団に対して、“最大”と言われるのが聖竜連合だ。

団長が選出した少数精鋭のKOBとは違い、それなりの実力と装備が揃っていれば加入可能なため、攻略組ギルドの中ではトップの規模を誇る。攻略初期に《軍》と並んで攻略組を率いていたDドラゴンナイト・ブリゲードKBを前身とし現在まで攻略に大きく貢献しているが、彼らについては以前から良くない噂を耳にすることがあった。

曰く、効率の良い狩場を秘匿・独占している。レアアイテムのためならば一時オレンジ化も辞さない、と。

彼らとの関係は、良くもなければ悪くもないとアスナは思っている。攻略の方針で多少のズレはあるものの、大きなトラブルが起きたことは一度もない。しかし彼らの活動は、攻略よりも自分たちが最強であることに注力されているのも事実だ。

大きくなる不信感を抱きながら、アスナはサツキたちと共に聖竜連合の本部に向かった。

「相変わらず大きいですね・・・」

「だな。バカみたいなの使ったんだろうな」

サツキとシユガーが見上げるのは、天高く聳える巨大な建物だ。逞しい竜のギルドフラッグが靡く、聖竜連合の本部。血盟騎士団の新しい本部もかなりの大きさだが、それよりもさらに大きい。総額コルは想像しただけで恐ろしくなる。

「・・・」

はしやぐ男二人に対して、ノノは静かに視線を向けていた。サツキに諭されここまでやって来たが、アスナにはまだ彼女が迷っている様

に見えた。

言い方は厳しかったが、サツキの言うことは正しい。アニメを凶行に趨らせた元凶が聖竜連合なら、真に裁くべき相手は彼らだ。攻略組がプレイヤーを殺めたのが事実なら、見過ごすわけにはいかない。

「行くか」

「ええ」

先行したサツキに並んで、アスナは本部前で門番をしていた二人に話しかけた。

「こんにちは。私たちは血盟騎士団の者ですけど、今お時間よろしいですか？」

「K O B !? こんちゃーす！誰かに用事ですか？っても、最前線行ってるんでほとんど人いないですけど」

「リーダーは？」

「リーダーも幹部も全員出てってるっす」

「どうしましょう？上の人じゃないと話せないですよね」

「帰って来るの待つのもなあ・・・」

ギルドの名誉に関わることだ。下手に話が広まってしまえば面倒なことになるのは目に見えている。どうしたものかと考える三人と、事情を知らずに首を傾げる門番二人。

「・・・リンド」

漂っていた微妙な空気の中、ノノが囁くように零したその名前はひどく耳に残った。サツキとシユガーは疑問符を浮かべていたが、門番の二人とアスナはその名前に心当たりがあった。

「リンドさんっすか？」

「あの人なら今日は残ってるはずだ。呼んでこようか？」

アスナたちが答えるより先にノノが領き、門番の一人が本部の中へ入って行った。

「誰だ？リンドって」

「DKB・・・聖竜連合の元となったギルドのリーダーをしてた人よ。最近は攻略に参加していないみたいだけど・・・ノノちゃん、彼を知ってるの？」

アスナの問いに、ノノは視線をそのままに淡々と答えた。

「チグネさんをDDAに誘った人」

その声は酷く冷め切っていた。

◆?

〈サツキsids〉

戻って来た門番に案内されて通された部屋は、外観からは想像できないほど小さく薄暗い一室だった。SAOの環境再現度がもう少し高ければクモの巣でも張ってそうなそこに、簡素な木の椅子に腰掛けた一人の男がいた。

「……お久しぶりです、リンドさん」

「ああ……久しぶり、アスナさん」

ぎこちなく副団長と挨拶を交わした男——リンドは、淡い青髪を揺らしながら俺たちを一瞥した。

とてもじゃないが、攻略ギルドに所属しているとは思えないほどに弱々しい。闘志どころか生気もなく、やつれているように見える。

「こんな場所ですまないね。遠慮しないでいい。汚いが、楽にしてくれ」

促されるまま用意された椅子に座る。俺たちの正面に座るリンドは、視線を落として何も無い机を見つめていた。まるで、死刑宣告を待つ囚人のように。

その様子を見て俺は確信した。アニメの件、リンドは確実に絡んでいると。

しかしこうなると、どう話を切り出すか迷う。単刀直入に、お前が殺したのか?と聞くのは気が引ける。かと言って回りくどく聞いて曖昧になるのは避けたい。シュガーが気まずそうに目を向けてくるので、俺は副団長にアイコンタクトを飛ばすが、彼女もどう切り出すのか迷っているようだ。

自分の評判を落してストレートに聞こうかと画策していると、小さく、しかし確かな意思が込められた声が発せられた。

「なんで来たか、わかるでしよう?」

ノノのその声にびくりと体を震わせたリンドは、口を強く結び顔を引き攣らせた。何かに怯えるような素振りとは裏腹に、必死に何かを伝えようとする。その様子をノノは何も言わずに黙って見つめていた。

数十回の葛藤の末、リンドは消え入りそうな声を絞り出した。

「・・・すまない」

「話して、全部」

詰め寄る彼女の心情は読み取れない。

真つ直ぐ向けられたノノの視線を正面から受け止め、リンドは今度こそ話し始めた。

◆?

〈リンドside〉

あの三人と出会ったのは、レベル上げのノルマを終わらせて街に戻って来た時だったんだ。

ギルドの規模に合わない小さな本部に入ろうとした時、不意に後ろから声をかけられた。元気な、希望と期待に満ち溢れた声を今でも覚えてる。

「あのー俺たちをDDAに入れてくださいー!」

「お、お願いしますー!」

振り返れば、土下座する勢いで頭を下げる二人と、それを見て苦笑いする一人がいた。突然の入団希望者でぼかんとする俺たちに、苦笑いをしていた少年が話し始めた。

「いきなりすみません。少しだけお時間いいですか?」

彼の話、三人がユニークスキル持ちだと言うのは信じ難いものだった。しかし後日、実際にその力を目の当たりにして信じざるを得なかった。

重力を感じさせない、軽やかで俊敏な体捌き。

あらゆる攻撃を無意味にする、不死に近い回復力。

全てを見通す、全能の眼。

異質なそのスキルは、攻略組でも十分に通用するほど強力な代物だった。三人が攻略組に、いや、DDAに加われば“最強”の代名詞に近付ける・・・そう思った。

少し話が逸れるが、当時のDDAは二つの派閥に別れていた。

俺が率いる《攻略重視派》と、現在のリーダーが率いる《最強重視派》だ。ゲームクリアを最優先とする俺たちに対して、一方は最強と云う名の名声を欲していた。レベル、装備、スキル・・・全ての質を上げることに固執していて、攻略はそのための手段に過ぎなかった。噂されている犯罪行為オレレンジに手を染めたのも、もはや数え切れない。

そうした背景もあって、三人の存在は大きなものだった。彼らを《攻略重視派》に加えれば、ギルドの方針も変わると思ったからだ。俺は《最強重視派》のヤツらに気付かれないように三人と接触を重ねた。俺を支持してくれていた同志たちも交流を深め、計画は順調だった。だが、予想していなかった誤算があった。

今まで最前線で戦い、死闘と仲間の死を乗り越えて強くなってきた自分たちでさえ、遠く及ばないほどに三人は強かった。たった一つのスキルによって埋まらない力の差。日に日に焦りは積もり、やがて醜い嫉妬へと変化した。

なぜスキル一つでここまで違うのか？

俺たちの今までは何だったのか？

このままでは、三人は俺たちに見切りをつけるだろう。そして最強派に入る、もしかしたら血盟騎士団に行ってしまうかもしれない。そうなればK.O.B最強の座は絶対になり、《最強重視派》はますます攻略

から離れていく――

抑え切れない負の感情とグルグル回る想定は、いつしか俺たちを最悪の道へ導いた。

現状維持のために、なかつたことにしよう。

三人を殺して、ゲームバランスを崩すユニークスキルを消してしまおう。

〈リンドside〉

最悪の道を選んだ俺たちは、三人をある場所に連れて行った。巨大なアリ地獄のようなすり鉢状のフィールド、DDAが秘匿している高効率狩場の一つだった。無数の牙を連ねた口を持つイモムシ型モンスターのもで、フィールドに無限に湧いて出てくる。一歩間違えば集中攻撃される危険はあるが、攻撃を受けずに倒し続けられればかなり効率が良い。ここを独占しているおかげで、俺たちはKOBに大きくレベルを離されずに済んでいた。

周辺に同志たちしかいないのを確認し、俺は傍で控える仲間三人に目配せした。

「今日はここか？」

「変わった所だね」

「下手したらヤバそうだけど、大丈夫なのか？」

流石の観察力でアニマが警戒するが、俺はいつも通りの良い人を演じた。

「大丈夫大丈夫！君たちなら楽勝だって！かなり効率良くレベルアップできるよ」

先に巣の中で戦闘しているメンバーを見本にして俺は戦い方を教えた。その最中に心のどこかで何かが軋む音が聞こえた気がしたが、気にせずに続ける。

「OK！んじゃ、いっちょやるか！」

「うんー」

説明を聞き終えたカイトが拳を握り、チグネも短剣を構える。アニマはフィールドを見たまま何かを考えているようだった。

——今しかない

三人の意識が逸れているその瞬間、俺の合図と同時に三本の短剣が彼らの背中に突き刺さった。

「・・・え」

「な・・・に」

ガクツとその場に倒れた三人を見下ろす。HPバーは黄緑色に染まっており、麻痺状態を表していた。俺は間髪入れずに指示を出す。「縛れ」

簡潔な指示に控えていた一人が動き、チグネの手足を拘束アイテムで縛る。

「なに、やめて！やめてよ！」

バタバタと暴れて抵抗するチグネを三人がかりで押さえ付け、拘束アイテムを取り付けていく。ものの数秒で麻痺状態が解除されたようだ、これを想定しての作戦だった。

「おいてめえら！なんのつもりだ！」

「チグネから離れる！」

麻痺状態のままカイトとアニマが叫ぶ。巣の中にまだ数匹湧いているのを見て、俺は口を開いた。

「すまない・・・君たちには気の毒だが、こうするのが最善なんだ」

「何の話だ！早く解放しろ！」

「てめえら、タダで済むと思うなよ！」

二人の怒号を聞きながら巣の中の戦闘を見守る。数分後、群れの湧きがピタリと止んだ。巣の中にいるメンバーが一斉にその場から走り出し、アリ地獄から脱出する。

「・・・来た」

地響きを鳴らしながら地中から現れたのは、今までのヤツらより何倍も巨大な個体だった。群れを一定数倒すと現れる親玉的存在で、その強さはフィールドボスに匹敵する。その巨体以上に厄介かつ危険なのは、体液に即効性の麻痺毒と猛毒が含まれていることだ。触れたら最後。体が動かなくなり、猛毒によってHPが減っていくのをただ見ていることしか出来ない。そんな格好の獲物を見逃すはずがなく、無数の牙を連ねた口で擦り裂くように捕食する――

「あぁッ！クソッ！」

眼をもつアニマは気付いたのだろう。これから行われる殺戮を、大切な仲間のその姿を。

全身にありつたけの力を込めているが、その意思に反して体は動かない。絶望に染まるその眼に心の軋む音が大きくなるが、俺は無言で同志に合図した。同志たちがチグネを持ち上げる。

「いやーやめて、放してよー!」

「おい!やめろ!!」

「これがテメエら攻略組のやり方か!?!」

声を見殺して、チグネは拘束されたまま無造作にアリ地獄へと放り投げられた。止まる術もなく転がり、巣の一番下まで落ちていく。

それを感じた巣のヌシ——地獄の長虫ヨルムンガンが地中から再び姿を現し、ゆっくりと恐怖に震える姿を楽しむようにチグネにその大口を開いた。

「やめろ、やめろおおお!!」

「ああああ!!ダメだダメだ!!」

「いや、助け——」

小柄な体はいとも簡単に大口に呑み込まれ、形容しがたい不協和音を奏でた。その瞬間、俺の心は後悔と恐怖で粉々に砕け散った。

ヨルムンガンドの捕食攻撃は、脱出するまで猛毒と牙による継続ダメージを与え続ける。しかし麻痺によって自力での脱出は不可能であり、他の者が攻撃して怯ませるしかない。この特性を利用することで、ヨルムンガンドは対象を確実に殺すことの出来る処刑道具となる。

〈超回復〉を上回る継続ダメージで、チグネのHPは目に見えて減少していく。止まない恐怖の絶叫に防具と短剣が碎かれる音が重なる。あまりの惨たらしい光景に、俺たちは身動き一つ取れなかった。

「クソッ!クソクソクソクソクソクソがああ!!」

「あ・・・ああ・・・」

アニマは激昂し麻痺を解こうと暴れ、カイトは絶望し震えていた。そんな地獄の光景に、一筋の光が煌めいた。

ヨルムンガンドの口から引かれたその光は、放物線を描いて地面に落下し軽い金属音を響かせる。

「・・・あ」

〈サツキside〉

リンドの血塗られた告白が終わり、室内はより一層重苦しい沈黙に包まれていた。

想像するだけでも身震いする惨たらしく残酷なその内容に、俺はどう反応すれば良いかわからなかった。副団長とシユガーも同じだろう。だが唯一、ノノだけはその小柄な体を小さく震わせていた。

「……………最悪」

絞り出されたのは計り知れない嫌悪を含んだ声。リンドの顔がさらに引き攣るのとほぼ同時に、彼の首元に雷光の如く閃いたノノの手が伸びた。

「よくも……………！人殺し！返してよ！チグネさんを返してよ!!」

「ノノちゃん!」

リンドに掴みかかったノノをシユガーが引き剥がす。椅子が乱雑に倒れる音は、ノノの悲痛な叫びに掻き消された。

「なんで！殺すこと、ないじゃん……………！アンタたちに何かした!?チグネさんが、あの人たちが殺されるほどの事をしたの!?ただ、ゲームクリアを、みんなで生きて現実に戻ろうって……………そのために、なのに……………後半は涙で言葉にならなかった。

これ以上は無理だと判断したらしいシユガーが、大粒の涙を流すノノを連れて部屋を出て行った。俺と副団長も放心状態のリンドに背を向けて出て行くとした時、蚊の鳴くような声で呼び止められた。

「……………サツキさん、忘れ物だ」

訝しげに振り向いた俺の目に映ったのは、机の上に置かれた神秘的な結晶アイテムだった。この世界唯一の蘇生アイテムである《還魂の聖晶石》。相棒を生き返らせようと死にも狂いで手に入れ、しかし蘇生は叶わず、当時俺と同じように探し求めていたリンドに高額で売り付けたものだ。当時は何とも思わなかったが、3人を生き返らせようとしたのだろうか。

「金はいいから持って行ってくれ。俺が持ってて良い資格なんて、ないからな」

「・・・そうか」

聖晶石を受け取り、俺と副団長は今度こそ部屋を後にした。

◆?

〈ノノside〉

「ねえねえ聞いて！なんとね私、DDAに仮入団することになったよ！」

「DDAにですか？スゴいですね・・・おめでとうございます」

追いかけていた夢を達成し笑顔を輝かせるチグネさんに、私は嬉しさの反面心配をした。攻略組でも屈指の勢力であるDDAだが、良くない噂も聞く。だがいつもより一段と目を輝かせるチグネさんを前に、その不安は徐々に消え嬉しさが勝っていった。

あの時に止めていれば、こんなことにはならなかったのだろうか？

私は攻略組にならず、様々な冒険譚を話しに来てくれるチグネさんを圏内で待ち続ける日々を、今でも送っていたのだろうか。

いや、違う。

あの時に、わずかに抱いていた本当の気持ちを伝えていれば良かったのだ。

——私も一緒に、チグネさんと冒険がしたい。

その一言が言えていたらと、後悔が濁流となつて私を押し流していく。

毎日毎日、目が覚めれば涙で視界がぼやけている。心臓が握り潰されそうな苦しさに襲われ、立ち上がる気力すらなくなってしまった。

リンドから話を聞いた日から、私は過去の思い出に縋る日々を送り

始めた。もう攻略組の、K O Bとしての私は死んでいた。

◆?

〈サツキside〉

「ノノが心配か?」

「それはもちろん、心配ですよ」

薄暗い通路を警戒して進む中、俺はシュガーに問いかけた。返答の
声にはいつもの元気はない。

あの日からノノは戦意を完全に喪失し、無期限の休養を余儀なくさ
れていた。副団長やギルドの女性隊員が面倒を見ているが、回復する
兆しは1ヶ月近く経った今でも見えていない。面倒見のいいシュ
ガーにとって、それなりの付き合いがあるノノの一時離脱を心配しな
いわけがないだろう。

「まあ、俺たちにどうこう出来る問題じゃない。今は信じて待つしか
ないさ」

「・・・そうですね」

複雑な迷宮区を進みながら、ノノの回復をただ願うばかりだった。

「・・・では明日、予定通り第67層ボスの偵察を行います。各人準備
を怠らないように。解散」

簡潔に述べたシュガーはそのまま部屋を出て行く。今までの彼な
ら飯の誘いに来るのだが、最近はそうだったことは無い。時間があれ
ばノノの元を訪れているようだ。

少し寂しさを感じつつも、俺は何も言わずに一人で夜の街に出た。

ちようど夕食の時間帯だったらしく、街の広場や通りは人混みで溢
れている。合間をすり抜けながら良さげな店を探すが、空腹の今はど

の店にも惹かれてしまう。こういう時の優柔不断さはいつまでも変わらないなど思っていると、不意に後ろから肩をツンツンとつつかれた。

「はい——え？」

振り向いた俺が見たのは、暗い赤色のフードを目深に被った少女だった。わずかに覗くヘイゼルの瞳が俺を射抜く。

「副団長？」

「ええ」

「ええって……どしたの？そんな格好で」

副団長は周囲を気にしながら抑え目の声で言った。

「あなたが寂しそうに出て行くのを見てね、しようがないからご飯くらい付き合っただけよかなって思ったのよ」

「寂しそうって……否定は出来んな。付き合ってくれるのはありがたいけど、なんで変装みたいなことしてんの？」

俺の問いにそっぽを向き、やや言いづらそうに副団長は言った。

「誤解されて変な噂が流れるかもしれないじゃない」

「まあ一理あるな。なら俺も目立たない格好にしとこ」

俺は赤と白で目立ちまくる血盟騎士団の制服から、夜の闇に溶け込む真っ黒なコートに装備を変更した。久しぶりに着る、攻略組になる前に愛用していた一張羅だ。副団長と同じようにフードを目深に被ると、俺は比較的空いている店を指さした。

「んじや、行こうか。あそこで良い？」

「ええ、任せるわ」

「あいよ」

俺が先導し少し間を空けて副団長が付いて来る。着替えたからか、先ほどまで感じていた周りからの畏敬の視線は消えていた。

空いている割には良さげな雰囲気の内の一番禺の席に座り、置かれていたメニューを机上に広げる。料理名からどんなモノかを予測している、対面に座った副団長がずっと半身を寄せてきた。必然的に顔が近くなるが、副団長の視線はメニューに向けられていて他意はないようだ。俺もメニューに視線を戻すと、やや元気の無い声。

「サツキくんは・・・相棒さんを亡くした時、どう立ち直ったの？」
「んえ？」

予期せぬ質問に変な声が出る。しかし至極真面目な副団長の雰囲気、俺はその真意を汲み取り答えた。

「んー・・・立ち直ってはないかな」

「え？」

気になった料理をいくつか選び、注文を済ませてから俺は続けた。
「今でも相棒が死んだのを受け止め切れてないよ。でも“約束”を守るために、悲しんでいる暇なんてないからな」

「“約束”？」

「ああ」

現実では有り得ない速度で料理を運んで来た店員NPCを見送り、俺はあの日を思い出す。

『君を必要とする人を、助けてあげて』。それまで誰かの為に戦うなんて微塵も考えなかった相棒が、なんで最期にそんなことを言ったかは分からん。まあ、おかげで俺は攻略組っていう新しい居場所を見つけてこうして生きてるわけだ。いつか天国で会うことがあったら聞いてみるさ」

俺の様子と話の内容が違い過ぎたのか、副団長は一瞬固まった後に口を開いた。

「そう、なのね。ごめんなさい、何も知らずに」

「いやいや・・・ノノの件だが、俺たちは信じて待つことしか出来ないんだから、あまり思い詰めることは無いぞ」

「・・・ええ」

一向に快復に向かわないノノの状態に、副団長は要らない負い目を感じているのだろう。こればかりはどうしようもない問題だ。何とかしたいと思う気持ちも分かるが、それで自分を追い詰めるのは間違っている。

「大丈夫、ノノは強い。人間としてな。必ず帰ってくるから気長に待とう」

「・・・ありがとう」

副団長は小さく笑みを浮かべた。その美しく可愛げな姿に思わずドキツとなり、誤魔化すように料理に手を付ける。そんな俺に続いて副団長も料理を食べようとして、その手を止めた。入口に向けられた彼女の視線を辿ると、そこに見知った姿を見た。

「お、キリト」

「サツキ・・・アスナ」

あの作戦以来の再会となるキリトと、サチが驚いた様子で立っていた。

E p. 43 夜会

〈アスナside〉

「久しぶりだなキリト、あの一件以来か」

「ああ、元氣そうで良かったよ。サツキなんて最後倒れてたから心配してたんだ」

「あー確かに。でも見ての通りピンピンしてるわ」

予期せぬ再会に戸惑ったアスナだが、男二人はそんな素振りも見せず会話を弾ませていた。会話に入るタイミングを探る中、巡らせた視線が同じく困惑気味のサチとぶつかる。

「こんばんは、サチさん。なんかごめんなさいね」

「いえいえそんな！こちらこそすみません」

なぜか互いに謝罪をすると、可笑しくてアスナとサチは笑ってしまった。男二人が疑問符を浮かべる中、アスナは言った。

「せっかいですから、一緒にどうですか？」

「それ美味そうだな」

「食うか？」

「サンキュー」

キリトが差し出した皿から肉の欠片を取ったサツキは、心底美味しそうに咀嚼を繰り返す。普段の彼には見られない子供っぽい姿に珍しさを感じつつ、アスナは手元の料理に手をつけた。

四人で食事となれば誤解の恐れはないと判断し、変装用のフードを外したアスナが他の客からは遠慮のない視線が集まる。何時ものことだと気にしない三人に対し、アスナの前に座るサチはどこか落ち着かない様子だった。

何か話題を出して気を紛らわせようと、アスナが口を開くよりも先にサツキが思い出したかのように話し始めた。

「そういえば今日は二人だけか？他は？」

「用事があるってどっかに行つたよ。俺とサチは留守番を頼まれたから、久しぶりに美味しい物でも食べようかってなつてさ」

「なるほどね、意図せずデートの邪魔をってしまったわけだ」

「で、デートってわけじゃあ・・・それならそつちはどうなんだよ」

「そりゃあ勿論デートに決まつて——なんてことはなく、独り寂しいぼっちな俺に副団長が気を利かせて付けて来てくれただけだよ。うん」

横からアスナのリニアの如き鋭い視線に射貫かれてサツキは即答する。キリトは苦笑いし、サチも小さく笑っているのを見てアスナも安堵する。

誘つたアスナ自身、場が持つか不安を感じていたが、サツキがズカズカと話題を振つて話すので会話が途切れることは無かつた。面識は互いに少ないはずなのに、よほど気が合うのか旧友と再会したかのように会話は弾んだ。内容はアインクラッドでの日々限定されたが、攻略組として、中層プレイヤーとして、コンビで、それぞれが違う道を歩んできた四人にとっては新鮮で興味深いものだった。

想定していた時間をだいぶ過ぎ、店内に他の客が居なくなつた頃に初めてサチが意を決した様子で話題を切り出した。

「お二人は、キリトが攻略組を抜けたことを怒っていないんですか？」

キリトは虚をつかれた様子を目を見開いた。それに構わずサツキは即答する。

「んー、俺は入れ替わりで入つたからなあ。知つての通り命懸けの事だから、他人に強制されるものでもないし。反対したヤツもいたらしいけど、もし俺がその場に居たら逆に今まで貢献してくれた感謝で送り出したと思う」

次を促すように視線を向けられたアスナは言葉に詰まつた。当時は突然の事で気持ちの整理が追い付かず、ヤケになっていた部分もある。今の考えを、素直な気持ちをアスナは絞り出した。

「私は・・・怖かつた。キリトくんがいなくなるのが。ずっとみんなの前に立って戦つてくれて、守つてくれていたから。私にそんなことは

出来ないし、私が今まで戦えたのはキリトくんがいたから。でも攻略よりも大切なものができたんだって、今は少し安心してる」

キリトは驚いた様子からどこか安堵したような表情になった。アスナはチラリと隣りを見て続ける。

「それに、少し頼りないけど新しい人も入ったからね」

「今までの活躍で頼りないって、攻略組のレベル高くない？」

「最前線で戦っているんだからレベルは高いでしょう」

「いやそうだけど、そうじゃない」

アスナの珍しい冗談にもサツキはツツコミを入れ、その場は笑いに包まれた。

「あれで良かったのか？」

「なんのこと？」

店を出て帰る道すがら、少し後ろを歩くサツキが遠慮がちに聞いてきた。

「キリトだよ。本当は戻ってほしいんじゃないのか？」

「そうね、前まではそう思っていたわ」

転移門の前でアスナは立ち止まり、サツキに向き直る。

「戻ってほしい気持ちと、キリトくんの選択を尊重したい気持ち・・・

どっちを優先すべきか悩んでいたけれど、ようやく答えが出たの」

「ほう、何が決め手だったんだ？」

「秘密よ。話したくなったら話すわ」

「なんだそれ」

首を傾げるサツキに別れを告げ、アスナは転移門をくぐった。

E p . 4 4 虚ろな光

〈サツキside〉

「「スイツチ!!」」

不気味な冷たさに包まれた戦場に、一寸違わない号令が響く。

俺は^{レイトウアーティン}霊 剣で眼前に迫った鋭利な髪を払い退け大きく後退した。

と同時に、偵察隊で一二を争う筋力自慢の槍使いが俺の前に飛び込み、なぎ払われた髪を力任せに押さえつける。

「キイイッー!」

どこか苛立ちを含んだ絶叫を上げるのは、恐ろしくも美しい長髪を武器とする人型の第67層ボス〈^{ザ・サッド}哀者〉だ。

「右側方、来ます!」

「あいよ!」

俺はシュガールの警告に合わせて二連撃技“バーチカル・アーク”を放ち、長く伸びた髪を斬り伏せた。しかし斬られた髪はすぐに再生する。

偵察戦を始めてから約一時間、特に危険を感じることもなく順調にボスの情報は集まっていた。長髪による遠距離攻撃は厄介ではあるが、対処に慣れてしまえばどうと言うことは無い。ボスのHPはすでに黄色に染まっている。特徴のない層のボスなんてこんなものだろう。偵察のベテランである面々は、おそらくそう思っているはずだ。

しかし、俺にはどうしても気になることがあった。

ボス部屋の奥に建つ祠のようなもの。位置を考えると、次の層への螺旋階段の入口だろうが、そのデザインが今までとは少し違う。クエストのキーアイテムやキーポイント特有の存在感を感じるのだ。確証はない。だが俺のゲーマーとしての勘が、あの祠に目を引かせる。「シュガー!どうする?もうちょい続けるか?」

陣形の後方で同じく長髪の処理をしていたシュガーも、祠の存在を無視出来ずにいるようだ。しかし流石の判断力でシュガーは指示を飛ばす。

「陣形を変更します!B・C班は更にボスに接近して攻撃を引き付け

てください！A班は迂回してボスの後方へ！」

「了解！」

各人が瞬時に行動に移り陣形を変えていく。A班を先導するシユガーが例の祠に向かうのを見て、俺は彼の思惑を悟った。

B・C班の牽制を掻い潜って伸びてきた髪を班員に任せ、俺とシユガーは祠までたどり着いた。

「どうだ？」

「見たところ普通のオブジェクトみたいです。開けられないので、やっぱり階段の入口なんでしょうか？」

「如何にも何かありそうなんだけどなあ」

古びた祠に鍵穴などはなく、無理やりにも開けるのは難しそうだ。戦況が大きく変わる節目であるボスのHP半減でも変化がないので、本当にただの杞憂だったのか。

「とにかく、一度戻りましょう」

「だな」

余裕とは言え、ボスを相手にしてる中いつまでも考えているのは危険だ。

二十分かけて少しずつ後退し、俺たちは死亡者ゼロで偵察を終えた。

「だから言っタロ、ボスに関係ありそうなクエは無いつテ」

「あんたの腕を疑うわけじゃないが、本当に無いのか？見落としてる可能性は？」

「67層にいる全NPCを調査済みダ。分かったのハ、悲惨な最期を遂げた女性が恨み怒りでモンスターになったってコトだけダヨ。実際にそうだったンダロ？」

「そうだけど、何か気になるんだよなあ」

偵察明けの昼下がり。どうしても祠の違和感が消えず、報告はシユ

ガーに任せて俺はアルゴと会っていた。事前に入手していたボスの情報に間違いは無く、祠に関するものは一つもない。

「でもサー坊の言う通り、気にはなルナ」

「だろ？」

「そんな明らかなオブジェに仕掛けがないとも思えナイしナ」

少し考えた素振りのあと、アルゴは頷いた。

「わかつタ。もう少し調べてみルヨ」

「助かる。何か掴んだら教えてくれ」

「報酬は高級ディナーのフルコースで良いゾ？」

「任せろ、とびつきり美味しいヤツ食わせてやるよ」

雑踏にまぎれて行くアルゴを見送り、俺は副団長にメッセージを飛ばした。アルゴに追加調査を依頼した事と本戦の延期を提案した内容への返信は、了解の旨とお疲れ様の一言だった。

空を見上げながら、俺は胸に残った嫌な予感を無理やり押し殺した。

◆？

〈アスナside〉

「じゃあボス戦は延期したのね」

「うん、少しだけね」

出された紅茶に手を伸ばしながらアスナは答える。ひと仕事終えて休憩に入ったリズベットは、よっころしよと女子に似つかわしくない声とともに椅子に腰掛けた。

シユガーから報告を受けたアスナは、予定外の空き時間をリズベットの元で過ごしていた。突然の来訪にも関わらずリズベットは快く歓迎し、遅めの昼休憩を取った。

「まあ慎重になるに越したことはないわ。誰も死なないことが一番よ」

「うん。偵察隊のみんなが、サツキくんの言うことだから何かあるん

だと思おうの」

何気なく言ったアスナの言葉に、リズベツトは目を丸くした。

「へえ、アスナも変わったわね」

「そうかな？」

「そうよ。最初の頃はスピード重視で、寝ても覚めても攻略！って感じだったのに。最近は落ち着いたっていうか、周りの意見をよく聞くようになったわ」

「確かに、前よりは慎重になったかも」

リズベツトに指摘されアスナは自身の変化を感じた。“攻略の鬼”とまで呼ばれた頃の面影はいつの間にか消えている。いつからだろうと考えていると、リズベツトが答えを出した。

「サツキが攻略組に入ってからかな、だいぶ丸くなったわよ。キリトとコンビ組んでた時もそうだったけど」

デスクゲームに囚われ自暴自棄になっていた時に、ゲームクリアの道を示したキリト。

己の無力さに打ちのめされていた時に、道を示す新たな光となったサツキ。

この世界でアスナという人間を救い、変えた二人の存在は間違いない大きい。

「で、どっちがいいの？」

「え？」

リズベツトの問いに今度はアスナが目を丸くした。

「だ・か・ら！あの二人でイケてるのはどっちよ？あ、もちろん男としてね」

「な、なに言ってるのよ！そんなじゃないわ」

首をブンブンと振ってアスナは否定するが、それがかえって裏目になりリズベツトはニヤニヤと笑みを浮かべて詰め寄る。

「ええくなんだかんだお似合いだと思うけど。でもキリトはもう相手がいるんだっけ？じゃあサツキかな」

「だから違うってば！なんでそうなるのよ」

「だって、ここ最近アスナが話すことってサツキのことばっかだもん。

自覚なかった？」

言われてみれば、リズベットに話すことといえばサツキの話題がほとんどだった。攻略の時はもちろん日常生活の他愛ないことも。今さら気付いたアスナは思わず沈黙する。より一層ニマニマと笑みを深めたりズベットは、何も言わずにアスナの答えを待っている。絶対逃がすまいとするその視線に負け、アスナは消え入りそうな声をこぼす。「確かに、少しは意識してるかもしれないけど・・・攻略組として頼りになる仲間ってだけで別に、好きとかそんなんじゃ・・・」

「――ほほう、これが俗に言うツンデレってやつか」

背後からすつかり聞きなれた声がして、アスナは反射的に振り返った。いつの間に入ってきたのか、声の主はどこか納得したように頷いている。

「さ、サツキくん!？」

「おつす副団長、奇遇だな」

偵察の疲れを感じさせないサツキは、背中に提げていたカタルシスをリズベットに手渡した。

「んじゃ、頼むわ」

「相変わらずボロボロね。もうちょつと優しく扱いなさいよ」

「これでも慈愛の心で使っただけだな」

肩をすくめるサツキに、アスナは高鳴る鼓動を抑えつつ聞いた。

「サツキくん、いつから聞いてたの・・・?」

「え?ずっといたわけじゃないぞ。少し意識してる、頼りになる、好きってわけじゃないってところかな」

「なっ!？」

一番聞かれなくなかったところをピンポイントで言い当てられ、アスナは顔が急速に熱を帯びるのを感じた。したり顔のサツキと必死に笑いを堪えているリズベットに弁明するも、はいはいと流される。

結局その日は、調子に乗ったサツキのへツンデレ副団長呼びに、アスナの本気の拳が閃いてお開きになった。

◆？

右へ、左へ、薙ぎ払う。

単純なこの動作を、かれこれ一時間は続けただろうか。

両手に握った身の丈ほどもある鋼鉄の鎌は、凍り付くように冷たい。長時間の戦闘で高揚した体温とは真逆に、襲ってくる屍人^{モンスター}を斬り伏せるほどその冷たさは増しているように思える。死神の鎌のような不気味な武器だが、かつて親友を裏切った私にはお似合いだろう。

後悔と自分への嫌悪が渦巻く頭に、派手なファンファーレが響く。聞き飽きたレベルアップを知らせるそれを合図に、私はソードスキルを発動させた。周辺に紅の軌跡が無数に刻まれ、一斉に飛び掛ってきた群れを消し飛ばす。

開かれた道を脇目も振らず走り抜け、戦線から離脱する。後ろから聞こえる数体の声を無視して、ひたすらに走り続ける。

あの日、親友を見捨てた時のように。

今日も私は、恐怖と絶望から逃げ続けている。

〈サツキside〉

偵察から3日が経った日の午後。

俺たちKOBとその他攻略ギルドで結成された総勢45名のレイドは、第67層ボス部屋の前に集まっていた。

あれからボスに関する新たな情報は見つからず、順調だった攻略ペースが落ちるのを危惧した各ギルドのお偉いさん方の意向で本戦に挑むことになった。祠の件は全員に伝達済みで、警戒するように伝えてはいるがやはり不安は拭えない。

集団の端であらゆる可能性を考えていると、久しぶりの声をかけられた。

「よおサツキ、珍しく難しい顔してんな」

「おめえはいつも通りのアホ面だな」

「この顔の良さが分からねえとは、まだまだ子供だな」

やれやれと首を振る侍男、クラインに俺は呆れのため息を吐いた。すっかり攻略組の一角となった〈風林火山〉を率いる彼だが、普段の姿を見ていると嘘ではないかと疑ってしまう。だがその実力と信頼は確かなものだ。

「お気楽なもんだな。こちとら消えない不安に頭を抱えてるつてのに」

「まあ正直、不安なことに変わりにはねえよ。でもよ、リーダーの俺が弱腰になってちゃあ士気に関わるからな。勝てるもんも勝てなくなるだろ？このメンツならいつも通り行けば大丈夫だって」

「いつも通り、な・・・」

俺は呟き、レイドの先頭でボス部屋の扉を無言で見つめる副団長に視線を向けた。タイミングよく副団長は、緊張した面持ちのレイドに向き直り凜とした声を発する。

「では予定通り、ボス戦を開始します」

それを合図に、各々が武器を手に取る。

「見ろ、アスナさんもいつも通りじゃねえか」

「・・・だな」

直前に不安を煽りたくないので同意するが、副団長の声が不安に揺れていることに俺は気付いていた。

◆？

不気味なほど冷たい空気が漂う迷宮を独り歩く。

死角が多いため警戒に集中力を要するこの場所は、とてもソロ向けとは言えない。それでも訪れた理由は、武器の強化に必要な素材を手に入れるためだ。今まさにボスと激闘を繰り広げているはずの67層から、わずか2層下という最前線と遜色ない難易度だが問題は無い。

誰かの為でなく、自分の為だけならば私は戦える。

迷わないように道を確認しながら奥へ進むが、私は違和感を感じていた。30分ほど敵とエンカウントしないのだ。広大な草原などのフィールドならば珍しいことではないが、迷宮のダンジョンでは本来運が良くても10分ほどで敵と遭遇する。

ありえない現象に警戒をさらに高めながら進むと、目の前の通路を猛スピードで何かが横切った。反射的に鎌を構えて目を凝らすと、一つ二つと続け様に通路を横切って行くのがモンスターだと分かった。私に気付いても不思議でない距離なのに、何かに引き寄せられるように走って行く。

「なんなの・・・？」

はち合わせしない様に音を消してモンスターたちが向かった先へ進むと、不気味な静けさの中で遠くから微かに何かが聞こえてきた。かなりの数と思われる、モンスターの声。

「・・・っ」

ずっと前、独りになる前の頃に見た光景が蘇る。無数のモンスター

達にリンチにされたプレイヤーが、恐怖に染まった絶叫を上げながら死んでいく様が。

加速する鼓動を押さえつけて音のする方へ足を進めと、淡い光がこぼれる部屋の入り口があった。そろそろとモンスターの群れが入って行くそこで、今まさに誰かが命を懸けて戦っている。私は全身を震わせながら、気付かれないように中を覗いた。

「ギシシシシエエエー！」

「ガアアッアッ！」

耳を劈く咆哮が絶えず響いていた。室内を埋め尽くす群れの数は尋常ではない。しかしそれよりも異質な存在がそこにはあった。

「・・・」

群れに囲まれながら、全方位から放たれる攻撃をまるで踊っているかの様に軽やかに躲している剣士。装備から侍と言った方が正確か。左腰に提げた大振りな刀を抜く気配はなく、ただ迫るモンスターの攻撃を躲し続けている。

「・・・すごい」

まるで周りが全て見えているかのような動きだ。攻略組でも真似できる者は限られるであろう芸当を、あの侍は当たり前であるかのようになっている。

その異様な光景に釘付けになり、私は背後に迫った敵に気付くのが遅れた。

「グルルルジャアア!!」

「え——きゃー！」

背後からの奇襲をまともに喰らい、私は群れの中に吹き飛ばされた。HPが2割ほど減少し、視線を上げると無数のギラついた眼が私を捉えていた。

次の瞬間、私に向かって血に飢えた数多の武器が振り下ろされた。「くっ！」

ダメージエフェクトで視界が赤色に染まる。全身を不快なショックが駆け巡る。もの凄い勢いで減少していくHPを見てめっちゃくちゃに鎌を振るうが多勢に無勢だ。

死が迫りあの時の、見殺しにしたプレイヤーの死ぬ瞬間がフラッシュバックする。あの人も、こんな絶望と恐怖を感じていたのだろうか。

いや、あのプレイヤーだけではない。

守ると約束したのに、自分が生き残るために最悪の形で裏切ってしまった親友の顔を思い出す。絶望の中で足掻いていたであろう彼女に、私がさらに絶望を突き付けて、そして――

「・・・ごめんね、アスナ」

伝えることの出来なかった言葉が、涙とともに零れた。

数ミリになったHPを最後に、私は目を閉じた。あの時と同じ、死の瞬間を見たくなかった。訪れる死を待った。

直後に聞こえたのは、部屋全体を揺るがす轟音と大量の破砕音だった。耳障りだった群れの声が消え、辺りが静寂に包まれた中で私に近づく足音が一つ。

「・・・大丈夫、か・・・」

恐る恐る目を開けると、へたり込む私を見下ろす侍と目が合った。正確には、顔につけた鬼の仮面のそれと。

◆?

〈サツキside〉

「スイッチ！」

「あいよー！」

長髪を両断して出来た隙で後方へ大きく跳躍する。すかさず飛び込んで来た槍使いにタゲを任せ、俺は大きく息を吐いた。

戦闘開始から30分程が経過し、残りHPバーが1本と少しになったボスを見て誰もが順調だと思っただろう。このまま何事もなく終わってくれと祈りつつ、俺は改めて戦況を見直した。

俺と副団長、シュガーを遊撃隊として除いた42名で6人パー

ティーを7つ編成し、ボスのタゲ取りと回復、攻撃をローテーション形式で回している。手練揃いなだけあって連携やスイッチに問題はなく、危なげなく戦闘は続いている。余裕、とさえ言える。

「大丈夫そうですね」

ポーシオンを飲み終えたシユガーが同じように戦況を見回して言った。

「だな。お偉いさん方にグチグチ言われるぞ」

ボス戦を延期すると言ったら各ギルドの幹部たち、特にDDAが抗議に近い文句を延々と言ってきたのだ。ヒースクリフの一言で収まったものの、何事もなく終わればまた文句を言って来るに違いない。

「言わせておけばいいのよ、気にすることないわ」

戦線から離脱して来た副団長が合流してくる。彼女の言うように、何事も無いに越したことはないのと言わせておくことにしよう。

「あと10分もしないで終わるな」

俺がそう言った瞬間に、HPバーが最後の1本となった。ボスが実際甲高い絶叫を上げる。各パーティーはローテーションするためスイッチするタイミングを伺っていた。

「うっし、ラストやるか」

「はい！」

「ええ」

俺たちも加勢するために愛剣を握り直す。

ボスが絶叫が止み、一瞬の静寂が訪れた時だった。

ギイイイ・・・

不気味なほど、その音はボス部屋に響いた。

音がした67層ボスの後方、例の祠がその扉を開いていた。そして

「アアアア・・・アアアアア」

呻き声とともに恐ろしく長い指が、次にグチャグチャにひしやげた

醜い顔、異常に痩せ細った腹と足が、頭になった。

誰もが動けずに現れたソレを見ていた。血走った眼で立ち尽くす俺たちを見回したソレは、腰に提げた2本の禍々しい鎌をだらんとした動作で握った。

同時に、ヤツの頭上に1本の長大なHPバーと固有名^{ザ・ラバリー}〈奪者〉が表示された。

「副団長！シユガー！」

言うや否や俺は走り出した。

背中に提げたままだったカタルシスも引き抜き、ノロノロと動き始めたラバリーの元へ向かう。

「CからG班で残りの1本をお願いします！A・B班は僕らとこちらの相手を！」

「攻撃パターンを見極めるまでは防御に専念してください！」

シユガーと副団長の指示に全員が即応し、想定内だと言わんばかりに陣形が変更されていく。ラバリーの一番近くにいたB班——クラインたちへ^{ザ・サント}風林火山〉がタゲを取り、もう一体と混戦にならないよう引き離れた。

ラバリーの前でタンク役のトールラスが盾を構えると、狙いを定めたのか右手の鎌を無造作に振るった。

何の変哲もない、ソードスキルですらないその一撃は、先ほどまで^{ザ・サント}哀者の猛攻を防ぎ切っていたトールラスの盾をあっさりと捲りあげた。間髪入れず、強烈な金属音とともに体勢を崩されたトールラスに、左手の鎌が横薙ぎに払われた。

「ガッ——!?!」

直撃を喰らって吹き飛ばされたトールラスは勢いよく転がった。HPは赤に染まる寸前で止まったが、ぐったりとしてその場で動かない。

「と、トールラス！」

「ッ！」

悲鳴にも似たクラインの声に反応してか、ラバリーはクラインに向けて鎌を振り上げた。それが振られる前に、俺はラバリー目掛けて突

進技：“レイジスパイク”を発動させた。限界まで威力をブーストして10メートルほどの距離を一瞬で縮める。

だが胴体を狙った剣尖はヤツを捉えることは無かった。消えたと錯覚するほどの速度で、背後からの俺の一撃を躲したのだ。着地した時には、すでに俺の攻撃範囲から絶妙な距離を置いていた。

「見かけによらず頭は良いようだな。クライン！こっちで引きつけるから回復させろ！」

「わかった！すまねえ」

風林火山の面々がトールラスを引きずって後退していく。その間もラバリイは俺を見たまま動かなかった。

「強さはケタ違いって感じですか」

「ああ、かなり強いぞ」

「ええ。タンク役で一撃半分、つまり——」

「——紙装甲の俺たちなら、即死だろうな」

A班から息を呑む気配がした。俺はラバリイから目を離さずに副団長に判断を仰ぐ。

「どうする？出直すか？」

一瞬の間のあと、副団長は決断する。

「・・・片方を倒した後、撤退します」

「了解。じゃあシユガーはあつちに加勢してサクツと倒して来てくれ。その間こっちのタゲ取っとくから」

「わかりました！」

「クライン！片方倒したら撤退するから、倒れたヤツは外まで連れて行け！」

「あ、ああ・・・わかった」

壁際で回復を終えたクラインたちが移動するのを見届けて、俺は再びラバリイと対峙した。やる気がなさそうに脱力した見た目に反し、攻撃力と速度は間違いなく今までのボスでも上位に入る。俺はわずかな予備動作も見逃さないように、ヤツに意識を集中させた。

そんな俺から、ラバリイは突然ずっと固定していた視線を外した。見ているのは、今まさに残り数ドットのHPが無くなる寸前のサツド

だ。

「これで、終わりだあああ！」

トドメとなるソードスキルを放ったのは、DDAの両手斧使い。サツドの頭上まで跳躍し、単発技・“インパクト”を発動させる。

途端、俺の全身を戦慄が走った。

だが動くのも、声を出すことも間に合わなかった。振り下ろされた両手斧が脳天を直撃し、そのHPを全損させる。

サツドはピタツと動きを止め、その全身が光を帯びて爆散――

――しなかった。

「・・・は？」

誰もが有り得ない現象に理解が追いつかない中、空中で技後の硬直時間に囚われていた両手斧使いに、サツドの長髪がグルグルと何重にも絡み付いた。

そして、それを見据えたラバリイが右手の鎌をゆらりと持ち上げる。

「ツ!?クソツッ！」

俺はラバリイを止めようと走り出すが、同時にヤツは軽々した動作で鎌を投擲した。狙い変わらず、モゴモゴと長髪の中で蠢く両手斧使いの元へ吸い込まれるように近付き、そして――

「あっ・・・？」

その体を、腹部から両断した。

◆?

「・・・大丈夫、か・・・?」

本物の侍の様な威厳がある声に、無意識に体が硬直する。私を一瞥した侍は身を翻すと、部屋の奥に開かれた祠に向かつて歩き出した。

「待って!」

その背中に私は声をかけ、束ねた長髪を揺らして振り向いた侍に駆け寄った。

「その、助けてくれてありがとう」

「・・・いや、私こそ、すまなかった・・・近くに、居たことに、気付かなかった・・・」

「どういふこと?」

謝罪の意味が分からないでいると、侍は信じられないことを言った。

「・・・先ほどの、大群^{アレ}は、私が・・・意図的に、引き起こした、ものだ、鍛錬の、ために・・・」

「鍛錬って、あんな危険なやり方しなくても」

私の言葉に侍は仮面の下で自虐的に嗤った。

「・・・こうでも、しなければ・・・あの高みに、達せられぬ・・・」

あの群れを一瞬で掃討する実力があるのに、さらに強くなるうとしている彼に私はある種の恐怖を感じた。それでいて攻略に参加していないのだから、彼の行動原理が分からない。

いやもしかしたら、私と同じなのかもしれない。

「・・・そなた、名前は・・・?」

「ミトよ。あなたは?」

「・・・ルナ・・・ミト、一つ、頼まれて、くれないか・・・」

「命の恩人だもの、私に出来ることなら」

そう言うルナは部屋の奥、意味深に設置された祠を指さした。

「・・・あの中を、調べてほしい・・・私はここで、湧いてくる、ヤツらの相手を、する・・・」

「まだ湧いてくるの?」

「・・・この部屋に、いる限りは・・・無限に、湧いてくる」

「わかった」

ルナは入り口に向き直り私は祠に向かった。かなり古びているそれは、単なるオブジェクトとは思えない存在感を放っている。埃を払いながら慎重に扉を開けると、中には古びた紙が一枚置かれていた。

「これは・・・」

書かれていた文字は所々が掠れているが、その内容に私は血の気が引くのを感じた。嫌な予感が全身を駆け巡った。

「もしかして・・・そんな・・・!」

私は紙を握りしめてルナの元へ走った。

◆?

〈サツキside〉

2つに分かれた体が爆散するのを見て、ボス部屋は阿鼻叫喚の地獄と化した。

その様を見て、感情のないはずの2体のボスが卑しい笑みを浮かべたように俺には見えた。

楽勝と思われたボス戦は、突如として現れた二体目ラバリイとHPを全損しても死なない一体目サットによって50層以来の犠牲者を出し、一気に絶望的状況に陥った。

「なんで、HPはないはずなのに・・・!」

初めて見るHPが0で動き続けるモンスターに、シユガーと副団長でさえ混乱と恐怖に包まれている。俺は止まりそんな頭を無理矢理加速させて考える。

嫌な予感の中した。ボスが2体、更にはHPが0でも死なないと

なれば何か特別な条件があるはずだ。絶対に勝てない、なんて理不尽な仕様はS A Oでは有り得ない。公平さを重んじる茅場晶彦がそんなことをするとは思えない。

「考える！何か見落としているはずだ・・・！」

おそらくボス攻略のヒントである何か^{フェアネス}が抜けている。だがそんなことを悠長に考えている暇なんてない。崩れた陣形に、今まさに2体のボスが牙を剥こうとしている。

「落ち着いて！陣形を立て直して防御と回避に集中！隙を見てG班から結晶^{クリスタル}で離脱してください！」

焦燥に駆られた副団長の指示に、各班は震えながらも動き出した。しかしそれは、嬉々とした様子^{フェアネス}のボスの前ではあまりに遅過ぎる。

「アアアアアアアア・・・」

無造作に、しかし確実にラバリーの鎌は逃げ惑うレイドメンバーの命を刈り取っていく。一つ、二つと命の破碎音が奏でられていく。心做しか、サツドの長髪による攻撃の速度と威力が増しているようにさえ思えた。

恐怖で腰を抜かした1人に、ラバリーが鎌を振り上げたところで俺は堪らず駆け出した。

ラバリーの前に躍り出て両手の剣をクロスに合わせ、振り下ろされた鎌を受け止める。途方もない衝撃に大量の火花。押し戻そう、などと言う次元の話ではない。押さえつけるのに精一杯で、少しでも力が抜ければ真つ二つにされてしまう。

「ッ！あああッ早く離脱しろ！」

俺の叫びに反応した数人が、転移結晶を取り出す気配を感じた。

だが直後、俺にのしかかっていた鎌の重さが消えた。

「ッ!？」

顔を上げると、眼前に迫っていた鎌が、いやラバリー自体が消えていた。どこに行ったと視線を巡らせた先で、無情にも鎌に両断されたメンバーと目が合った。その手には転移結晶が握られている。これは――

「ッ！クソッ！ダメだ、転移結晶を使うな！」

血反吐を吐くかの俺の警告は遅過ぎた。ラバリイは、その巨体に似つかわない速度で次々と鎌を振るう。ターゲットされた者は全て、離脱のために転移結晶をその手に持っていた。

無数の種類いるモンスターには、特殊な特性を持つものがある。動物型なら火を怖がり、聴覚が発達したヤツは大きな音に弱い等だ。プレイヤー側が有利になるものもあれば逆に、厄介な特性を持つものもある。

それが《攻撃優先》だ。ヘイト値に関係なく、条件を満たすプレイヤーがいれば最優先で攻撃するもので、状態異常になった者、レベルが一番低い者、女性であること等様々な種類がある。

初見で気付くのは難しく、戦線が崩れて全滅したなんて珍しいことではない。

今までのボスでこの特性を持ったヤツはいなかった。ましてや、結晶を持つ者を優先するなど初めてだ。即死級の攻撃力のボスに狙われるため結晶が使えない。実質、ここは《結晶無効化エリア》と同じだ。

全滅——という言葉を頭から叩き出して、俺は悲鳴と絶叫をかき消すほどの大声を出した。

「全員聞け！結晶を使おうとするとタゲられる！攻撃を躲しながらゆっくり扉まで後退するんだ！近くのヤツと隊形を作り直せ！」

言い捨てて俺はラバリイの元へ走る。こちらに気付いたヤツがゆっくりとその醜い顔を向けてくる。込み上げてくる恐怖を押し殺しながら、俺は心の中で強く念じる。

——守る！これ以上、誰も死なせない！

俺の決意に呼応してか、2本の愛剣がその刀身を黒色に染めた。視界がモノクロームになり、ラバリイの姿をくつきりと映し出す。恐怖に打ち勝つように強く、優しい力が全身を包み込んだ。

「アアアアア……」

持ち上げられた鎌がモノクロームの世界で真紅に染まるのを見て、俺は漆黒のカタルシスを構えた。

「はあああつー！」

斜めに斬り上げる両手剣カテゴリ：“サイクロン”で鎌を受け止める。大音響とともに二つはせめぎ合い、俺は間髪入れずに^{レイヴァー・テイン}霊剣を振るった。

〈暗黒剣〉連撃技：“常闇剣舞”

通常のソードスキルはシステムがプレイヤーを半強制的に動かしてくれるが、この技は俺の動きに合わせてシステムがアシストをしてくれる。言わば型のない自由自在なソードスキルだ。俺が意図的にキャンセルするか、被弾するまでアシストは継続される。

黒閃がラバリーの腹部を捉え、初めてそのHPを減らした。

一撃喰らわせ、回避し、捌き、また一撃見舞う。強力なシステムアシストとモノクロームの視界のおかげで、俺は単身でラバリーを足止め出来ていた。

——このまま……早くみんな、離脱しろ！

死闘の片隅で俺は祈った。

だがこの世界で祈りが通じたことなんて、一度もなかった。

「……アアー、アアアアアアアアアア！」

今までと違う呻き声を上げて、ラバリーは両手の鎌を高々と掲げた。新たな攻撃を警戒する俺の目は、ヤツの鎌に現れた変化を見逃さなかった。

禍々しい形状に変化はない。

だが、放つ輝きが違うのだ。

何かに濡れたような、独特な光の反射。俺はアレを見たことがある。

そうだアレは……SAO最初期の頃、初見で最も多くの犠牲者を

出した強敵たちが使っていた武器と、同じ輝きだ。

「——ッ！」

ズキリと頭痛がした直後、ラバリイは両手の鎌を無茶苦茶に振り回し始めた。

読めない連続の攻撃をどうにか捌いていく。

そして俺は、猛攻の中で部屋全体に飛び散るように広がっていく雨粒のような物を見た。モノクロームの世界でそれは、まるで赤い雨の様だった。

「ダメだ！ソレに触れるな！」

鎌の回避に徹しながら警告する。だが雨の様に降り注ぐソレを避ける事など不可能だ。サツドの攻撃を防ぎながら後退していたメンバーたちは、状況が分からないままソレに触れる。

直後、メンバーのプレイヤーネーム横にアイコンが追加された。それは俺の視界左上に小さく表示された副団長とシユガーも例外ではなかった。2人のそれを見た俺は、戦慄とともに息を呑む。

表示されたのは、一定時間声が出せなくなる《沈黙》と、視力を失う《盲目》のデバファイコン。

数ある状態異常でも最悪と言われるものだった。

◆?

「……素晴らし〜」

ヒースクリフは世界の支配者として感嘆の声をこぼした。

管理者用ウインドウに映し出された剣豪サツキと最凶ラバリイの戦いを鑑賞していた彼は、自分の思惑が現実であつたことを確信していた。

増え過ぎた攻略組から優秀な者を選別するために急遽追加した《奪者ザ・ラバリイ》は、クウォーターポイントのボスに匹敵する強さをしている。体格やHPは大きく差があるが、その厄介さは今までのボスとは比較にならない。

プレイヤー側が不利になる各種の状態異常をランダムに付与する毒が、ラバリイの鎌に塗られているのだ。直接攻撃を受けることはもちろん、鎌が振られ飛び散つたものに触れるだけで状態異常に陥る。

広範囲の状態異常攻撃という類を見ない仕様だが、解除アイテム以外にも救済の措置はしっかり用意してある。それに気付くためには隠されたヒントを得る必要があつたのだが、その前にボス戦が始まつてしまつたので“詰み”の状態だ。

良くて半分死に、最悪の場合だと全滅を考えていたヒースクリフ。しかしその予想を良い意味で裏切つたのは、サツキだった。

全てのソードスキルを使えるようになるユニークスキル〈剣豪〉全ての、と言つてもそれは他のユニークスキルを除いた話だ。だからヒースクリフの〈神聖剣〉やノノの〈抜刀術〉などは例外となる。

・・・はずだった。

最初にそれを確認したのは、クリスマスの日。

次は《亡霊王ラフィン・コフィン》との戦闘。

その次は、“笑う棺桶ラフィン・コフィン”討伐作戦の時。

バグだと思われたその現象は、世界の理を超越してサツキが引き起こしていた“奇跡”とも言えるものだった。

右頬に蠢く痣が浮かび、本来の色を塗り潰すように漆黒に染まったサツキが、今は亡き黒の剣士の姿と重なる。

ヒースクリフに自然と笑みが浮かんだ。歓喜の笑みが。

「期待しているよ、サツキ君」

叶わないと思っていたかつての“最強”との戦いを思い描きながら、ヒースクリフは67層ボス戦を鑑賞し続けた。

◆？

〈アスナside〉

——声が、出ない。

自分の身に起きた異常にアスナは混乱した。

そしてその異常は、目の前でバタバタと倒れていくレイドメンバーたちにも起きていることは明らかだった。

「なんだよ、これ！」

「どうなってるんだ！いきなり、体が……」

表示されたプレイヤーネームの横に、先ほどまでは無かったアイコンが追加されていた。毒、麻痺、火傷、凍傷……メンバーそれぞれが、あらゆる状態異常に陥っている。

「あ、アスナさん！みなさん！」

声の方を向くと、両手剣を構えながら辺りを探るシュガーがいた。ネーム横のアイコンは《盲目》。アスナが喰らった《沈黙》よりも危険なものだ。視界ゼロの彼とは声でしか意思疎通が出来ないが、それを封じられたアスナには何も出来ない。

再び崩れた戦線を見回しながら、アスナは思考を加速させた。

この状態異常は間違いなくボスによるものだ。しかしアスナはも

ちろん、全員が回避に徹していたので攻撃を受けていない。単身でラバリーを食い止めているサツキは、今のところ状態異常になっていない。

ふと、自身の団服の肩に何かが付着しているのにアスナは気が付いた。

ただの汚れエフェクトではない。よく見ると、状態異常になった全員にも同じものが付着している。考えられるのは一つ。

(これに触れたから・・・!?)

サツドの攻撃に集中していたせいで、アスナを含むほとんどが気付かないうちに何らかの攻撃を受けていた。いや、正確には攻撃と呼べるものではない。

声を出せないもどかしさを抑え、アスナは考える。

(サツドが特殊な攻撃をしたとは思えない。フィールドのギミックでもなければ、あとは――)

核心に迫った時、左上に表示されたサツキのHPが大きく減少した。反射的に見ると、パリイに失敗したのか肩に真つ赤なダメージ痕を刻んだサツキが大きく後退してラバリーと距離を取っていた。

HPを3割ほど減らしたラバリーに対し、サツキは危険域寸前だ。いくら彼でも、このままでは・・・

全滅——という言葉が全身を支配する。恐怖と混乱の声が遠ざかる。

(これで、終わり・・・?)

あの時と、50層ボス戦と同じくアスナは動けなかった。

全身から力が抜け、アスナはその場にへたり込んだ。

不思議と落ち着いていて、恐怖はなかった。何時かはこの時が来るだろうと予感はしていた。覚悟は出来ていた。

『明日奈、もうすぐ模試でしょう?大丈夫なんでしょうね』

『頑張ってるならいいんだ。心配させないでくれよ』

『大丈夫、お前はよくやってるよ』

今となつては遠い、家族の記憶を思い出す。厳しい家だったが、求

められたことに応えようと必死になっていた。必死に還ろうとした。

『大丈夫。私が、守るから……絶対にアスナを危険な目に合わせない』
焼けるような夕焼けに染まった草原で、そう約束してくれた親友。
それが果たされることはなかったが、恨んだことは一度もない。突然
の別れから再会することはなかったが、彼女ならきつと大丈夫だ。

回想にふけていると、ソードスキルでサツキを退けたラバリイがその醜悪な顔をアスナに向けた。

冷たい戦慄が走る。

明確な殺意をもって、ラバリイは鎌を掲げた。

それを見たサツキが必死に何かを叫んでいるが、アスナには届かなかった。黒く染まった瞳が何かを訴えている。全てを包み込む夜の闇のように深く、優しい瞳。

ラバリイは躊躇なくその腕を振るい、鎌を投擲した。

近づく死の瞬間に、アスナは目を瞑って身を任せる。

「——はあああああッ！」

直後に聞こえた声を、アスナは幻聴だと疑わなかった。

聞こえるはずのない、この場にいるはずのない人の、懐かしい声だったから。

ガキイインツ！と甲高い音とともにアスナは目を開いた。

アスナの命を刈り取るはずだった禍々しい鎌は、対称的に優美な輝きを放つ鎌に弾かれていた。その衝撃で禍々しい刀身から何か飛び散る。アスナは瞬時にそれこそが状態異常の元凶なのだと思感するが、声に出すことが出来ない。

しかしアスナの意図を見透かしているかのように、乱入者は雨の様に降りかかるそれを、鎌を高速で振り回して弾き飛ばした。

薄紫色の長髪が揺れ、アスナは今度こそ息を呑んだ。

「・・・ごめん、アスナ」

親友^{ミト}は一言そう言うと、アスナを守るようにラバリイに向き直る。

アスナはその背中に、かつて抱いていた以上の安心と頼もしさを感じていた。

〈サツキside〉

突如現れた大鎌使いに、俺は驚きを隠せなかった。

一撃死しかねない攻撃の前に躍り出て防ごうとするなど、余程の胆力がなければ出来ることではない。さらに目を見張るのは、武器の取り扱いだ。アインクラッド広しと言えど《鎌》を主武器にしている者は少ない。他武器と比べて扱いが難しいからだ。しかし彼女は、身の丈ほどもある大鎌を軽々と自在に扱い、降りかかった毒すらも吹き飛ばした。

攻略組で彼女を見たことはない。しかし、かなりの実力者であることは明らかだった。

攻撃を防がれたことに腹を立てたのか、俺には目もくれずラバリイは鎌使いの元へ向かって行った。ヤツのソードスキルを喰らったことで《失聴》の状態異常になった俺に周りの音は一切聞こえないが、依然として切迫している状況なのは目に見えている。

俺がポーシオンを飲み終えて走り出すのと同じタイミングで、ラバリイが鎌使いを目掛けてダッシュした。

振り上げられた禍々しい鎌を見て、鎌使いは二連撃技・“ベネデイクシヨン”を発動させた。初撃の斬り上げでラバリイの攻撃を受け流すと、横薙ぎの二撃目が腹部にヒットしHPを減らす。わずかに出来た隙を見逃さず、さらに二連撃技・“ライテスネス”で追撃する。

「はあああっー！」

怯んだラバリイに追い付いた俺は短剣カテゴリー単発技・“ラピッドバイト”で背中を抉る。確かな手応えを感じ、さらに片手鎌カテゴリー・“ウッドペッカー”を見舞う。反撃を喰らう前に俺と鎌使いは意図せず同じタイミングで大きく後退した。

のらりとした動作で毒塗りの鎌を拾うラバリイを警戒しながら、俺たちは固まったままの副団長に近付いた。鎌使いがポーチから取り

出した《咳止めポーション》を手渡すと、副団長は一息に飲み干す。

「次いで俺に何か話していたが、失聴状態の俺には何も聞こえない。ジェスチャーでそれを伝えると幸いにも意味が伝わったらしく、薄ピンク色の《感音ポーション》を差し出してくる。通常時に使えば一時的に〈聞き耳スキル〉の効果を得られ、失聴状態時にはそのデバフを打ち消す。ありがたくそれを受け取って飲み干すと、静寂から一転、阿鼻叫喚の地獄へと引き戻された。

「——聞こえる?」

「ああ。助かった、ありがとう」

凜としたその声はどこことなく副団長に似ているように思えた。

「……ミト、ミトだよね……?」

消え入りそうな、か細い副団長の声。ミトと呼ばれた鎌使いの少女は何かを言いたげにするが、沈黙でも喰らったかのように何も言えずにいた。ワケありと思われる2人の関係を知りたいと思う気持ちを押し留め、俺は無理やり本題に入った。

「悪いんだけど、もう少しだけ協力してくれないか?」

「……もちろんよ。そのために来たんだから」

「心強いな。まあ見ての通り“詰み”な訳だけど……もしかして、ボスについて何か知ってる?」

「……」

ラバリイとサツドを一瞥した鎌使い——ミトは、希望とも絶望とも言える答えを口にした。

「……アイツらは、2体同時に倒す必要があるの」

◆?

〈ミトside〉

「……ミト、何かあったか……?」

目にも留まらない速さで残党を処理したルナに、私は握っていた紙を差し出す。古びたそれに書かれていた事は、私の予想通りならば最悪の結果を予兆していた。

哀しき呪縛に囚われた者

死して尚、城を彷徨う命を救わんと、全てを奪う醜き者

そのエモノを潤す血毒は、生者の万物を侵す

輝石の光は、彼の者には眩しい

両者の間には、何者も入らん

堕ちた魂は、二つで一つ

断たんとするなら、共に滅ぼせ

「・・・これは・・・」

「多分、67層ボスの攻略ヒントじゃないかな。情報屋が最近、躍起になって探してたんだ。偵察で何か違和感があるって」

必要最低限の用事でしか街中を出歩かない私でも、ボスの情報を求める声は耳に入っていた。しかし自分が生き残るために必要なこと以外には一切目を向けていなかった。攻略に役立つ情報を知っているはずがなかった。

しかし偵察で判明していたボスの名が、最初の一文である哀しき者と一致している。二文目からは何を指しているのか分からないが、これこそ偵察隊が感じていた“違和感”の答えとなるのではないか。

「どうしよう・・・もうボス戦は始まっているはず」

「・・・伝えに、行けばよからう・・・」

「私がボス部屋まで？無理よ、私は・・・」

レベル的には問題ではない。でも私には出来ない。

もし間に合わなかったら、かつて犯した過ちを繰り返してしまうから。

深刻な顔をしていたのだろう。ルナは私に一つの提案をしてきた。

「・・・直接、伝えられないのなら、誰かに依頼、すると良い・・・」

「そんな危険なこと、引き受けてくれる人いるかな？」

少し間を置いて、ルナは言った。

「・・・攻略組に、信頼され、いち早い伝達が、可能なのは・・・情報屋の《鼠》だろう・・・」

「よくオレっちがここにいと分かったナ。どうやって調べたンダ？」

「勘よ」

ニシシと笑う小柄な女性——《鼠》と呼ばれる情報屋アルゴに私は簡潔に答えた。

嘘は言っていない。日夜インクラッド中を走り回っているであろう彼女とあっさり会うことが出来たのは、ルナの驚異的な勘の良さによるものだ。ドンピシャで現在地を言い当てて急行したのが幸いし、こうしてコンタクトを取ることができた。

「そっちのおニーサンも初めましてだナ。これからご鼻屑に」

「・・・ああ、何かあれば、頼もう・・・」

さすが攻略組とも顔見知りなだけあり、ルナの風格にも彼女は動じない。頼もしさを感じつつ私は本題を切り出した。

「緊急の用件だから、手短に言うわ。67層ボスのものと思われる情報を手に入れました」

アルゴの顔から笑みが消えた。

「本当力？」

「ええ、間違いないと思う」

私は古びた紙片をアルゴに渡した。内容を一瞥した彼女の顔に緊張が走る。

「ゴイツは不味いな、もしかしなくてもボスの情報だ。しかも二体カ・・・？最後の文は——」

「——ボスの、同時討伐を、示唆している・・・」

ルナの眩きで空気が重くなる。

「ボスが二体だったことは過去にも……でも同時討伐なんて条件は初めてダナ。それにこの『血毒』って言葉は、毒を使うってことか？」

「『万物』ってというのが気になるわね」

「……通常の毒に非ず、全ての……状態異常といった、ところか……」
ルナの推察に、私とアルゴに戦慄が走った。最悪のシナリオが脳内で組み立てられていく。

「っ！ボス戦なら、ポーションやクリスタルも持って行っているんでしよう？」

「当たり前ダ！各種ポーションはもちろん結晶^{クリスタル}だつて——」

「……それは、危険だ……」

「どうということ？」

ルナは顎に手を添えながら、鋭いかつ恐ろしい予測を述べた。

「……『輝石の光』が指すのは、おそらく結晶^{クリスタル}……ボスには、結晶アイテムに関する特性が、あるはずだ……」

Ep. 49 往け

〈mitside〉

「・・・少し、速度を上げるぞ・・・」

「ええー!」

立ち塞がる屍人^{モンスター}たちを無視して薄暗い迷路を走る。

初見ではとても出来ないことだが、全容が表示されたマップがそれを可能にしている。アルゴから最前線迷宮区のマップ情報を無償譲渡されたのは、20分ほど前のことだ。

「——とにかく、今はレイドに情報を伝えるのが最優先だ!」

焦りの声を上げるアルゴは、ウインドウを操作しながら続けた。

「2人はボス部屋に急行してクレ!これはマップ情報だ!」

「ちよ、ちよっと待ってよ!」

差し出された半用紙アイテムを、私は受け取れなかった。

「無理よ、私には・・・ボス戦なんて・・・」

「頼む、今行けるのは2人だけなんだ!」

「私、私は・・・」

かつて痛感した自分への失望と、打ち勝てなかった恐怖が全身を硬直させる。

——今から駆け付けたところで、状況が変わるとは思えない。

——行くならもっと、大勢でないと。

——街で有志を募れば、きっと他の誰かが。

あの時と同じ、逃げる選択肢が頭を埋め尽くしていく。

私の濁流のような思考は、ルナの口から出たその名で塞き止められた。

「・・・ここで攻略組を、特に・・・剣豪サツキや、閃光のアスナを喪うのは、確かに痛手だろう・・・」

「——え」

忘れられないその名に、時が止まったような気がした。脳裏に焼き付いた親友の笑顔がフラッシュバックする。私は震えた声を発した。

「アスナ……いま、アスナって言った……？」

ルナは知らないのかという様子で確かに言った。

「……閃光のアスナ、血盟騎士団の副団長にして……細剣の名手……」

「っ……ああ、嘘……」

私は脱力しその場に膝をついた。あの日から張っていた糸が切れ、同時に安堵と新たな罪悪感が全身を満たす。混ざりあつた感情が涙となつて頬を伝った。

「……生きて、たんだ……アスナ……！」

「アーちゃんの知り合いカ？」

「……ええ、親友だった。今となつては、恨まれてるかもしれないけどね」

「……そうカ」

目を見開いたアルゴだったが、深くは触れなかった。代わりに再びマップデータが記された半用紙を差し出してきた。

「アーちゃんは簡単に死ぬほど弱くない、まだ間に合うヨ」

「……少なくとも、全滅はない、だろう……」

「……ええ、そうね」

完全なビキナーだった彼女が、今や攻略組ギルドの副団長だ。あの日から今までどんな経験をしてきたのかは、裏切り見捨てた私には分からないし知る権利もない。でも、そんな彼女が簡単に負けるとは思わない。

私は半用紙を受け取り、涙を拭って立ち上がる。

「オレっちは急いで増援を集めるカラ、アーちゃんを、みんなを頼んだヨ」

「分かった……私一人だと心もとないから、ついて来てくれる？」

ルナは小さく笑みを浮かべて言った。

「……付き合おう……」

「——見えた!」

一本道の最奥に異質な存在感を放つ巨大な扉が見えた。間違いない。ボス部屋だ。微かに、しかし確かに絶望に染まった悲鳴が聞こえてくる。

「間に合え……!」

雑魚たちを引き離れた速度のまま、私とルナはボス部屋に突入した。中は、まさに地獄絵図だった。

「うわあああ!」

「やめ——」

目の前で男がその体を呆気なく爆散させた。男の命を奪ったのは、部屋の奥に鎮座した人型モンスターが伸ばした髪だ。HPがすでにゼロになっているソイツは、混乱するレイドに向かって縦横無尽に鋭利な髪を振り回している。

到着した直後に“死”を目の当たりにし、長年私を苦しめていた親友^{アスナ}が死ぬ光景がフラッシュバックする。それを振り払って私は地獄を見回した。

「——あ」

そして見つけた。

糸が切れたかのようにへたり込む彼女は、血盟騎士団の象徴でもある赤と白の隊服を着ている。栗色の長いストレートヘアは見間違うはずもない。

およそ2年ぶりに見たアスナは、あの時よりも弱々しく今にも消えてしまいそうだった。そしてそれは、ただの予感ではなかった。小さく表示された彼女のHPバー横には《沈黙》のデバフアイコン、そして——

「ッ!」

アスナを見据える、醜悪な異形のモンスター。掲げられた鎌が鈍く光るのを見て、私はヤツが2体目のボスであることを確信した。

「逃げろ!アスナ!!」

ヤツの後ろで漆黒の剣士が叫んだ。単身相手にしていたのか、ボロボロの状態でも必死に動こうとしているが、間に合わないだろう。

怒号と絶叫が遠ざかり、世界がスローモーションになる。

あの時と同じだ。

トラップに掛かり、大量の雑魚たちに行く手を阻まれ、表示されたHPが減っていくのを見ていることしか出来なかった、あの時。

でも、今は違う。

私は武器を構え、走り出すために足に力を込めた。

それを察知したかのように、鋭利な髪が高速で私に迫る。

しかし、それが届くことはなかった。

「――往け、ミト」

視認できない神速の斬撃で髪を斬り伏せたルナが、私に言う。

「うんー」

あの時感じた恐怖はなかった。今度こそ助ける。ただそれだけの為に走った。

軽々しく投げられた鎌がアスナに迫る。

「――はあああああッー」

私はアスナの前に躍り出て、飛来した禍々しいそれを弾き飛ばした。衝撃で刀身に塗られていた毒が飛散するが、それもまとめて切り払う。

驚きが込もった視線を背中に感じたが、私は振り返らずに長らく言えなかった言葉を口にした。

「・・・ごめん、アスナ」

赦してもらおうなんて思わない。ただの自己満足だ。どれだけ罵倒されようが嫌悪されようが、全てを受け入れる。それが私に出来る唯一の償いだから。

「アアアアアアアッ！」

おぞましい声を上げながらボスが迫って来る。アスナを巻き込まないよう、私は武器を構え直してボス目掛けてダッシュした。

振り下ろされた鎌を二連撃ソードスキルで迎撃・反撃し、生まれた

隙に追撃のソードスキルを見舞う。ボスが怯んだ瞬間、ヤツの背中に漆黒の剣士の剣戟がヒットし、残り7割ほどのHPが目に見えて減少した。

漆黒の剣士と同じタイミングで後退した私は、転がった鎌を拾うボスの隙を見てアスナに《咳止めポーション》を手渡した。

「酷い状況ね」

次いで漆黒の剣士に話し掛けるが応答はない。私の意図を察してか、彼は耳を指差すジェスチャーをした。よく見るとHPバーの横に《失聴》のデバフアイコンが表示されている。私が《感音ポーション》を手渡すと、漆黒の剣士は一気に飲み干した。

「聞こえる?」

「ああ。助かった、ありがとう」

少し大人びた声だった。

遠くからでは分からなかったが彼の右頬の蠢く痣を見て、私は以前どこかで聞いた話を思い出した。中層のプレイヤーだったか、命の恩人を探しているという話で、その剣士の頬に痣があつたという。彼がそうかは分からないが、一人でボスの相手をしていた実力を鑑みれば可能性は高いだろう。

そんな考察を頭から追い出して、私は早速ボスの情報を伝えようと口を開きかけた時、懐かしく消え入りそうな声が聞こえた。

「・・・ミト、ミトだよね・・・?」

信じられないといったその声に、怒りや憎しみは感じなかった。本音を言えば今すぐに向き直って謝りたい。しかし今は一秒を争う状況だ。私の刹那の葛藤を感じてか、漆黒の剣士が口を開いた。

「悪いんだけど、もう少しだけ協力してくれないか?」

「・・・もちろんよ。そのために来たんだから」

「心強いな。まあ見ての通り”詰み”な訳だけど・・・もしかして、ボスについて何か知ってる?」

「・・・」

私は2体のボスを一瞥して言った。

「・・・アイツらは、2体同時に倒す必要があるの」

底のない闇色の目が、驚愕で見開かれた。

〈サツキside〉

ボスの同時撃破。

鎌使いの少女——ミトが告げた打開策は、今の状況ではあまりに絶望的なものだった。

「2体同時に・・・？」

俺の呟きにミトは頷く。

「ええ。正確には、2体のHPが共にゼロになる瞬間を作ればいいの。髪の方はもうゼロになってるから、あとは——」

「あの野郎をゼロにすればいいわけか」

俺の答えが正解だと言わんばかりに、ラバリイは醜悪な笑みを浮かべた。

俺は地獄絵図を見回して思考を加速させる。

サツドにタゲられたメンバーは風林火山を主体として即席の陣形を作り、振るわれる髪を捌いている。しかし後退して離脱しようとする者がいれば優先してタゲるようで逃げられない。このままではジリ貧になる。彼らが耐えているうちにケリを付けなければならぬが、凶敵・ラバリイのHPはまだ七割近くも残っている。

だが絶望の中にも、一筋の光はあった。

「・・・死闘、だな・・・剣豪・・・」

「来てくれたのか、ルナ」

仮面の侍はこの状況に臆している様子はなかった。さすがの頼もしさを感じながら、俺は座り込んだままの副団長の前に屈んで感情に揺れるヘイゼルの瞳を見つめた。

「副団長・・・俺とあんた、ミトとシユガー、ルナの五人でヤツに勝てる見込みはあると思うか？」

この場にいる最強メンバーで短期決戦に持ち込む。俺が出した最善策だが、無謀だと自分でも思う。俺たちが負ければ、全滅に直結す

る危険な賭けだ。だが勝てば、全員が助かる。

「・・・かなり、厳しいと思う」

「勝率は？」

「・・・三割くらい」

「充分だ」

驚きで目を見開いた副団長の手を取り立ち上がらせ、近くで手探りに周囲を探っていたシユガーの手を引いてみんなに向き直る。

「ミト、〈開眼結晶〉は持つてるか？」

「ええ、一応あるけど・・・」

一定時間索敵ボーナスを獲得でき、盲目デバフを解除できる唯一の結晶アイテムだ。俺は続ける。

「よし、みんな聞いてくれ——」

◆？

「あら天音ちゃん、今日も来てたの？」

消毒液の匂いが漂う室内で私の名前を呼ぶ声が聞こえた。視線を向けると、少し驚いた様子で両手に荷物を抱えた女性が立っていた。反射的に立ち上がり頭を下げる。

「お邪魔しています、おばさま」

「いやあねお邪魔なんて、きつとその子も喜んでるわ」

そう言いながら荷物をテーブルに置く女性は、ベットの上で眠ったままの彼の母親だ。私が物心つく前から可愛がってくれていて、勝手ながら二人目の母親とも呼べる大切な存在になっている。

「お仕事の方は大丈夫なの？」

「ええ、ようやく落ち着いてきました」

「そうなのね。でもせっつかくのお休みにわざわざ来てくれなくても良いのよ？この子ったら全然起きないんだから」

「それなら起きるまで通い続けますよ。今の姿を一番見て欲しいのは彼なんですから」

「あら、そうなの？」

嬉しそうに微笑むおばさまの視線が私の背後で止まり、微かに表情に翳りが見られた。つられて見ると、病室の角に設置されたテレビから淡々としたアナウンサーの声が聞こえる。

『続いては・・・本日のS A O内での死者数ですが、14時現在で6名——え？あつ、失礼しました。死亡者は26名です。今月初めて二桁代と——』

私は思わずテレビを消した。そして傍らで眠る、いや戦い続ける彼を見る。

「・・・大丈夫よ、絶対に帰ってくるから」

「・・・そうですよね」

私たちの声は、抑えられない感情に揺れていた。

◆？

〈ミトside〉

「まず、俺が結晶を持ってヤツを引き付ける。その間にシユガーに結晶を使ってくれ。そして俺とシユガーでヤツの攻撃を捌くから、隙を見て三人で削ってくれ」

さも当然かのように言ったサツキに、私は瞬時に反応した。

「疑うわけじゃないけれど、二人で捌けるの？」

「任せてください！」

「伊達に偵察隊やってないからな、捌くくらいなら俺たちで充分だ」
軽い返事に反して私はシユガーとサツキに頼もしさを感じた。サツキは削り役の三人を順に見て続ける。

「三人はガンガン攻撃してくれ。短期決戦だ、五分で終わらせる」

「・・・承知、した・・・」

「わかった」

「やりましょう」

短い打ち合わせを終えて各々が武器を構える。

「クライン！あと五分だけ耐えてくれ！」

「——おうよ！頼んだぜ、サツキッ！」

厚い信頼を感じさせるクラインの返事を受け、サツキはラバリイを見据えた。右手に提げた流麗な剣が纏うオーバレイが輝きを増すと同時に、漆黒の剣豪は走り出した。

「——勝つぞー！」

サツキは左手の剣を収め、代わりに転移結晶を持っていた。これによつてラバリイのタゲがサツキに固定される。私は打ち合わせ通りに盲目の両手剣使いに〈開眼結晶〉を使った。

「ありがとうございますー！」

真紅の双眸を開いた彼はそう言うと、臆することなくサツキを追従する。それを視認したサツキは結晶を二本目の愛剣に持ち帰ると、本格的に攻防を始めた。

「・・・さあ、往くか・・・」

側面に向かって走り出したルナを做つて私も走り出そうとした時、隣りに懐かしい気配を感じた。

「ミト・・・」

二度と聞けないと思っていた声は少し大人びていた。再会の喜び以上に、ボスに対する恐怖以上の罪悪感を払い除けて、私はかつての親友に向き直った。

「絶対勝とうね。話したいこと、一杯あるんだから」

その声と瞳には怒りも悲しみも無かった。あの頃と変わらない親友の姿がそこにはあった。

「うん、勝とう・・・アスナ」

互いに頷いて同時に走り出す。ルナと反対に挟むように回り込み、ソードスキルを発動させる。

「スイツチ！」

二本の鎌を高々と弾いたサツキとシユガーの声に合わせて、私たちは飛び込む。がら空きの醜体に斬痕が刻まれ、長大なHPが目に見えて減少する。反撃の一撃も正確に危なげなくサツキが受け止め、シユガーが押し返す。

「・・・次、だ・・・」

「ミト、行こう！」

「うん！」

初めてのボス戦――

間違いなくアインクラッドで最も死に近い状況でも私は動けている。

勝つんだ、このまま。

ボスにも、弱い自分自身にも。

〈サツキside〉

——勝率三割、悪くない

殺意のまま振り回される鎌を捌きながら、俺は副団長の答えを思い出していた。

シュガーが加勢してくれたおかげで負担は大幅に減っている。削り役の三人の動きを見る余裕が生まれ、絶妙なタイミングでのパリイが出来ている。このままいけば、と思うが油断はしない。これ以上の犠牲は出してはならないと意識を集中させる。

「アアアアアア——」

あれほど耳障りだったラバリーの絶叫が遠のいていく。集中が極限に、いや、それより更なる高みへと達しているのか無音の世界へと足を踏み入れる。自分の心音すら聞こえない中、俺は愛剣を振るった。

「――」

〈暗黒剣〉 八連撃技・ブラックロータス 黒蓮

ラバリーの攻撃を捌き、抑え、押し返す。ヤツが動くよりも速く、何かに導かれるように、俺は黒い軌跡を刻み続けた。

「スイッチー！」

「はああっ！」

副団長の声に合わせて、ラバリーの鎌を弾き返してバツクジャンプする。生まれた確かな隙に副団長とミトの連撃、さらにルナの神速の一閃が背後から命中した。

「シュガーー！」

「はいー！」

間髪入れずに飛び込みタゲを引き受ける。シュガーがソードスキルの構えを取ったのを確認し、俺は「暗香疎影」で回避しつつ後ろに回り込んだ。黒い幻影を手応えなく切り裂いたラバリーの動きが一瞬止まる。

「はあああつー！」

それを見逃さず二連撃技“サブサイドンス”でシユガーが鎌を弾くと、副団長とミトの追撃が直撃した。

副団長はともかく、初めてにしてはミトとの連携が上手くいつている。副団長の知り合いらしい彼女だが、攻略組にいないのが不思議なくらい強い。それは、あの鬼面の侍にも言えることだが。

ルナのソードスキルにも似た連撃がヒットし、ラバリーのHPは遂に二割にまで減少した。このまま押し切る——そう意識を集中させたおかげか、背後から迫った脅威に俺はいち早く反応できた。

「ツ！後ろだ！」

体を捻りつつ叫び、二本の剣で迫って来た鋭利な長髪を受け流す。火花を散らしつつ転がるように離脱した俺は、追撃を弾きながら体勢を整えた。

「サツキさん！」

「来るぞー！」

縦横無尽に払われる髪を前に防戦一方となる。ラバリーと比べれば重くはないが手数が多い分厄介だ。

「サツキくん！」

「こつちよー！」

なんととか副団長たちと合流して状況を見渡す。ボス部屋全体をサツドの髪が覆い尽くすように伸びていた。

「クライン！大丈夫か!？」

「こつちは大丈夫だ！すまねえ、急にヤツの攻撃が——」

「下手に動くなよ！防御に集中しろ！」

クラインたちがやられた訳ではないことに安堵しつつ、俺は目の前に揃った二体を見据えた。

ラバリーの背中に乗ったサツドは鋭い眼光で俺たちを睨め付けながら髪を漂わせていた。ラバリーは一回りほど巨大化した両手の鎌を揺らし、刀身から溢れ出る毒を見せつけている。

そこで俺は、ゼロになつていたはずのサツドのHPが少しずつ回復していることに気が付いた。

「いよいよマズいな」

「あと少しなのに・・・！」

「落ち着きましよう、まだ勝機はあります！」

「・・・一撃・・・技が決まれば、な・・・」

「そうね・・・でも見て。この髪、さつきまでとは違うみたい」

ミトの言う通り、サツドの髪色が明らかに違う。何かに濡れているようなこの光沢は、間違いない。思わず舌打ちをする。

「ラバリーの毒か！つまり——」

「この髪に触れただけで、アウトってわけね」

「そんな・・・！」

「無茶苦茶ですね・・・！」

再び絶望の色が濃くなる。だが負ける可能性を考えている暇はない。

「ここは一気に決める。片方ずつ、なんて手はもう通用しない。同時にアイツらに攻撃を当てる」

「・・・出来るのか・・・？」

もつともな意見だ。

「やってみないことには分からん。勝率的には、一割ってとこか」

「危険よ、と言いたいところだけど」

「それしかなさそうですね」

「どうせこのままじゃジリ貧なもの」

「・・・うむ、ならば・・・最後まで、付き合おう」

武器を構え直す四人にこれまで以上の頼もしさを感じ、俺は全身に力が溢れるのを感じた。俺は愛剣を構える。

「誰でもいい、ヤツらに一発ずつ喰らわせてやれ」

俺たちが走り出すのと同時に、ボス戦最後の局面が動き出した。

◆？

〈ミトside〉

今までにない最高の集中力だ。

自分がさらに上の段階へと上るのを感じる。

これは紛れも無く、ボス戦という極限の状況下と、自分が圧倒される強者たちと出会ったからだ。この短時間で感覚が研ぎ澄まされ、眠っていた新たな感覚が叩き起される。

襲い掛かる猛毒の髪を押し退けながら、私は前を往く強者たちを追いかけた。

ルナ——謎の多い侍だが、その実力はトップレベルのもの。

シユガー——鋭い観察眼で、迅速正確な判断ができる。

サツキ——劍豪の異名通りの劍技、仲間を想う気持ちと相当な胆力を持っている。

アスナ——私が知っている彼女とはまるで別人のようだ。劍技はもちろん、精神的な面においても。

知りたい。

彼らのことをもつと知りたいと思った。

そのためにはまず、眼前のボスを倒さなくてはならない。みんなで生き残ることが最優先だ。

漆黒の軌跡が一閃、行く手を阻むように束になった髪を切り裂き、ボスまでの道が開かれる。

「今だー！」

サツキの声で全員がボスに飛び込む。

必殺のソードスキルのエフェクトが煌めいた。

◆？

〈サツキside〉

〈暗黒剣〉 広範囲技・“ 暗天災禍”

遠距離攻撃と錯覚するほど長い射程の一閃が、ボスへの道を切り開く。

「今だ！」

叫ぶと同時に、俺は突進技“ レイジスパイク” を発動させた。狙いはラバリイ、仕留めるためでなく動きを止めるためだ。後ろで同じくソードスキルを発動させた四人にチャンスを作る。

「はああああつ！」

「アアアアアア！」

俺の一撃を受け流したラバリイは、もう片方の鎌を振り下ろしてきた。それをカタルシスで受け止め、レーヴァンティンを引き戻して両手の鎌を押さえ付ける。膠着状態の中でラバリイと視線が交わった。

「・・・往け・・・」

風を切る音がして、あれほど目障りだったサツドの髪が細切れになって宙に散った。やはりルナの剣技には舌を巻く。

「「はあああああああー！」」

最大の武器である鎌と髪を封じられた二体に、三人の渾身の一撃が迫る。決まれば確実にHPを削り切れる威力だ。俺はその瞬間までラバリイに反撃させまいと両手に、全身に力を込めた。

『——サーくん！』

黒い。

肩まで伸びる髪も、瞳も、背中の片手剣も、身に付けている装備も……

左頬に浮かんだ剣状の痣も、全てが黒一色だ。

なぜこのタイミングで、と思った。

レーヴァルテインの感応現象、死者の記憶と心意を継承する力。どれだけ求めても叶わなかった、世界最強の剣士の姿がこの瞬間に見えた。

かつての相棒であり〈暗黒剣〉の使い手であった少女は、生前でも見ることのなかった取り乱した様子で叫んだ。

『——サーくん！それ以上使っちゃダメ!!』

直後、俺の視界で光が爆ぜた。

「——がつ!?!あああああああッ!!」
形容し難い激痛が全身を襲った。

アインクラッドでは痛みを感じない。体を貫かれようが、手足を切り飛ばされようが、不快感を少し感じるだけで済む。

しかしこの激痛は、アインクラッドはもちろん現実世界でも経験したことがないものだ。意識が遠のき、全身から力が消えていく。

「サツキくん！」

異変に気付いた副団長がカバーに入ろうとするが、それよりも速くラバリーが動いた。

「ヴアアアアッ！」

容易くカタルシスを弾き飛ばしたラバリーの一撃をレーヴア||テインで受け止められたのは、体に染み付いた剣士としての本能のおかげだろう。直撃は避けられたが、勢いを殺すことは出来ずそのまま吹き飛ばされる。

「サツキさん！」

「あつ……が、あああ……」

何とか手で構うな、攻めろと伝えるが俺は無様にも立ち上がれなかった。

まるで意識と体の接続が切れたかのような感覚に、俺の中で絶望が肥大化していった。

「咲月!？」

静かな病室で突然響いた不吉な音に、私は声を上げた。

音の発生源は彼に付けられた心電図、そのモニターに表示された心拍が急激に上昇している。

「咲月・・・頑張れ、頑張つて・・・!」

「大丈夫、大丈夫よ」

私には、やせ細った手を握って祈るしか出来ない。プレイヤーの心拍数上がるのは、モンスターと戦っているからだと言ったことがある。その直後に死んでしまうことが多いことも。

次の瞬間には死んでしまうかもしれないという恐怖の中、無意味だと分かっている私でも私は彼の手を握り続けた。

◆?

〈サツキside〉

激痛と絶望の中でも意識を失わなかったのは、右手に懐かしい温もりを感じていたからだろう。

言うことを聞かない体を無視して目だけを前に向ける。

シユガーがラバリの猛攻を捌き、副団長とミトがサツドに攻撃を当てようとして髪に阻まれている。ルナは後方から三人に迫る髪を切り伏せていた。一人でも脱落すれば一瞬で崩れる均衡状態。

(クソツ・・・動け、動けよ・・・!)

激痛に構わず俺は立ち上がろうとした。脳細胞が焼き切れんばかりの灼熱を感じ、本能が大音量で危険信号を発する。

『貴様には無理だ、餓鬼』

脳内に響いたその声に、俺の息が止まった。

『身の程を知らない餓鬼だ・・・貴様程度にあの女の技が使える筈がないだろう。今までやっていたのは只の猿真似、あの女の足元にも及ばん』

思考が止まる。

一番聞きたくない、忘れたい、思い出したくない声。

『そこで這いつくばって見ている』

「・・・あ・・・あ・・・」

光の届かない深海のように深く、深く深く閉ざしていた記憶が蘇る。

大量の不気味な札に四方を覆い尽くされた、宗教じみた部屋。

見えない斬撃を舞うように避ける漆黒の女剣士と、血で染めたような真つ赤な着物姿の男。

斬撃を避けられているのに嗤う男の眼が、鮮明に思い浮かぶ。

『あの時と同じように』

「黙れ・・・黙れえええッ!!」

下卑た声を掻き消す咆哮が俺の口から迸った。全身の激痛をも上回る、烈火の如き憤怒が俺を立ち上がらせた。

とてつもなく重く感じるレーヴァテインをぶら提げて、俺はボスの元へ走った。その視界に突然、初めて見たシステムメッセージが表示された。

「警告」

装備中の武器の筋力要求値を満たしていません。
武器を変更してください。

そのメッセージの答えは、俺のプレイヤーネームの横にあった。
「ツ！毒が・・・！」

時間経過で筋力が低下していくデバフ。ラバリーの一撃を受けた時に付与されていたようだ。筋力要求値を満たしていない武器は、適当に振り回すだけなら可能だがソードスキルを発動させることが出来ない。この局面で飛び込むには致命的、無謀の極みだ。

しかし俺は止まらない。

この様ではソードスキルが使えても使えなくても、たいして役に立っていない。出来るのはせめて、ボスに一瞬だけでも隙を作ることだ。そうすれば、必ず誰かの攻撃が届く。

(動け！みんなを助けろ！戦え！)

『ほう、ここまで愚かだったとは流石に想定外だったぞ』

再びあの声が響く。

『その様で何が出来る？教えてやろう、何も出来ない。無駄死にだ』

嘲笑の声は止まない。

『貴様はここで死ぬ。そしてあの女も無駄死となる。最高の結末
エンディング
じゃないか。傑作だ』

「うるせえんだよ！」

幻聴に吐き捨てて意識から排除し、俺はシュガーに振り下ろされた鎌にレーヴァルティンを叩きつけた。

「サツキさん！」

「来るぞー！」

振るわれる鎌を不格好に受け止める。回避すればサツドを狙っている副団長とミトが危ない。

「シュガー！俺が、隙を作るから、トドメを頼むー！」

「ツ！わかりましたー！」

俺の異常に気付いたシュガーがソードスキルの構えを取り、俺は腰のポーチから神秘的な輝きを放つ結晶を取り出した。

「ほら、お前の、大好物だろ？」

〈還魂の聖晶石〉を見たラバリイは、血走った目を俺に釘付けにした。振り下ろされた二本の鎌を同時にレーヴア・ティンの腹で受けるが、刀身ではなく俺の体が悲鳴を上げる。のしかかる重さに耐えられず片膝を着く。すでに半分近くまで減少したであろう筋力では、罅迫り合いをするには圧倒的に足りない。

「はああああっ！」

だが十分だ。シュガーのソードスキルがラバリイの頸を捉え、そのHPを大きく減少させる。このまま喰い込んだ刀身が離れなければ、継続ダメージで削り切れる。

「今ですー！」

二割ほどまで回復したサツドを相手に、副団長とミトが動く。

「アスナー！行ってー！」

ミトの鎌が髪を両断し道を作る。副団長がサツドの顔の高さまで跳躍し、細剣を構えた。

だが次に動いたのは副団長ではなく、ラバリイだった。

「ガアアアアッ！」

シュガーの剣が頸に刺さったまま、右手の鎌を横なぎに払って副団長の細剣を弾いた。空中で体勢を崩した副団長の華奢な体を、鎌を手放した左手で捕まえる。

「あっ……！」

このまま握り潰すつもりだ。HPがジワジワと減少し、副団長が苦悶の表情を浮かべた。

「アスナーアア!!」

絶叫したミトがソードスキルで助けようとするが、位置が高い。剣が刺さったままのシユガーと、手数が増した髪の手をしながらは助けに入れない。

（——俺だ、俺しかない！立て！助ける！剣を持って！守れ！）

激情が吹き荒れ、四肢の感覚が遠ざかっていく。レーヴァルティンを頼りに立ち上がり、見上げた先でヘイゼルの瞳とぶつかった。

『見ろ、分かるか？あの目に込められた感情が』

『弱い、役立たず、臆病者……貴様を軽蔑している目だ。また見殺しだな。愉快愉快』

違う。

『もう諦めて大人しく死ねよ。貴様が生きているのが、不愉快でしようがない』

「……そうか。なら、もつと生きてやるよ」

俺はレーヴァルティンを上段に構えた。岩のような重みが全身に加わり、その場から一步も動けなくなる。

（俺はどうなってもいい。たとえ体が壊れようが、戦えなくなろうが、今この瞬間だけは……！）

ヘイゼルの瞳に映っていたのは、軽蔑なんかじゃない。まだ短い付き合いだが分かる。あれは、俺への信頼だ。絶対に助けてくれると、俺を必要としている瞳——

『私は、自分のためならすつごく頑張れるんだけど……君は違う』

狂おしいほど焦がれた声が聞こえる。

『君は、君自身じゃない誰かのために頑張れる〈剣豪〉なんだよ』

『君を必要としてくれる人を、助けてあげて』

そうだ。

あの約束が始まりだった。

「——ッ！うおおおおおッ!!」

世界の色が失われていく。心臓が爆発しそうなほど脈打ち、全身に力が高速で巡っていく。

『愚か愚か愚かだなあ。身に余るその力は、貴様を助けはするが滅びの道だ』

その通りだ。結局俺は、死んだ後も相棒に助けられている。たまたま真似事が出来たのを良いことに。その代償がこの痛みなら、俺は受け入れよう。

（せっかく忠告してくれたのに、ごめん。でも使わせてくれ。説教なら次に会った時ゆっくり聞くから）

モノクロームの世界で、俺は再び漆黒に染まったレーヴァテインを振るった。

〈暗黒剣〉 継続強化状態・“黒ノ剣衣”

〈暗黒剣〉 突進技・“黒龍斜陽転”

連続で攻撃を繋げるほど自分を強化する技と、連続ヒット技の組み合わせ。黒龍を思わせる軌跡がラバリーの左手を喰らい、副団長を解

放する。

「サツキくん！」

「行け、アスナ！」

今度こそ動けなくなった俺は地面に叩き付けられながら叫んだ。俺の声に応え、副団長は再び高く跳躍した。

「やあああああつ！」

夜空に煌めく流星を思わせる八連撃技“スター・スプラッシュ”が、防ぐ術を失ったサツドの顔面を貫く。そのHPがゼロになると同時に、シュガーの両手剣がラバリーの頸を切り飛ばした。

「アッアッアッアッアッアッアッ——」

断末魔を響かせて、二体のボスはその体を爆散させる。

表示された「Congratulation！」の文字が、長きに渡ったボス戦の終わりを告げていた。

◆?

〈アスナside〉

「散って逝った勇敢な同士たちに、最大の敬意を」

死闘となったボス戦から一夜明け、血盟騎士団本部では犠牲者の慰霊式が執り行われていた。慰霊碑に名前が加えられたのは、ラフィン・コフィン討伐作戦以来のことだ。ボス戦での犠牲者は計16名、内7名がKOB所属だった。

「今回の件について、君に責任はない。残念な結果だが、気を落とさないでくれたまえ」

「・・・はい」

凄惨な報せを受けても眉一つ動かさなかったヒースクリフに一礼し、アスナは団長室を後にした。歩き出そうとして目眩に襲われ、思わず壁に手をつく。戦後処理に追われて休めていない影響だとアスナは分かっていた。

新着メッセージを報せる音で、アスナは遠くなりかけた意識が呼び戻された。差出人を確認し、アスナは足早に歩き出した。

「・・・アスナ、大丈夫?」

「・・・うん、大丈夫よ。ありがとね、ミト」

口ではそう答えるが、アスナの口調は重かった。

目立たないようにフードを目深に被ったアスナは、ミトとともに第一層へはじまりの街へ外柵広場に来ていた。他のプレイヤーとすれ違いうことすらなく、NPCの声だけが虚しく響いているのに違和感を感じつつも今は都合が良かった。

いつか、これから更に犠牲者が増え続ければ、どの街もこうなるかもしれないと危惧していたアスナにミトは頭を深々と下げた。

「アスナ・・・今更何なのって思うかもしれないけど、ごめん。あの日、アスナを見捨てて逃げて。ボス戦のことも・・・私がもっと早く来れば、助かったかもしれないのに」

アスナは優しい笑みを浮かべて首を振った。

「あの日、ミトがいなくなつて独りになつてから、なんで逃げたのって何回も考えた。・・・攻略組になつてから、なんとなく分かった気がする」

無限の蒼穹からミトに視線を向けたアスナは続けた。

「怖かつたんだよね・・・誰かの命を背負うのは、守れなかった時の後悔と絶望が・・・守るべき仲間がいる今なら分かる。今回のボス戦も、その前でも嫌つてほど思い知つてきたから」

「アスナ・・・」

「ミトはあの日の決断を間違つたと思つてるけど、私は正しかつたと思うよ。こんな辛いこと、経験しない方が良く、ミトにそんな思いして欲しくない」

「それは私も同じよ・・・アスナには、そんな思いさせたくなかつたのに、私が弱かつたから約束を守れなかつた・・・本当に、ごめん」

「もういいのよ、二人とも今生きてるんだから。とんだ再会になつたけどね」

アスナはミトをそつと抱きしめた。ミトもアスナの肩に顔を埋めて手を回す。久々に触れた親友の体の震えが止むまで、アスナはミトを抱きしめ続けた。

「決めた。私、K○Bに入る」

「え？」

目元を腫らしたミトの声にアスナは驚いた。

「私じゃあ力不足かな？」

「そんな事ない、むしろ心強いけど・・・どうして？」

ミトは強い意志の宿った瞳でアスナを見つめた。もう後悔と罪悪感に揺れていないと、アスナは感じた。

「私は、もう逃げない。挫けそうになったら支えるし、命に代えても守る。必ずアスナをあつちの世界に還すよ。今度こそ約束する」

「・・・違うでしょう、ミト」

アスナはミトの手を握った。

「みんなで生きて還るの。私もミトを守るから、改めてよろしくね」

「・・・うん！」

握り返された手から伝わる熱が、あの日から凍っていた心を溶かしていった。

「そうか、こちらとしても大歓迎だ。これからよろしく頼むよ、ミト君」

血盟騎士団本部に戻った二人は、早速ヒースクリフにミトの入団を打診していた。ボス戦での活躍を報告していたからか、ヒースクリフはミトの実力を疑うことなくあっさり承諾した。安堵しつつアスナは続ける。

「団長、もう一件よろしいですか？」

「なんだね？」

「もう一人、勧誘したい人がいます。鬼の仮面を着けた侍、ルナというカタナ使い・・・かなりの手練ですが、本人は攻略に乗り気ではないみたいです。団長の方から直接声を掛けてみてもらえないでしょうか？」

昨日のボス戦で大きく貢献した彼は、アスナの話があっさり流して立ち去ってしまった。本物の侍のような威厳にその場は諦めてしまったが、彼が攻略組に加われれば戦力が増すのは明らかだった。

「なるほど。しかし残念ながら、彼には前から声を掛けているのだが

断られている。どこかの彼のようにね」
その返答にアスナは苦笑いした。

◆?

「なかなか高い評価、流石と言ったところか」
「・・・当然だ・・・」

アスナとミトが去った後、団長室を訪れたルナはヒースクリフの言葉に頷いた。

「今の攻略組はどうかね？」

「・・・悪くは、ない・・・判断力、観察眼、即応性・・・特に最後の連携は、目を見張るものが、あった・・・」

「なるほど」

「・・・一つ、聞きたい・・・」

「なんだね？」

ルナは腰に提げた刀に手を添えて言った。

「・・・どこまで、想定していた・・・〈暗黒剣〉・・・あれはもう、ソードスキルの域を・・・霊剣の感応現象も、システムの域を超越、している・・・」

ヒースクリフは笑った。一人のプレイヤーとしてではなく、この世界の創造主として。

「そうだね、全くの想定外だ。しかし私は嬉しく、そして期待しているのだよ」

「・・・」

「あれこそが、私が求めていたものだからね」

Ep. 54 余暇の冒険

〈サツキside〉

「ようエギル、相変わらず阿漕な商売してんな」

「おうサツキか、ここほど良心的な店を俺は知らねえけどな」

「よく言うわ」

昼間の賑わいがピークに達している時間帯、俺は第50層主街区〈アルゲード〉に居を構えるエギルの店に来ていた。文字通り人波に揉まれながら到着した時に丁度よく交渉が終わったらしく、巨漢の店主はイカつい顔に笑みを浮かべて俺に向き直った。

「で、今日も買取か？」

「ああ、頼む」

俺はストレージから食材やら素材やら鉱石やらのアイテムを実体化させてエギルの前に置いた。品定めを待つ間に乱雑に商品が配列された店内を見回していると、作業片手間にエギルが口を開いた。

「なあ、やっぱりまだ本調子ってわけじゃねえのか？」

「うーん、だいぶ良くなったけど。副団長がまだダメだっけ言うからなあ」

攻略組の俺が、この時間帯に最前線にいないのは理由がある。

67層ボス戦で無理をした代償か、あの日以来俺は戦闘能力が格段に落ちてしまった。スキルやステータスに異常はなく、ソードスキルも普通に使えるのだが、スイツチャやパライなどのシステム外のプレイヤースキルに問題があった。以前のような正確さやキレがなくなっていたのだ。SAOにやたら詳しいヒースクリフ曰く、俺の脳に負荷が掛かり過ぎた為だという。運動信号をナーヴギアが上手く拾えていない故のパフォーマンスの低下ではないかと。

これでは攻略に参加させられない、と副団長に強制休暇を命じられて早2ヶ月、俺は徐々に回復してるし攻略も滞りなく進んでいる。今は戦闘しなくていいお使い系や採取系のクエストを消化して、手に入れたアイテムをエギルに売り付けるのが日課になっていた。

「まあ、せつかくの休暇なんだからしつかり休め。 攻略も問題ないんだろ？」

「そうだな。 新しく入ったミトが大活躍してるよ」

KOBに新規加入したミトの勢いもあって、凄惨な結果を引き摺ることなく攻略は進められていた。 現在の最前線は第72層、その迷宮区も八割方がマップピングされている。 ボス部屋が見つかるのも時間の問題だろう。

「うっし、今回はこんなもんだろ」

表示された査定額をチラ見して確定ボタンを押すと、ズラつと並んでいたアイテムが消えて所持金が追加された。

「さんきゅー、また貯まったら来るわ」

「買い取れるモノにしろよ。 前みたいに腐った肉とか得体の知れないポーションとかはやめてくれ」

「とか言って何でも買ってくれるじゃん」

「お得意様だからな」

そこでニヤリと笑う店主の視線が俺の背後に固定された。

「サー坊」

直後に聞こえた特徴的な声に振り向くと、俺のすぐ後ろにはいつの間に入って来たのか小柄なプレイヤーがいた。

「うおっ！ ビックリさせんなアルゴ」

「ニシシ、索敵スキルがなまってるんじゃないか？」

「熟練度は下がんねえよ。 流石の隠蔽スキルだと言っておこうか」

どうにか格好つける俺を他所に、アルゴは続けた。

「サー坊、復帰はまだなんダロ？」

「まあな、もう良い頃だと思っただけど」

「じゃあヒマってわけダ」

「言い方に悪意があるが、そうなる」

「ンじやおネーサンのお願ひ、聞いてくれるよナ？」

「どーせ面倒なクエだろ」

休暇中、アルゴに依頼されることは何回かあった。 その全てが誰もやりたがらないような手間と時間のかかるクエストで、オマケに報酬

が微々たるものだった。丸3日間かけて砂原フィールドを這いつくばりながら短剣を探したクエストで、依頼人NPCがぶつきらぼうに報酬の水ポーシヨン（10コル）を投げて寄越した時に手を出しかけたのは記憶に新しい。

そんな俺の考えを見抜いたのか、肩を震わせながらアルゴは言った。

「そんな心配するなヨ。今回のはちゃんとしたクエ、しかも同行者付きダ」

「同行者？」

「そうダ。先方のクエに同行する形ダナ。安心しろ、中層の採取クエだカラ」

「俺が行かないとダメな理由でもあるのか？」

「念のために頼りになる人が欲しいって先方の要望と、目的地のフィールドが今のサー坊に丁度いい場所だカラ」

「丁度いい？」

「そう、モンスターがポップしないアスレチックエリアなンダ。崖登りから綱渡り、飛び越えにくぐり抜け、何でもありダ。体を慣らすにはもってこいだロ？」

「リハビリにはなるか・・・分かったよ、同行する」

「毎度！先方にはオレっちから伝えるから、詳細が決まったらメツセージ送るからナ」

したり顔のアルゴは、珍しいの入荷したら連絡くれヨ！とエギルに言い残して颯爽と去って行った。

「相変わらず騒がしいヤツだな」

「まあ・・・アルゴも色々抱えてるからな」

67層ボスの事前情報を掴めなかったことを、アルゴは今でも悔いている。同じ轍を踏まないよう、まるで自分を戒めているかのよう。日夜走り回っているその姿は、俺から見ても痛々しいものだ。彼女に頼っていたものの大きさを、俺を始め攻略組は改めて実感している。一見無駄と思えるクエストも一つも漏らすことなく調べているのも、この世界に“絶対”がないことを知ってしまったからだろう。だか

ら俺も文句を言いつつ手伝うのを断ったりはしない。

「んじや行くわ。土産があつたら持つて来てやるよ」

「期待しないで待つとくぜ」

エギルに別れを告げ、再び人混みに揉まれながら俺は街中を散策して時間を潰した。

アルゴから連絡が来たのは2日後、第72層ボス部屋が発見されたのとほぼ同じ時間だった。

「——って、お前からかい」

「なによ、文句でもあるわけ?」

「お久しぶりです!」

集合場所の第30層主街区へルアンへ時間ピッタリに行くと、そこには見知った2人がいた。

一人は見慣れた鍛冶屋の服装ではなく、メイス使いの装備を身に付けたリズベツト。そしてもう一人は、右肩に小さなドラゴンを乗せた数少ないビーストテイマー・シリカだ。

「リズって戦えるの?」

「鍛冶屋のハンマーにも筋力値が必要だから、レベルは上げてるわよ」

「へえ、知らなかった」

「まあ、アンタみたいにバカ重い剣を振るわけじゃないからそんなにだけどね。てか、休暇中だからって最近全然店に来ないじゃないの。使わなくてもメンテはしなさいよね」

「おいおい、そんなに経営不振か?」

「次からアンタだけ料金倍ね」

「申し訳ございませんでした」

冗談めかしたやり取りの後、俺はシリカの変化に気が付いた。

「お? だいぶ強くなつたみたいだな、シリカ」

「わ、わかりますか？」

「装備が新調されてるし、雰囲気？が逞しくなってるよ」

「そうなんです！リズさんに作ってもらったんですよ」

なかなかの性能と判る防具を嬉しそうに見せていたシリカは、何かを思い出したかのように姿勢を正した。

「サツキさん。せっかくのお休みだったのに来てくれてありがとうございます
ざいます」

「いやいや全然、むしろヒマしてたから逆にありがたいよ」

「なら今度、素材集め手伝ってもらおうかなー」

「まあもうすぐ復帰するから忙しくなるけど」

ギロリと向けられた視線を無視して俺は続きを促した。

「それで、採取クエって聞いているけど何を取りに行くんだ？」

「それなんですけど、よく分からないんです」

「え？」

「場所だけ指定されて、そこにあるモノを取って来いって言われただけなのよ。まだ誰もクリアしたことがないみたいで、そのモノが何かは不明」

「へえ、中層クエで未クリアってことは最近追加されたのかもな」

「少しだけ警戒心が上がりつつも、久しぶりの初見クエストに期待が高まった。」

「採取クエならあたしだけでも大丈夫かなって思ったけど、どうもきな臭くてね」

「なるほど、それでアルゴに依頼してたのか」

「でもサツキさんがいれば心配ないですね！」

「これでも攻略組だからな。大船に乗ったつもりでいろよ」

「はいはい頼みますよー！剣豪さん」

「それ恥ずかしいから止めて」

持ち物の最終確認を終え、俺たちは街の外に向かい始めた。そこでふと気になったことを口にする。

「そう言えばダンジョンって何処ののだ？」

「最北端にある《陽彩の塔》って所よ」

「すつごく高い塔ですね！あ、ここからも見えますよ」

シリカが指差す先に薄らと聳え立つシルエツト。それを見た時、俺のある記憶が呼び起こされた。

「あー、あそこか。なるほど・・・うん」

「何よ？」

「どうかしました？」

歯切れの悪い俺に2人が怪訝そうな顔をする。俺は一瞬考えて決断した。

「よし、ちよつと買い物してから行こう。まずは極太のロープだ」

ぽかんとした2人を引き連れて俺は店を回った。

『おいしいiiiiiiii！なんてどこ通つてんだああああ！』

『あはははっ！ほら、そこ崩れるよ！』

『危ねええええっ!?!』

『ほらほら、横から来てるよサーくん！』

『うおおおっ!』

俺の記憶が正しければ、あのダンジョンは一筋縄ではいかない。

Ep. 55 アスレチック

〈サツキside〉

「うわあ、本当に高いですね」

天高く聳え立つ塔を見上げながらシリカが言った。

上層へと繋がる迷宮区タワーにも引けを取らない塔の入口に到着した俺たちは、改めてその高さに圧倒されていた。建つてから長い年月が経過しているようで所々の外壁が崩れ、草木や蔓があちこちに巻き付いている。

「登るの大変そうね」

「だな、サクツと登ろうぜ」

モンスターが湧かない分、いつもより気楽に俺たちはダンジョンへと足を踏み入れた。

「中は思ったより普通なのね」

ダンジョン内を見回したリズは意外そうだった。たしかに外観と比べると中はそんなに荒れていない。よくある塔型ダンジョンだ。親切に上へ続く階段もあるので、今のところアスレチック要素は一つもない。

「そう言えば聞きそびれてたけど」

先頭を進む俺に後ろからリズが話しかけてきた。

「アンタ、ここ来たことあるの？」

「まあな、結構前だけど」

「そうだったんですね」

「じゃあ、何か心当たりないの？レアなアイテムが手に入るとか」

「うーん、それがなあ・・・」

俺は立ち止まって2人に向き直った。

「なーんにも、無い。文字通り、このダンジョンにはレアアイテムどころか、宝箱や壺なんかも何一つ無いんだ」

俺の言葉に二人はフリーズした。先に再起動したリズは、素っ頓狂な声を出した。

「は、はあ!?!何にも?」

「そう」

「見落としては?」

「隠しエリア込みで踏破率100%だぜ?」

「じ、時間の条件とか」

「丸2日探索したよ」

考えついた可能性をことごとく否定され、リズは再びフリーズした。

「で、でもそれならクエストは・・・」

「そう、それだよ」

俺は歩き始めながら続けた。

「俺が来たのはあくまで前の話、クエストもなくなっただ気まぐれで訪れた時の話だ。その時とは状況が違う。ここを舞台としたクエストがあつて、ここにあるモノを取って来いって明言されてる。だったら、前に無かつた何かがあるはずだ。そして——」

俺は後ろ歩きをしながら、2人にドヤ顔で言った。

「そのモノがあるであろう場所だが、俺はすでに見当が付いている」

途端にシリカは笑顔を咲かせ、リズは何かを察したように顔を引き攣らせた。

「流石サツキさんです!どこなんですか?」

「まさか・・・」

「そう、そのまき——」

かさ!と言おうとした瞬間、後ろ歩きしていた俺の足が階段にぶつかって体勢を崩し、勢いそのままに尻・背中・頭を強打した。

「がっ・・・」

「だ、大丈夫ですか?」

「アホね」

HPが減っていないことを確認して、俺は気を取り直して続けた。

「えーっと、まあブツの場所なんだけど・・・頂上だな。確実に」

「ならさっさと登りましょう。道は分かるんでしよう?」

「ああ。道って言うより行き方だけだな」

「どういうことですか?」

疑問符を浮かべる2人を連れて、俺は階段を上がった。

「要はここからが、このダンジョンの本番ってわけだ」

階段の先は解放感のある大広間。今までの何も無い廃れた内装とは打って変わって、一面が水に満たされていた。

「なに、これ?」

「見ての通り、ここからは普通の道がない」

俺は水面に浮かぶ丸太や巨大な水性植物を指差しながら続ける。

「アレを足場にして水に落ちないように進むんだ。落ちたらここに強制転移させられて、最初からやり直し。落ちてもHPは減らないけど、ゴール直前でのやり直しはかなりの精神的ダメージだから、気を引き締めろよ」

「前はどれくらい掛かったんですか?」

「一時間もしないでクリア出来たよ。ここは慣れば簡単だ」

「ここは・・・?」

何やら勘がいいリズに俺は現実を突き付けた。

「こんなの序の口だよ。上に行くほどギミックが難しくなるから、ここはさっさと突破していこう」

そう言っただけ俺は最初の丸太にジャンプした。が、勢いがあり過ぎたのかバランスを崩し、豪快な水しぶきをあげながら冷たい水の中へ落っこちた。

「・・・とまあ、こんな感じになるから。最初は武装解除して身軽にした方が良さぞ」

びしょ濡れ状態で強制転移させられた俺は、肩を震わせる二人にアドバイスを送った。

「ほら、ラスト慎重に來い！」

「フアイトです、リズさん！」

アスレチック開始から一時間と少しが経過し、最初の水面エリアは残すところリズの一步だけとなった。

短剣を主武器とするシリカは流石の身のこなしで水渡りを攻略できたが、そもそもフィールドに出る機会が少ないリズはそれなりに苦戦している。リスタート回数はダントツの7回。その内の4回が、最初に忠告していたゴール直前での悲劇だった。

「動かないで水の流れを読むんだ。必ず止まるタイミングがあるから、そこで一思いに飛んで來い」

「うう、こんなに敏捷力が欲しいと思ったのは初めてよ」

「防具も脱いだらどうだ？モンスターは居ないし、少しはマシになるぞ」

「誰がアンタの前で脱ぐもんですか！」

「失礼な！そんな不純な理由じゃないわ！」

「二人とも落ち着いてください！」

ガミガミ言い合っつてしまい水面がなかなか落ち着かない。リズのじつとしていられない性格と、俺の余計なことを口走る癖が悪い意味で噛み合っつてしまう。

「仕方ない。これ以上長引かせるのも面倒だし、秘策を使うか」

俺はここに来る前に買っつておいた耐久力マシマシ極太ロープを取り出した。それを瞑想しているリズに向かって投げる。

「リズー！それを体に巻いてくれ」

訝しげにしながらも言う通りにリズはロープを自分の腰に巻いた。

「これで良いの？」

「ああ、しつかり掴まっつてろよー！」

「どうするんですか？」

俺はロープを握っつたままリズに背を向け、ニヤリと笑っつた。

「こうするんだ、よっ！」

掛け声とともに俺は肩越しにロープを思いつ切り引っ張っつた。確

かな重みが宙に浮かぶ手応え、そして――

「ぎゃあああっ!?!」

乙女に似つかわしくない絶叫が塔に響き渡った。

「オーライオーライ」

ロープを手放して上を見上げ、ジタバタ暴れながら落下して来るリズを真下で受け止める。想像よりも強い衝撃が加わるが、床に落とすことなく踏みとどまった。

「わあ! スゴいですサツキさん!」

「秘技・一本釣り。マグロのやつ見てから一回やってみたかったんだよなあ」

「だ・れ・が・マグロですってえ!?!」

「ごふっ!」

怒ったリズの右アッパーが顎に炸裂し、俺は堪らず膝をついた。これで攻撃判定にならないからSAOのシステムは信じられない。

「とまあ、これでこのステージはクリアなわけだ」

「もう少しマトモな方法があったでしょうが」

「これが一番手っ取り早い」

「このためにロープを買ってたんですね」

俺は上へ続く階段を登りながら首を振った。

「いや、本当は別の使い道を考えてたんだ」

登り切った先は、先ほどと同じ大きさの広場。しかし水は無ければ上へ続く階段も見当たらない。ジト目を向けたリズが思い口を開く。

「・・・で、次の種目は何かしら?」

「行けそうなどころはないですけど・・・」

「まあ、パツと見はな」

俺は二人を連れて東側の壁に向かった。

「それじゃあ続きまして第二種目：ロッククライミング〈岩登り〉ならぬウォールクライミング〈壁登り〉、行ってみようか」

鳩が豆鉄砲を喰らったようなという例えは、こんな顔なんだろうと二人の顔を見て俺は思った。

〈サツキside〉

「前から思ってたけど、アンタってバカなの？」

「失礼な——と言いたいとこだけど、これに関しては否定できない」

「良かった。まだ自覚あるバカだった」

「うおおい！人の話を聞け」

「ここを、登るんですか・・・？」

どう見たって登れそうにない壁を前に、二人は困惑していた。俺も初見の時は同じリアクションだったから、その気持ちは分かる。

「じゃあこの種目の説明をしよう。ここを登るのに足りないものは何だ？」

「アンタの脳みそかしらね」

「黙らっしやい」

「はい！足場がないです」

「正解だシリカ。見ての通り足場も掴まれそうなところもない」

俺は頭上にわずかに見える上階への階段を指差した。

「ここをあそこまで地道に登って行く」

「だからどうやってよ？まさか、壁走りとウォールランか言うんじゃ・・・」

「試したけど、半分くらいが限界だったな」

「あ、やったんだ」

「ちなみに、ここでも死ぬ心配はない。前と同じように落下中に強制転移させられるから。まあ、分かってもかなり怖いけど」

以前の経験を思い出して胸がヒュっとなる。

「それで、どうやって登るんですか？」

「これを使うのさ」

俺はストレージから簡素な石の棒を实体化させた。

「コイツを壁に刺してって足場を作るんだ」

「だからアホみたいな本数買ったのね」

「そゆこと」

来る前に街で大量購入していたこの棒は、耐久力がやたら高く設定されている。武器としては使えないが、足場にするのには最適だ。と
いうか、ここで使うための物だろう。俺は早速一本目を構えて壁に向
かって大きくジャンプした。

「よつと」

ガキインと音を立てて突き刺さった棒に、逆上がりで体を上げて
ゆっくりと足を乗せる。安定さを確認して同じ要領で二本目に到達
した後、下で待つ二人にロープを垂らした。

「二人ともー！このロープを体に巻いて登ってきてくれ！」

二人がロープを巻き終えたのを確認し、俺は三本目に取り掛かっ
た。ロープで体を繋いだのはロスを防ぐためだ。誰かが落ちてても残
りが踏ん張ればリスタートは避けられるし、引き上げることも出来
る。

「途中で休憩しながら行くから、ノーマスで行こうぜ。ゆっくり行っ
ても二時間は掛からないから」

「分かりました！」

「安全第一でお願いね」

「あいよ」

俺は最短ではなく安定重視のルートを選び、棒を突き刺して進ん
だ。

「サツキー！あとどんくらい？」

「んゝ・・・7. 8本つてとこだな」

下からのリズの声に、ゴールまでの距離を目測した俺は言った。

水面ステージよりも目に見えて分かる恐怖心からか、当初の予定ギ
リギリの二時間近く掛かったがノーマスでゴール目前まで来ていた。
しかし休憩を挟んでいたとは言え、長時間の緊張状態で疲れが溜まっ
てきている。

「・・・このくらいなら行けるか？」

「ちよつとー！変なこと考えてないわよね」

上を見上げたまま零れた眩きにリズムが反応する。前から思ってたが、意外にも勘が鋭い。俺はわざとらしい笑みを浮かべて、下の二人を見て言った。

「この距離なら行けそうだから、駆け上がって引き上げるよ」

「だ、大丈夫ですか？」

「フラグにしか聞こえないんだけど」

「大丈夫大丈夫、任せとけて」

言つて俺はジャンプして棒を突き刺し、その勢いに乗ってさらに跳躍した。その間に次の棒を実体化させ、突き刺し、跳躍。目測通り7本目のジャンプでギリギリ頂上に手が届いた。

「おおーやるじゃん」

「スゴいです！」

「こんな朝飯前よ」

賛美の声に気持ち良くなりつつ最後のひと登りをする。

「はああ、やつと終わ——」

達成感で満たされたため息を吐いた瞬間。

ブワツという衝撃とともに、俺の体は浮き上がった。

「・・・はっ」

突然の浮遊感の中で見たのは、階段がある広場の壁に大きく開いた穴だった。外と繋がっているそこから舞い込んだ風が俺を浮き上がらせたと理解した時には、すでに俺は広場からも壁からも引き剥がされていた。そのまま重力に従って落下が始まる。

「ちよつとー！」

「サツキさん！」

驚愕した二人に瞬時に言えたことは一つ。

「踏ん張れええええええ！」

リスタート防止のためにロープで体を繋いでいたが、この勢いで落ちれば道連れも有り得る。三人仲良くリスタートという最悪な結果は避けたい。

それを二人も察したのだろう。余った棒を取り出して手元に突き

刺し、衝撃に備えてしっかりと掴まった。

「ぐえっ！」

一番下のシリカを過ぎた直後に腹に巻いたロープが締められ、俺は無様に宙吊りになって止まった。

「本当に、アンタってヤツは」

呆れたリズの声を聞きながら俺は二人に引き上げられた。

「——と言うわけで、若干ロスしたけど無事に壁登り終了。お疲れさん」

「お疲れ様でした！」

「本当に疲れたわよ」

自分の失態を誤魔化すように階段広場で座り込む二人を労う。あれからリズを先頭に慎重に進み、無事登り切る事が出来た。突風は初見殺しのギミックだったらしい。

「前はあんなの無かったんだけどなあ」

「油断したわね」

「また何かが変わってるかもしれないね」

「だな。慎重に行こう……っても、最難関が終わったから後は楽勝よ」

「あら、そうなの？」

「それは良かったです！」

朗報を聞いて疲れが吹っ飛んだ様子の二人を連れて上へ上がる。攻略の日々とは違う仲間との純粹な楽しさを俺は感じていた。

◆？

〈アスナside〉

「決めるよ、ミト！」

「ええ！」

声を合わせ、アスナは親友と共に駆ける。

狙いは、腹の弱点を頭にした巨大な体躯の蜘蛛型モンスター。一時間近くの戦闘で瀕死となった第73層ボスだ。

「せやあああ！」

リズベットの最高傑作の細剣と、最上位ソードスキル“フラツシング・ペネトレイター”が組み合わさった威力は、ボスの残りHPを余さず消し飛ばした。

ボスが爆散し、歓喜の声が響く中でアスナはミトとハイタッチを交わした。

「お疲れ、アスナ」

「ミトもお疲れ様。楽勝だったね」

「このくらいの相手なら、このメンバーでも充分でしょ」

「そうね・・・」

戦闘前と変わらない顔ぶれを見回して、アスナはようやくボス戦の緊張が解けるのを感じた。67層の惨劇以来、犠牲者は出ていない。偵察隊と情報屋による事前の調査が徹底され、ボスに関する僅かな情報も逃していないおかげだろう。

その偵察隊と今この場にサツキが居なくなつて、もう2ヶ月になる。戦力の低下を覚悟しての休暇命令だったが、新しくKOBに入つたミトが代役を十分過ぎるほど務めていた。

「お二人とも、お疲れ様でした！」

疲労を感じさせない声の主は、満面の笑みを浮かべたシユガーだ。

「お疲れ様、いつもありがとうね」

「いえ！お役に立てて光栄です」

「最近休めてないでしょ？しばらくゆっくりしたら？」

「大丈夫です！今の攻略ペースを維持したいので、死なない程度に頑張ります！」

「マジメね・・・」

すっかり仲良くなった二人と共に上への階段を上がりながら、アス

ナは以前から考えていたことを口にした。

「サツキくんのことなんだけど・・・そろそろ復帰してもらおうと思うの」

「あら、良いんじゃない？復帰させろってうるさかったもんね」

「何か理由があるんですか？」

74層に繋がるレリーフが施された扉を前に、アスナは固い声を発した。

「・・・もうすぐ第75層クウォーター・ポイントでしょう。サツキくん力は、必要になるから・・・」

精鋭揃いの攻略組レイドですら半壊させる強さのボス。かつての死闘を思い出すアスナとシユガーはもちろん、ミトも二人の様子から体が緊張する。

アスナが触れると、重厚な扉は自動的に開き始めた。

新たな層の景色が、希望と絶望への一歩が、勝利の余韻を掻き消していった。

〈サツキside〉

「ほら、もう少しだ。頑張れ二人とも」

延々と続く螺旋階段を上りながら、俺は少し後ろをぐったりとした様子で付いてくる二人に声を掛けた。

「アンタね、こんなクソ長いの、初めてよ・・・」

リズが悪態をつくのも無理はない。

壁登りを終えてからと言うものの、片足程度の幅の道を通ったり、天井から垂れたツタでターザンしたり、回転する床を走って進んだりと数々の種目をクリアしてきたのだ。いよいよ疲労が限界に来たこの時に、何の変哲もない階段をただひたすらに上がるのは、もはや苦行と言える。

「あと、どれくらいなんですか?」

「んー、1000段くらい?」

「多過ぎでしょ・・・」

「まあまあ、これが本当に最後だから。ゴールは目の前だぞ」

余裕ぶる俺だが、実際かなりキツイ。だが休業中とは言え、攻略組として二人に弱音を零すわけにもいかない。強靱な精神力とミジンコほどのプライドで俺は足を動かし続けた。

「おい見ろ!ゴールだ!頂上に着いたぞおお!」

目先に外の光を見つけて、俺は疲労も忘れて階段を駆け上がった。

「何でアンタがそんなハイテンションなのよ!」

「行きましよう!リズさん!」

二人も嬉しそうに声を上げて駆け上がる。

一番に到着した俺を出迎えたのは、枯れた老齢の樹。そして真っ赤

に染まった夕日と一面に広がる雄大な景色だった。苦勞して登って来ただけあつて、30層のフィールドを一望できる。ここほどの特等席はないだろう。

「うわぁ・・・」

「綺麗ですね・・・」

二人もこの景色に圧倒されていた。

クリアタイムは約5時間。疲れを癒すように、俺たちはしばらく無言で景色に魅入った。

『スゴい！やっぱり登って来て良かったね』

『まあ確かに。死ぬまでに一度は見えておきたい景色ではあるな』

『でしょー？なんか、世界に私たちだけしか居ないみたいでロマンチックじゃない？こーゆー場所で告白したら絶対成功すると思うんだあ』

『登って来るまでに破局しなければな』

『てことは、私とサーくんは大丈夫ってことだね！・・・告白、する？』

『・・・しねえよバカ』

あの時と同じ景色が、相棒との日々を追憶する。

懐かしさを感じていると、風の音に混じってグウ〜という大きめの音が聞こえてきた。音の方を見ると、シリカが顔を真っ赤にしてお腹に手を当てている。

「・・・お腹空いちやいました」

「そんじゃ、とりあえず飯にするか」

「そうね、気が抜けたらお腹空いたわ」

夕日に照らされながら、俺たちは飯の準備に取り掛かった。

◆？

〈アスナside〉

「・・・攻略は、どこまで進んだんですか？」

数ヶ月ぶりに聞いたその声に、以前のような元気はない。

しかし、確かな意思の込められた彼女の声にアスナは喜び、安堵した。

「ノノちゃん・・・」

抜け殻のように横たわっていたノノは、自ら起き上がりアスナたちを見つめていた。

「ノノちゃん、もう大丈夫なの？」

「・・・うん、心配かけてごめんなきい。もう、大丈夫だから」

震えた声で問いかけたシュガーは、心底安心した様子で息を吐いた。アスナもまた、ノノの快復にほつと息を吐く。

普段の調子で話し始めたシュガーを見つめるノノだが、その瞳に翳りがあるのがアスナは気になっていた。

◆？

〈サツキside〉

コトコトと蓋を揺らして音を立てる小鍋を見て、頃合いだと判断した俺は掛けていた火を消した。蓋を開けると香ばしい匂いが広がり、空腹を刺激する。

「へえ、意外としつかりしてるじゃない」

「料理スキルがゼロでも食材が良ければ美味しいもんだ。最後に仕上げのコイツ・・・驚くことなかれ、世にも珍しいS級食材だ」

「おおー！」

アルゴのお使いクエで入手したS級チーズを贅沢に振りかける。即席のなんちゃってチーズ料理の完成だ。

「うくん中々の出来映え・・・〈SAGラタン〉とでも名付けるか」

「SAって何ですか？」

「A級とS級の食材しか入ってないから」

「センスの欠片もないわね」

「美味ければ何でも良いだろ」

均等に取り分けて一口頬張ると、やはりレア物を使ってるだけあつてかなり美味しい。夢中で食べ進め、3人ほぼ同時に完食した。

陽が沈み、すっかり辺りが暗闇に包まれた中で上を見上げると、見事なまでの星空が広がっている。食後の満腹感に浸りながら地面に寝っ転がり、自然のプラネタリウムを満喫していると、リズとシリカも同じように夜空を見上げた。

「・・・綺麗ね」

「こんな星空、今まで見たことないです・・・」

「苦労して登ったからな・・・これくらいは贅沢をしても、バチは当たらないだろ」

しばらく沈黙して、風の音をBGMに絶景を魅入る。

柔らかいベットでもないのにウトウトし始めた時、シリカが思い出したように言った。

「・・・ところで、クエストのアイテムって結局なんなんでしょう?」

「頂上にあるって言ってたけど、特に何も無いわよね・・・」

「んゝクエ受けるから何かしらの変化があると思っただけだなあ。その樹が咲いてるとか・・・違ったなら、明日下りながら風潰しに探すしかないな」

「そうね・・・今日はとりあえず休みましょ」

「そうですね・・・」

「だな」

耐寒性抜群かつ隠蔽ボーナスも付く攻略組御用達の寝袋を広げ、星空の下で俺たちは眠りにつくことにした。寝袋の性能のおかげで寒さは感じない。

現実世界と同じ星座はあるのかと目を凝らしていると、リズが口を開いた。

「ねえ、サツキ」

「んー?」

「前に来た時って一人だったの?」

「いや、相棒とだよ」

「相棒さんがいたんですか?」

「そういえば話してなかったな」

「聞かせなさいよ・・・どんな人だったの?」

俺は視線を星空に向けたまま少し考え、話し始めた。

「・・・とんでもなく強かったよ。断言する、今の攻略組にも勝てるヤツは居ない」

「そんなに、ですか?」

「ああ。特殊な状況を除けば、普通の戦闘で相棒がHPを減らしたことは無かった。バカげてるよな。死んだら終わりっていうのに何時もはしゃいでて、ふざけてて、マイペースで・・・生き生きとしてた。散々振り回されたけど、楽しかったよ」

「・・・でも、攻略組にはならなかったんだ」

「ああ。強かったけど・・・それ以上に臆病だった。誰かのためには戦えない、その勇気がない、そう言ってたよ。もし相棒にその勇気があったら、今より攻略は確実に進んでいた。でも責める気はない、俺もそうだったから」

「サツキさんも?」

「俺なんて何の予備知識もなくログインしたんだぜ? たまたま相棒と出会ったから良かったけど、それでも自分が強くなるのに必死で、誰かのために戦うなんて考えはなかったよ」

「じゃあ、何で攻略組になったのかしら?」

「それは――」

広がる星空が、あの頃を懐古させる。

流れ星を見ようと、連れて行かれたモンスターの湧かない丘で寝転がった夜。不意に相棒が言った言葉。

『君は、私みたいにならないでね』

『・・・なんだよ急に』

『君は強くなる。たくさんの人が、君を必要とする日が必ず来る。そ

の時は、逃げちゃダメだよ?」

『どっかの最強剣士さんが隣に居る限り、約束は出来んな』

『ダメ、約束して。私が死んだら、君を必要としてくれる人のために戦うって』

『それなら大丈夫だな。もし相棒が死ぬ時が来るのなら、俺の方が先に死んでる』

『・・・バカ。ちゃんと聞いてよ』

「——約束、したからな。俺を必要としてくれる人のために戦うって」
あの時の相棒の声は、普段からは想像できないくらい弱々しいものだった。今思えば、あれは冗談でもなく本気だったのだろう。

相棒は死の予感、いや、死ぬ覚悟があったのだと思う。その理由が何かは分からないが。

「・・・そうだったのね。そしてまさに今、言われた通りにアンタは大勢に必要とされてる。アスナたち攻略組のみんな、あたしやシリカのようなゲームクリアを待つみんなに」

「・・・そうだな。正直、俺には大き過ぎる期待だけど」

「何言ってるのよ。十分頑張ってるわ」

「そうですよ!でも、無理はダメですからね?」

「ああ、ありがとう」

背負っているものの大きさを改めて感じながら、俺は静かに目を閉じた。

〈サツキside〉

暖かい光を感じて、俺は目を覚ました。

温もりの残る寝袋から這い出て立ち上がると、遙か向こうに連なる山々から太陽が顔を覗かせていた。広大な景色に光が差し込んでいくのを、俺は黙って見届けた。

「うわぁ・・・」

「朝も絶景ね」

シリカとリズも起きたようで、昨夜とは違った光景に声を零す。

太陽が完全に姿を顕にしたところで、俺は大きく背伸びをした。

「うくん、良い目覚めだな」

「最高の野宿でしたね」

「そのうち絶景スポットとして有名になるかもな」

「ここを登る物好きは少ないでしょうけど・・・本当に何も無いのね」

当初の目的を思い出してリズが肩を落とす。そう、これからが本番だ。

「んじゃ、飯食ったら隅々まで探しますか」

「もうアスレチックは懲り懲りよ・・・」

「ゴツさえ掴めれば楽しいですよ！」

昨日を思い出して憂鬱になるが、探さなければ見つかる物も見つからない。

「そんじゃあ飯は——」

余り物で簡単な朝食を作ろうとした俺は、目に入った光景に動きを止めた。

「え？」

昨日までは枯れていた樹が、陽光に照らされて神々しいまでの輝きを放っていたのだ。まるで息を吹き返したように桜色の花を一杯に咲かせ、あつという間に一面に広がる。

「うわぁ！綺麗ですな」

シリカが声を上げ、リズも黙って咲き誇る花を見上げた。

「前はこんなこと無かったなあ、クエスト限定のイベントか」

俺の考えが正しいことを証明するものを、リズが見つけた。

「あーあそこ見て」

リズが指さしたのは垂れ下がった一本の枝先。そこには金色に輝く球体、いや果実が実っていた。シリカが吸い寄せられるように近付いてもぎ取ってみると、それでも果実は輝かしい光を放っている。同時に、クエストの進行を示す効果音が鳴った。

「これが目的のモノか」

「どう見てもそうでしょうね」

「〈陽果〉って名前ですね。食材アイテムみたいですよ」

「食ってみるか」

「持って帰らないとクエストクリアにならないでしょうが」

「一個くらい良いだろ。苦労した分、俺たちに食う権利はある」

そう言ってシリカから果実を受け取ろうとした時、輝きを放っていた樹がその光をより一層強くして、次の瞬間には最初のように枯れた姿になっていた。

「・・・え？なんで？」

突然の現象で零れた俺の声に、シリカが思い付いたように言う。

「もしかして、一つしか実らないのでしょうか・・・？」

「たぶんそうだろうな・・・数時間かけて登って来たのに一個しか手に入らないってマジか」

「ま、良いじゃない。探す手間が省けたんだし」

クエストの難易度に改めて肩を落とすが、リズはどこか嬉しそうだった。

「そうだな。何はともあれ目標達成ってことで、帰るか」

「降りるだけなら楽だから良いわ」

「大丈夫って分かっても、落ちるのは怖いですけどね」

「でも眺めは最高だぜ？」

俺の言葉に二人は首を傾げた。そんな二人に構わずメニューウインドウを操作していると、リズが口を開く。

「眺めつて、中は何も無かったじゃない」

「中はな。目の前にあるだろ？最高の景色が」

俺はそう言つて視線を絶景を見渡した。数秒かけて意図を理解した二人が素つ頓狂な声を上げる。

「ここから飛び降りるんですか？」

「大丈夫なの？」

「いや、ここは救済措置ないから普通に死ぬ。だからコイツの出番だ」俺は青と白を基調とした装衣を実体化させて二人に渡した。

「何これ？」

「街で買つといたへ飛翔の装衣だ。これを着てれば、こんだけ高い場所からでも落下ダメージを無効化できる。これで一気に降りよう」

俺は早速装衣を羽織つて頂上の端に足をかけた。同じようにしてシリカが下をのぞき込むと、不安の声を零した。

「うう・・・やっぱ怖いです」

「大丈夫大丈夫。俺が言ったタイミングで装衣広げて、あとは景色見れば良いから」

「最初から広げれば良いじゃない」

「あんまり上で広げれば突風で飛ばされるから逆に危険だ。滞空時間が長ければ飛行モンスターにタゲられるしな」

「なるほどね・・・なら任せるわ」

「まあ怖いのは最初だけだ。行くぞー！」

不安げな二人と対称的に気分が高揚した俺は勢いよくジャンプし、広大な景色に身を躍らせた。リズとシリカが続く気配を感じながら、俺は重力に従つて落下するのに身を任せる。

「ぎやあああつ!!」

「わああああつ!!」

「いえーいー！」

三者三様のリアクションをしながら塔の半分を過ぎた辺りで、俺は風の音に負けない声を上げた。

「今だ！」

両手を大きく広げると装衣が風を捉え、強烈な浮遊感とともに落下

速度が弱まる。揺れるようにゆっくりと降下し始めたのを感じて視線を上に向けると、リズとシリカも成功したようで安堵した目と合う。俺が顎で二人の視線を前へ誘導すると、途端に目を輝かせた。

「・・・綺麗」

頂上と変わらないはずなのに、興奮からかより美しく見える景色に見送られながら俺たちは地上に着地した。絶景の余韻に浸りながら顔を合わせると、自然に笑いが込み上がってくる。

「とまあ、そんなわけで攻略完了だな。お疲れさん」

「お疲れ様。どうなるかと思っただけど、何だかんだ楽しかったわ」

「そうですね！サツキさん、改めてありがとうございます！」

「ああ、俺も良い暇つぶしになったよ。今度は最速クリアRTAでもやるか」

「絶っつっつ対に嫌よ」

今回の冒険を振り返りながら俺たちは歩き出した。

そのまま帰路に着き、街まで二人を送ったところで俺たちは別れた。何度も礼を言うシリカと、こまめなメンテの約束を取り付けてきたリズの姿が見えなくなると、途端に寂しさを感じる。〈陽果〉を依頼主に届けるまで付き合おうとしたが、シュガーからノノが復活したとメッセージが来ていたためすぐに向かうことにしたのだ。

遅めの朝食を屋台で買い食いしながら、冷めない興奮とノノ復活の喜び、俺の攻略組復帰への期待で胸を膨らませていた。

◆？

〈アスナside〉

「彼女、元気になって良かったわね」

「ええ、本当に良かった」

KOB本部の中庭でリハビリをするノノと、それに付き合うシュガーを見てアスナとミトは安堵していた。

復帰が絶望的と思われた数ヶ月前が嘘だったように、ノノは以前の
ような明るさを取り戻していた。この調子ならレベルとプレイヤー
スキルも直ぐに取り戻すだろう。

「んんん、もう一回！」

「はい！」

どこか元気のなかったシユガーも、ノノの復活を心から喜んでい
るのが見て分かる。無邪気に、されど真剣に剣を交える二人は以前のそ
れと変わらない。

「——やああつ！」

手元が霞む速度の一閃に剣を弾き上げられたシユガーは、さすがに
大きく後退して仕切り直した。

友人としての喜びはもちろん、攻略組としてもノノの復活は喜ばし
いことだった。

〈ヒースクリフ神聖剣〉〈サツキ剣豪〉〈カグマ不滅〉、そして収監されているラフコフの新幹部。

彼らにも引けを取らない〈ノノ抜刀術〉は、間違いなく大きな戦力とな
る。クウオーター・ポイントを目前に控えた現在、これほどの朗報は
ないだろう。

「おつ、早速やってんな」

久しぶりに感じる声に振り向くと、炭のような真っ黒に焦げた物体
が刺さった串を持ったサツキがいた。なんて声を掛けるべきか思考
停止していると、ミトが呆れた様子で言った。

「また変なモノ買って・・・」

「失礼な、ちゃんとした食い物だわ」

「なら、もうちよつと美味しそうな買いなさいよ」

「見た目だけで判断していると損するぜ」

残りを平らげたサツキは、一段落した様子のノノに向き直った。

「まだ本調子ってわけじゃなさそうだな」

「まあね。そういうアンタもじゃないの？」

「俺はもう絶好調よ。あとは副団長の判断次第ってとこだ・・・もう大
丈夫なんだな？」

「ええ。心配と迷惑をかけた分、これから貢献していくわよ」
「・・・そうか」

サツキの反応が、どこかノノに不信感を抱いているようにアスナは感じられた。

E p. 59 孤独の失意

〈アスナside〉

「スイッチ！」

完璧に合った掛け声とともにシュガーと入れ替わったサツキが、骸骨剣士の前に飛び込んだ。そのままガラ空きの胴体に連続技を見舞う。

当たり判定がシビアな相手だが、難なくクリティカルヒットを連発させ残っていたHPを余さず消し飛ばした。戦闘終了の音とハイタッチの音が重なる。

「すっかり本調子ですね！それどころか以前よりも良かったと思えますよ」

「だろ？やっぱり休暇つてのは大事なんだよ。今度みんなでバカンス行こうぜ」

「あら良いじゃない。旅費はもちろん出してくれるのよね？」

「そこはダイゼン氏に頼むから問題ない」

「経費をアテにするんじゃないやありません」

74層迷宮区を進みながらアスナたちは雑談に花を咲かせた。

サツキが攻略組に復帰してから三日、アスナは改めてその存在の大きさを感じていた。その強さによる戦闘の安定さはもちろん、他愛のない会話が最前線の緊張を程よく解かしている。未だに一部のメンバーから畏怖されているミトとも、いつの間にか仲良くなっていた。「もう八割方マツピングは終わったか？」

「そうですね。今週中にはボス部屋を見つけれそうです」

「今のところボスに関する情報はないみたい。部屋を見つけてからじゃないと出ないのかもしれないけどね」

「ま、何にせよもうすぐボス戦ってことだ・・・ノノは参加させるのか？」

自然と聞かれてアスナは即答できなかつたが、サツキの言いたいことを瞬時に理解して口を開いた。

「まだ本調子って訳でもないし、レベルも追い付いていないから参加させるのは気が引けるけど……」

「次がクウォーターだからなあ……難しいところだ」

本来ならば復帰直後のノノをボス戦に参加させるのは避けるのが定石だ。期間が空いた分、以前のように戻るまでは時間が掛かってもリハビリをさせていただろうが、今回はタイミングが悪い。

過去に同じく、攻略組に甚大な被害を出すであろう第75層を突破するのに、ノノの〈抜刀術〉は大きな力になる。しかし、久しぶりのボス戦がそれではあまりに危険だ。かと言って、リハビリもままならない今の状況で数日後に行われるであろう74層ボス戦に参加させるのも——という問題に、アスナは悩まされていた。

副団長として自分が決断しなければいけないと思い詰めていたアスナだったが、サツキの様子からしてバレバレだったのだろう。いきなり迷宮区に行こうと誘い、この四人しかいない今になってこの話を持ち出したのは、アスナ一人に抱え込ませないためか。

「……みんなは、どうしたら良いと思う?」

意を決してアスナが聞くと、サツキの表情が一瞬だけ和らいだように見えた。しかし直ぐにいつもの調子で言う。

「ノノ本人に任せるのがベストだろうよ。参加したいってなら参加させれば良いし、逆も然り。本人に戦う意思がなければ勝てないし、強要するものでもないしな」

「わあ! スゴいですよサツキさん、ヒースクリフ団長と同じこと言ってます!」

「マジかよ……ってかアイツと話したのか」

「はい! 少しでもいいんですけど」

「ノノなら参加するって言ってたわよ。クウォーター前には完全復活するって張り切ってたし」

「それじゃあれベリングに付き合わないとな。装備は更新しなくても通用するだろうから——」

さも当然のように話し始めた三人にアスナは面食らった。誰かに相談はおろかそういう素振りも見せていなかったはずが、この三人に

は筒抜けだったのだろう。

「言ったはずだよアスナ、私が支えるって。そう思ってるのはあの二人も同じだよ」

「・・・うん、ありがとう」

前を歩く男二人の背中と隣を歩くミトに頼もしさを感じつつ、アスナは迷宮区を進み続けた。

◆?

〈ノ side〉

握った刀の感覚を確かめながら、私は体に染み付いた〈抜刀術〉の基本技・“墮月”を空打ちした。縦一線に軌跡が刻まれ、一瞬の間をおいて風を斬る音が鳴る。

全盛期よりも速度が落ちているのを改めて感じつつ脱力して顔を上げ、私は75層の底をぼんやりと見つめた。

あの日、チグネさんが死んだと知った日によく似た夕焼けだ。彼女の笑顔が声が匂いが温もりが、たまらなく愛おしい。でも二度と会うことの出来ない現実がのしかかる。

「戻りました!」

元気な声に視線を向けると、笑顔を輝かせたシユガーが駆け寄ってきた。その後ろからアスナさんとミトさん、サツキが続く。

「みんな!お疲れ様」

以前のような明るい無邪気なキャラを演じて私は答える。真っ直ぐで、人を疑うことを知らない純粹なシユガーが、私の腹の中を見破れるはずもなく嬉しそうに言った。

「聞いてください!なんとボス部屋を見つけてきました!」

「本当に?スゴいじゃん!」

「俺の驚異的な勘のおかげだな」

「いっつも外すくせに、今日は調子良かったわね」

「さっそく偵察に行ってもらうから準備しててね」

「ちよつと待て、まさか明日じゃないよな？ 貴重なオフ日だぞ？」

「明日よ」

「明日に決まってるじゃない」

「明日ですよ！」

「なん・・・だと・・・」

がくりと項垂れるサツキを他所に、アスナさんが口を開いた。

「ノノちゃん」

「心配しないでアスナさん、私も戦える・・・マップ見せて」

ヘイゼルの瞳を見つめて私が答えると、シユガーは大きく頷いて右手を動かし始めた。アスナさんとミトさんも安堵した様子だ。

ただ一人。

「・・・」

黙ったままのサツキの視線に気付かないふりをして、私はシユガーから渡された迷宮区マップに目を通した。

予想より早い、準備は整った。

夜の帳に包まれた静寂の中、私は音を立てずにベットから起き上がった。隊服に着替えて愛刀を提げ部屋を出る。念の為に索敵スキルを発動させ、鉢合わせる人がいないことを確認しながら私は本部を後にした。

凍りついた心では、頬を撫でる風の冷たさは感じなかった。

◆？

〈サツキside〉

フレンドメッセージの受信を知らせる音で俺は目覚めた。

重たい瞼を上げて外を見ると、まだ夜の帳が下りている。寝ていたのはせいぜい2時間程度だろう。いつもなら寝直すところだが、妙な胸騒ぎを感じて右手を動かしメッセージを確認する。送り主はシユガーだ。

「ノノちゃんがいなくなりました」

その一文だけを読んで、俺はすぐにギルド本部へと向かった。

「サツキさん!」

本部に入るや否やシユガーが駆け寄って来る。副団長とミト、他の団員たちの姿もあり、みな深刻な顔をしていた。

「ノノちゃんが、なんで、どうして……!」

「落ち着け……状況は?」

珍しく取り乱しているシユガーを落ち着かせて説明を促す。

「……眠れなくて、夜風に当たろうと廊下を歩いていたらノノちゃんの部屋のドアが開いていたんです。まだ起きてるのかなと思って中を見たら、誰もいなくて、机にこれが……」

震える手で差し出された紙を受け取る。二つ折りのそれを開くと、短くこう書かれてあった。

——ありがとう、ごめん

幼さが残るその字から、俺は確かな覚悟と決意を感じた。

「ノノ、やっぱりお前——」

死ぬつもりだ。

口にはしなかった。だが、誰もが気付いている。

「ど、どうして? あんなに元気だったじゃない!」

「今は理由よりも探し出して止めるところが先だわ!」

「どこを探すって言うの?」

「考えてたって分からねえよ!動くしか——」

「もしかしたら、もう」

「やめろ!」

怒号にも近い声が交錯する中、俺は黙って思考を加速させた。

死を望んでいたのなら、なぜすぐに実行しなかった?

なぜ復帰の意思を見せた?

なぜこのタイミングで?

彼女の様子がおかしいのは分かっていた。

以前と同じように振舞っている姿に裏があるとは思っていた。大切な人の死は、そう簡単に乗り越えられるものではない。最悪のパターンを考えて、街の外柵沿いに監視役を雇った程に俺は警戒していた。しかしそれは不発に終わっている。

レベルに差がついたとは言え攻略組、しかもユニークスキル持ちが死ぬことは逆に難しい。無防備に雑魚の攻撃を受け続けてもバトルヒーリング戦闘時回復で死ぬことはない。最前線でない限り。

「——ッ!」

そう、最前線ならば俺たちでも死ぬことは有り得る。それがボスであるなら尚更だ。

「……そういうことか」

眩きは限りなく小さかったはずだが、声は止み、全員の視線が俺に集中した。

「サツキくん、何か心当たりがあるの?」

「ああ」

なぜすぐに実行しなかったか?する前に機会を失っていたから。なぜ復帰の意思を見せたのか?最前線のマップを手に入れるためだったから。

なぜ今このタイミングなのか?全ての条件が整ったから。

「……ノノは独りでボスと戦うつもりだ。そして……死ぬ気だ」

〈サツキside〉

「急ぎましょう！こっちです！」

先頭を走るシュガーを俺と副団長、ミトが追従する。数時間前に踏破したばかりの迷宮区を迷いなしに突き進めるのは、明日に予定されていた偵察のために暗記していたからだろう。

他の団員たちにレイドの緊急招集を頼み、俺たち四人は先遣隊としてボス部屋に向かっていた。逆算して、すでにかなり奥に進んでいると思われるノノにまだ追いついていない。

(・・・お前は、本当にバカだよ)

群がる雑魚を無視して走る中、俺はノノに毒づいた。

大切な人を喪う悲しみと苦しみは、痛いほど分かる。

独り^{ソロ}になったあの日の絶望と後悔を忘れはしない。消えない焰となつて今も俺の体を灼き続けているように、その傷は決して癒えることはないのだ。

その果てに、死という道を選ぶのを咎めることは出来ない。

「ノノちゃん、無事でいて・・・！」

ミトの悲痛な声とともに、俺たちは走る速度をさらに上げた。

◆?

〈ノノside〉

可能な限り戦闘を避け、表示されたマップを頼りに薄暗い迷宮を独りで進む。すでにボス部屋がある最上階まで来たので、見つけるのは時間の問題だろう。

『私はチグネっていうの！よろしくね』

『作ってみたんだ、味見してみて!』

『ほんつと、あの二人つたらさあ……』

『ね!今度みんなでどこかに行かない?』

『私ね、攻略組になりたいの』

過去のフラッシュバックが止まらない。

もう取り戻せないのなら、色褪せてしまう前に永遠のものにしよう。

「……見つけた」

半ば開いた二枚扉は、今まで同様に強烈な威圧感を放っている。しかし微塵の恐怖も躊躇いもなく、私は部屋に足を踏み入れた。

「うわあああああつ!!」

「あああああつ!」

聞こえてきた恐怖の声と予想外の地獄絵図に、私は足を止めた。

部屋の中央付近には、二十人程度のパーティーが散り散りになっている。そして、連携など取れていない彼らに大剣を軽々と振るう巨体。間違えようがない、七十四層ボスだ。

圧倒的な力の差、蹂躪されるパーティーを見て私は気付いた。

攻略組から姿を消して随分経つ《軍》だ。二十五層ボス戦で甚大な被害を出し、治安維持を名目にはじまりの街を占拠しているはずの彼らが、なぜか今ボスに挑んでいる。

理由は知らないし、興味もない。だけど――

「ゴアアアアアツ!」

「――」

足元で動けなくなった一人に振り下ろされた大剣、その前に身を躍らせた私は基本技“墮月”を放った。金属音が響き渡って大剣が弾き返り、仰け反ったボスは私に明確な殺意を向けてくる。納刀して構え直した私は、視線をボスに向けたまま苛立ちの声を出した。

「邪魔、さっさと消えて」

「あ、アンタは——」

最後まで聞くことなく私は右手を閃かせた。

〈抜刀術〉四連撃技〃白銀〃

ボスが大剣を振り上げた時には、すでに四つの剣痕が腹に刻まれた。そのままボスの側方に走り軍からタゲを外す。横なぎに払われた大剣を屈んで躲し、低い姿勢から二連撃技〃夕霧〃を脚に見舞う。

ボスの攻撃を捌いて反撃を繰り返す最中、視界の端に安堵と混乱した様子の子の軍を見て私は再び声を荒らげた。

「死にたくないでしょ!?!早く逃げて!」

「何を言うか!我々に撤退など有り得ない!さっさと立たんか貴様ら!」

リーダーと思しき男の怒号で何人かがノロノロと立ち上がる。私は舌打ちして意識から軍を排除し、ボスにのみ集中する。

私より一回りも大きい大剣を振るう動作は、微妙なカスタムが施され完璧に捌くことが出来ない。直撃は免れるが、時折刀身が体を掠めてHPをじわりと減らしていく。

このままではジリ貧。

死に場所を決めてここに来たけど、こんな終わり方は納得できない。

全力を出せ。

悔いを残さないよう、絶望と恐怖と怒りと悲しみと後悔を燃やし尽くせ。この世界で生きた証を残せ。

「ツ!あああああああ!」

咆哮を迸らせ、私は刀を抜き去った。

◆?

〈サツキside〉

『サーくん。人が一番力を発揮できるのは、どんな状況だと思う?』

『そりゃあ、死にそんな時じゃないか？火事場の馬鹿力とか、走馬灯とか言うだろ』

『そうだね。サーくんも経験あるんじゃない？前に引つ掛かった孤立トラップとか』

『確かに、あの時は馬鹿力だったな。途中から記憶飛んだし』

『うん、それがこの世界では一番大切な。死を目前にした恐怖と絶望に勝った時の力は計り知れない。でも、それと同じくらい強くて、全く逆の力もあるの』

『なんだよ？』

『死を恐れない人の“心意”だよ』

『死を恐れない、ね。じゃあ相棒の強さの秘訣もそれか？』

『少し違うかな。私は強いから、負けて死んじやうかもって場面がないだけ。死を恐れない人は、自分が死ぬことになっても何かを成そうとする人のことだよ』

『つまり、命よりも大事なもののために戦う人ってことか』

『うん。他人から見たら理解できないことでも、本人からしたらとても大事なもの・・・サーくん、もしそんな人に出会ったら、助けてあげて』

「・・・とんだお願いをされたもんだ」

迷宮区を駆け抜ける最中、俺は相棒の言葉を思い出していた。

元は“外部からの救出待ち組”だったノノが、復讐のためとは言え攻略組にまで上り詰める理由となったチグネさん。彼女と会ったこととはないが、真っ直ぐで純粹かつ強い信念の持ち主であったことは感応現象で見た記憶から窺える。そんな彼女に少しでも認められる死に方として、ノノは単独でボスに挑むことを選んだのだろう。

「見えました！」

現れた重厚な扉に向けて俺たちは更にスピードを上げた。扉が開いていることから、すでに戦闘が始まっていることが分かる。

「うわあああつー！」

勢いそのままに飛び込もうとした瞬間、響いた絶叫と悲鳴に俺たちは急制動をかけた。

「大丈夫か!？」

扉から中を覗き込み叫んだ俺の目には、地獄絵図が広がっていた。同じ格好をした十数人が無様に転がり、HPは半分近くまで減っている。その奥では山羊の頭の巨体が身の丈もある大剣を軽々と振りかざしていた。

そして、その巨体の目の前で座り込む見慣れた赤と白の騎士服。

満身創痍なノノのHPは、真っ赤に染まっていた。

「ノノちゃん!」

悲鳴じみた声とともにシュガーが走り出す。

「行くぞー!」

俺たちも続き、ボス部屋に身を躍らせた。

◆?

〈ノノside〉

終わりが見えないと思われたボスとのタイマンも、私の敗北の色が濃厚になってきた。

ボスの圧倒的な攻撃力とHPに対し、一人のプレイヤーに過ぎない私はあまりに無力だ。ここまで生き延びていることすら奇跡と言える。火事場の馬鹿力とでも言うべき最高潮の集中力と、授かった〈抜刀術〉が無ければこうはならなかった。

(・・・ほんと凄いなあ、アイツ)

同じくユニークスキルを授かり、単身でもボスと渡り合ってきたサツキの強さを改めて実感した。何かと馬が合わないことが多かったけど、その強さを疑ったことはない。どんな強敵が現れようとも、彼がいれば負けることはないと思える。

「グオオオオオツッ!」

「ッ!」

咆哮とともに初めて見るモーションに反応が遅れ、私は横腹に大剣

の直撃をもらった。世界が回っているような錯覚とともに、叩きつけるように何度も転がった。

視界の端に赤く染まったHPバーを見て、私は冷たい床から立ち上がるのを止めた。顔を上げて、掲げられた大剣と勝ちを確信したボスの顔を見据える。

——ああ、ようやく終わりか。

求め続けてきた瞬間に、やはり恐怖よりも安堵した。これで苦しみから解放される。

次に見るのはあの人だと信じて、私は目を閉じた。

『はじめまして！これからよろしくお願いします！』

——違う。

『流石ですね！勉強になります！』

——なんで

『もっともっと強くなって、皆さんを守れるようになります！』

死の直前に見たのは、いつも真っ直ぐで純粋な赤い目を向けてくるシュガーだった。まさに今、目の前にいるかのように姿と声が鮮明に思い浮かぶ。

思い返せばずっと一緒だった。チグネさんに出会う前までは孤独で、死んでしまってから再び孤独に戻り、KOBに入ってから友人と呼べる関係は確かに多くなった。その中でも共にした時間はシュガーが一番長い。攻略でもレベリングでも休日でも。しかし不思議と嫌ではなかった。

——ああ、今になって気付くのか

私の中で彼の存在が大きくなっていくことを自覚した。彼が周りに与える影響を一番に受けていて、それでいて気付いていなかったことに笑ってしまう。

せめて死ぬ前に気付いて良かったと思いながら、私は最期の瞬間を待った。だから――

「ノノちゃん！」

その声を幻聴だと疑わなかった。

聞こえるはずない、いるはずがないと、私はさらに強く目を閉じた。だけど目の前で金属音が大音量で響き、何かの熱を感じたことで私は目を開けた。

「間に、合いましたよ、ノノちゃん……！」

顔が触れそうなほど至近距離から真っ赤な瞳で私を見つめるシユガーは、振り下ろされた大剣を背中に回した愛剣で受け止めていた。

「はあああああつ！」

完璧に合った3つの声とともに、ボスの背中に鮮やかなエフェクトが煌めいた。苛立ちの声を上げながら大剣を振り回したボスが大きく跳躍して私たちから距離を取る。その間に入るようにして現れた3人の後ろ姿に、私はどうしても絶対的な信頼と安心感を感じてしま

う。

「ノノちゃん！良かった……」

「危ないところだったわね」

「よお大バカ野郎、邪魔したな」

「なんで……」

私の呟きに答える前に、サツキは鋭さの増した青い瞳をボスに向け、二本目の愛剣を抜き去った。

「お互い言いたいことは山ほどあるだろうが、まずは片付けてからだな」

その言葉に同意するように放たれたボスの咆哮が、第2ラウンド開始の合図となった。

E p. 61 青眼の悪魔

〈サツキside〉

「カツコつけたは良いけど、どうしたのか」

明確な殺意が込められたボスの視線を受け止めながら、俺は両手の愛剣を握り直した。

ノノが生きていることには安堵した。しかしその嬉しさを消し飛ばすほどに状況が悪い。

当初の予定では救出が最優先だったためボスと戦う、ましてや倒そうとは微塵も考えていなかった。しかし今、ボスを倒すことに全力を尽くさないといけない。

一つ目の理由は、俺たちとボスの位置関係だ。

俺と副団長、ミトの背後からの攻撃を受けたボスは追撃をキャンセルして距離を取った。しかしただ距離を取っただけでなく、俺たちの背後、部屋の入口側に移動したのだ。一人も逃がさないため、と考えるほど高度なAIを持っているとは考え難いが、偶然にしても運が悪すぎる。

これだけならまだ逃げ切れる自信はあった。タゲを引き受けつつ撤退することは今までに何度もやってきたからだ。だが、それを不可能にするもう一つの理由がある。

「アスナ、あの人たちって」

「ええ、何で《軍》がここに・・・?」

そう、本来なら居るはずのない元攻略組の〈アインクラッド解放軍〉の存在だ。最前線から退いた彼らだが、ここにいる理由はボス攻略に他ならないだろう。おそらく精鋭を揃えてきたのだろうが、装備も人数も精神力も話にならないレベルだ。今まで生きていただけで奇跡と言える。

「・・・この人数を逃がすのは厳しいな」

「応援が来るまで耐えましょう。レイドを組めれば状況を変えられるはずよ」

「それまであのバカでかい大剣を捌き切れればな」

俺たちの身長を優に超える刀身が、青白い松明の光を反射してギラリと輝いた。直撃はもちろん掠るだけでもヤバいのが目に見える。それに、ボスのモーシヨンには何かしらのカスタムが施されていることが多いため、初見で完璧に捌くことは至難の業だ。

逆に言えば、ここまで攻撃に特化しているボスはHPが低い傾向にある。それを裏付けるように、胸部に意味深に刻まれた古傷がある。あそこが弱点と見て良いだろう。大剣を捌きつつ叩ければ、勝機はある。

「副団長とシユガーは、ノノと軍の奴らを頼む。俺とミトでボスのタゲを取るから、壁際に誘導して回復させてやってくれ。そっちが落ち着いたら、四人で反撃する」

「わかった、気を付けて」
「わかりました」

副団長が軍の元へ向かい、シユガーがノノを抱えて離れたのを見届けてから、俺とミトはボスに向き直った。

「二人が来るまではパライに徹しよう。アレは気抜いたら即死だからな」

「わかってる。アナタこそ無理しないでよ」

そう言い、俺とミトは咆哮を響かせるボスへと走り出した。

◆?

〈ノノside〉

シユガーに抱えられて後退する中、ボスに立ち向かうサツキとミトの背中をぼんやりと見ていた。

たった二人で、とは思わない。その強さを知っている者なら誰だって、何とかするだろうと思うはずだ。

「死にたくないなら、黙って私の指示に従いなさい」

少し離れたところで怒りに震えたアスナさんの声がする。私が何を言っても聞かなかつたりリーダーと思われる男が、その一言で嘘のように大人しくなった。

——ああ、やっぱり、全然違う。

SAOの囚人となって絶望と恐怖に吞まれた私と、復讐のために攻略組になった私と、世界で唯一の力を自分のためだけに使ってきた私と……全然違う。

絶望と恐怖に打ち勝って前に進み、この世界からの解放を願って戦い、仲間のために力を使う。

憧れた人たちが歩いてきた道の反対を、私はずっと歩いてきたのだ。

「……もう嫌だ」

こぼれた呟きに一瞬動きを止めてから、シユガーはゆっくりと私を壁際に座らせた。強く握った手に視線を落とす私に、シユガーはいつもと変わらない優しい声で言った。

「ノノちゃん……僕はまだ大切な人を喪ったことがないから、ノノちゃんの苦しみを分かかってあげられない。でも今のノノちゃんを見て、絶対にその苦しみを味わいたくないって思うんだ」

言葉の真意を理解しかねて顔を上げると、ぼやけた視界の中でシユガーは困ったように笑っていた。

「ノノちゃんのお願いだつたら何でも叶えてあげたい。でも、こればかりは譲れないんだ……自分勝手だけど、これからもずっと一緒にいて欲しいから、生きていてほしいから、僕はノノちゃんを助けるし守る」

「……私にそんな価値ないよ」

「僕からすれば、僕の命以上に価値があるものだよ。だって僕は、世界で一番ノノちゃんのことを好きだから」

赤い瞳に込められたその思いに疑う余地はない。

シユガーは立ち上がってボスの方へ向き直った。

「僕だけじゃない。ノノちゃんに生きてほしい、大切な仲間だって思ってる人はたくさんいる。もう、独りじゃない。だから見てて」
愛剣を構えて走り出したその背中に、私はやはり疑いようがない頼もしさを感じていた。

◆?

〈サツキside〉

俺を両断しようとして振り下ろされた大剣をレーヴァルティンの腹で受け止める。のしかかる重さを流すように右へ払い、一回転してリニアをがら空きの胸へ叩き込む。

「スイッチー！」

声に合わせて後退し、俺とボスの間にミトが飛び込み大鎌を振るう。刻まれた傷に苛立ったように払われた大剣を躲したミトは、追撃の三連撃技をボスの横腹に見舞った。彼女に気を取られている隙に、俺もボスの右脚に“シャープネイル”を喰らわせる。

「単調な攻撃だな。後で絶対パターン変わるヤツだ」

「二人が来るまで下手に減らさない方が良いかもね」

「だな。ブレスなんか吐かれたらたまったもんじゃないし」

「そういうのはフラグになるから」

言ってるそばからボスは大口を開き、青白く輝く炎を溜めだした。

「来るぞ！」

「わかってる！」

咄嗟に二手に分かれてブレスの直線上から離れると、ボスはミトに狙いを定めたらしく青い炎は横なぎに追尾する。ミトの技量なら躲せると判断し、俺は側方から近付き脇腹にレイジ・スパイクを見舞った。

ギロリと俺に眼光を光らせたボスの反撃を捌こうと集中させた視界、その端で流星の如き一閃が煌めいた。

「はあっ！」

山羊を模した悪魔の顔面に強烈な一撃^{リニア}がヒットし、HPが目に見えて減少する。軽やかに着地した副団長のその一撃に続くように、ボスの背後でさらにライトエフェクトが爆ぜた。

「お待たせしました！」

「良い一撃だ、シユガー！」

視界の端に壁際で回復する軍と放心状態で座るノノを確認し、俺はボスに向き直る。

四方から囲む形になった俺たちを順に見据えたボスは、鼻息を荒くしながら大剣を高々と掲げた。刀身がライトエフェクトを放つと同時に俺は叫ぶ。

「範囲攻撃！」

簡潔な警告だが、三人は流石の反応速度でボスの間合いから離れる。空振りに終わった攻撃が、部屋の冷たい空気を斬り裂いた。

「範囲持ち、厄介だな。シユガー！」

「了解です！」

俺とシユガーが攻撃を終えたボスに急接近する。それを見て、副団長とミトは俺の意図を理解したように後に続いた。

四人一斉に攻撃する方がダメージは稼げる。しかし範囲攻撃によつて一気に態勢を崩される恐れがある。時間は掛かるが安全に、確実に勝利を掴むためにはスイッチによる攻守一体が基本だ。

「うおおおっ！」

振り下ろされた大剣をシユガーとともに弾き返し、ボスの体勢を大きく崩す。すかさず飛び込んだミトが脚に、副団長が胸にそれぞれ追撃を喰らわせた。

「やっぱりHPは高くないようね」

「油断は禁物です！」

「とりあえず増援が来るまで持ち堪えましょう」

「ああ！次来るぞ！」

七割ほどになったHPを睨みつけながら、俺たちはボスに向かって走り出した。

一時間も経つただろうかと、視界左上の時計をチラ見した俺はまだ二十分も過ぎていないことに思わず目を見開く。

一つのミスも許されない攻防により引き上げられた集中力。しかし常用のポジションは飲み干し、残るは緊急用の数本となっていた。同じく正面からボスと対峙し続けたシユガーも残量が危ぶまれる。攻撃役の二人に分けてもらおうかと考えたが、そんな隙など作れるはずもない。

「・・・だいぶキツいな」

思わず零れた眩きにボスがニヤリと笑みを浮かべた。しかしその巨軀にも激戦による傷が確かに刻まれている。残りHPは三割を切る程だ。

「サツキ！それ以上は危険よ！私が代わるわ！」

ミトの切羽詰まった声に同意することは出来ない。彼女の腕を疑ってるわけではないが、あの大剣を捌くには武器の耐久力が心もとない。それは細剣フェンサー使いの副団長にも言えることだ。

その時、打開策を導き出そうとしていた俺の耳に聞き慣れない男の声が後ろから聞こえた。

「血盟騎士団の諸官ら！」

反射的に声の方——ボス部屋の入口を目を向けると、軍の連中とノノがいつの間にか離脱を完了させていた。

「我々はもう大丈夫だ！早急に撤退を！だが気を付けろ！ここでは結晶が使えない！」

「無効化エリア？ふざけてやがる・・・！」

「でも、あとはいつも通りに撤退するだけです！」

「スイッチのタイミングで後退しましょう！」

「サツキくん！いける？」

「勿の論よ！パリイは任せな！」

「なによ、それ・・・！」

ミトの震えた眩きに誰も答えられない。

ただ一人、真の姿を解放した青眼ザ・グリーンアイズの悪魔だけがニヤリと深い笑みを浮かべた。

〈サツキside〉

「クソツ！走れ!!」

咆哮による硬直が解けた瞬間に俺は叫んだ。我に返って走り出す三人に続き、恐ろしく遠く感じる入口へ向かう。

「こつちだ!!」

「早く！」

恐怖と焦燥に駆られた軍のヤツらに急かされ、俺は愛剣を収めるのも忘れて走った。しかしそれが、逆に俺の命を救うことになる。

「危ない！」

悲鳴じみた警告と同時に視界の端で鈍色の輝きを捉えた俺は、本能的に愛剣を側方でクロスさせる。瞬間に世界が揺れる衝撃と浮遊感に襲われた。

「がっ・・・！」

冷たい床に叩きつけられた俺のHPバーは急減少し、赤に染まる一歩手前で停止した。愛剣を滑り込ませてなければ死んでいたかもしれない一撃、威力と速度がさつきとは桁違いに上昇している。

「シュガーくん！」

副団長の声に顔を上げる。最後尾にいた俺を吹き飛ばしたボスは、次にシュガーを標的として大剣を振りかぶっていた。

「はああっ！」

逃走を諦めたシュガーはボスに向き直り、ソードスキルの構えを取った。だがボスは無意味と言わんばかりに無造作に剣を振る。それをシュガーは真正面から迎え撃つことなく、わずかにタイミングをズラして側面から大剣を弾き軌道を逸らした。

流石の観察力と判断力だと舌を巻くが、床に突き刺さった大剣がライトエフェクトをまとっているのを見て俺は叫んだ。

「まだだ！」

「なっ！」

シュガーが構えを戻すよりも先に、ボスが動いた。

突き刺さったままの刀身が床を抉りながらシュガーへと迫る。ステップでの回避が間に合わないと言ったシュガーは、愛剣でのガード体勢を取った。しかし――

「シュガーー！」

ギャリイインツ！と大音響とともにシュガーの愛剣は彼の手を離れて宙を舞った。下から掬い上げられた衝撃に耐えられなかったのだ。ボス戦での、しかも目の前でのロストは何よりも致命的。

「くっ！」

ミトが鎌を分離させ収納されていた鎖を投擲する。数ある武器の中で唯一の形状変化のギミックだ。同時に扱いの難易度が随一とされる鎖による遠距離攻撃が、彼女の意思を宿してボスに肉薄する。

「今のうちに！」

「はい！」

「ごっちー！」

ボスが変幻自在な鎖の動きに翻弄されている隙にシュガーが離脱する。俺も緊急用ポジションを惜しまず流し込んで副団長たちの元へ向かった。

「すみません！へましました」

「生きてりやなんでも良い！つてか、さすがに状況が悪い」

「今まで通りに撤退するのは難しそうね」

「ここまで攻撃特化とは、クウォーターを思い出しますね・・・！」

「全力で回避しつつ後退するしかない・・・念の為に言っておくが、仮に誰かがやられても変な気を起こすなよ。今は戦力が足りなさ過ぎる」

「ごっちのセリフですよ！」

「まったくね・・・全員で帰りましょう」

「ああ！」

業を煮やしたボスが力任せに鎖を弾き飛ばすのと、俺たちが動いたのは同時だった。

「ミト！そのまま鎖で牽制してくれ！シュガーは剣拾ったら離脱！副

団長は俺と交互にボスのタゲ取りだ！」

「わかった！気を付けて！」

「了解です！」

「ええー！」

鎖の間を掻い潜ってわざとボスに接近、タゲを取る。鎖が邪魔して思うように大剣を振れていないおかげで回避に余裕が生まれる。

「スイッチチ！」

攻撃ではなく回避のためのスイッチ。後方のミトはもちろん、俺と副団長どちらか一人しか狙わせない絶妙な位置取りだ。

「はあっ！」

三度目のスイッチの時、ミトの鎖がボスの青眼を捉えた。明確なチャンスに俺と副団長は大きく後退し、シュガーは扉までの離脱を完了させる。

「もう少しです！」

「頑張れ！」

「負けるな！」

扉からの声援を受けつつ、俺と副団長はボスの行動に注視していた。そして全く同じタイミングで叫んだ。

「ブレス！」

口内を、いや巨躰を青白く輝かせて放たれたブレスは一直線に俺たちを照準している。俺は一步ボスに近付いてから側方にダッシュした。すると狙い通りにブレスは俺を追尾してくる。

「副団長！」

タゲが外れた副団長は頷いてミトの位置、ダッシュで逃げ切れる位置まで一気に後退した。俺もブレスが途切れた瞬間に二人の元へ向かう。

「行け！」

かなりの距離を稼げた今しかない。再び扉へと走り出す。副団長とミトが離脱し、残りは俺一人。

「サツキくん！」

「サツキ！」

「サツキさん！」

共に死線をくぐり抜けた仲間の元へ、ただひたすらに走る。

——見てただろう？

扉に寄りかかり、腫らした目で俺を見ているノノに心の中で問いかける。

——お前にはこんなにも頼りになる仲間がいて、お前を必要としている。お前を真に救うことはできないかもしれない。でも、支えてやることはできる。助けてやることはできる。かつて俺がしてもらったように。

ダツシユの勢いそのままに扉へ飛び込もうと、踏み込んだ時だった。

「——え？」

吸い寄せられるように巻き上がった突風が、俺の体を宙に浮かせた。

◆？

へノノside

文字通り足元を掬われて浮遊したサツキを見て、死闘の終わりを確信していた全員が息を呑んだ。部屋の外にいた私たちでさえ引き寄せられたその突風の発生源には、天を仰ぎ、胸を大きく膨らませたボスの姿があった。

全員が瞬時に悟った。あれがボスの大技の前兆であると。

「ゴオオオオオオオオッ!!!」

咆哮とともに感じたのは、熱。

吹き荒れる暴風が全身を、吸い込んだ空気が肺を焦がす感覚に私たちは動けなかった。ただ確かなのは、それが部屋全体を範囲内とする特大のブレスであること、引き寄せられた突風はボスが空気を吸い込んだことにより発生したものだということ。

そして私たちの数メートル先で倒れ、純白のブレスに身を焼かれ続けているサツキのHPを容赦なく減らし続けていることだった。

「サツキくん！」

パーティメンバーとして彼のHPが見えているアスナさんが、ブレスに飛び込もうとするのをミトさんが制する。代わりに再び鎖を展開し、サツキに向けて投げるがブレスの猛烈な勢いに押し戻されてしまう。

「ダメ、このままじゃ・・・！」

何も出来ずに、目の前で仲間が焼かれるのを見ていることしか出来ない。

——最悪だ。私のせいで、私なんかのために、私なんかより必要とされる存在が死んでしまう——

その時だった。

絶望の中、その歌が聞こえたのは。

◆？

〈サツキside〉

視界が白に染まり、全身を焼き尽くさんとする熱がHPを急速に削っていく。戦闘時回復を上回るダメージ量と数メートル先の扉まで這うことすら出来ないほどの風圧が、俺に明確な死を突き付けてくる。

これがボスの大技であることは間違いない。キャンセルさせるにはボスに一定ダメージを与えることがセオリーだが、この状況でそれはあまりに絶望的だ。

——ダメだ、使えねえ・・・！

唯一の打開策であった〈暗黒剣〉も発動しない。六十七層ボス戦を

最後に使えなくなっていたが、この土壇場でもそう都合よく奇跡は起きなかった。

「・・・ク、ソ・・・」

いよいよHPが三割を切り、黄色から赤へとその色を変える。焔に焼かれた全身から感覚が遠ざかっていく。今まで何度も死の隣りを歩いてきたが、いざその時だと思うとやはり怖い。

何かを叫び続ける仲間たちを最後に一瞥して、俺は目を閉じた。

「・・・サーくん、怖い？」

「・・・ああ」

「・・・私もね、本当は怖いんだあ・・・」

「・・・知ってる。隠すのヘタクソ、バレバレだ」

「・・・そっか、ごめんね」

ため息が出るほど美しい星空の下で、震える相棒の肩を抱いた最期の目を思い出す。あの時に相棒が感じていた恐怖が、今なら分かる。

「見てくださいサツキさん！」

「言っておくけど、私の方が先輩だから！」

「何かあったらいつでも頼れよ！」

「毎度、また来いよ！」

「スゴいです、サツキさん！」

「アンタねえ、もう少し丁寧に扱いなさいよ！」

「君は、強いな」

「ありがとう、アスナを守ってくれて」

「頼りにしてるわ、サツキくん」

仲間たちとの日々、攻略組としての戦いの日々が走馬灯となって蘇ってくる。我ながら幸せな日々だったと思う。

そして――

「――」

死を直前にした静寂の中で聞こえたのは、懐かしい歌だった。音楽に興味のなかった俺と相棒ですら、下層の街中で一度聞いただけで好きになった一曲。

最期に聞くには相応しいと思っていた俺は、それが記憶の中の幻聴ではないことに気付いた。

「——今よ！ノー君！」

「——ああ！」

吹き荒れるブレスに掻き消されることなく、その声は聞こえた。

それだけではない。俺を押し潰していた風圧も、全身を焼いていた熱さも感じなくなっていた。見ればHPの減少は止まり、全損まで数ドットを残している。

見上げた俺の横を何かが過ぎ去る気配を感じたが、それを目で追うことなく俺は扉に立つその少女に目を見開いた。

青と白の装備に身を包み、楽器のような物を携えている。とても武器には思えないが、彼女がそれを弾きながら歌うことで音符のエフェクトが発生している。そこで俺たちのHPバー横に、初めて見るバフアイコンが出現していることに気付いた。

ソードスキルに間違いない。そして稲妻に打たれたような衝撃とともに、俺の過去の記憶が呼び起こされた。

かつて最前線だった町の広場で、あるプレイヤーが路上ライブをやっていた。その歌声は思わず足を止めてしまうほどに美しく、さらに驚くことに聞き入っていた全員にバフを付与していた。

特殊な条件を満たさないと習得できないエクストラスキルの一つにして、頭一つ抜けた熟練度の上がりにくさから攻略では使われないだろうと相棒は言っていた。確か名は——

「——〈吟歌〉」
チャント

俺の眩きとボスの絶叫、そしてブレスが止むのはほぼ同時だった。

〈ノノside〉

——《気炎の旋律》《疾風の旋律》《達人の旋律》が発動しました——

視界に羅列されたメツセージが、目の前で歌う少女によるものだというの是一目瞭然だ。最前線で戦うには——いやそれ以前に戦闘向きとは思えないほどの軽装であるが、彼女がただ者ではないことは直感できる。

旋律の効果か、今まで感じていた熱と風が嘘のように消え去っていた。それは私だけではないようで、みんな驚きの顔を見合わせている。そんな私たちに気付いていないのか、ボスはブレスを吐き続けた。いた。

そのブレスの中を一直線に駆け抜けるもう一人の乱入者。彼の名を私は、いや私たちは知っている。

「——ノーチラス」

元K○B所属の片手剣使い・ノーチラス。寡黙で真面目な性格で一軍メンバーに上り詰めた実力者だったが、一年前のある出来事を機にK○Bを脱退、最前線から身を引いていた。

最後に見た時とは別人のような雰囲気醸し出す彼は、歌の加護を受けてブレスをもともせずボスに接近し、肉厚の片手剣を抜き去った。

「グルルルアアアッ!?!」

胸部への単発重ソードスキルがクリティカルヒットし、絶叫したボスは大きく体勢を崩してブレスが途切れた。

「サツキくん!」

「サツキ!」

アスナさんとミトさんが駆け寄り、サツキの口にハイポーションを流し込む。むせ返りながらも窮地を脱したサツキは立ち上がると二

人に礼を言い、次いで歌の少女へと向き直った。

「助かった、ありがとう」

「間に合って良かった・・・お礼したいのは私たちの方だよ、サツキさん」

「どういうことだ?」

少女は小さく笑ってから、ボスと対峙するノーチラスを見据えて言った。

「お話は街に戻ってからゆっくりしましょう。もう、終わるから」

少女の言う通り、直後にボスはHPを全損させて爆散した。

◆?

〈サツキside〉

「お疲れ!ノー君」

「ああ、ユナも」

大量のポリゴン片が散らばる中、ボスを仕留めた二人は武器を収めてハイタッチを交わした。その姿に既視感を覚えながら、何とかボスを倒せたことに俺は安堵のため息を吐いた。それはみんなも同じように、言葉を交わさずとも頷き合い生還を喜ぶ。

「本当に助かったわ、ありがとう。ユナさん、ノーチラス」

その名前に聞き覚えはなかったが、副団長は知っているようだった。ノーチラスと呼ばれた少年は気まずそうに視線を落としたが、彼と対称的にユナは笑みを浮かべる。

頭の片隅で何かが引つかかる俺が先ほどのユナの言葉の真意を確かめるべく口を開きかけた時、後ろで金属音と何かが倒れる音がした。

「ダメだ!ノノちゃん!」

「・・・離して」

反射的に振り返った俺の目には、シユガーが覆い被さるようにしてノノを押さえ付けている姿が映った。その近くにノノの愛刀《霞桜》が転がっているのを見て、俺はまだ根本的な問題を解決していないこ

とに気付く。

「生きてるのが辛いのに……みんなの優しさに甘える私が許せないの！
こんな思いをするなら、もう終わらせたい……」

ノノを一番許せないのはノノ自身。

過去の自分を見ているようで、その気持ちが俺には痛いほど分かる。

「僕たちには、ノノちゃんが必要なんだ」

「……私が必要としてない」

「辛いのは分かるわ。でも、死んで終わろうなんて思わないで」

「……何も知らないくせに」

「チグネさんがそんなこと望んでるはずないじゃない」

「分かったように言わないで！」

シュガーたちの声もノノは拒絶する。ここまで追い詰められてしまったら、もう誰の声も届かないだろう。

「……もう……楽にさせてよ……」

「ノノ……」

無駄だと分かっている口を開きかけた時だった。

——い、あの子に——！

聞き慣れない声が脳内に響いた。以前にも聞いたことがあるその声の必死さに、俺は耳を傾ける。

——私たちの——出の場所——に、残した物が——

途切れ途切れの声にもどかしさを感じていると、視界が光に覆われて見知らぬ場所が映し出された。広大に広がる森林を見渡せる丘、そこに剣を横した銅像が突立っている。見覚えはない。だが感応現象で見えたのなら意味があるはずだ。

「チグネさんとの思い出の場所……心当たりはないか？ノノ」

「……なによ、急に」

明らかに変わった様子に俺は続ける。

「剣の銅像がある丘だ。そこはお前たちにとって、何か特別な場所

じゃないのか？」

「なんで、それを……」

「チグネさんは、そこに何かを残しているはずだ……死ぬのはそれを探してからでも遅くないんじゃないか？」

驚きと混乱した様子で俯いたノノは、何も言わなかった。そんな彼女にシユガーが寄り添う。

「みなさん、先に転移門の有効化アクティベートに行ってください。僕はノノちゃんともう少しここにいます」

「……そうか、頼んだ」

赤い瞳から感じられた真つ直ぐな意思を信じる。残っていた軍の連中に二度と同じ無茶をしないことを約束させ、結晶で離脱するのを見届けてから俺たちは上へ続く階段を上り始めた。長い螺旋階段の途中で副団長が心配そうな声を零す。

「ノノちゃん、大丈夫よね」

「ああ、俺たちに出来ることはやった。あとはシユガーに任せよう」

「……そうね」

「思い出の場所って言ってたけど、心当たりがあるの？」

「後で詳しく話すよ」

感応現象について知らないミトへの説明を考えながら上つて行く。と、禍々しい装飾が刻まれた大扉が現れた。未踏の地へ続くそれを押し開ける前に、俺は今回のMVPへと向き直る。

「えーと、改めて礼を言わせてくれ。二人とも本当にありがとう。来てくれなかったら俺はこうして生きてなかった」

「いえ、またこうして会えて嬉しいです！ね？ノノ君」

「う、うん。そうだね」

明るいユナとは真逆に、ノノチラスはどこか緊張している様子だ。攻略の鬼と呼ばれる副団長の圧によるものだと思っていたが、ユナの口から意外な理由が明かされた。

「ノノ君ってば、サツキさんに会えて緊張してるの？」

「俺？」

「以前に助けてもらってから、ずっと目標にして頑張ってきたんです。

誰かを助けられるくらい強くなるって」

「は、恥ずかしいよユナ」

いたずらっぽく笑うユナを制止するノーチラスをまじまじと見て、俺はあることを思い出した。まだ相棒とコンビを組んでいた頃、一度だけダンジョン内で助太刀をしたことがある。その時に助けたのがこの二人だ。

「ま、他はともかく剣の腕だけは見習えるからね」

「だけって何だよ失礼な」

ミトに異議を申し立てつつ、俺は気を取り直して大扉に手を添えた。

「ま、その辺の話は飯でも食いながらゆっくりしようぜ」

「変なお店は勘弁してよね」

いつぞやのアルゲートでの記憶を思い出したように副団長が釘を刺してくるが、俺は聞こえないフリをして扉を開放した。

◆？

〈ノノ side〉

自分の鼓動すら聞こえない静寂の中、私は俯いたまま動けないでいた。すでに死闘の熱は覚め切り、少しばかり冷静になった頭をサツキの言葉が何度も反芻する。

『何かを残しているはずだ』

思い返せばチグネさんが死んでから、いや、殺されたと知って復讐すると決めた時からだ。私は過去の思い出に近付かなくなった。一緒に巡った街にもお店にも、二人だけの秘密だよと教えてくれたお気に入りスポットにも。

復讐の妨げになるから、思い出を綺麗なまま残しておきたいと無意識に避けていたのかもしれない。それが結果として、一番大切なこと

を見落とすことになった。

『・・・何をしているんですか?』

『これ?秘密!・・・って言いたいんだけど、ノノには話しておこうかな。これはね、私がこの世界で生きたって証』

『生きた証、ですか?』

『うん・・・もし私が死んでもノノや、誰かがこれを見つけたら私がこの世界で生きたって証になるでしょう?それを遺しているんだ』

『そんな縁起でもないこと言わないでくださいよ』

『もちろん死ぬつもりなんてないけどね。でも・・・もしもの時は、ノノに見つけてほしいかな』

『・・・わかりました』

チグネさんと交わした約束を、今になってようやく思い出した。忘れていた自分への嫌悪感と失望、後悔が押し寄せてくるがそれ以上に

「・・・行かなきゃ」

動こうとする気持ちにボロボロの身体が追い付かず、立とうとしてよろめいた私をシユガーが支えてくれた。

「行こう」

支えられながら、私たちはゆっくりと思い出の場所を目指して歩き始めた。